

天 狗 山 古 墳

松木武彦・和田 剛・寺村裕史 編

2014

天狗山古墳発掘調査団

天 狗 山 古 墳

松木武彦・和田 剛・寺村裕史 編

2014

天狗山古墳発掘調査団



巻頭図版 1 竪穴式石室内部



巻頭図版 2 後円部の墳丘と埴輪列

はじめに

岡山大学考古学研究室では、古墳時代後半期の吉備地域の歴史を解明する「『雄略朝』プロジェクト」の最初の大きな試みとして、1998年から2000年の3年間にわたって、岡山県吉備郡真備町天狗山古墳の発掘調査を行いました。この古墳は、戦前に出土した豊富な副葬品や帆立貝形という特異な墳丘形態によって、早くから考古学界によく知られ、「雄略朝」期の吉備地域を代表する古墳として注目を集めてきました。にもかかわらず、戦前の発掘が乱掘に近いもので、そのデータが学術的に十分に活用できる状態にあるとはいえませんでした。

天狗山古墳について詳しく調査してみたいと思い、初めて墳丘に上がったのが1997年の秋のことでした。うっそうと茂る雑木林と足の踏み場もない倒木にはばまれ、古墳の全体像をつかむのもままなりません。しかし、隆々たる後円部の墳丘や、くっきりと凹凸をみせる周溝と周堤の見事な残り具合は、ぜひともこの古墳と取り組みたいと闘志を燃やさせるに足るものでした。

その後発掘に3年、整理と調整に13年の日を費やし、このたびようやく報告書の刊行にこぎつけることができました。遅きに失しかけたことを諸方にお詫びいたしますとともに、参加した学生や卒業生の努力に、敬意を払いたと思います。最初に古墳に上がったときの意気込みを思い起こすと、空回りに終わったり、息切れしたりしたところもないではありませんが、全体としてほぼ満足のいく成果が得られたのではないかと感じています。冊数を多くしてできるだけたくさんの人に行き渡らせたいと、華美なカラー写真表紙などは避けて装丁も極力安く仕上げたあまり、ビジュアル的には冴えず見にくいところも少なからずありますが、どうかご容赦ください。

調査の場を提供していただきました川辺地区・二万地区をはじめとする倉敷市真備地区の皆さまに、心から感謝いたします。

松 木 武 彦

例 言

1. 本書は、岡山県倉敷市真備町川辺2735-1、2737-2、2746、2821-2～4、同下二万642-1、644～646、655～657に所在する天狗山古墳の発掘調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は、とくに断らない限り、磁北にしたがっている。高さは海拔である。
3. 本書の編集作業は、松木武彦、和田 剛、寺村裕史が行い、測ノ上隆介の協力を得た。
4. 遺構・遺物の写真は松木が撮影した。ただしX線写真は東京国立博物館の提供による。
5. 英文抄訳は松木が作成し、松本直子が点検した。ハングル語抄訳は張允禎が担当した。
6. 出土遺物や調査図面・写真は、本書の刊行後、岡山大学考古学研究室で保管する。ただし、一部の遺物については、地元である倉敷市の施設で展示公開している。
7. 本書は、1997～2000年度文部省科学研究費基盤研究B(2)「吉備地域における『雄略朝』期の考古学的研究」(研究代表者 松木武彦、研究分担者 新納 泉)の成果の一部を含んでいる。また、(旧)真備町教育委員会より刊行資金の援助を受けた。

天狗山古墳

目 次

序 文

はじめに

I 調査の経緯と概要

1. 調査の経過 松木武彦 (1)
 - (1) 「『雄略朝』プロジェクト」の概要と経過 (1)
 - (2) 天狗山古墳のこれまでの知見と、調査にいたる経過 (2)
 - (3) 第1次発掘調査 (2)
 - (4) 第2次発掘調査 (3)
 - (5) 第3次発掘調査 (4)
 - (6) 謝辞 (5)
 - (7) 凡例その他 (6)
2. 天狗山古墳の歴史的環境 藤原憲芳 (6)

II 調査成果

1. 墳丘の測量 光本 順 (9)
 - (1) 墳丘に関するこれまでの知見 (9)
 - (2) 天狗山古墳の測量結果と知見 (10)
 - (3) 天狗山西古墳の測量結果と知見 (10)
 - (4) 小結 (13)
2. 各トレンチの調査結果 (13)
 - (1) トレンチの設定 松木武彦 (13)
 - (2) 竪穴式石室の位置と埋蔵状況 寺村裕史 (15)
 - (3) 竪穴式石室の構造 高田貫太 (18)
 - (4) 墳頂部平坦面の各トレンチ 寺村裕史 (22)
 - (5) 後円部南トレンチ 西田和浩 (25)
 - (6) 後円部東トレンチ 金子 愛・寺村裕史 (26)
 - (7) 後円部西トレンチ 渕ノ上隆介 (30)
 - (8) くびれ部西トレンチ 北 浩明 (32)
 - (9) くびれ部中央トレンチ 鯉沼裕子 (36)
 - (10) 前方部西トレンチ 藤原貴宏 (38)
 - (11) 前方部北西トレンチ 井上宗嗣 (39)

(12) 前方部北トレンチ	福井 優・池尻伸吾 (43)
3. 墳丘の構造と構築過程	寺村裕史 (44)
(1) 墳丘盛土と地山との関係	(44)
(2) 埋葬施設	(46)
(3) 外表施設 (葺石・埴輪)	(46)
(4) まとめ	(47)
4. 出土遺物	(47)
(1) 鉄製武器	高田貫太 (47)
(2) 円筒埴輪	和田 剛 (50)
(3) 形象埴輪	瀧ノ上隆介 (63)
(4) 陶質土器・陶質系土器・須恵器	大熊美穂 (66)
(5) その他の出土遺物と、弥生時代高地性集落の存在	松木武彦 (73)
5. 天狗山西古墳の調査成果	(73)
(1) 調査の経緯と発掘区の設定	大熊美穂 (73)
(2) 墳頂部トレンチ	大熊美穂 (75)
(3) 北トレンチ	大熊美穂 (77)
(4) 西トレンチ	飯田浩光 (77)
(5) 南西トレンチ	飯田浩光 (78)
(6) 出土須恵器と年代	大熊美穂 (78)
(7) その他の出土遺物	飯田浩光 (81)
(8) まとめ	飯田浩光 (81)
6. 地理情報システムによる墳丘分析の成果と展望	新納 泉 (83)
7. 東京国立博物館の所蔵資料	(83)
(1) 調査の経緯	松木武彦 (83)
(2) 副葬品の概要	松木武彦 (84)
(3) 鏡	宇垣匡雅 (85)
(4) 挂甲	野崎貴博 (85)
(5) 籠手	和田 剛 (85)
(6) 馬具	張 允 禎 (89)
(7) 胡禄金具	和田 剛 (89)
(8) 鉄刀・鉄剣	大熊美穂 (90)
(9) 鉄鏃	松木武彦 (95)
(10) 鹿角装刀子	和田 剛 (97)
(11) U字形鋤先	松木武彦 (97)
(12) 鏃	寺村裕史 (98)

Ⅲ 考 察

1. 天狗山古墳出土挂甲の復原	野崎貴博 (100)
-----------------------	------------

2. 陶質系土器の系譜.....	大熊美穂 (105)
3. 天狗山古墳の副葬品配置—伝聞記録と埋葬に先行する副葬に関する検討—	光本 順 (119)
4. 周濠の地方伝播に関する一試論—吉備の事例を中心に—	宇垣匡雅 (129)
5. 日朝関係からみた天狗山古墳築造の歴史的背景	高田貫太 (138)
6. 石室蓋石・葺石の岩石と産地の検討	鈴木茂之 (149)
IV 総 括	松木武彦 (154)
ハンゲル語抄訳	(155)
英文抄訳	(156)
報告書抄録	

挿図目次

図1 周辺の遺跡	(7)	図18 くびれ部西トレンチ円筒埴輪列平面・立面および断面	(34)
図2 墳丘の平面	(11~12)	図19 くびれ部中央トレンチ平面・土層断面	(36)
図3 トレンチの配置	(14)	図20 くびれ部中央トレンチ葺石・平面および立面	(37)
図4 墳頂部のトレンチ配置と石室の関係	(15)	図21 前方部西トレンチ平面・土層断面	(38)
図5 墳頂部石室土層断面	(16)	図22 前方部西トレンチ土器出土状況	(39)
図6 竪穴式石室	(19)	図23 前方部北西トレンチ平面・土層断面	(40)
図7 竪穴式石室サブトレンチの平面と断面	(20)	図24 前方部北トレンチ平面・土層断面	(41~42)
図8 墳頂部東トレンチ平面・土層断面	(23)	図25 墳丘の構造	(45)
図9 後円部南トレンチ平面・土層断面	(24)	図26 鉄製武器	(49)
図10 後円部南トレンチ円筒埴輪列平面・立面および断面	(25)	図27 円筒埴輪 (1)	(51)
図11 後円部南トレンチ周堤外側の遺構・平面および土層断面	(25)	図28 円筒埴輪 (2)	(52)
図12 後円部東トレンチ平面・土層断面	(27~28)	図29 円筒埴輪 (3)	(53)
図13 後円部東トレンチ葺石平面および立面	(29)	図30 円筒埴輪 (4)	(54)
図14 後円部東トレンチ円筒埴輪列平面・立面および断面	(30)	図31 円筒埴輪 (5)	(55)
図15 後円部西トレンチ平面・土層断面	(31)	図32 円筒埴輪 (6) 朝顔形とわかるもの	(56)
図16 くびれ部西トレンチ平面	(32)	図33 線刻のある円筒埴輪片	(61)
図17 くびれ部西トレンチ土層断面	(33)	図34 形象埴輪 (1)	(63)
		図35 形象埴輪 (2)	(64)

図36 陶質土器	(67)	図56 鍔	(98)
図37 陶質系土器・須恵器	(68)	図57 小札の種類	(100)
図38 その他の出土遺物	(72)	図58 小札の構成	(102)
図39 天狗山西古墳・トレンチの配置と平面	(74)	図59 緋	(102)
図40 天狗山西古墳 乱掘墳土層断面	(75)	図60 綴	(103)
図41 天狗山西古墳 墳頂部トレンチ・北トレンチ・ 西トレンチの土層断面	(76)	図61 覆輪	(103)
図42 天狗山西古墳 南西トレンチ土層断面	(78)	図62 下掘	(103)
図43 天狗山西古墳 須恵器	(79)	図63 土器の特徴比較	(106)
図44 天狗山西古墳 鉄鏃	(80)	図64 須恵器と陶質系土器	(108)
図45 鏡	(84)	図65 吉備産須恵器の分布	(109)
図46 挂甲	(86-87)	図66 羅州系土器	(111)
図47 籠手	(88)	図67 法量の比較	(113)
図48 馬具(1)	(90)	図68 鳥足文土器の分布	(115)
図49 馬具(2)	(91)	図69 天狗山西古墳の副葬品配置	(119)
図50 胡鍔金具ほか	(92)	図70 有力墳における副葬品配置	(122)
図51 刀・剣	(93)	図71 小規模墳の副葬品配置	(123)
図52 鉄鏃(1)	(94)	図72 吉備の古墳の周濠(1)	(132)
図53 鉄鏃(2)	(95)	図73 吉備の古墳の周濠(2)	(133)
図54 鹿角装刀子	(96)	図74 各地域における周濠の採用	(135)
図55 U字形鋤先	(97)	図75 天狗山西古墳周辺の地質図および試料採取位置	(151)
		図76 天狗山西古墳周辺の地質断面図	(152)

写真目次

写真1 墳丘の伐採と清掃(乱掘墳)	(3)	写真3 トレンチ調査の風景	(5)
写真2 現地説明会の風景	(3)		

表目次

表1 円筒埴輪観察表	(57)	表5 栄山江流域土器の諸特徴	(110)
表2 形象埴輪観察表	(65)	表6 岡山地域における古墳時代中・後期の副葬品と その配置	(120)
表3 陶質土器・陶質系土器・須恵器観察表	(69)	表7 石材試料の岩石鑑定結果	(150)
表4 各部位の小札枚数	(101)		

図版目次

巻頭図版1 堅穴式石室内部

巻頭図版2 後円部の墳丘と埴輪列

カラー図版1 蓋石（細粒花崗岩）

カラー図版2 葎石（斑状細粒花崗岩）

カラー図版3 葎石（ホルンフェルス）

カラー図版4 葎石（ホルンフェルス）

カラー図版5 葎石（斑状細粒花崗岩）

カラー図版6 葎石（細粒花崗岩）

カラー図版7 陶質土器1・2

カラー図版8 陶質系土器1・6

図版1

1. 調査前の墳丘 後円部南側より
2. 調査前の墳丘 後円部西側周溝

図版2 墳頂部石室トレンチ メインセクション

図版3

1. 堅穴式石室内部（南東から北西方向をのぞむ）
2. 堅穴式石室内部（南東側小口壁と乱掘時破壊口）

図版4

1. 石室内遺物出土状況
2. 石室基底部の構造

図版5

1. 墳頂部東トレンチ
2. 墳頂部東トレンチ 埴輪出土状況

図版6 後円部南トレンチ 周堤側からみた埴輪列と周溝

図版7

1. 後円部南トレンチ 周溝堆積状況
2. 後円部南トレンチ 周堤外側および土壌

図版8 後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葎石

図版9 後円部東トレンチ 後円部1段目テラス・埴輪列 および周溝

図版10

1. 後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葎石（直下より）
2. 後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葎石断面
3. 後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葎石
（斜め方向より）

図版11

1. 後円部東トレンチ 後円部1段目テラス埴輪列
2. 後円部東トレンチ 周溝堆積状況

図版12

1. 後円部西トレンチ 周堤側より
2. 後円部西トレンチ 周溝堆積状況

図版13

1. くびれ部西トレンチ 全景
2. くびれ部西トレンチ 埴輪列

図版14 くびれ部西トレンチ 東側拡張部分 埴輪列屈曲点

図版15

1. くびれ部中央トレンチ 全景
2. くびれ部中央トレンチ 後円部2段目斜面葎石

図版16

1. くびれ部西トレンチ 造り出し状遺構全景
2. くびれ部西トレンチ 造り出し状遺構上面土器出土状況

図版17

1. 前方部北西トレンチ 全景
2. 前方部北西トレンチ 周溝堆積状況

図版18 前方部北トレンチ 周堤より前方部斜面を望む

図版19

1. 前方部北トレンチ 周溝堆積状況
2. 前方部北トレンチ 周溝内埴輪出土状況

図版20

1. 前方部北トレンチ 周堤斜面および裾
2. 前方部北トレンチ 周堤断ち割り状況

図版21

1. 天狗山西古墳 調査前の墳丘
2. 天狗山西古墳 石室に使用されたと推測される石材

図版22

1. 天狗山西古墳 攪乱状況
2. 天狗山西古墳 北トレンチ
3. 天狗山西古墳 西トレンチ
4. 天狗山西古墳 南西トレンチ

図版23

1. 鉄鉾・鉄剣・鉄ヤリ
2. 鉄鏃（天狗山西古墳出土）

図版24

1. 円筒埴輪1
2. 円筒埴輪2
3. 円筒埴輪6

4. 円筒埴輪 6 外面線刻
5. 円筒埴輪 6 口縁内面調整

図版25

1. 円筒埴輪 9
2. 円筒埴輪 10
3. 円筒埴輪 10 外面調整
4. 円筒埴輪 10 内面調整

図版26

1. 円筒埴輪 8 口縁部
2. 円筒埴輪 8 筒部～底部
3. 円筒埴輪 12
4. 円筒埴輪 15

図版27

1. 円筒埴輪 16
2. 円筒埴輪 17
3. 円筒埴輪 18
4. 円筒埴輪 19

図版28

1. 円筒埴輪 20
2. 円筒埴輪 20 外面調整
3. 円筒埴輪 21
4. 円筒埴輪 21 外面調整

図版29

1. 円筒埴輪 22
2. 円筒埴輪 22 外面調整
3. 円筒埴輪 23
4. 円筒埴輪 24

図版30

1. 円筒埴輪 25
2. 円筒埴輪 26
3. 円筒埴輪 27
4. 円筒埴輪 28

図版31

1. 円筒埴輪 29
2. 円筒埴輪 29 外面調整
3. 円筒埴輪 30
4. 円筒埴輪 30 外面調整

図版32

1. 円筒埴輪 31
2. 円筒埴輪 31 外面調整

3. 円筒埴輪 33
4. 円筒埴輪 33 内面調整

図版33

1. 円筒埴輪 32
2. 円筒埴輪 34
3. 円筒埴輪 35 (朝顔形) 口縁
4. 円筒埴輪 36 (朝顔形) 筒部線刻
5. 円筒埴輪 36 (朝顔形) 筒部下半～基底部

図版34

1. 線刻のある埴輪片
2. 蓋形埴輪・立ち飾り部片

図版35 蓋形埴輪 軸受部・笠部・台部およびその他の形象埴輪

図版36

1. 陶質系土器 2
2. 陶質系土器 3
3. 陶質系土器 4
4. 陶質系土器 5
5. 陶質系土器 7
6. 陶質系土器 8
7. 陶質系土器 9
8. 陶質系土器 10

図版37

1. 陶質系土器 13 (外面上から)
2. 陶質系土器 13 (斜め横から)
3. 陶質系土器 13 (内面上から)
4. 陶質系土器 11
5. 陶質系土器 12
6. 陶質系土器 14
7. 陶質系土器 15

図版38

1. 須恵器 17～19
2. 須恵器 20
3. 須恵器 21～25
4. 弥生土器・中世土器
5. 須恵器片

図版39

1. 天狗山西古墳出土 須恵器 1～4・6～8
2. 天狗山西古墳出土 須恵器 9

図版40

1. 鏡

2. 挂甲
3. 籠手
4. 馬具 (轡)
5. 馬具 (杏葉)

圖版41

1. 馬具 (鐙)
2. 馬具 (雲珠)
3. 絞具
4. 胡鐐金具他

5. 鉄刀
6. 鉄刀 (装具)

圖版42

1. 鉄鐐
2. 鉄鐐 (平根系)
3. 鹿角装刀子
4. U字形鋤先
5. 棺金具

I 調査の経緯と概要

1. 調査の経過

(1) 「『雄略朝』プロジェクト」の概要と経過

天狗山古墳の調査は、岡山大学考古学研究室が1998年から約10年間をかけて推進した「『雄略朝』プロジェクト」の最初の発掘調査である。岡山大学の古墳時代の研究プロジェクトとしては、1990年からほぼ10年間にわたって実施した、「定プロジェクト」に続くものである。

「雄略朝」とよばれる5世紀後葉は、近畿の中央勢力がほかの各地の諸勢力に対して支配の度を強め、古代国家形成に向けて一步を進めた時期と考えられている。吉備地域においては、記紀のいわゆる叛乱伝承にしめされるように、大王に比肩しその政権運営にも主体的に参与した強力な地域勢力としての吉備が、大王勢力によって力をそがれ、その支配体制下に置かれる方向性が定まった一つの画期としてとらえられることが多かった。

その実態を具体的に反映しうるのは古墳の動態である。しかし、吉備においても、また全土的にも、この時期の古墳の編年序列にはいまだ不明確な点が残し、古墳の築造動向の詳細を把握しきるにはいたっていない。岡山大学考古学研究室の新納と松木は、こうした研究の実態を踏まえ、「定プロジェクト」に続く古墳研究プロジェクトとして、新たに「『雄略朝』プロジェクト」の発足を起案した。1996年のことである。その目的として、この時期の古墳に関する既存の資料を整理検討するとともに、指標となりうる古墳については発掘も含めた詳細な調査を行い、上記の検討に必要なデータを新しく得ることを目指した。また、それを全国的な古墳築造動向のなかに当てはめることを通じて、吉備の各小地域間、それらと列島各地との政治的諸関係の展開を考察し、吉備と近畿との関係の再検討を軸に、日本列島の古代国家形成ないし社会複合化のプロセスにも迫ってみたいと考えたのである。

「定プロジェクト」の最後の発掘である定東塚・西塚古墳の第4次調査が1997年の早春をもってひとまず完了したので、1998年からは「『雄略朝』プロジェクト」の最初の発掘を行うべく、その対象を選定する必要性が出てきた。いっぽう、このプロジェクトには大学の研究室の枠組みを越えた広がりをもたせたいという希望から、岡山県古代吉備文化財センターの宇垣匡雅氏を加え、新納・松木・宇垣の3名が共同研究者として以後の研究を行うことになった。なお、その後、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの野崎貴博氏・光本順氏（当時）・高田貫太氏（当時）を、研究協力者としてプロジェクトの基幹メンバーに加えている。

こうして体制を整えた1997年初夏以降、共同研究者の新納・松木・宇垣は、3名一緒に、あるいはそれぞれ単独で、「雄略朝」期すなわち5世紀後葉から6世紀初頭にかけての県内の古墳のいくつかを、発掘対象の候補として踏査した。踏査した古墳の多くはさまざまな理由で候補から外さざるをえず、それらを除いた数基が最後に残った。そのなかで天狗山古墳に絞られるにいたった理由として、「雄略朝」期のキーワードともいえる帆立貝形の前方後円墳であること、戦前に掘り出された石室の副葬品が著名かつ重要である割にはその出土状況も含めた実態がはっきりしないことの2点が、大きなポイントであったと思う。そのことを踏まえて上がった墳丘が、「はじめに」で述べたようにすばらしく保存状況がよかったことが、最終的な決定打となった。

1997年12月、松木は大学院生数名とともにふたたび天狗山古墳に登り、寒風吹きすさぶ中ほぼ1日をかけて、発掘計画を立てるための墳丘の観察と略側を行った。この結果を踏まえて具体的な発掘準備にかかり、1998年2月26日に第1次発掘調査に着手するのであるが、これ以降の経過は後に詳述する。

なお、天狗山古墳の発掘調査および整理作業の一部は、平成9～12年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「吉備地域における『雄略朝』期の考古学的研究」(課題番号09410103、研究代表者松木武彦、研究分担者新納泉)によっている。(松木武彦)

(2) 天狗山古墳のこれまでの知見と、調査にいたる経過

天狗山古墳は、古くからよく知られた古墳である。18世紀の後半に古川古松軒が著した地誌である『吉備之志多道』にも、「南山古墳」として、見取り図とともにそのようすが描かれている。

大正末年から昭和初年のいずれかの時期に、遠山荒次氏によって後円部の竪穴式石室が掘られ、多数の副葬品が取り出された。このときの出土遺物の大半は東京国立博物館に収容されており、小型変形四獣鏡1、鉄刀2、鉄剣1、鉄刀子3、矢筒金具、鉄鏃多数、挂甲、籠手、馬具(剣菱形杏葉・f字形鏡板・環状雲珠・木心鉄板張輪鍔・絞具ほか)などが知られている。これらが発掘されたときの状況については、末永雅雄氏による聞き取りに基づいて報告がなされた⁽¹⁾。また、出土した資料のうち主要なものの詳細については、村井崑雄氏の報告がある⁽²⁾。発見の状況については第Ⅲ部(考察)第3章の光本順の論考に詳しく、品目の詳細については第Ⅱ部第7章の「(2) 副葬品の概要」に整理してあるので参照されたい。

これらの記録や遺物、あるいは発掘前の古墳の観察によって得られた天狗山古墳についての知見は、おおよそつぎのとおりであった。⁽³⁾

- 1) 前方部が小さく低平な帆立貝形の前方後円墳で、その規模については、通常、墳丘長45m前後とされる。
- 2) 周堤上および墳丘テラス面に円筒埴輪を巡らせ、葺石をもつ。
- 3) 後円部に長さ3.9m・幅約1m・高さ約0.8mの竪穴式石室が、墳頂下約5mのところに存在する。
- 4) 竪穴式石室の出土品から、造営時期は5世紀後葉と想定される。
- 5) 西側の周堤外側に小古墳1基が存在する。

上記のような知見から、天狗山古墳は、5世紀後葉の吉備地域では豊かな副葬内容をもった有力な古墳として、学界では古くから知られていた。しかし、副葬品発見時の事情もあり、遺物そのものについて以外は学術的評価に耐えられる情報が大きく不足していたことは否定できない。とくに、埴輪や土器から押さえられる年代を明らかにし、副葬内容との様式的関係を明確に把握しておくことは、全国的視点での古墳時代研究にとっても、また吉備の古墳研究にとっても危急の課題といえた。

天狗山古墳に関するこの課題は、さきに述べた「『雄略朝』プロジェクト」の目的と合致するものであり、天狗山古墳の発掘調査はプロジェクトの遂行にとってきわめて重要な意義をもつものと判断された。新納・松木・宇垣の共同研究者3名は、1997年の秋ごろ、岡山大学考古学研究室の学生と大学院生に天狗山古墳の発掘調査を提案したところ積極的な同意を得られたので、ただちに準備を開始し、1998年の早春、第1次の発掘調査に着手するにいたったのである。

なお、古墳の名称については、これまでに「天狗山古墳」のほか、学界に通用する別称として「矢形大塚古墳」があり、おもに地元の名称として「南山古墳」、古い文献にみえるものとして「千壺古墳」の名前があった。今回の調査では、学界においてもっともポピュラーであり、真備町(現倉敷市)指定史跡としても登録されている名称である「天狗山古墳」を用いることにした。天狗山西古墳については、真備町教育委員会(当時)と協議の結果、そのように命名した。(松木武彦)

(3) 第1次発掘調査

第1次発掘調査は、天狗山古墳の正確な墳丘の規模・形態、および埋葬施設(大正末～昭和初年頃に既掘)の構造を明らかにし、埴輪等の出土遺物の分析によってその築造年代を把握することを目的として、1998年2月26日から3月26日までの30日間実施した。

2月26日から雑木及び下草の伐採作業およびグリッド設定に着手し、その完了部分から墳丘の測量を開始した。測量作業は3月26日まで実施し、本次は墳丘本体部分の作業をほぼ完了した。

墳丘の規模・形態を調べるためのトレンチは、墳丘主軸線に沿って前方部前端（前方部北トレンチ）および後円部後背面（後円部南トレンチ）の2ヶ所に設定した。前方部北トレンチは3月4日より掘り下げを開始、3月24日に原遺構面（墳丘・周堤面および周溝底）に達し、24～26日の3日間で記録作業を行った後、26日夕刻に埋め戻しを完了した。後円部南トレンチは3月3日より掘り下げを開始、途中周堤部分で埴輪列を検出するなどの後、3月19日に原遺構面（墳丘・周堤面および周溝底）に達し、20～24日の5日間で記録作業を行って、26日に埋め戻しを完了した。

また、埋葬施設（竪穴式石室）を再露出させてその構造を調査・記録する目的で、墳頂部石室トレンチを設けた。現乱掘墳を包み込むようにトレンチを設定したが、実際には乱掘墳の埋積土を除去する形で掘り下げた。埋積土が予想以上に厚く作業は難航したが、かつて竪穴式石室が掘られた際の侵入口を3月22日に発見し、25日までに石室の略測等を行った。石室は再調査を予定して土嚢により侵入口の埋め戻しを行い、3月26日に完了した。全調査面積は129㎡である。なお、トレンチに伴う作業の完了後、27日～31日の4日間で周辺環境や測量杭の整備を行った。

第1次発掘調査のメンバーは、プロジェクトの共同研究者・研究協力者のほか、以下のとおりである。高田貫太、喜田 敏（以上大学院文学研究科）、下江健太、高田浩司、光本 順（以上4年生）、井村岳人、織田花与、角谷亜矢子、嘉原倫子、木藤寿子、佐々田友規、久次直樹、福井 優、馬路晃祥、宮崎由紀子、和田 剛（以上3年生）、池尻伸吾、大森久望子、金子 愛、河合孝治、北 浩明、武田有子、谷脇一葉、寺村裕史、新谷俊典、西田和浩、榎原康剛、吉野和一郎（以上2年生）、岡本 恒、片山久美、木村恭子、西河洋明、藤原貴宏、本堂春生、真野義隆、村上由美、森 直美、山本和史、吉田修之（以上1年生）、大熊美穂（駒澤大学学生）、豊島直博（大阪大学大学院生）、山田俊輔（早稲田大学学生）。（松木武彦）

（4）第2次発掘調査

第2次発掘調査は、正確な墳丘の規模・形態をさらに明らかにし、前年度に再発見を果たした埋葬施設を本格的に調査するとともに、埴輪等の出土遺物の分析によってその築造年代を把握することを目的として、1999年2月26日から同4月3日までの37日間実施した。

2月26日から雑木及び下草の伐採作業を行い、前年度調査において測量が未完であった部分から測量作業を開始した。測量は3月末まで実施し、墳丘西～北側の周堤から外側について、ほぼ作業を完了した。

墳丘の規模・形態および埴輪列の状況を調べるためのトレンチは、墳頂部2ヶ所（墳頂部東トレンチ・墳頂部北トレンチ）、後円部東側面（後円部東トレンチ）、前方部前端（前方部北トレンチ）、くびれ部西側（くびれ部西トレンチ）の計5ヶ所に設定した。このうち前方部北トレンチは前年度調査に引き続いての掘削で、その範囲は変わっていない。さらに、石室および周囲の墳丘構造を確認するために、石室開口部を中心に壺掘り状の矩形トレンチ（墳頂部石室トレンチ）を設けた。また、墳丘周堤西側に付随する小円墳（天狗山西古墳）を調査する



写真1 墳丘の伐採と清掃（乱掘墳）



写真2 現地説明会の風景

ため、2ヶ所のトレンチ（墳頂部トレンチ・北トレンチ）を設定した。

以上のうち、後円部東・前方部北・くびれ部西の各トレンチは2月27～28日より掘り下げを開始した。前方部西トレンチは前年度の再掘削であったために3月初旬に遺構面に達し、その後はトレンチ内の断ち割りによる墳丘構造の精査を行って、埋め戻しを含むすべての作業を3月中に完了した。後円部東・くびれ部西の両トレンチは3月中旬に遺構面に達したが、埴輪列の検出と精査・記録に多くの作業時間を割き、例年になく多雨による予定の遅れもあって、埋め戻しを含むすべての作業を完了したのは4月2～3日である。墳頂部東・墳頂部北の両トレンチは、墳頂部石室トレンチの掘り下げがほぼ完了した3月13日に掘り下げを開始し、北トレンチは3月23日、東トレンチは3月27日にすべての作業を完了した。

墳頂部石室トレンチについては、前年度に埋め戻した土嚢の撤去と併行して上部から壁面の精査を行いつつ掘り下げ、3月11日に石室開口部を再露出した。12～18日に石室の精査と記録を行った後、3月23日より石室開口部床面および控え積みの断ち割り作業を中心として墓壙および石室構造の調査を実施したところ、3月27日に石室床面下部より鉄器を検出した。その精査・記録と取り上げのため、当初の予定を越えて4月2日に石室関係の作業をおおむね終了した。

天狗山西古墳については、伐採の後に3月上旬からトレンチの掘り下げを行った。墳頂部トレンチは予想以上の乱掘の大きさと乱掘壙内の複雑な土層埋積に翻弄されたが、3月20日までには乱掘の実態と埋葬施設の残骸を確認・記録できた。北トレンチも墳端の確認作業に腐心しつつも、4月1日にはすべての作業を完了した。

現地での作業の大半は4月3日に完了し、調査団は撤収した。なお、埋め戻し部分を中心とした墳丘の保全、周辺環境の整備、記録の確認や補正などのために、調査担当者（松木）を中心に適宜作業を続行し、4月20日をもってすべての作業を終えた。

第2次発掘調査のメンバーは、プロジェクトの共同研究者・研究協力者のほか、以下のとおりである。高田貫太、大熊美穂、下江健太、高田浩司、光本 順（以上大学院文学研究科）、井村岳人、馬路晃祥、和田剛（以上4年生）、池尻伸吾、大森久望子、金子 愛、河合孝治、北 浩明、谷脇一葉、寺村裕史、新谷俊典、西田和浩、槇原康剛、吉野和一郎（以上3年生）、岡本 恒、片山久美、木村恭子、西河洋明、藤原貴宏、本堂春生、真野義隆、村上由美、森 直美、山本和史、吉田修之（以上2年生）、有賀祐史、安藤智三郎、飯田浩光、河村範子、黒木陽介、鯉沼裕子、高丸里美、瀧ノ上隆介、松本 歩、三宅由紀子（以上1年生）、三浦知徳（富山大学学生）、アガタ・ファルカフスカ（法学部研究生）。（松木武彦）

（5）第3次発掘調査

第3次発掘調査は、前年度の調査に引き続き、天狗山古墳および天狗山西古墳の正確な墳丘の規模・形態を明らかにし、埋葬施設の確認を行うとともに、埴輪等の出土遺物の分析によってその築造年代などを把握することを目的として、前後の予備調査・確認も含めて2000年2月28日から同3月31日までの32日間実施した。

調査地は前年度までにほぼ伐開が進んでいたため、2月28日からトレンチを設定して墳丘の調査に着手した。トレンチは、天狗山古墳主墳については、墳頂部2ヶ所（墳頂部南東トレンチ、墳頂部北東トレンチ）、後円部東側斜面（後円部東トレンチ）、後円部北側斜面から前方部上面（くびれ部中央トレンチ）、後円部西端（後円部西トレンチ）、西側くびれ部（くびれ部西トレンチ）、前方部西側面の造出状突出部（前方部西トレンチ）、前方部西側角（前方部北西トレンチ）の8ヶ所を設定した。また、天狗山西古墳では、西側斜面（西トレンチ）と南西側斜面（南西トレンチ）の2ヶ所にトレンチを設定した。

以上のトレンチは、いずれも3月31日までに調査と記録を完了して埋め戻しに着手した。また、前々年度および前年度から引き続いて行ってきた墳丘の測量調査は、これよりさき3月17日に終了した。現地での全作業は3月31日をもって完了して調査団は撤収した。なおこの間3月27日に、岡山大学理学部鈴木茂

之助教授（当時）に石材の鑑定をお願いした。その後、松木を中心に墳丘の保全、測量図の補正等の諸作業を断続的に行い、4月15日をもってすべての作業を終えた。

第3次発掘調査のメンバーは、プロジェクトの共同研究者・研究協力者および考古学研究室講師松本直子のほか、以下のとおりである。大熊美穂、三浦知徳、和田剛（以上大学院文学研究科）、寺村裕史、西田和浩（以上4年生）、岡本 恒、片山久美、河合孝治、西河洋明、藤原貴宏、本堂春生、真野義隆、村上由美、森 直美、山本和史、吉田修之（以上3年生）、有賀祐史、安藤智三郎、飯田浩光、河村範子、黒木陽介、鯉沼裕子、高丸里美、淵ノ上隆介、松本 歩、三宅由紀子（以上2年生）、池田 晋、岩崎紅美、岡本高志、河村寛子、久保幸子、小濱真由良、佐藤宏邦、田所千佳、濱本一人、藤田紗織、向井 妙、和田大作（以上1年生）、張 允 禎（韓国東亜大学校研究生）、井上宗嗣（関西大学学生）、入江剛弘（金沢大学学生）、清水 健（東京都立大学学生）、足立賢二、セバスチャン・フラー



写真3 トレンチ調査の風景

（松木武彦）

（6）謝辞

3次にわたる天狗山古墳の発掘調査および整理作業においては、地元の真備町教育委員会、真備町文化財審議委員諸氏をはじめ、多くの方々や機関のご厚意を賜り、また指導や助言をいただいた。とくに教育委員会社会教育課課長の山田守氏（当時）と藤原憲芳氏には献身的なご協力を賜った。

調査地の土地所有者である井上学、井川堅、井上友則、加藤玄太郎、加藤鶴子、加藤昇、加藤道温、木村元、小西豊、武政昭男、武本克巳、武本充の諸氏は、発掘調査に理解をしめされ、調査を快諾されただけではなく、調査中にもさまざまな便宜や励ましの言葉を与えられた。真備町川辺在住の加藤満広氏、総社市三輪在住の中田啓司氏、土地所有者の一人加藤道温氏には、現地の作業に対して直接的な手助けをいただいた。また加藤道温氏には、天狗山古墳の過去の状況や、遠山荒次氏による石室発見時のようすなどについて、重要な情報をいただいた。古墳近隣の吉田建設株式会社には、調査中の駐車場の提供をはじめさまざまな援助を賜った。

葺石石材の鑑定については、岡山大学理学部助教授（当時）の鈴木茂之氏の援助を賜り、分析結果について玉稿を拝受した。遺構や出土資料について、岡山理科大学教授亀田修一氏、駒澤大学教授酒井清治氏、韓国忠南大学校教授朴淳發氏、国立光州博物館（当時）宋義政氏より、とりわけ懇切なご教示を賜った。また、韓国における関連資料の調査では、全南大学校教授林永珍氏、趙鎮先氏、徐賢珠氏、忠南大学校教授禹在柄氏から、多大なご厚意とご援助をいただいた。竪穴式石室出土鉄器の保存処理とX線写真撮影については、国立歴史民俗博物館総合研究大学院大学学生（当時）の津村宏臣氏の援助をいただいた。津村氏には、古墳周辺の自然地理学的環境に関するご教示も賜っている。さらに鉄製武器の金属学的分析や付着有機物の年代測定については、同博物館（当時）の今村峯雄氏・永嶋正春氏ならびに津村氏に種々のご教示やご便宜を賜りつつも、鉄製武器の金属分析に関してはまだ実施するところまではいたっていない。非力をお詫びしつつお礼を申し上げたい。また、過去の発掘時における出土資料の調査に際し、東京国立博物館および同館考古部（当時）の古谷毅氏・日高慎氏、および岡山県古代吉備文化財センター所長（当時）の葛原克人氏（故人）には多大な援助を賜った。これらのほか、調査中には多数の方々にご来訪いただき、さまざまなご指導や援助を賜った。

発掘調査と整理作業は、岡山大学考古学研究室の全メンバーの協力のもとに行われた。とくに同僚の稲田孝司氏（当時）・松本直子氏には全面的なご援助をいただき、山本悦世氏をはじめとする岡山大学埋蔵文

化財調査研究センターの皆さんには、出土品の整理や保存管理についてご助言を含むさまざまなご助力を賜った。

以上のご厚意とご協力に対し、心から感謝したい。

(松木武彦)

(7) 凡例その他

本書では、方角の表現についてやや特別な扱いを行っている。天狗山古墳は前方部をほぼ正確に北西に向けているが、混乱を避けて方角の認識および呼称の単純化を図るため、本来は北西というべき前方部が延びる方向を「北」として調査と記録を実施した。したがって、以下の報告でもそれを踏襲し、主軸方向を南北として前方部側を北、後円部側を南とし、その他の方角呼称もすべてそれを基準としている。レベル高は海拔を表す。

(松木武彦)

注

- (1) 吉備郡教育会1937『吉備郡史』上巻
- (2) 村井嘉雄1966「岡山県天狗山古墳の遺物」『MUSEUM』250号
- (3) これまでの天狗山古墳に関するその他の主要なデータとして、以下の二つの文献がある。
西川 宏1986「天狗山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料
新納 泉1991「矢形大坑古墳」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社

2. 天狗山古墳の歴史的環境

周辺の地理 天狗山古墳は、岡山県の南西部に位置する倉敷市真備地区の川辺と下二万の境にある南山山塊(89.9m)の北側に突き出た尾根の先端に築かれている。麓からの比高は約70mで、小田川とその流域を眼下に見下ろし、また高梁川をはさんで総社平野を遠望できる位置にある。この山塊には古墳群が多数存在しているが、その中においても、天狗山古墳の規模は最も大きく、また位置的にも最も条件のよい場所に築かれている。

天狗山古墳の存在する倉敷市真備地区(旧真備町)は、緯度、経度として北緯34°35′～34°39′、東経133°38′～133°44′の間にある。地区の地形は東西に走る南北二つの山地が東は高梁川によって切られており、巨視的には南北8.7km、東西7.7km、面積44.8km²の長方形をなし、中央を小田川が東流している。

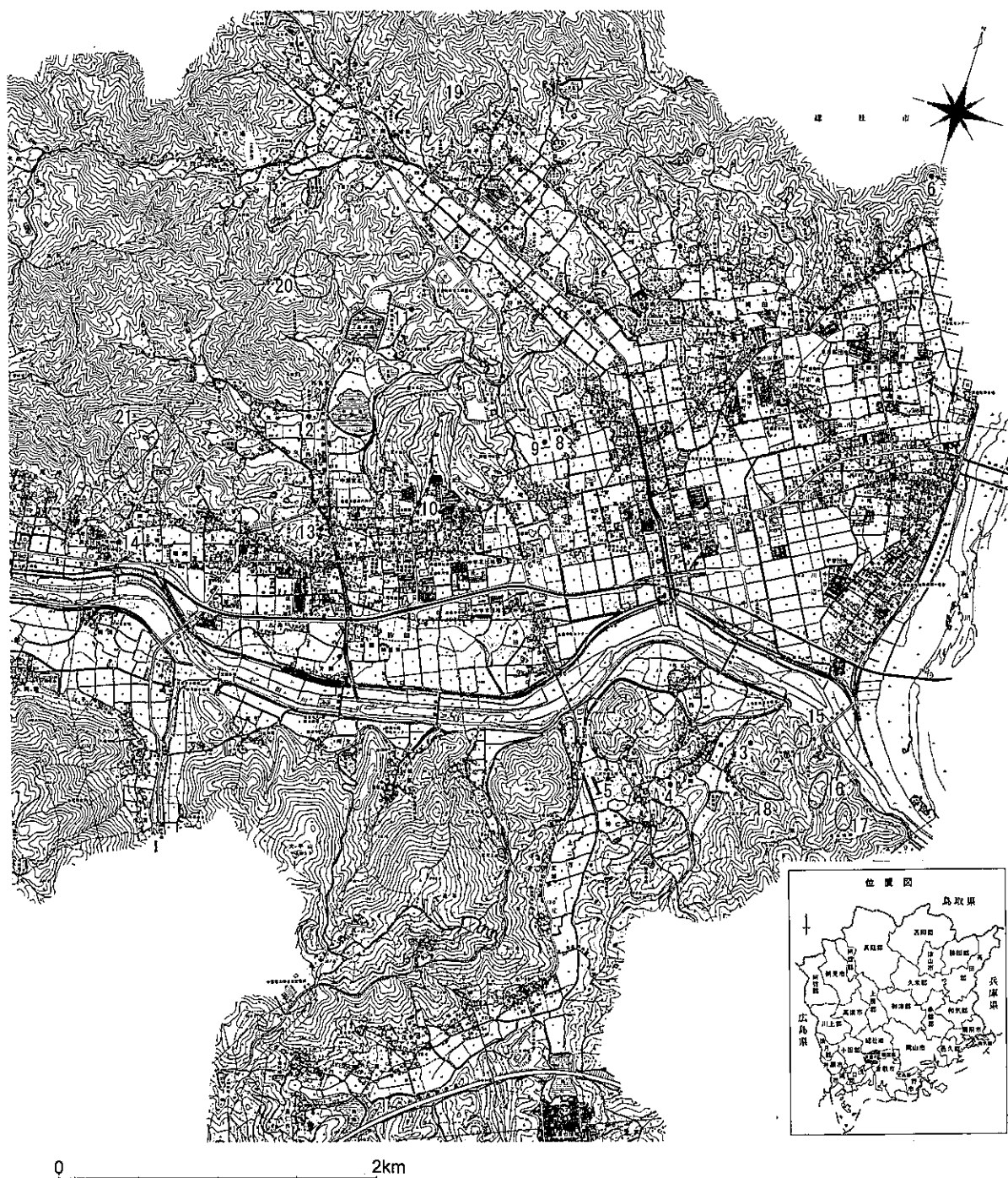
真備地区の北部は西から、鷲峰山(399.2m)・高山(384.7m)・妹山(315.0m)の三山が連なって、東にのびた丘陵をなしており、吉備高原最南端としての性格をもつ。南西側の丘陵は北側のものに比べて低く、弥高山(307.6m)を中心とした標高200m前後の山地で斜面は急峻であり東に行くに従い低くなっている。北側の斜面と比べその南側は緩やかな斜面となり、倉敷市玉島の平野へと続く。

町の東端には中国山地に源を発する岡山県三大河川の一つ高梁川が南流しており、真備地区を南北に分け、山麓沿いに東流する小田川と河口から約12km さかのぼったところで合流する。

また真備地区では筍が特産品であり、北側の平地に近い小丘陵付近で盛んに生産されているため、斜面は削られて階段状になっており、地形の改変が進んでいる所が多い。

遺跡が存在する川辺、下二万は地区の東端で小田川の下流域にあたる。小田川の両岸には比較的安定した自然堤防が形成されており、付近には沖積平野が広がり水田などの穀倉地帯が展開されているが、近年急速に市街化が進み住宅開発が多い地区になっている。

歴史的環境 岡山県をほぼ南北に流れる三大河川のうち、最も西を流れる高梁川下流域の総社平野は古



- | | | |
|-------------|--------------|-----------|
| 1 天狗山古墳 | 8 竜王塚古墳 | 15 南山古墳群 |
| 2 天狗山西古墳 | 9 阿知境遺跡 | 16 南山中古墳群 |
| 3 矢形小ぐる古墳 | 10 西山遺跡 | 17 南山東古墳群 |
| 4 勝負砂古墳 | 11 高津池北古墳 | 18 南山西古墳群 |
| 5 二万大塚古墳 | 12 箭田大塚古墳 | 19 正連寺古墳群 |
| 6 伊与部山弥生墳丘墓 | 13 箭田廃寺 | 20 高津池古墳群 |
| 7 岡田廃寺 | 14 黒宮大塚弥生墳丘墓 | 21 瀬戸古墳群 |

図1 周辺の遺跡

代吉備文化の中心的地域であった。その西部に位置する真備地区は高梁川の下手で西から合流する小田川の下流域にあたる。この地は高梁川と小田川の沖積によって、早くから安定した平野が形成され、農業に適していたことや、また古代以降は旧山陽道が小田川に沿って横断していたことなど交通の要地でもあり、多くの遺跡を残している。

地誌的には、古代より備中国下道郡に属し、江戸時代には一部（旧矢田村）が岡山藩の領地であったほかは現在の真備地区の岡田に陣屋を持つ岡田藩の領地であった。明治時代に入り、1900（明治33）年に賀夜郡、下道郡が合併し、吉備郡と称したころは郡役所が現在の総社市にあり、当地は吉備郡西南部と称していた。1952（昭和27）年にこの地の1町5村が合併し、下道郡ゆかりの奈良時代の政治家、吉備真備にちなんで真備町となった⁽¹⁾。この後、総社が市制を敷き、旧吉備郡のその他の町村は岡山市や総社市、倉敷市へと合併され、最後まで残っていた真備町も2005（平成17）年に倉敷市に合併された。

真備地区の遺跡としては、旧石器時代は遺跡、遺物ともに確認されていないが、高梁川を東に渡った総社市の宝福寺裏山遺跡⁽²⁾と、浅尾遺跡⁽³⁾でナイフ形石器が発見されており、地区内でも将来発見される可能性がある。

縄文時代のものとしては、1985（昭和60）年に行われた妹の蓮池尻遺跡の発掘調査で、後期から晩期に至る土器片がまとまって出土しており、地区内において当時の人々が生活していたことを示す資料である⁽⁴⁾。

弥生時代になると、土器や石器が採集されている遺跡は町内各地にある。それらは、丘陵の尾根筋や斜面、あるいは微高地上などである。

地区内で今までに発掘調査された遺跡は数ヶ所であるが、そのうち蓮池尻遺跡では、前期からの遺物が出土しており集落の存在が指摘されている⁽⁵⁾。なお、この遺跡内で1915（大正4）年に流水文銅鐸が出土しており、現在は東京国立博物館に所蔵されている。また、尾崎の黒宮大塚弥生墳丘墓では、特殊器台・特殊壺をふくむ多数の供献土器類が出土しており、箭田の西山遺跡⁽⁶⁾では、丘陵の尾根上で中期末から後期の遺構のほか、特殊器台を二つあわせて土器棺としたものが発見された⁽⁷⁾。

弥生時代後期から古墳時代にかけて、地区内では拠点となる集落遺跡の存在が未周知であったが、1996（平成8）年から1997（平成9）年にかけて行われた有井の調査で、古墳時代後期の竪穴住居2軒、掘立柱建物12棟の、集落を思わせる遺構をもつ弥生時代から中世に至る遺跡の存在が確認された⁽⁸⁾。

古墳時代には、真備地区内には多くの古墳が築かれたが、その分布は大きく三つに分けることができる⁽⁹⁾。まず小田川下流域の南側の地域、末政川の流域とその左側の地域、さらに箭田から尾崎、呉妹にかけての地域である。

小田川下流域の南山を中心とした地域では、丘陵上にこの度調査が行われた全長約57mの天狗山古墳が存在し、山裾には全長約38mの二万大塚古墳がある。小田川を挟んだ北側には、有井に龍王塚古墳がある。これは径38×35mの円墳で竪穴式石室を有し、石室内からは馬具などとともに直刀が一振出土しており、5世紀後半の築造と思われる⁽¹⁰⁾。箭田を中心とした地域では、矢砂に箭田大塚古墳がある。これは全長54mの張り出しをもつ円墳である。石室の全長は19.1mで、玄室に3基の組み合わせ式の埋葬施設が現存している。1983（昭和58）年の調査で須恵器・土師器をはじめ鉄製品や玉類などが出土しており、築造年代は6世紀末と考えられる⁽¹¹⁾。箭田大塚から800mほど北に行った地点には1981（昭和56）年に調査された高津池北古墳があり、7世紀後半の須恵器が出土している⁽¹²⁾。

飛鳥時代に入ると、古墳に代わって寺院が建立されるようになる。まず、箭田大塚の南前面に位置する箭田廃寺（現在の吉備寺）が築かれ、白鳳期のものでは岡田の岡田廃寺、小田川を挟んだ南岸の八高地区にある八高廃寺などがあり、いずれからも備中地方を中心に出土する吉備式（備中式）の蓮華文瓦が出土している。箭田廃寺の蓮華文瓦は県内で最も古い時期のもので、国の重要文化財に指定されている。

また奈良時代以降の火葬の風習が行われていたことを示す遺物として、市場砂走⁽¹³⁾、妹坂本⁽¹⁴⁾、蚊箭田阿知境遺跡⁽¹⁵⁾の3ヶ所から骨蔵器が出土している。さらに、小田川を約6kmさかのぼった小田郡矢掛町東三成の

南側山麓からは下道園勝・園依朝臣母夫人（吉備真備の祖母）の銅製骨蔵器が出土している。

（藤原憲芳）

注

- （1）岡山県吉備郡真備町1979『真備町史』
- （2）間壁葎子1966「高梁川下流域の無土器時代の遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号
- （3）鈴木義昌・小林博昭1987「浅尾遺跡」総社市史編さん委員会『総社市史 考古資料編』総社市
- （4）高畑知功1986「蓮池尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』62、岡山県教育委員会
- （5）高畑1986前掲
- （6）間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号
- （7）正岡睦夫・山磨康平・平井 勝1979『西山遺跡』真備町教育委員会
- （8）根木智宏編1998「池田散布地・石塔鼻散布地・阿知境遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』135、岡山県教育委員会
- （9）真備町教育委員会1996『真備町の文化財』
- （10）これまで方墳といわれていたが、2001～2003年にわたる岡山大学考古学講座の測量実習に伴う成果として、円墳である可能性が非常に強いことが確認された。
- （11）中野雅美1984「箭田大塚古墳」真備町教育委員会
- （12）岡山県真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会1982『高津池北古墳』
- （13）中田啓司1959「備中真備町市場の一火葬墓」『古代吉備』第3集
- （14）間壁葎子・近藤益二1981「真備町妹坂本骨蔵器」『倉敷考古館研究集報』第16号
- （15）山磨康平1988「真備町箭田阿知境奥出土の骨蔵器」『古代吉備』第10集

Ⅱ 調査成果

1. 墳丘の測量

（1）墳丘に関するこれまでの知見

標高約80mの丘陵頂部に位置する天狗山古墳は、挂甲や籠手、馬具をはじめとする貴重な遺物を出土した古墳として著名である。⁽¹⁾ そのいっぽうで、これまで公表された墳丘測量図はなく、規模や墳形に関する詳細なデータが不足していた。

墳丘に関する先学の軌跡をたどると、天狗山古墳の墳形・規模に関する最初の報告は、末永雅雄著『日本上代の甲冑』⁽²⁾ にみることができる。末永は、第二次大戦前に天狗山古墳の埋葬施設を掘った遠山荒次からの聞き取りをもとに、天狗山古墳の概要と歴史的な位置づけについて論じている。墳形については主墳となる円墳に小円墳が付属し、周濠と周堤をもつものとして示した。主墳（現在の後円部）の規模については、径約36m（約108尺）、高さ約9m（約27尺）とされている。

1937年に刊行された『吉備郡史』では、天狗山古墳の墳形に関する知見とともに、天狗山古墳の西に位置する古墳、すなわち現在天狗山西古墳と呼称する古墳の存在に関する記載がなされている。墳丘の概略図では、天狗山古墳は盾形の周濠をもつ一般的な前方後円墳として描かれている。また、概略図には、左右のくびれ部に造り出しと思われる構造物がみられることも注目できる。いっぽう天狗山西古墳は、天狗山古墳の陪塚とされており、周濠をはさんだ前方部の隣に位置する円墳として描かれている。⁽³⁾

1986年に発行された『岡山県史』では、天狗山古墳後円部は径28m、高さ約8mで、それに幅17.4m、長

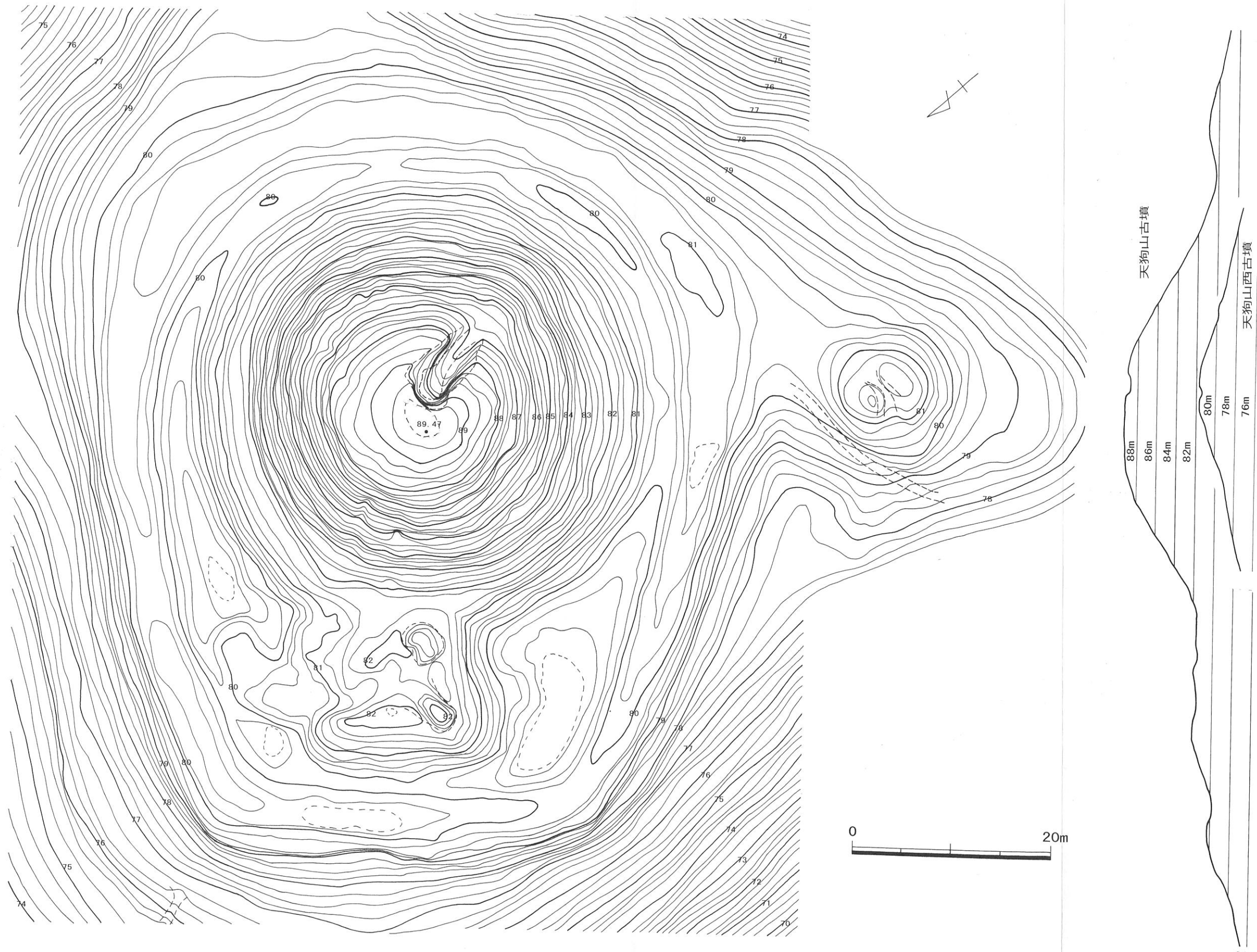


図2 墳丘の平面と断面

であるのか、何らかの人為的な加工が施されたものなのかという点については判然としない。接続部分の北西側は、谷地形となる。

(4) 小結

以上のように、天狗山古墳については、従来考えられていた墳丘規模よりも15m近く大きくなることが判明した。また、前方部に付属する造り出しが存在する可能性が出てきた。天狗山西古墳については、規模や天狗山古墳との位置関係が明らかとなった。こうしたデータを基礎に、天狗山古墳と天狗山西古墳において、墳丘構造および埋葬施設、外表施設、両古墳の先後関係の解明を目的に発掘調査を行った。

(光本 順)

注

- (1) 末永雅雄1934『日本上代の甲冑』本文篇 岡書院(『増補 日本上代の甲冑』本文篇、木耳社、1981年)
村井富雄1966「岡山県天狗山古墳出土の遺物」『MUSEUM』250号
- (2) 末永雅雄1934前掲
- (3) 永山卯三郎編1937『吉備郡史』上巻(『吉備郡史』上巻、名著出版(復刻)、1975年より)
- (4) 新納 泉1991「矢形大坑古墳(天狗山古墳)」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社
- (5) 西川 宏1986「天狗山古墳」『岡山県史』第18巻、考古資料、岡山県

2. 各トレンチの調査結果

(1) トレンチの設定

調査年次ごとの発掘区の設定についてはさきに概述したが、それらの目的を明記しつつ、箇所ごとに整理しておく(図3)。

後円部では、墳丘・周溝・周堤・埴輪列などを確認する目的で、南・東・西の3方向に3ヶ所のトレンチを設けた。まず第1次調査では、周溝・周堤および周堤上埴輪列を確認するとともに古墳の長さを確定する目的で、後円部背面墳丘裾の主軸沿いに後円部南トレンチを設けた。長さ13.5m・幅2.0m・面積27㎡である。第2次調査では、もっとも墳丘の残りがよいとみられた東側墳丘斜面下半部から周溝にかけて後円部東トレンチを設けた。長さ15m・幅2.5m・面積37.5㎡である。第3次調査では、後円部東トレンチを、長さ8.5m・幅2m・面積17㎡で斜面上方に延伸した。第2次調査と第3次調査にわたる後円部東トレンチの総面積は54.5㎡におよんだ。また、第3次調査では、反対側の後円部西側斜面下部から周溝にかけて後円部西トレンチも設け、周溝の状況を確認するとともに後円部の直径を確定した。当初は長さ5m・幅2mであったが、斜面上方に向かって長さ3.6m・幅0.5mの細長い拡張区を設け、合計面積は11.8㎡になった。

後円部墳頂面では、副次的埋葬施設の有無を確認するための4本のトレンチを設けた。そのうち第2次調査の墳頂部東トレンチと墳頂部北トレンチは、ともにおもおの長さ6m・幅1mで面積6㎡、第3次調査の墳頂部南東トレンチと墳頂部北東トレンチは、いずれも3m四方の正方形で面積は9㎡である。これら4ヶ所のトレンチと後述する墳頂部石室トレンチによって、後円部墳頂面はほぼ全域を精査しうる結果となった。

前方部では、まず第1次調査において、周溝と周堤を確認して古墳の長さを確定する目的で、前方部前端部の周溝から周堤裾にかけて、主軸に沿った前方部北トレンチを設けた。このトレンチは第2次調査で再発掘を行うとともに、墳丘本体との関係を見るために前方部墳丘に向かって延伸し、最終的には長さ20m・幅2.5m・面積50㎡となった。第3次調査では、保存状況のよい前方部西側隅角を確認して前方部幅を割り

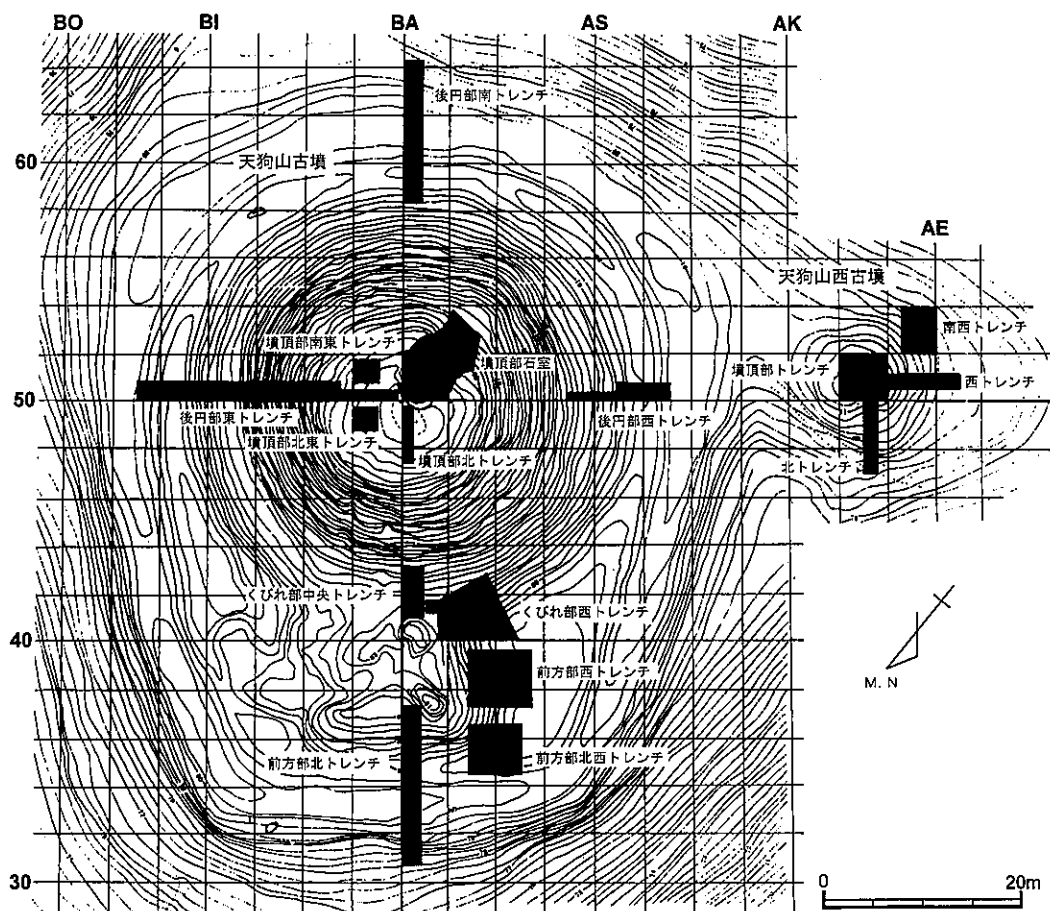


図3 トレンチの配置

出す目的で、 5×5 mで面積 25m^2 の前方部北西トレンチを設定した。同時に第3次調査では、西側辺の造り出しを調査するために、 $6 \text{ m} \times 6.5 \text{ m}$ ・面積 39m^2 の前方部西トレンチを設けた。

後円部と前方部との接続状況を調査するため、くびれ部に2ヶ所のトレンチを設けた。第2次調査では、残りのよい墳丘西側においてくびれ部の墳丘と埴輪列を確認する目的で、くびれ部西トレンチを設定した。長辺約9 m・短辺約5.5mの不整矩形で、面積は 41.1m^2 である。くびれ西トレンチは、円筒埴輪列がくびれ部で屈曲する箇所を捕捉するため、第3次調査において、長さ2 m・幅1.5m・面積 3 m^2 で東側に小さく拡張した。さらに第3次調査では、墳丘主軸に沿う長さ5 m・幅2 m・面積 10m^2 のくびれ部中央トレンチを設け、後円部前方斜面と前方部上面との関係をつかもうとした。

竪穴式石室を調査するためのトレンチは、現在の乱掘墳を包み込むように長さ12m・幅7 m・面積 84m^2 で当初設定したが、実際には埋積土を除去して乱掘墳の壁面および底面を露出していく作業が主となった。

天狗山西古墳では、まず第2次調査で、埋葬施設を確認するために 5×5 m・面積 25m^2 の墳頂部トレンチを設けた。さらに、長さ7.5m・幅1.5m・面積 11.25m^2 の北トレンチを設定し、墳丘の形状と規模の確定を目指した。第3次調査では、墳丘の形状をさらに詳しくみるために、 $5 \times 3.5 \text{ m}$ ・面積 17.5m^2 の南西トレンチと、長さ7.5m・幅1.5m・面積 11.25m^2 の西トレンチを設けた。

以上の総面積は 447.4m^2 を測る。以下に、それぞれのトレンチの調査成果を述べる。まず後円部竪穴式石室の埋蔵状況とその構造について説明し、つぎに後円部、くびれ部、前方部の各トレンチの成果を概述したのち、墳丘の全体構造について知見を述べる。その後に天狗山西古墳の成果を記す。(松木武彦)

(2) 竪穴式石室の位置と埋蔵状況 (図4・5、図版2)

第1次調査と第2次調査において、竪穴式石室の検出、墳丘盛土の構造および墳丘構築過程の把握、墓壙の有無の確認を目的に、後円部墳頂平坦面中央から南に開口する乱掘壙の主軸を基準とし、東西7m、南北12mのトレンチを設定した(図4)。本発掘区を墳頂部石室として報告し、竪穴式石室の詳細については別項を設ける。

第1次調査においては、トレンチを設定したものの、実際には乱掘壙の埋積土を除去する形で掘り下げを行なった。埋積土を掘り下げたところ、後円部中心寄りの現墳頂面から深さ約5mのところ、乱掘者による竪穴式石室への侵入口を確認した。埋積土の断面の検討から、乱掘等に伴う掘り込みは、それぞれ時期を置いて計3回にわたって行なわれたと考えられる。出土遺物としては、流土(埋積土)中から埴輪片、古銭、鉄釘、不明鉄器片などが出土しているが、埴輪片を除いてはいずれも後世の混入によるものと考えられる。

第2次調査においては、第1次調査で確認した竪穴式石室に主軸を設定し、石室主軸と乱掘壙主軸の交点を基準点とした。その基準点から石室主軸に沿って南東に3mをメインセクションとして設定し、さら

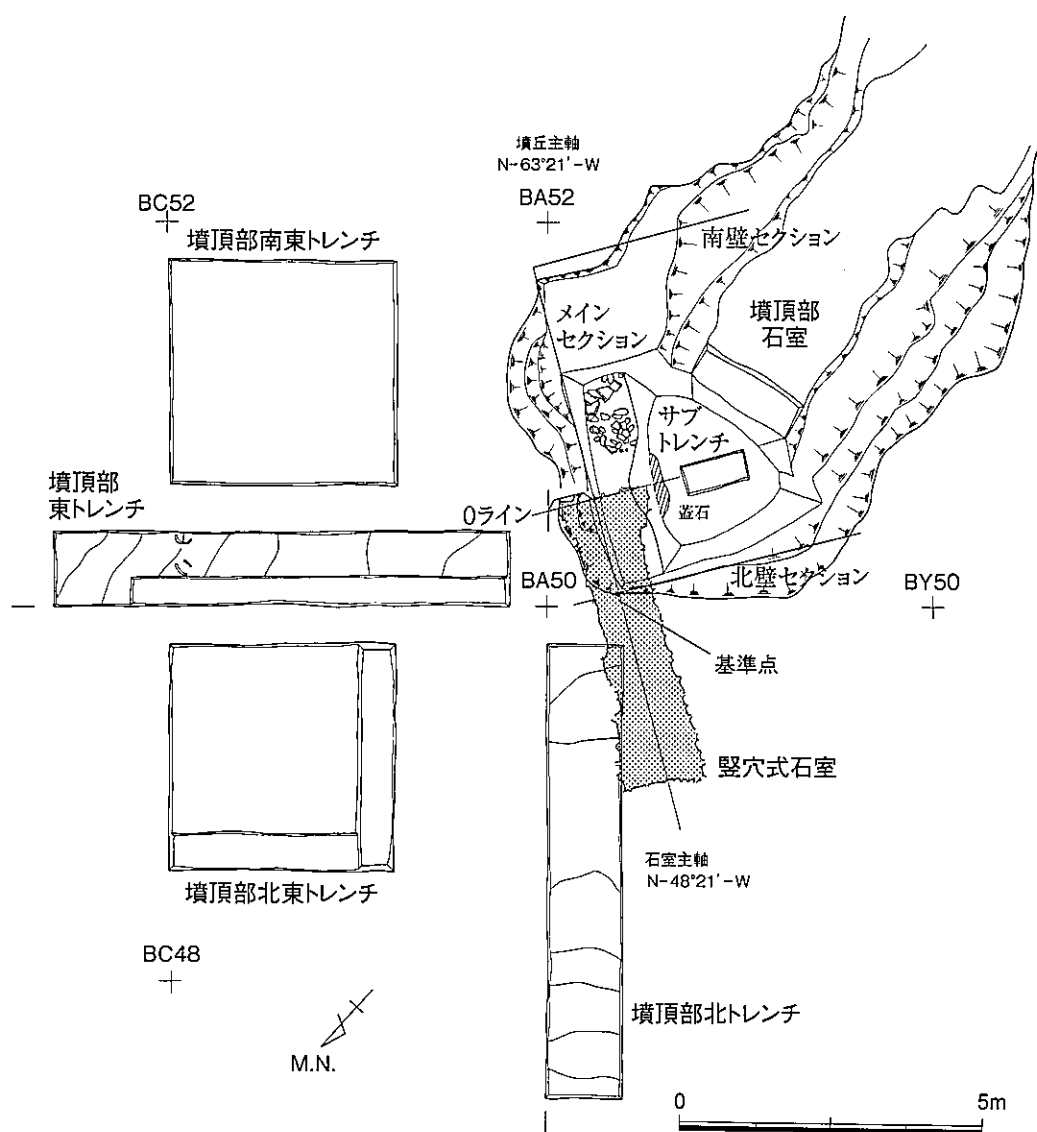


図4 墳頂部のトレンチ配置と石室の関係

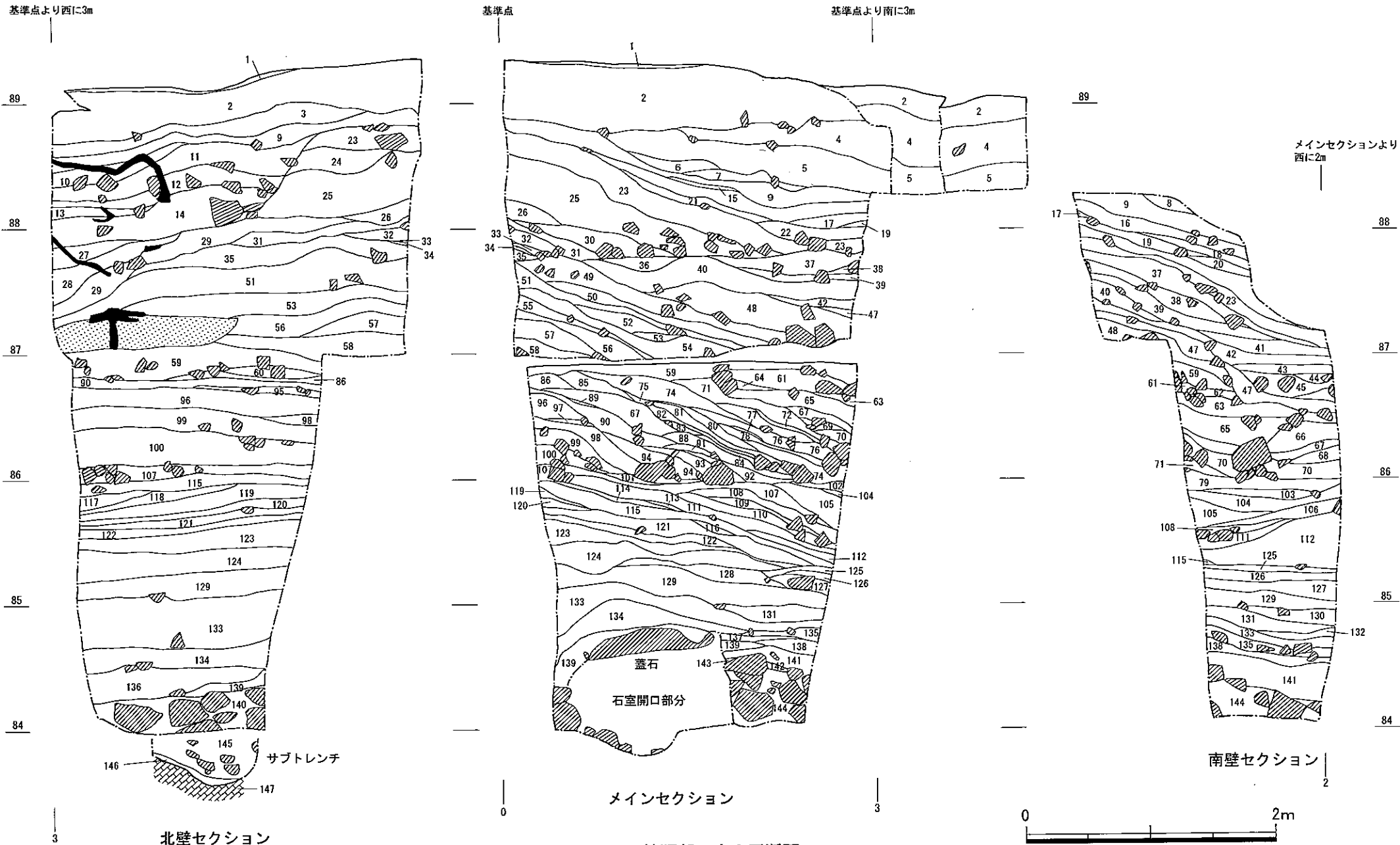


図5 墳頂部石室土層断面

1	黒色土	盛土	36	黄白色土	盛土	60	明黄褐色土	盛土	102	淡緑灰色土	盛土
2	淡赤褐色土	盛土	37	黄緑灰色土	盛土	61	明黄褐色土	盛土	103	黄褐色土	盛土
3	黄白色土	盛土	38	暗黄緑灰色土	盛土	62	緑灰色土	盛土	104	淡緑灰色土	盛土
4	赤褐色土	盛土	39	暗黄緑灰色土	盛土	63	淡赤褐色土	盛土	105	明緑灰色土	盛土
5	淡黄褐色土	盛土	40	黄緑灰色土	盛土	64	淡赤褐色土	盛土	106	淡緑灰色土	盛土
6	淡黄褐色土	盛土	41	黄緑灰色土	盛土	65	暗緑灰色土	盛土	107	淡緑灰色土	盛土
7	黄褐色土	盛土	42	暗黄褐色土	盛土	66	暗赤褐色土	盛土	108	明緑灰色土	盛土
8	黄褐色土	盛土	43	黄褐色土	盛土	67	明黄褐色土	盛土	109	暗緑灰色土	盛土
9	黄褐色土	盛土	44	黄緑灰色土	盛土	68	暗赤褐色土	盛土	110	明黄褐色土	盛土
10	暗赤褐色土	盛土	45	黄緑灰色土	盛土	69	暗緑灰色土	盛土	111	暗緑灰色土	盛土
11	橙白色土	盛土	46	明黄褐色土	盛土	70	明赤褐色土	盛土	112	明赤褐色土	盛土
12	赤褐色土	盛土	47	明黄褐色土	盛土	71	淡黄褐色土	盛土	113	明緑灰色土	盛土
13	橙白色土	盛土	48	黄緑灰色土	盛土	72	明赤褐色土	盛土	114	淡緑灰色土	盛土
14	緑褐色土	盛土	49	明黄褐色土	盛土	73	暗緑灰色土	盛土	115	明黄褐色土	盛土
15	黄褐色土	盛土	50	黄緑灰色土	盛土	74	淡赤褐色土	盛土	116	淡黄褐色土	盛土
16	黄褐色土	盛土	51	明黄褐色土	盛土	75	明黄褐色土	盛土	117	赤褐色土	盛土
17	明橙色土	盛土	52	暗黄緑灰色土	盛土	76	暗緑灰色土	盛土	118	明黄褐色土	盛土
18	明橙色土	盛土	53	明黄褐色土	盛土	77	明黄褐色土	盛土	119	淡緑灰色土	盛土
19	黄褐色土	盛土	54	暗黄緑灰色土	盛土	78	暗赤褐色土	盛土	120	明黄褐色土	盛土
20	黄褐色土	盛土	55	黄褐色土	盛土	79	明緑灰色土	盛土	121	淡緑灰色土	盛土
21	黄褐色土	盛土	56	暗黄緑灰色土	盛土	80	明黄褐色土	盛土	122	明黄褐色土	盛土
22	黄褐色土	盛土	57	暗黄褐色土	盛土	81	暗緑灰色土	盛土	123	淡緑灰色土	盛土
23	淡橙色土	盛土	58	明黄緑灰色土	盛土	82	淡赤褐色土	盛土	124	明黄褐色土	盛土
24	暗黄褐色土	盛土	59	淡緑灰色土	盛土	83	明赤褐色土	盛土			
25	明黄褐色土	盛土				84	淡緑灰色土	盛土	125	淡緑灰色土	盛土
26	黄緑灰色土	盛土				85	明赤褐色土	盛土	126	淡赤褐色土	盛土
27	明緑灰色土	盛土				86	淡赤褐色土	盛土	127	淡緑灰色土	盛土
28	暗緑灰色土	盛土				87	暗赤褐色土	盛土	128	淡緑灰色土	盛土
29	緑灰色土	盛土				88	暗黄褐色土	盛土	129	淡赤褐色土	盛土
30	緑灰色土	盛土				89	明緑灰色土	盛土	130	暗黄褐色土	盛土
31	緑灰色土	盛土				90	淡赤褐色土	盛土	131	淡緑灰色土	盛土
32	緑灰色土	盛土				91	暗緑灰色土	盛土	132	明黄褐色土	盛土
33	緑灰色土	盛土				92	暗黄褐色土	盛土	133	暗赤褐色土	盛土
34	緑灰色土	盛土				93	暗緑灰色土	盛土	134	暗赤褐色土	盛土
35	緑灰色土	盛土				94	暗赤褐色土	盛土	135	淡緑灰色土	盛土
						95	暗緑灰色土	盛土	136	黄灰色土	盛土
						96	明赤褐色土	盛土	137	淡赤褐色土	盛土
						97	淡緑灰色土	盛土	138	淡黄灰色土	盛土
						98	明赤褐色土	盛土	139	白色粘土	盛土
						99	淡赤褐色土	盛土	140	淡黄灰色土	盛土
						100	淡赤褐色土	盛土	141	淡赤褐色土	盛土
						101	暗黄褐色土	盛土	142	白色粘土	盛土
									143	褐赤色土	盛土
									144	淡黄灰色土	盛土
									145	淡黄灰色土	盛土
									146	白色粘土	盛土
									147	淡黄色土	地山

にメインセクションの両端からそれぞれ西に90度振った線上3mを、北壁セクション、南壁セクションとして設定した。各セクションともに石室床面と同レベルまで垂直に掘り下げを行なおうとしたが、約5mという深さのために、メインセクションでは標高（絶対高）約87m付近の礫群検出面に幅60cmのテラスを設け、北壁・南壁セクションではもとの乱掘堀の形をそのまま利用する形でやや緩く法面がついている。

石室の位置関係については、南側小口壁に沿って石室主軸と直交する線を0ラインとし、石室内の記録のための基準線とした。0ラインは図上においては、石室主軸との交点から東へ61.0cmの点でBAライン（墳丘主軸）と105°の角度で交差する。この交差する点とBA50との距離は124.5cmである。なお、石室主軸と0ラインとの交点から前述の基準点までの距離は119.8cmである。また、石室の床面と地山との関係を把握するために、石室の0ラインを乱掘堀の底面まで外に伸ばす形で、幅60cm、長さ120cmのサブトレンチを設定し地山面まで掘り下げた。このサブトレンチの北壁の土層を北壁セクションの土層に投影した（図5）。

メイン・北壁・南壁各セクションの検討によって、後円部墳丘の構築過程が明らかとなった（図5）。盛土の施し方としては、墳丘中心部分がある程度高く盛り、その後周囲に土を盛り水平にならすという作業を何回か繰り返しており、ほぼ1mおきに平坦な面を作っていることがわかった。以下、その工程ごとに詳細に述べる（丸字の番号は上の土層注記表中の丸数字と対応）。

①地山を削り出し、石室構築面を整地する。このことについては、石室外のサブトレンチにおいて、

地山上に旧地表面（ブラックバンド）がみられず、石室側に向かってやや地山が下がっていく状況が確認できた。

- ②石室構築と並行して、淡黄灰色土層、淡赤褐色土層、白色粘土層などの粘性の強い土を、石室全体を覆うような形で互層状に盛る。その後、赤褐色土層、黄褐色土層、緑灰色土層により、互層状に盛土を行なう〔土層注記表125層～146層〕。
- ③黄褐色土層、緑灰色土層、赤褐色土層により互層状に盛土を行なう。盛土の方法としては、墳丘の中心部分（基準点付近）を高くする形で盛った後に、周囲を同レベルまで揃えるように土を盛っていく〔102層～124層〕。
- ④標高86m 付近で一度平坦面を作り、大型礫を敷き詰め、その後に緑灰色土層、黄褐色土層、赤褐色粘質土層により、互層状に盛土を行なう。盛土の方法は③と同じである。墳丘中心部分は赤褐色の厚い土層がみられる〔60層～101層〕。
- ⑤標高87m 付近で一度平坦面を作る。大型礫の敷き詰めは、メインセクションの南半分と南壁セクションで確認できた。その後、黄緑灰色土層、黄褐色土層により、互層状に盛土を行なう。盛土の方法は③④と同じだが、周辺に盛られる土層が③④の場合よりわずかに厚いという傾向がみてとれる〔36層～59層〕。
- ⑥標高88m 付近で一度平坦面を作り、大型礫を敷き詰める。その後、墳丘中心部に緑灰色土層と黄褐色土層を高く盛り、さらに周囲に橙白土層や黄褐色土層を互層状に盛っていったん水平にしている。その上にかぶせるようにやや厚めの赤褐色土層を一面に盛り、墳頂平坦面を形成していると考えられる〔2層～35層〕。

なお、墳丘盛土のセクションでは墓壙のラインは認められず、墳頂部平坦面トレンチの調査でも確認できなかったため、石室床面までの深さ約5.5mということも考慮に入れると、墳丘構築後に上面から墓壙を掘り込んだのではなく、石室を構築した後にその上に盛土を行ったと考えられる。（寺村裕史）

（3）竪穴式石室の構造（図6・7、巻頭カラー図版1、図版3・4）

石室現状 後円部乱掘壙の堆積土を掘り下げたところ、現墳頂面から5m程の位置で竪穴式石室の侵入口を確認した。石室床面のレベルが現墳頂面下約5.5mを測り、異例の深さといえる。石室は平面的にみて後円部のほぼ中央に構築されており、主軸方向はN-48°21'-Wである。墳丘主軸からは15度西にずれる。

北東側長辺の側壁が両短辺側壁に近い部分を残して幅2mにわたり崩壊し、南西側壁も大きく歪み、壁石材がせり出していた。さらに乱掘時に南西隅部分が破壊されており、蓋石の一部に亀裂がみられるなど、非常に危険な状態であった。そのため、石室観察・実測を最小限にとどめざるを得なかった。ここでは、そのような限定的な調査の中で得られた知見を記す。まず、竪穴式石室の規模であるが、石室長（主軸における）380cm、幅は南東端で117.8cm、北西端で105.8cm、現床面から蓋石までの高さは南東端で71.5cm、北西端で71.5cmを測る。石室内の遺物出土状況記録から、被葬者の頭位は南東方向であったと考えられる。

壁体構造 石室四壁は最下段から天井石直下まで、割石を平らな面を揃えるように意図しながら平積みしている。石材の大きさは15～50cm大とばらつきがあるが、平均20～30cm大の割石を意識的に選択、使用したようである。壁部位によって特に石材の大きさを区別していたようではないが、壁上部には小ぶりの石材を比較的多く用いるようである。また横長の石材を斜めに積んだり、石材の隙間を小ぶりの石材で充填する部分も認められ、その意味で整然とした積み方であったとはいえない。

また、南西長辺や南東短辺などでは明確に、北東長辺や北西短辺では一部不明瞭にはあるが、現床面から20cm程度の位置に目地が通り、水平方向にいったんレベルを揃えるという石室構築過程を反映している可能性がある。この目地よりも下段では石材を比較的横長において積む傾向が強いが、上段はやや乱雑な積み方である。ただし、この目地を境に壁体の傾斜が変化するというようなことはない。

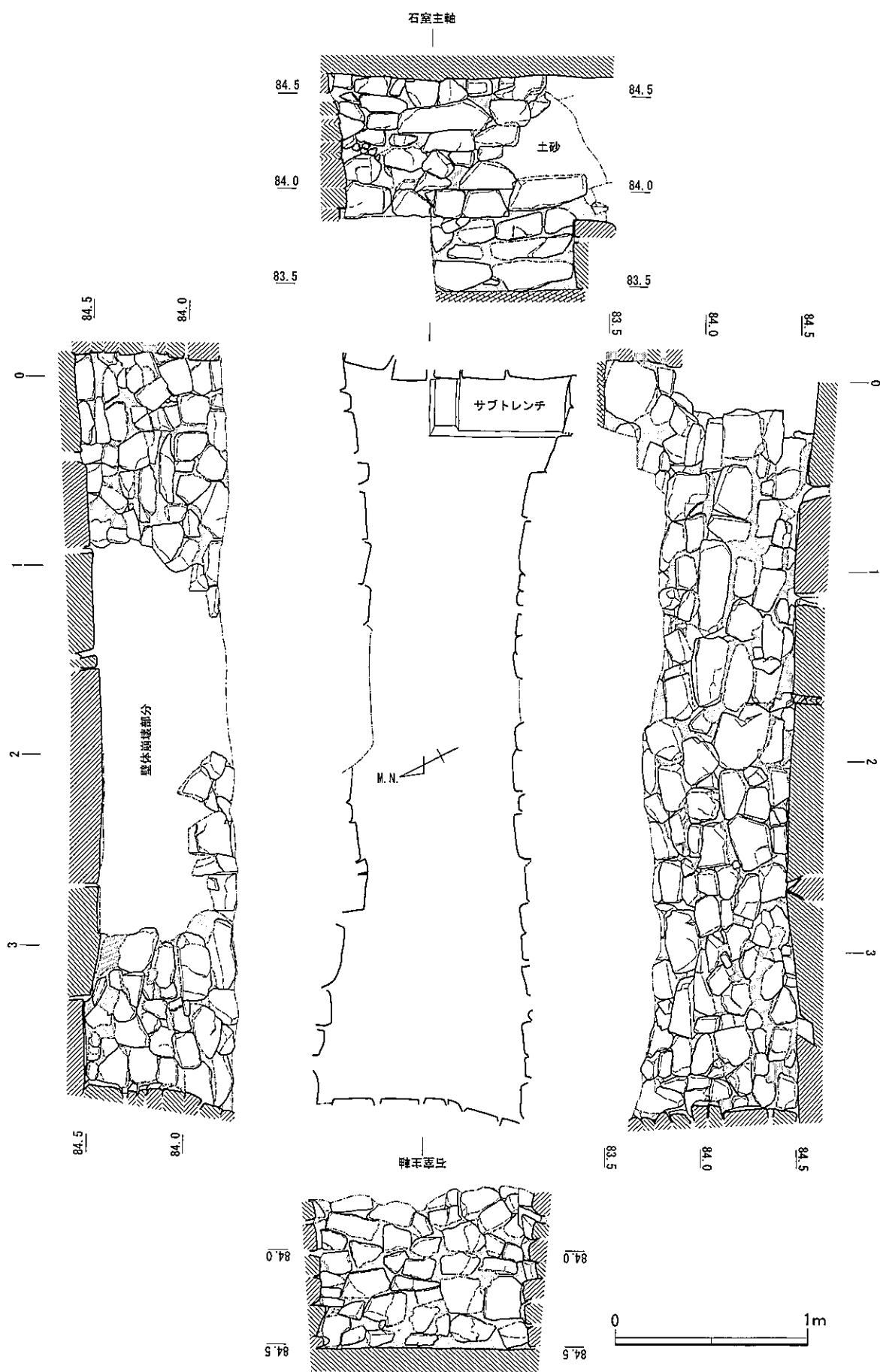


図6 竪穴式石室

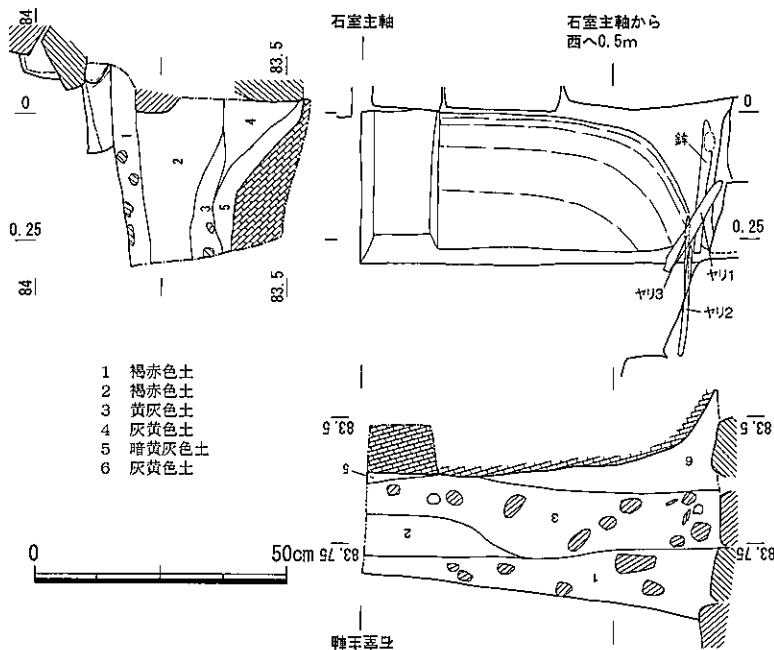


図7 竪穴式石室サブトレンチの平面と断面

辺側の壁に開口部のような構造を確認することはできず、現状では竪穴式石室と判断しておきたい。四壁の壁石の隙間には全面的に白色粘質土が認められる。この白色粘質土は一部、隙間部分のみならず壁面にまで及び、現床面に隙間からはずれた白色粘質土が散乱している。すなわち、壁体を積み上げながら石材と石材の間にかませていったというよりも、壁体が一度完成した後に、壁面を平滑に仕上げたり石室を密閉することを意図して、壁石材の隙間に丁寧に詰められたものと考えられる。ただし、その両方が行われた可能性もあろう。蓋石と最上段の隙間や後に触れる棺床の形成土によって埋め込まれる壁体最下段部などにも、くまなく白色粘土は詰められており（貼られており）、壁体構築に欠かせない工程であったことがうかがえる。

石室最基底面と棺床 このように石室壁面を平滑に整えた後に設けられたのが棺床である。これは石室南隅の断ち割り調査（サブトレンチ）によって確認できた（図7、図版4-2）。この断ち割り調査によって、石室基底が地山上、すなわち地山削り出しによって整形された後円部1段目のほぼ中央に位置すること、棺床の最基底となる部分を残してその周囲を10cm程掘り下げ、そこに壁体を築いていることなどが明らかとなった。すなわち、当初の壁体の高さ（壁体最下段から蓋石まで）は110cmほどであるが、棺床最基底面から20cmほどにわたり床面全面に粘質土や円礫を4層ほど敷くことで、石室底面をかさ上げして棺床を設けている状況が確認できた。断ち割り部分の層序と関連付けて記せば、

- ①棺床最基底面を残してその周囲を壁体構築用に10cmほど掘り下げる。
- ②この面を基底として壁体を築く。壁体完成後に白色粘土を壁面全体に貼りつける。
- ③4～6層を用いて壁体最下段と棺床基底面の間を充填する（壁体最下段は埋め込まれる）。
- ④棺床基底面に粘質土（1～3層、川砂利を多く含む層もある）を約20cmの厚さにわたり敷き詰める。

以上のようになる。現床面はかく乱のため凹凸が激しいが、本来は川砂利を敷き詰めて平坦な礫床に仕上げていたようである。

さらに、棺床形成土中からは、鋒を南東短壁に向けた鉄鋒1点、鉄やり3点が出土しており、木棺搬入に先行する儀礼の存在が想定できる。ただし、作業の危険性から、鉄器出土レベルまで床面全面を掘り下げることは不可能であった。

四隅の状態をみると、隣り合う壁石が互いにかみ合うという状況ではなく、短辺が長辺に挟まれているようであり（特に南東短辺と北東長辺の関係）、いずれの隅角も最下段から最上段まで明確である。ただし、一壁ずつ順次構築したというよりは、下段から上段まで四壁を同時に積み上げていった可能性が高い。さきに指摘した目地の通りもそれを傍証する。崩壊やせり出しが著しいが、本来は四壁をほぼ垂直に構築していったのであろう。その場合、石室平面は長方形(380×117.8cm)で、石室平面比3.23となる。蓋石は大形扁平な石材6枚で、それぞれの隙間を割り石で充填しているようである。

竪穴系横口式石室の可能性も皆無ではないが、観察可能な範囲において短

壁体外側の状況 乱掘堀を利用した後円部墳丘セクション図（図5）から一部明らかにすることができる。まず地山〔147層〕は、一部が北壁セクションのサブトレンチによって確認されたにすぎないが、石室方向に向かって若干落ち込んでいる状況がうかがえ、石室構築にともなう地山面、すなわち後円部1段目中央部の整地によるものと考えられる。また、壁体外側には壁石材と同大の石材や粘質土などを用いた厚い控え積みが行われている。それは周辺にいくにつれてなだらかにレベルが低くなるように積まれており、盛土としての機能も有していたようである。壁体構築と並行して行われたものと判断できるが、とくに北壁セクション図（図5）に沿ってその過程を記すと次のようになる。

①整地した面に白色粘土〔146層〕を敷く（おそらく棺床基底面や壁体構築面の外側に）。

②壁体下部構築と並行して小ぶりの礫を含んだ淡黄灰色土層を用いて控え積みを施す〔145層〕。

③壁体上部の構築と並行して壁石材と同大の石材を壁体背後に置き並べつつその隙間に淡黄灰色土層を詰めて厚い控え積みを施す〔140・144層〕

②と③は控え積みの過程を示しており、これが壁体構築で述べた目地の通りによる構築過程と対応している可能性もある。

④壁体完成後にはその全面を白色・黄灰色・褐赤色粘質土などで被覆する〔137・138・141層〕（この段階で後円部において石室を中心とする儀礼空間が準備された可能性が高い。この空間において石室に被葬者を埋葬する様々な儀礼が行われたのであろう）。

⑤被葬者を埋葬した後に蓋石を架構し、さらに蓋石全体を白色粘土によって被覆する〔139層〕。

基本的に控え積みと埋葬施設の被覆は、このような順序をたどると考えられる。ただし、蓋石被覆（⑤）と控え積み部分の被覆（④）は同時に行われた可能性も否定はできない。

赤色顔料の塗布 壁体と床施設が完成した後には壁面全面に赤色顔料が塗布された。この順序は、棺床形成土に埋め込まれた壁体下段部には赤色顔料が塗布されていないことや、石材の隙間に詰められた白色粘質土にも赤色顔料が塗布された痕跡が認められることなどから推定できる。作業上の効率やつぎに記す木棺の存在などから、石室を木棺に納める前段階に塗布された可能性が高い。蓋石内面にも赤色顔料が全面に塗布されていた。四壁最上段と接する部分にも塗布された部分が確認できたので、あらかじめ蓋石の一面に赤色顔料を塗布し架構したものと判断できる。

木棺 石室内部に納められた木棺の痕跡として、乱掘時に石室四壁に沿って約45cm間隔で確認された鉄製銚を挙げることができる（図56・図版42-5）。実際の出土点数は不明であるが、脚部の木質残存状況から銚が木理に直交して打ち込まれていたことが明らかとなっている。とすると、長辺沿いに確認された銚は、木棺底板と側板、木棺蓋板と側板、もしくは複数の側板の結合に用いられた可能性が高く、石室内法とはほぼ同大の箱形木棺の存在（少なくとも木棺幅と石室幅はほぼ一致するものとみるべき）を推定できる。また、棺床形態から平底の木棺であった可能性は高い。ただし、その他の具体的な木棺構造については不明とせざるを得ない。

以上の検討を参考にして埋葬施設の構築過程を概略的に復元してみよう。

①地山削り出しによって整形された後円部1段目中央を整地し、棺床最基底部となる部分を残しその周囲を10cm程掘り下げる。

②棺床を取り囲むように壁体を構築する。壁体構築は四壁同時に行われた可能性が高く、また壁石材と同大の石材や粘質土を用いて順次控え積みが行われた。控え積みは周辺にいくにつれてレベルが緩やかに低くなるように仕上げられた。

③壁体完成後に壁石材の隙間を充填しつつ壁面を円滑に仕上げるために白色粘質土を四壁全面に貼りつける（この段階と並行して控え積み部分を粘質土によって被覆した可能性があり、儀礼の場としての空間を準備したと考えられる）。

④石室内部に川砂利や粘質土を20cm程の厚さに敷いて棺床（礫床）を設ける。この際に長柄の武器を棺

床内に置くなどの儀礼が行われた可能性が高い。

⑤礫床完成後、四壁全体に赤色顔料を塗布し、鏝によって緊結された箱形木棺を石室内に配置する（木棺が持ち運び用であったのか、それとも石室内で各部材の緊結が行われたのかは不明）。

⑥被葬者埋葬、副葬品配置が行われる。

⑦赤色顔料を片面に塗布した蓋石6枚を架構し、さらにその上を厚さ10～20cm程の白色粘土によって覆い、石室を密閉する。

限られた知見によるものではあるが、埋葬施設構築は基本的に以上のような順序で行われたものと考えられる。前期古墳のように、墳丘完成後に墓壙を掘り石室を構築するのではなく、墳丘築造過程（後円部1段目の平坦面）において葬送儀礼が行われたことや、いわゆる無墓壙の竪穴式石室である点などが特徴といえよう。さらに、石室四壁を完成させた後に棺床を設け鏝を用いた木棺を納めるという葬送順序なども前期のそれとは異なる点と指摘でき、すでに指摘があるように、渡来系墓制と伝統墓制が融合した新式の竪穴式石室として評価することができよう。また、棺床形成途中における長柄武器の配置などが示すように、石室構築過程の様々な段階で儀礼が行われた可能性が高く、注目できる。（高田貫太）

（4）墳頂部平坦面の各トレンチ

墳頂部平坦面においては、墓壙の確認、副次埋葬施設の有無の確認、埴輪列の有無の確認を目的として、第2次調査で東トレンチ・北トレンチ、第3次調査で北東トレンチ・南東トレンチの計4つのトレンチを設定した（図4）。一部で墳頂部埴輪列を確認したが、予想以上に広い範囲にわたって墳頂平坦面は乱掘を受けた可能性も見てとれた。副次埋葬施設は発見されなかった。

墳頂部東トレンチ（図8・図版5） 後円部中心点で墳丘中軸線と直交する線上に設けたトレンチで、BA50から50cm 東のところを基点に幅1m・長さ6mのトレンチを設定した（図4・8）。

ほぼ表土直下に墳丘面があり、この面は墳丘中心から東側（墳頂平坦面端）に向けて緩やかに下っており、その比高は90cmにおよぶ。当初は侵食・流下による傾斜と考えたが、トレンチ東端近く（BC50付近）から原位置と考えられる埴輪の基底部が2基検出されたため、墳頂部には埴輪が並べられ、また築造当初からこのような傾斜をもっていた可能性が高まった。埴輪列の底部のレベルが墳丘中心部よりも約50cm低いことも考慮に入れると、墳丘中心部の墳丘面は周囲より高く、墳頂面は厳密には平坦でなく、丸みを帯びていたことが想定される。

さらに埴輪列の掘りかたおよび墳丘盛土の確認のために、50ラインから南へ幅40cmのサブトレンチを設定して掘り下げを行なったところ、サブトレンチ内から底面を上側に向けた基底部の埴輪片が出土した（17層内）。このため、北壁セクションでは少なくとも17層以上は攪乱の後に堆積した土と考えられる。ただし、埴輪列が検出されたトレンチ南半分には遺構面が広く残ると考えられるため、幅1mのトレンチ内の北側と南側で、土層の状況が異なることが分かった。埴輪列の掘りかたは、北壁セクションとの対応関係においては12層に対応することから、これ以下は北壁セクションにおいても墳丘盛土と考えられる。

原位置で確認された埴輪は2基の基底部である。最下段しか残存していないため、種類は不明であるが、他のトレンチで出土しているものと比較すると円筒埴輪と考えられる。墳頂部における埴輪列は、その他のトレンチにおいて出土している埴輪列よりもやや間隔を空けて並べられている。掘りかたに関してはテラス上、周堤上と同じように布掘りである。埴輪基底部が2基しか確認できなかったのは、埴輪列が検出された付近を境に、その北側では攪乱を受け埴輪列が残存していないためと考えられる。

墳頂部北トレンチ 墳丘中軸線に沿い、東トレンチとは直交する形で、BA50から50cm 北のところを基点に幅1m・長さ6mのトレンチを設定した（図4）。表土直下が墳丘面で、この面は墳丘の中心から外側にかけて緩やかに傾斜している。東トレンチで埴輪列が検出されたレベルと同レベルにおいても、埴輪列・埴輪片は検出できなかった。他の出土遺物もなかった。

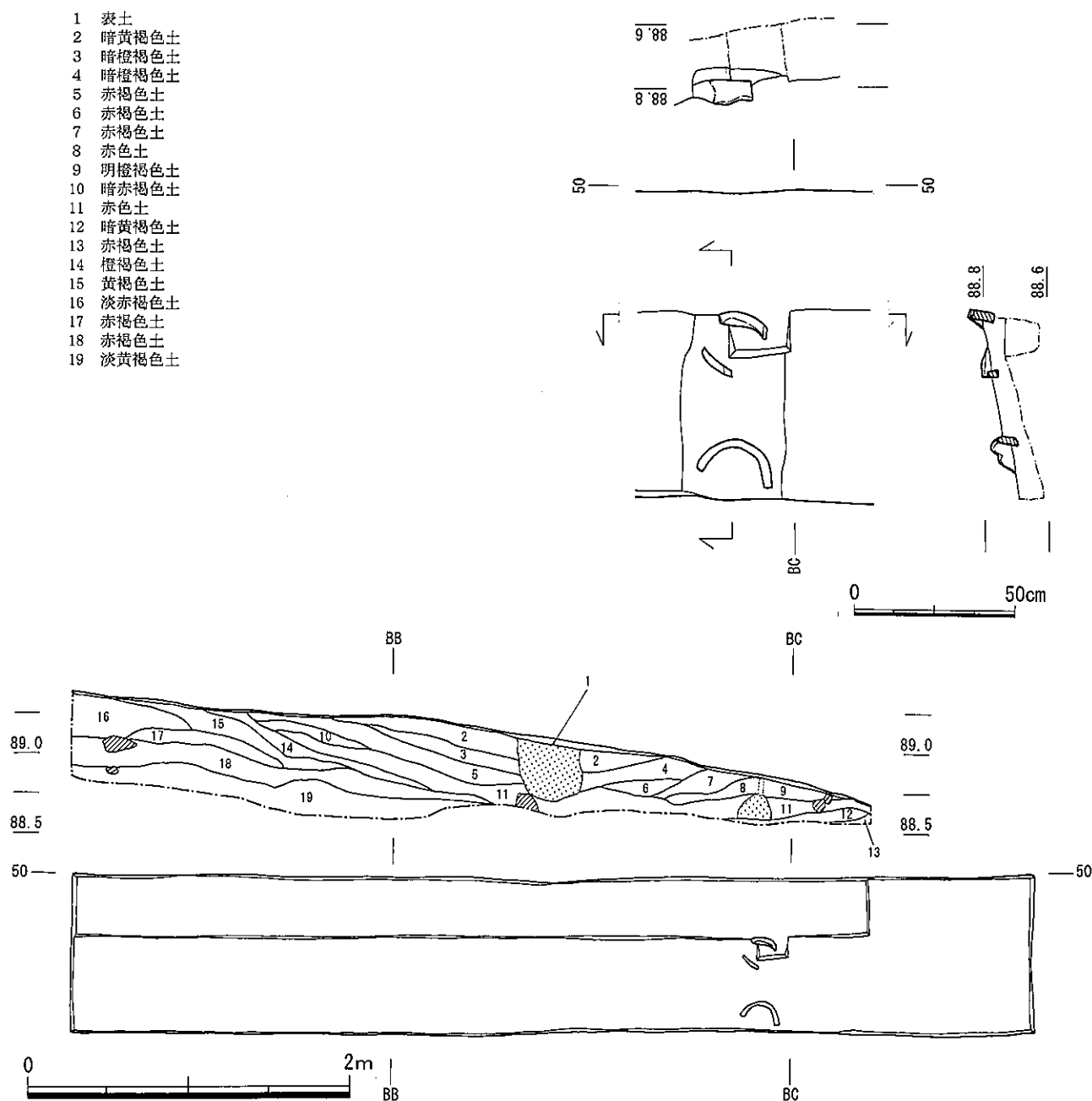


図8 墳頂部東トレンチ平面・土層断面

墳頂部北東トレンチ・墳頂部南東トレンチ 第2次調査で検出された埴輪列の追跡と墳頂平坦面の形状の把握、竪穴式石室以外の副次埋葬施設の確認を目的に、埴輪列が検出された墳頂部東トレンチを両側から挟む形で、南北3m、東西3mのトレンチを二つ設定した(図4)。

北東トレンチでは、表土層直下でしまりの強い盛土層と考えられる層を検出した。そこで、トレンチ西側に幅50cmのサブトレンチを設定し、東トレンチにおいて検出された埴輪列のレベルまで先行して掘り下げを行なった。サブトレンチを掘り下げたところ、南西側約半分で深さ約50cmにおよぶ後世の掘り込みと思われる黒色の攪乱土を検出した。その攪乱土内からは円筒埴輪片のほかに蓋形埴輪の脚台部と思われる破片などが出土しており、墳頂部には蓋型埴輪が樹立されていた可能性が高い。埴輪列が検出された場所が東トレンチの東半分に偏っており、本トレンチでも南西側に攪乱がみられることから、東トレンチの西

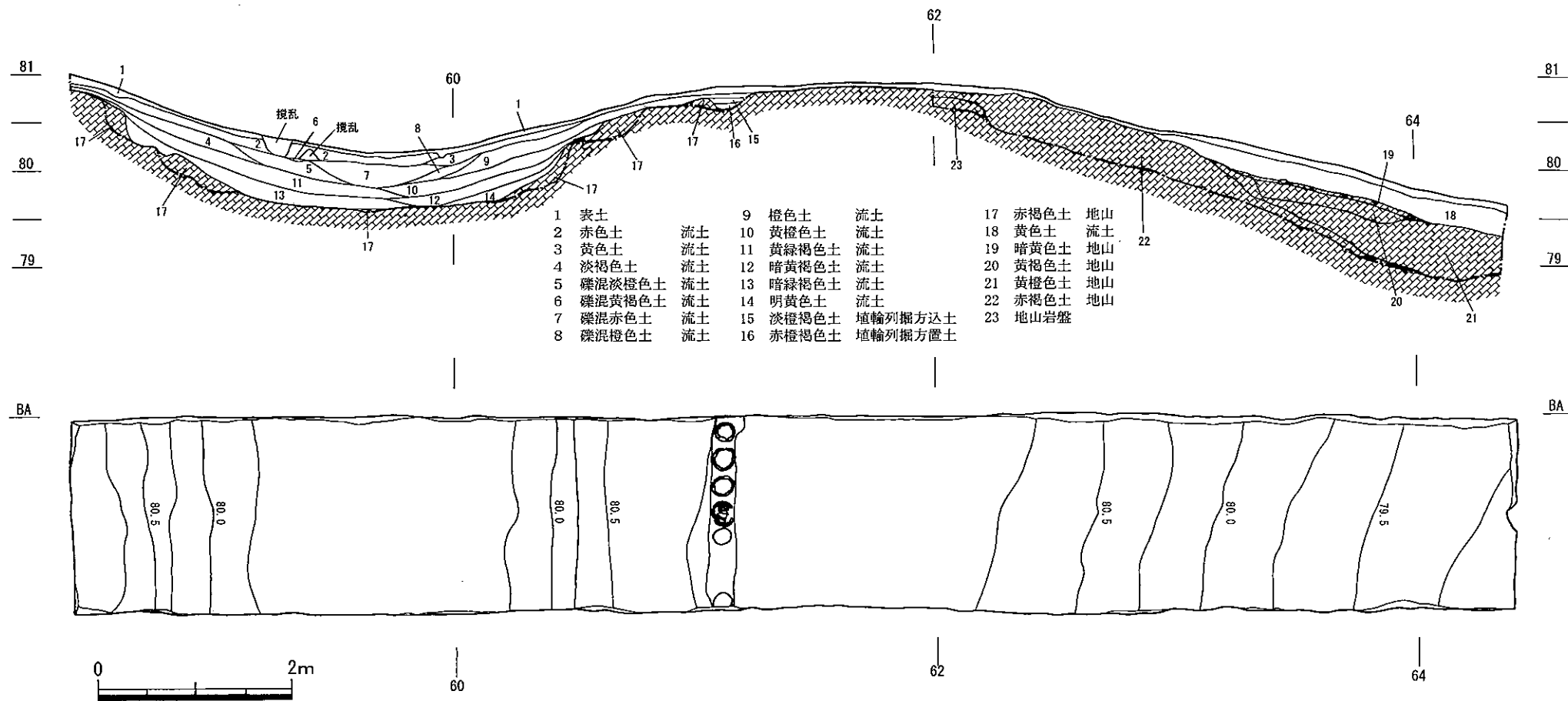


図9 後円部南トレンチ平面・土層断面

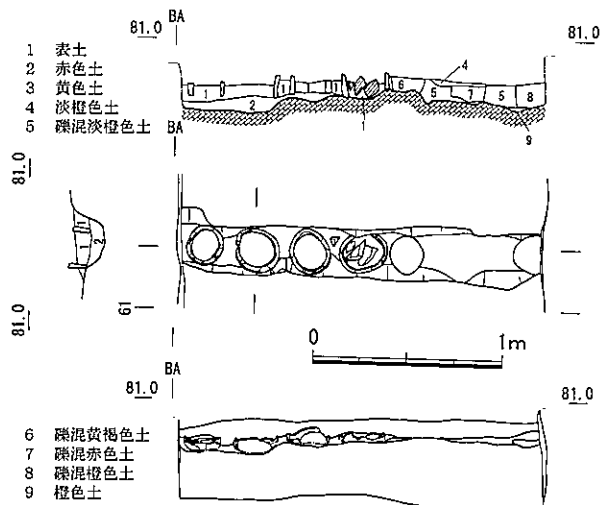


図10 後円部南トレンチ円筒埴輪列平面・立面および断面

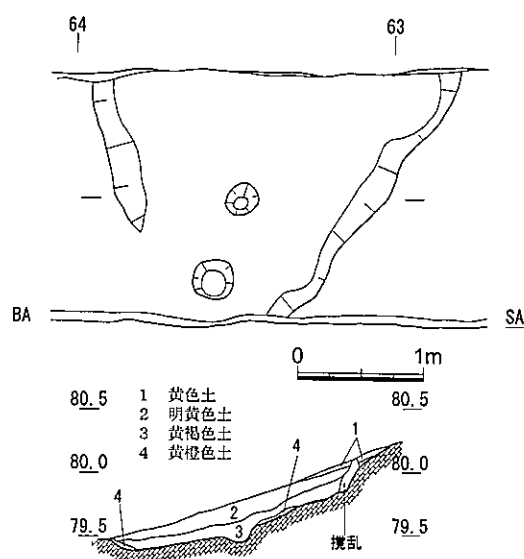


図11 後円部南トレンチ周堤外側の遺構・平面および土層断面

墳丘と同じく、軟質岩盤の地山を削り出して作られていた。周溝の断面は緩い逆台形を呈し、底面の幅は約2.5mを計り、周堤上面から周溝底までの深さは約1.4mである。周溝内の堆積土の厚さは最深部(周溝中央部)で50cm以上あった。周堤は内側(周溝側)を急斜面に削り出しているのに対し、外側は緩斜面をなしてそのまま自然の斜面に移行している。調査の過程で周堤上部に盛土の痕跡を確認できなかったため、本来盛土があったのかどうかという点については留保せざるを得ない。墳域と外部との明確な境界は確認できなかった。

円筒埴輪列(図10・図版6) 周堤の上面中央から周溝側にやや偏った61ライン付近で、周堤を巡る円筒埴輪列の一部を検出した。樹立する埴輪はいずれも底部付近のみ残存していた。原位置をとどめる埴輪は4本で、抜き取り痕跡が2本分確認できた。抜き取り痕跡を持たない箇所には埴輪が存在したかどうかは確定できないが、存在したと考えるなら、本トレンチ幅で検出した埴輪列には、本来7～8本の円筒埴輪があったものと推測できる。また、埴輪列周辺や周溝内から出土した破片には少量の朝顔形がみられた。個体認定・

側から本トレンチにかけての広い範囲で、大規模な乱掘を受けていたことが考えられる。

南東トレンチでは、墳丘面を精査しながら最深部で現墳頂面下約40cmまで掘り下げた。表土層は薄く、その直下から盛土層と考えられるが、墳丘面の流出が著しく、埴輪列・掘り形もすでに流出している可能性が高く、検出には至らなかった。副次埋葬施設も未発見である。(寺村裕史)

(5) 後円部南トレンチ

後円部の規模・形態および周溝・周堤・埴輪列の把握を目的として、後円部南トレンチを設定し、後円部背面墳丘裾の中軸沿いに、長さ13.5m・幅2.0mにわたって掘り下げた(図9)。その結果、後円部下段斜面と周溝・周堤を確認した。墳丘の築造方法が明らかとなり、周溝内から多数の埴輪を検出し、また埴輪列の残存状況とその設置方法が明らかになった。そして前方部北トレンチの成果と合わせて、天狗山古墳の正確な全長を明らかにすることができた。また、周堤外側の緩斜面から弥生時代と考えられる段状遺構とピットを検出した。

墳丘の構造(図9、図版6・7) 後円部背面の1段目斜面下方から周溝・周堤、外側の緩斜面を検出した。遺構面はいずれも地山で構成されており、墳丘部分も盛土の形跡を確認することはできなかった。墳丘斜面および周溝から周堤中央部までは軟質岩盤の基盤層であり、それより外側の斜面は黄橙色あるいは赤褐色の粘質土(古墳築造以前の流土または表面風化層)であった。墳丘部分は軟質岩盤を削り出して作られ、葺石は確認できず、後円部1段目の斜面には本来葺石がなかった可能性が高いことが判明した。周溝と周堤も、

本数の確定には至らないものの、本トレンチ周辺を巡る円筒埴輪列には朝顔形が含まれていた可能性を指摘できる。

埴輪の樹立方法は、まず埴輪を設置するために、地山の軟質岩盤を深さ15cm程度に溝状に掘削し、布掘りの掘りかたを作り、続いて埴輪を設置する。埴輪には、底部が溝底にじかに接しているものと、置き土をはさむものがある。置き土は埴輪の高さを揃えるなどの目的で施したと考えられる。さらに埴輪周囲に土を充填し完成となるが、埴輪の内部にも設置当時に土を充填したかどうかは、明らかではない。埴輪の間隔は検出面付近で1/3～1/4本分程度で、口縁付近では互いに接するほど密に埋設されていたと想定される。

周堤外側の遺構（図11、図版7-2） 周堤外側の緩斜面の地山内から、弥生土器片を伴う古墳築造前の段状遺構およびピットを2基検出した。遺構は地山を掘り込んで作られているが、不整形で底面も水平をなさず、性格は不明である。遺構の埋土は炭粒を頻繁に含んでおり、遺構及びその周辺で、火を使用した可能性がある。ピットは2基とも浅く、その埋土は段状遺構の埋土と同質のものであるため、切り合い関係をもつ別の遺構というよりも、段状遺構の底面の凹凸である可能性を否定することはできない。

出土遺物 周溝に埋積した流土から、円筒埴輪片多数と不明形象埴輪片が出土した。円筒埴輪片には少数の朝顔形を含む。これらの埴輪片の多くは、周溝の下層埋土（10～13層）に含まれ、墳丘側と周堤側の両方から流入してきたものと考えられる。周堤外側の遺構から出土した弥生土器片はいずれも細片で、年代が判明するようなものはわずかである。（西田和浩）

（6）後円部東トレンチ

後円部東側における墳丘端および後円部径の確認、墳丘・周堤の構造把握、葺石・埴輪列の状況解明などを目的として、まず第2次調査で、後円部中心点で墳丘主軸に直交する50ライン沿いに、2段目斜面下部からテラス・1段目斜面・周溝を経て周堤まで、南北2m・東西125mの発掘区を設定した。当発掘区では、周堤・周溝・1段目斜面およびテラスから2段目斜面途中まで、後円部南トレンチ同様、ほぼ全面が地山の岩盤を削り出して作られていることが判明した。また、2段目斜面で葺石を検出した。

第3次調査では、第2次調査のトレンチを同じ幅で西へ8.5m延長する形で、墳丘2段目斜面から墳頂にかけて発掘を行なった。調査前から一部葺石が露出していたが、調査の結果おおむね10～30cmの流土層下において、トレンチのほぼ全面で葺石を確認した。

墳丘と葺石の構造（図12・13、図版8～11） 墳丘は、テラス面から約1m上の2段目斜面途中、標高82.1m付近よりも下部を地山削り出しで、上部を盛土で築成している。そして、後に述べるように、2段目斜面途中から施される盛土の部分にのみ葺石があり、それより下方の削り出しによる2段目斜面および1段目斜面は葺石をもたないという特異な構造である。周溝から周堤にかけても地山削り出しで、どの部分の地山も軟質岩盤である。ただし、周堤上の一部に薄い盛土があり、この付近から基盤の地形が低くなる前方部側にかけて、周堤の築成はしだいに盛土の割合を高めていくと考えられる。後に述べる前方部前面の前方部北トレンチでは、周堤のほとんどの高さが盛土によることが判明している。周溝は、逆台形の断面形をもち、底部の幅は約4mと、後円部南トレンチ部分よりも広い。周堤上面から周溝底面までの深さは約1.2mで、最大で約70cmの厚さに流土が堆積している。

葺石は、先述のように、後円部2段目斜面途中のBGライン以東の斜面上方で検出され、それより下では検出されなかった。当初は、2段目斜面下部では、葺石が転落したために検出されないのではないかと考えていたが、テラス上や周溝底において、葺石の根石になるような大きさの転石はなく、また安定した下側の石が転落し、斜面の上側の石が残っているというのも物理的に考えにくいことから、葺石は古墳築造当初から、2段目斜面の途中から葺かれていたのではないかと考えられる。また、二次的な除去の可能性についても、石の抜き取りを示すような痕跡は残っておらず、考えにくい。葺石の遺存状況は比較的良好であるが、2段目斜面上方の墳頂平坦面の端付近では葺石がほとんど見られない箇所があり、斜面と墳



図12 後円部東トレンチ平面・土層断面

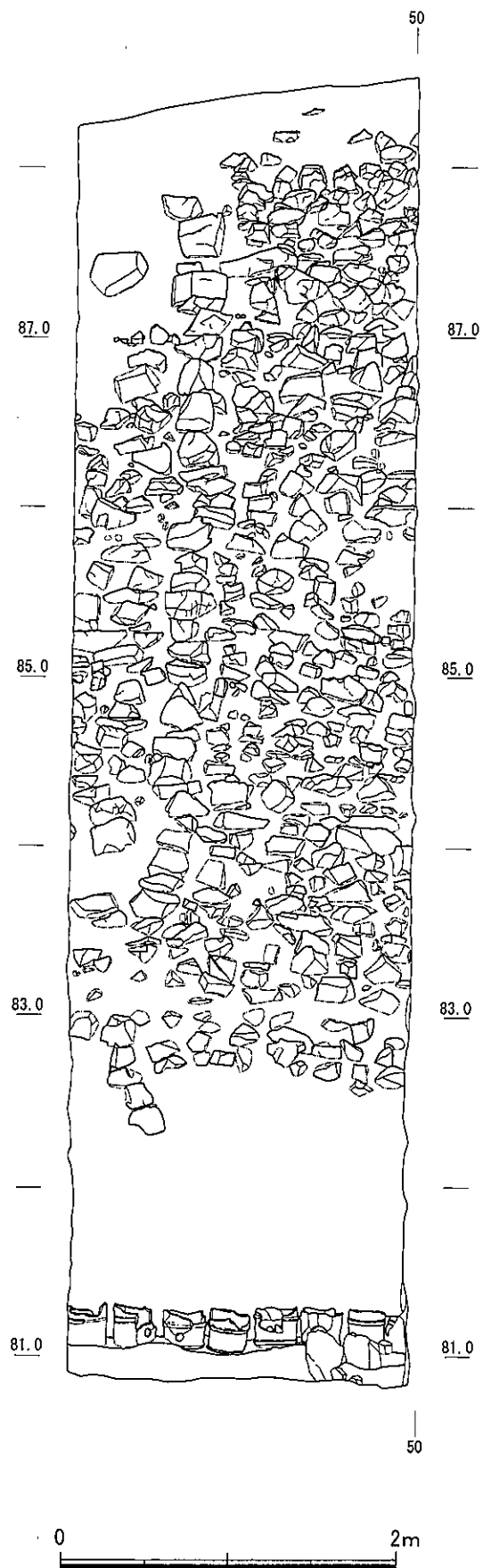
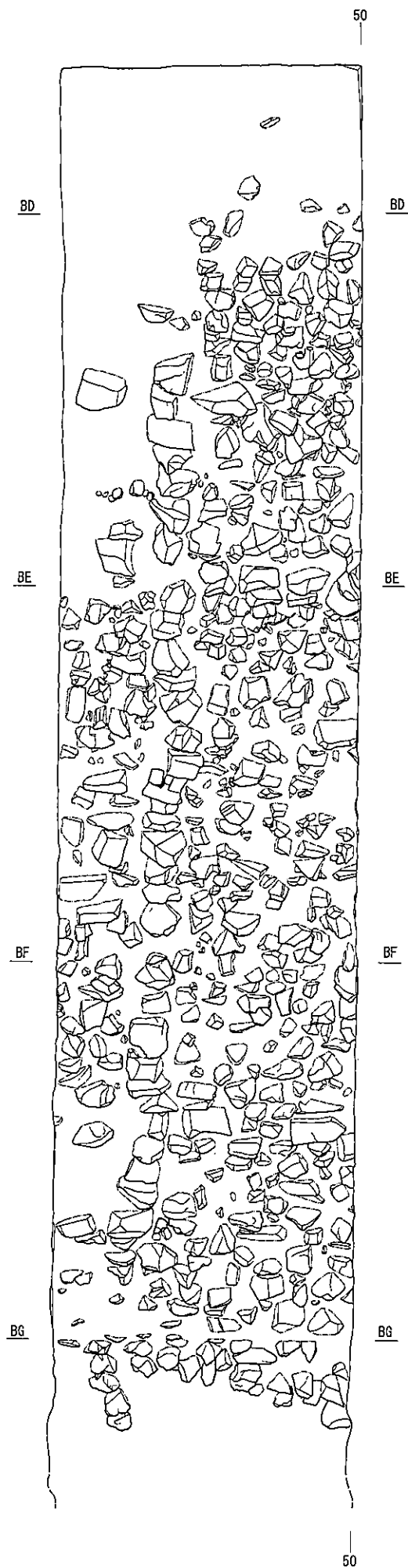


図13 後円部東トレンチ葺石平面・立面

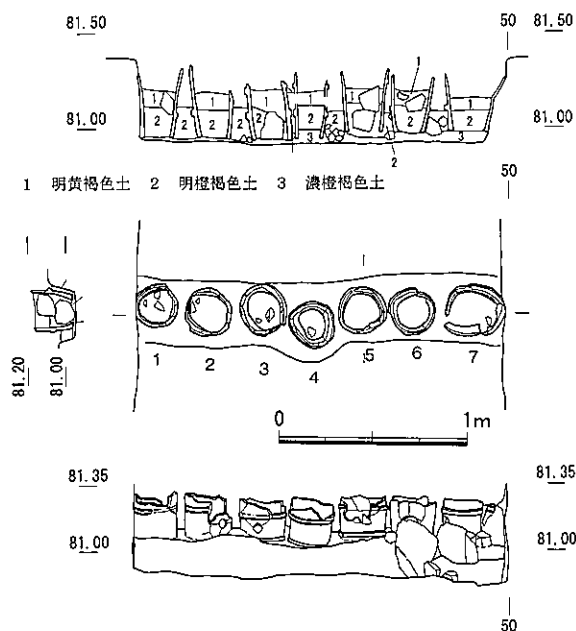


図14 後円部東トレンチ円筒埴輪列平面・立面
および断面

頂平坦面との明確な境界線（葺石最上縁）は確定できなかった。

トレンチ中央やや南寄りに一直線状のいわゆるタテ目地が認められる。この目地は長径30～40cmの比較的大きさの揃った石を用い、下から上にかみ合わせながら強固に積み上げられている（図版8・10）。それ以外の葺石は、長径10～20cm前後とやや小形でまばらに葺かれており、特に強固にかみ合わせた状況は認められない。葺石はもっぱら、斜面に対して垂直方向に、盛土に深く埋め込むことによって固定している。タテ目地相互の間隔は、トレンチ内において確認することはできなかった。

葺石と盛土の状況をより詳細に把握するために、B G50から南へ0.6m・東へ2.6mの範囲で断ち割りを入れ、土層を確認した。まず、2段目墳丘下部では地山の岩盤を検出し、その上に地山と考えられるしまりの非常に強い層（23・24層）と旧表土と考えられる黒みを帯びた層（22層）が確認された。それよ

りも上の部分が盛土である。盛土は、厚さ5～20cm、平均10cmほどの層を基本的には水平に盛っているが、21層では、斜面側を盛り上げて土留め的な機能を持たせている様子が確認された。盛土を水平に盛って積み上げた斜面の表面に、赤褐色土層（15層）を葺石の置き土として施し、葺石を埋め込んでいる。

葺石が斜面の途中から葺かれている状況は、盛土が斜面の途中から盛られていることと対応していると考えられる。具体的には、盛土が盛られているのは82.1m付近より上の部分であるのに対し、葺石が検出されたのは82.3m付近より上であり、非常によく対応している。つまり、斜面の途中から葺石を葺くという特殊な状況は、盛土部分にのみ葺石を施すという意識が働いていた結果ではないかと考えられる。

円筒埴輪列（図14・図版11） 埴輪列は、幅約2mを測るテラス面の周溝に近い部分で検出され、地山の軟質岩盤を溝状に掘削した布掘り状の掘りかたの中に7本の円筒埴輪が並べられていた。置き土を施した上に底部を設置する。間隔は後円部南トレンチと同様で、密である。埴輪内埋土下層には埴輪片を含まず、設置当初から充填していた可能性が高いことが本トレンチでは明らかである。さらに、埴輪内には15cm前後の角礫が入っているものがあり、後から葺石などが転落して偶然入るとは考えにくく、埴輪樹立の際人為的に入れられていたものと考えられる。周辺や周溝内から出土した破片には、若干の朝顔形が含まれるが、埴輪列を構成するどの個体が朝顔形であるかや、その本数などは確定できない。

出土遺物 流土中から円筒埴輪片が多数出土しているほか、墳丘2段目斜面で弥生土器片数点、周溝底付近で須恵器の甕片が出土している。（金子 愛・寺村裕史）

（7）後円部西トレンチ

第3次調査において、後円部西側における墳丘端および後円部径の確認、墳丘・周堤の構造把握を目的として、墳丘主軸に直交する50ライン沿いに東西5m、南北2mのトレンチを設定した。さらに、墳丘のテラスのようにみえる緩斜面の構造と葺石を確認するために、50ライン沿いに幅50cmの拡張部を設定し、調査を行った。

墳丘の構造（図15・図版12） 調査の結果、墳丘端を墳丘1段目斜面の傾斜変換点に定め、後円部東トレンチの成果とあわせ、後円部径は約46.5mであることが判明した。また、墳丘の構造は、周堤および墳丘1

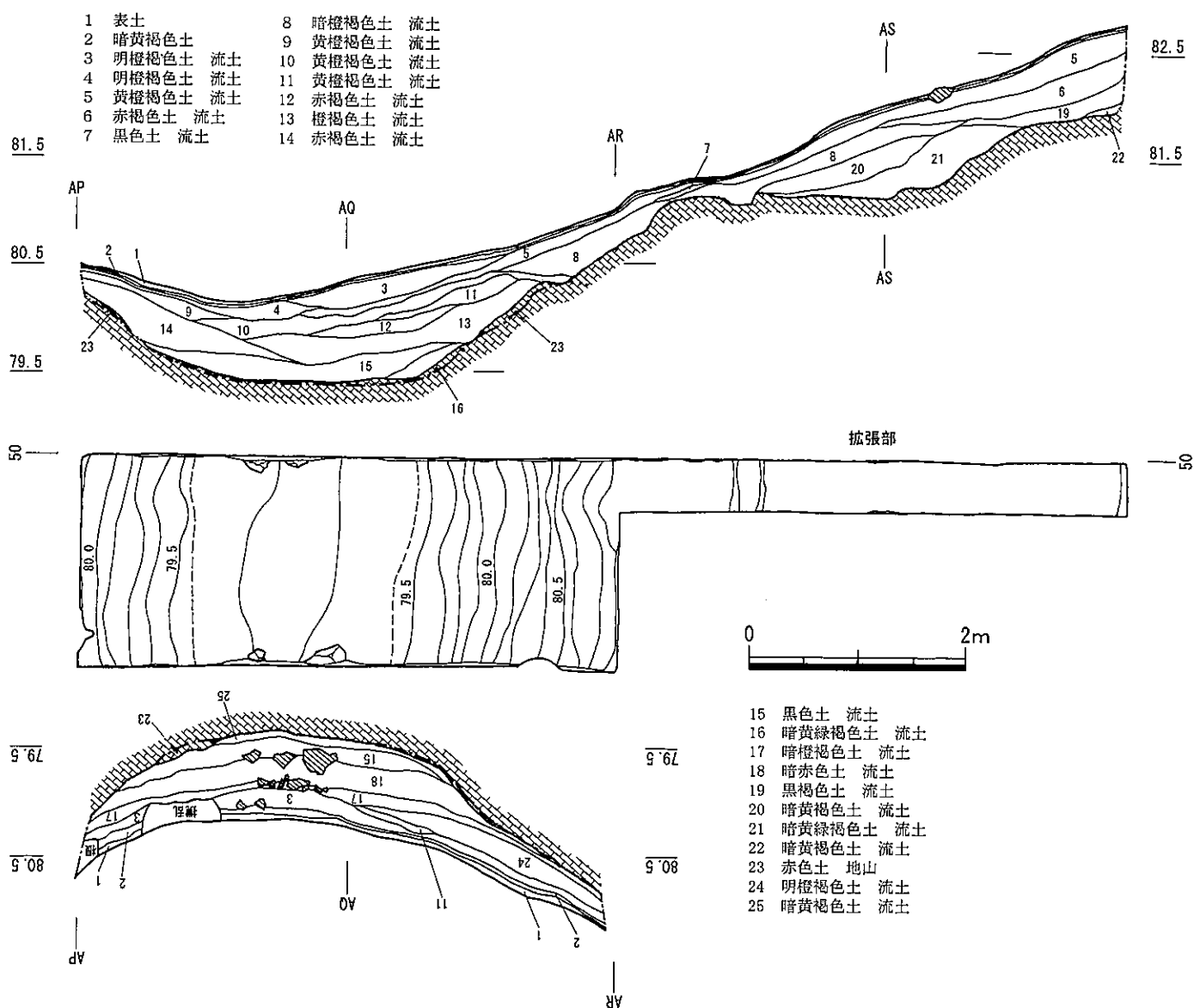


図15 後円部西トレンチ平面・土層断面

段目については地山を削り出して成形している。この部分の地山は軟質岩盤でなく、赤褐色の粘質土となっている。テラス状の緩斜面については、後世の攪乱が激しく、埴輪列も掘りかたと思われる溝状遺構が検出されたのみである。葺石も同様に確認することができなかった。墳丘側の流土にも大きく改変された様子を確認することができ、後世の改変が著しいことが判明した。このように、墳丘西側にみられる緩斜面は後世の攪乱によるところが大きく、整地されている可能性が高い。

ただし、周溝から周堤にかけての遺構面の形態は、ほぼ原状を残していると考えられる。周溝の断面形は、後円部南トレンチ・東トレンチでは逆台形を呈するのに対し、この部分では逆カマボコ形に近く、幅も狭い。周堤上面から周溝底面までの深さは約1mで、主として墳丘側からの流土が約1mの厚さに堆積している。

出土遺物 出土遺物は、埴輪片がほとんどで、弥生土器片、須恵器片、鉄釘などが出土した。弥生土器片については墳丘盛土中に混入していたものが流出したものであり、また鉄釘に関しては後世の改変によると考えられるので、本古墳に伴うものとは考えられない。埴輪片は、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪のほか、形象埴輪として蓋形埴輪が確認され、立ち飾り部や軸受け部、笠部、笠部中位突帯など1個体分の資料が

出土している。また、ヘラ記号が施された円筒埴輪片が5点出土している。須恵器は、甕の胴部と思われる破片（図37-25）のみである。（測ノ上隆介）

（8）くびれ部西トレンチ

第2次調査において、くびれ部の形状と構築方法の解明、後円部テラスから前方部上面にかけての埴輪列配置の確認を主な目的とした調査を行った。トレンチはこの目的に沿って後円部、前方部それぞれの平坦面から、墳丘端、周溝底にかけて設定した。長辺約9m・短辺約5.5mの不整矩形である。土層観察の便宜を図って、トレンチ西壁は後円部の中心BA50杭とAV40杭を結ぶラインにのせ、トレンチ北壁を前方部長軸に直交する40ラインにのせている。なお、第2次調査では後円部テラス上に埴輪列を検出したものの、くびれ部の屈曲点付近の埴輪配列の状況や前方部上の埴輪列の有無が判然としなかったため、第3次調査時に第2次調査で検出した埴輪列の東側に接して長さ2m・幅1.5mのトレンチを設け追加調査を行った。

墳丘の構造（図16・17、図版13～15） くびれ部の後円部1段目テラス、前方部上面縁部から墳丘端、周溝の一部にかけての遺構面を検出した。等高線の81.00m付近で平坦面から墳丘1段目斜面へと傾斜変換し、79.375m付近で墳端ラインをなす。くびれの谷部は深くはっきりと造り出されている。葺石は検出しておらず、地山面ないしは盛土面が表面に露出していたものと思われる。前方部と後円部1段目斜面は地山削り出しで構築されている。後円部テラスは地山削り出しの部分と盛土が施される部分があり、東側の前方部に近い部分は地山削り出しのみで構築され、その他の部分には盛土が施されている。盛土は東側にいくほ

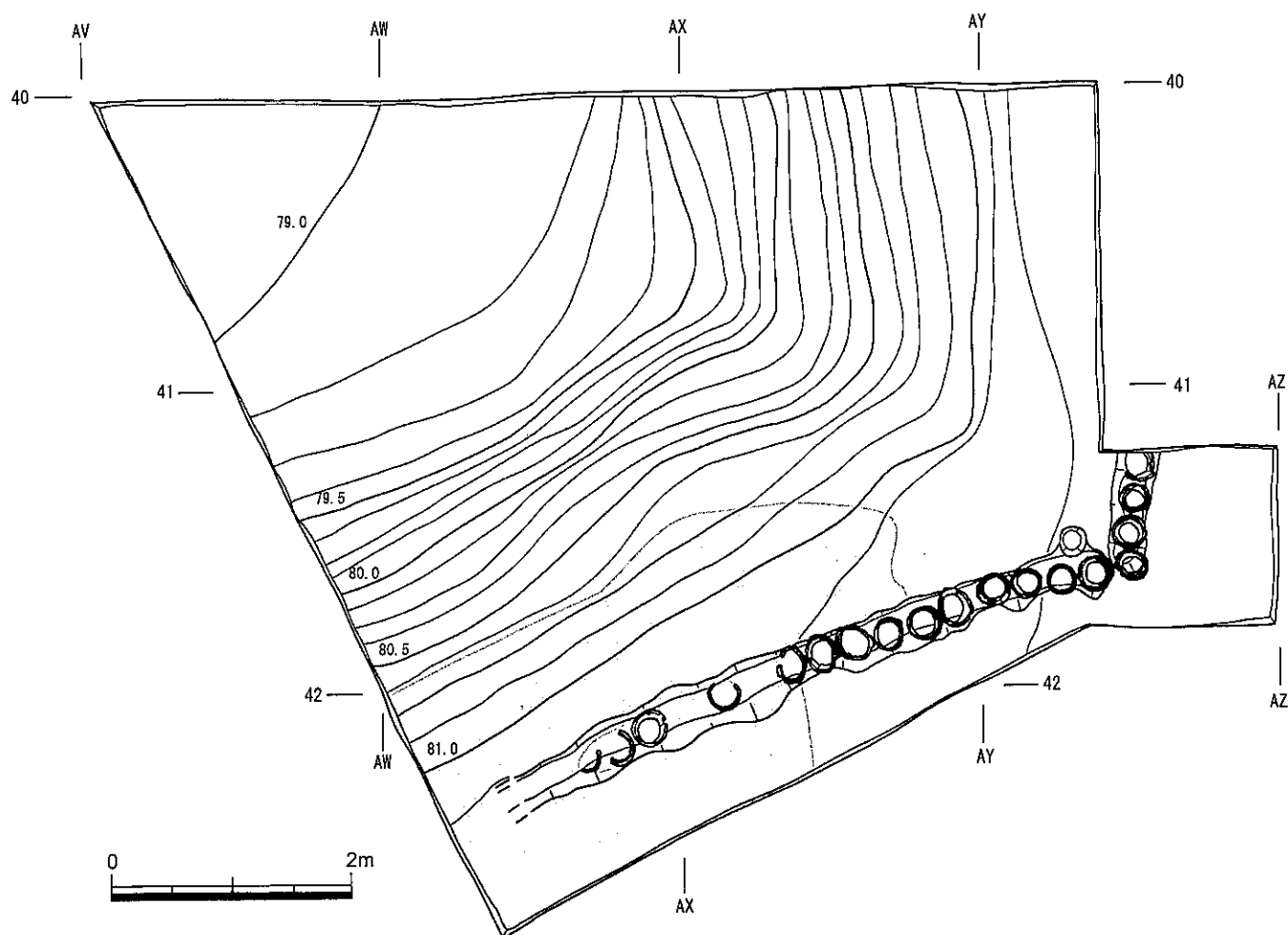


図16 くびれ部西トレンチ平面
（アミ目は盛土部分）

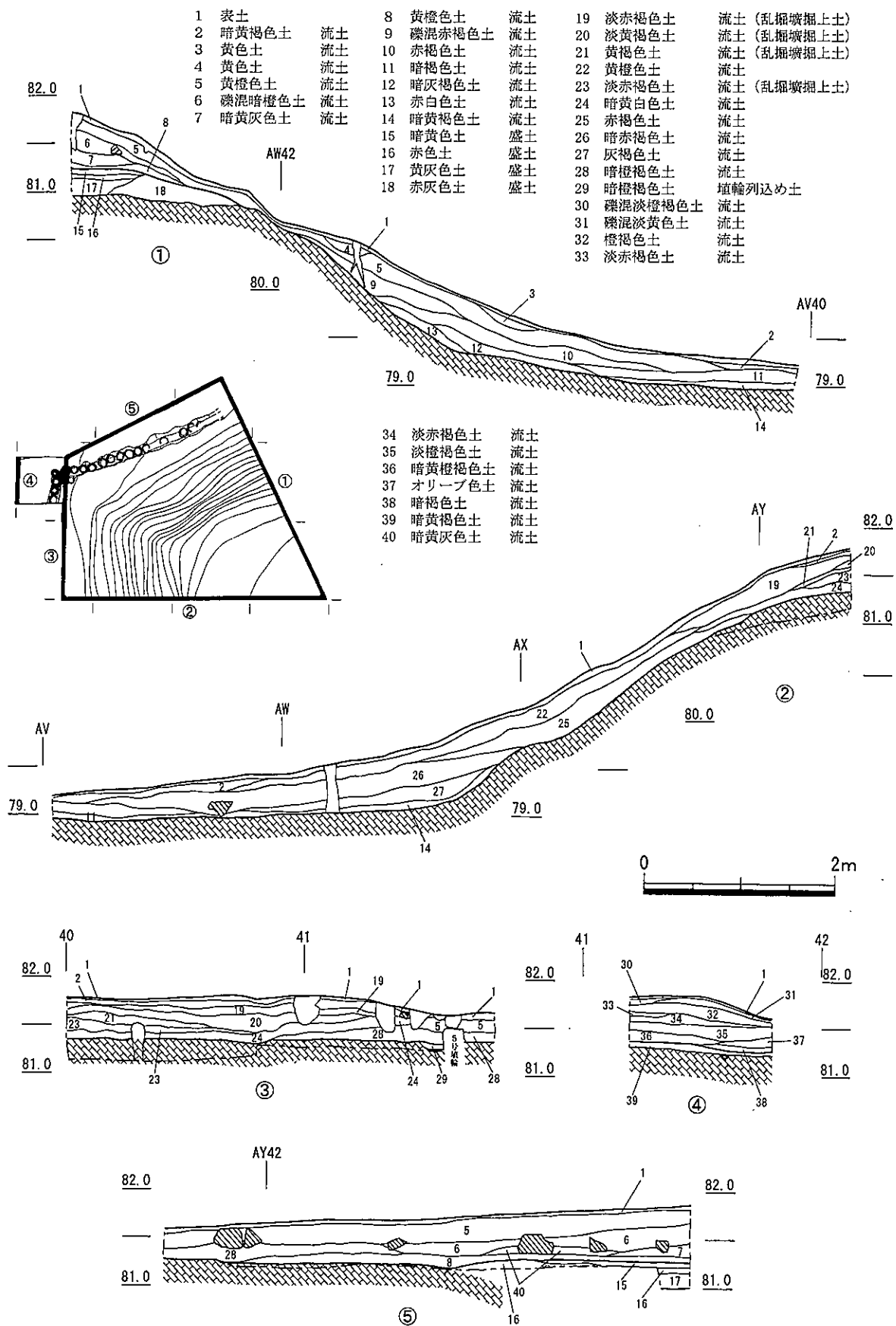


図17 くびれ部西トレンチ土層断面

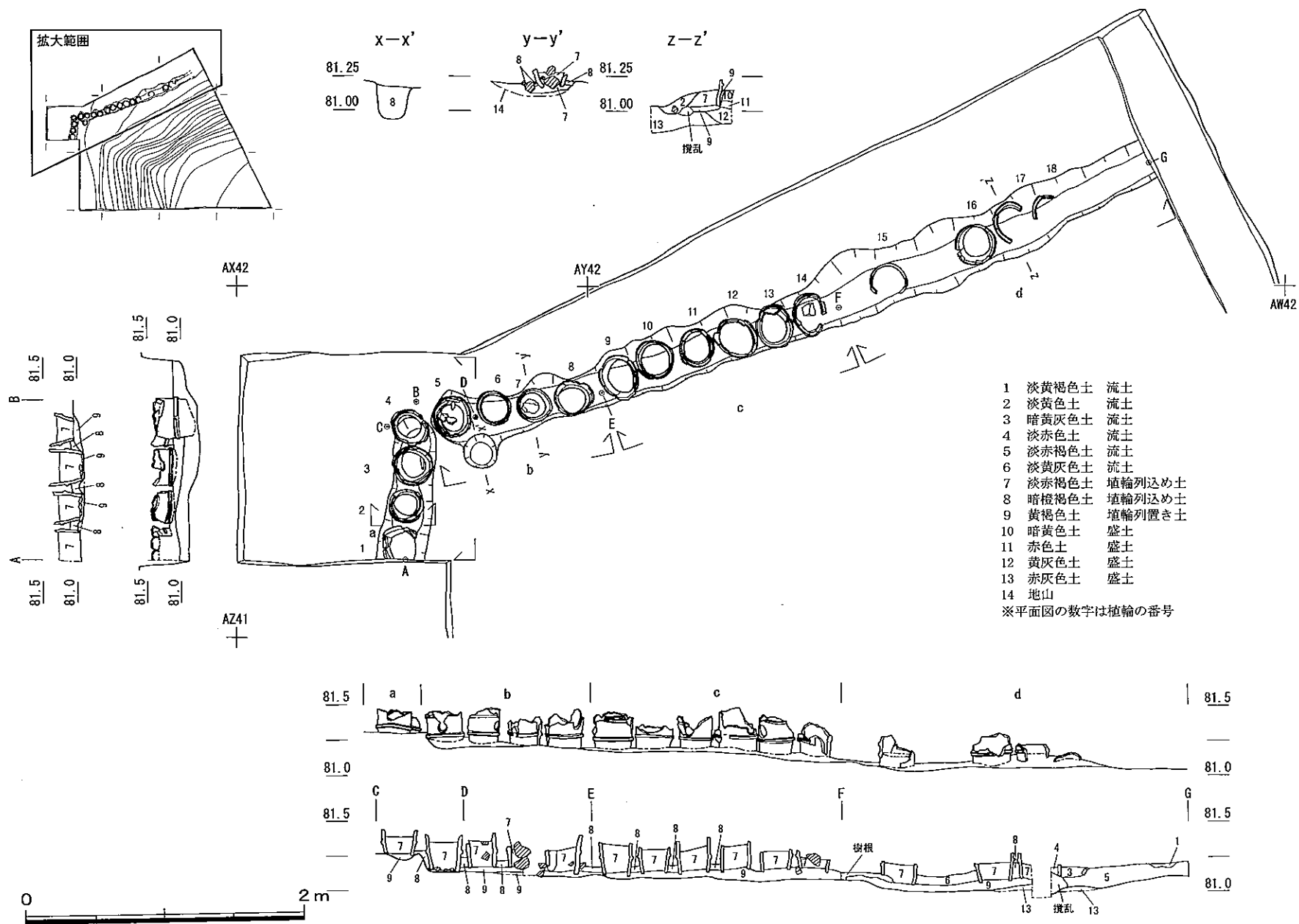


図18 くびれ部西トレンチ円筒埴輪列平面・立面および断面

ど薄く、西側ほどやや厚くなるが、最も厚いと思われるトレンチ西端部分でも厚さ25cm程度と概して薄い。トレンチ西壁に設けた断ち割りの断面の土層観察から、地山をいったん平坦に削った後に、テラスの外縁に堤状に土を盛り（18層）、その内側に黄色土と赤色土を水平の互層状に盛った（15～17層）と考えられる。なお、本トレンチ内で検出した地山は、大半が黄橙色ないし淡黄色の粘質土で、周溝底の低い部分に限り、基盤をなす軟質岩盤の上面が部分的に露出している。

円筒埴輪列（図18、図版13-2、図版14） 後円部テラス上および前方部上面で円筒埴輪列を確認した。埴輪列は、後円部テラス外縁から後円部と前方部の接続部に至り、ここで列の方向を屈曲させ、前方部上面西側縁辺に沿ってさらに前端部に向かう。したがって、後円部埴輪列は前方部埴輪列と接する部分で途切れ、後円部テラスを一周するかたちにはならない。つまり、くびれ部の埴輪配列は墳丘1段目平坦面（後円部テラス・前方部上平坦面）の外縁を一周する一つの列として認識できるかたちになっている。原位置を保って埴輪列を構成する円筒埴輪は、後円部テラス部分で14基、前方部上面で4基の合計18基である。盛土によって墳丘が構築されている後円部の西側では埴輪の残りが悪く、掘りかたごと完全に流失してしまった部分もある。比較的遺存状態のよい埴輪列屈曲部周辺の埴輪でも2段目タガ付近までしか残存していない。

埴輪列掘りかたは布掘りで、後円部列と前方部列それぞれ別個に布掘りを行った後、基本的には置き土を置いた上に埴輪を並べ置き、埴輪内と掘りかた内にそれぞれ異なる込め土を詰めて埴輪を据え付けている。残存状態が良好な前方部埴輪列の掘りかたでは、布掘りながらも埴輪が据え付けられた部分を特に広く深く掘削した状況が観察でき、また置き土や置き石を部分的に施している。このことから、前方部列では、一旦布掘りで掘りかたを掘削した後、実際の埴輪据え付けに際しても適宜部分的に掘削し、底面の高さをそろえるために置き土や置き石を行ったものと思われる。埴輪同士の間隔は後円部南・後円部東の両トレンチと同様に密である。

前方部側・後円部側の埴輪列の連結部に位置する4号埴輪は、掘り方から南側寄りに半身はずれる格好で設置されている。底部を水平に保つため厚めに置き土が施され、前方部列の他の埴輪や後円部の埴輪より底面レベルが10cmほど高くなる。これは、布掘りを行った後実際に埴輪を据える段階で掘りかた内に埴輪設置のスペースが確保できずにはみ出てしまったものか、あるいは後円部側の埴輪列の並びとの整合をとるため意図的に掘りかたから外して設置したものと考えられる。この点に加えて、掘りかたが後円部側と前方部側では接続されていないことも考え合わせると、前方部、後円部それぞれの掘りかた掘削から埴輪の設置にいたるまでを一連の作業としてスムーズに行ったのではなく、埴輪列構築過程上にいくつかの作業工程の段階を踏んでいた可能性を想定できる。また、後円部側の埴輪が緩やかな円弧状に並べられず、数本単位での直線状に並べられている（5～8号・9～14号・15～18号の3単位）状況も埴輪設置作業の復元の参考になるだろう。

埴輪列の屈曲部付近、5号埴輪・6号埴輪の北側で埴輪列掘りかたに連結するピットを1基検出した。ピットは地山から掘り込まれ、埋土に埴輪列掘りかたの込め土がみられる。このことから、ピットは墳丘築造中か埴輪列掘りかた掘削に並行して掘り込まれ、埴輪設置時に埋め戻されたと考えられる。なお、木製の樹立物を据え立てていた可能性もあるが、土層からは柱痕などは確認できなかった。

遺物とその出土状況 本トレンチ内では大量の埴輪片が出土している。多くは墳丘斜面から周溝にかけて流土中から出土したもので、とくに墳裾付近やくびれの谷部で大量の出土をみた。これらの埴輪片は後円部テラスや前方部上の埴輪列を構成する円筒埴輪の破片が大半を占めると考えられる。破片は概して小さく遺存状態は悪い。普通円筒埴輪片が圧倒的多数を占めるが、いくらか朝顔形円筒埴輪片が混ざる。

埴輪列周辺でも密集した状態で埴輪片を検出している。後円部埴輪列の南側、墳頂側にあたるテラス部分を中心に出土しており、テラスからの流出を免れた埴輪列埴輪の破片の一部とみられる。しかし、テラスから流れ落ちた破片が相当多かったようで、埴輪列と接近した位置で検出したにもかかわらず、列を構成する埴輪との接合に成功した破片は少なかった。直接接合はしなかったものの、11～13号埴輪の南側か

らまともに出土した朝顔形円筒埴輪の口縁部片は、胎土や色調、調整などの特徴が13号埴輪の特徴と一致することから、13号埴輪の破片である可能性が極めて高い（図32-36）。したがって、このトレンチ内の円筒埴輪列では少なくとも1基は朝顔形円筒埴輪を交えていたとみられる。

また、前方部テラス縁部付近、AY40を北西隅とするグリッド内を中心にして円筒埴輪片がまともに出土している。大形の破片を多く含み、少なくとも6個体分の破片で構成されている。基底部を含む個体が3個体あり、そのうち1個体は口縁まで復元できる（図28-7）。これらの破片は大半が20・21・23層に含まれて出土している。前方部上に堆積する19～21・23層は発掘区の東に接する乱掘堀の掘り上げ土とみられることから、これらの埴輪片は乱掘によって破壊された前方部埴輪列の残滓と考えられる。

ほかに、前方部西側の造り出し状遺構から転落したと考えられる須恵器杯身片（図37-21）や、須恵器

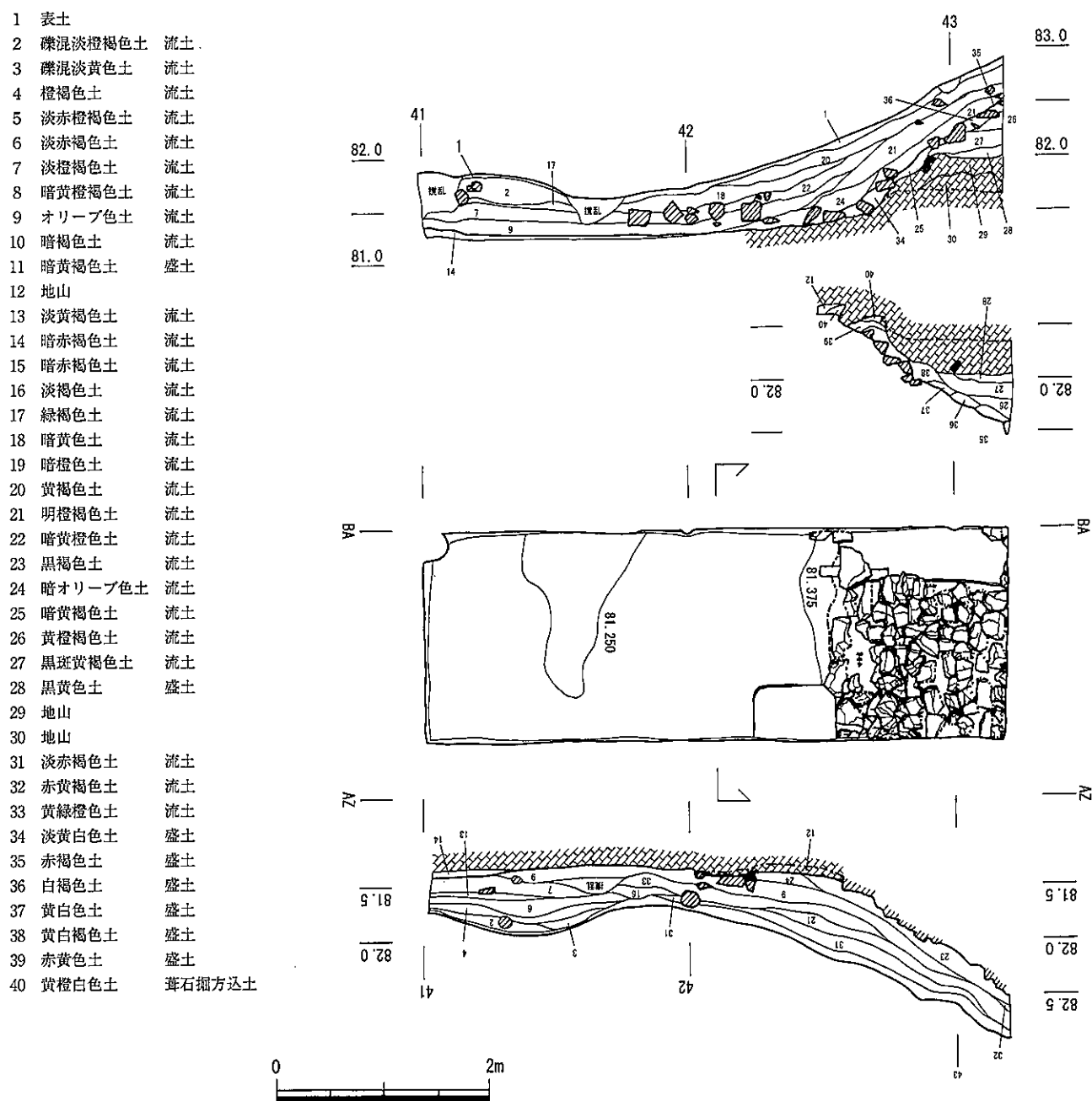


図19 くびれ部中央トレンチ平面・土層断面

瓦片が見つかった。また、古墳に伴わない遺物には弥生土器片や中世の播鉢片（図38-2）などがある。

（北 浩明）

（9）くびれ部中央トレンチ

本トレンチでは、後円部と前方部との接続部における墳丘構造や葺石の状況を確認することを、おもな目的として調査を行った。墳丘中軸線に沿って、後円部2段目北斜面下部から前方部平坦面上面にかけて南北5.5m、東西2mのトレンチを設定した。

墳丘と葺石の構造（図19・20、図版15） 前方部上面は、基本的に、黄橙色ないし赤褐色の粘質土からなる地山を削り出すことによって造成されている。さらに、だいたいの平坦面を形成したのち、上面を水平に整えるために薄く敷土状の盛土（14層）が施される。整えられた上面は、本トレンチ内においては、標高81.3mを保ちほぼ水平である。地山を削って造成した部分は後円部2段目斜面基底部から高さにして約70cm、標高82.0m付近までで、それより上の後円部斜面は、地山最上層に形成された旧地表の黒色土層（28層）をはさんで上部に積み上げられた盛土により形成されている。盛土は、水平に施された厚さ約20cmの層が2層まで確認できた（26・27層）。

葺石は、後円部2段目斜面の裾から上方にかけての検出面全面で確認した。長径20～40cmの角礫が用いられている。斜面裾に比較的大きな石を並べ、基底石とする。基底石は斜面裾に沿って並べられるが、その際に一部地山面を浅く掘り込んだり、置き土をしたりして（40層）、設置の安定を図っている。これらの石を基底とし、その上に下方から上方に向かって、土で固定しながら（25層、34～39層）積み上げていくという工程が繰り返し行われたと考えられる。葺石は斜面と平行するヨコ方向に並ぶ傾向が見てとれ、上方に向かって階段状に積み上げられていった状況が想定できる。ただし、ヨコ方向に並べる工程の幅などについては、本トレンチでは明らかにしえなかった。

上記のような本トレンチの葺石の施工方は、後円部東トレンチでみられた状況とは異なっている。後円部東トレンチでは、タテ方向に一直線状に石が並ぶ、いわゆるタテ目地が認められ、このタテ方向の分割が施工の単位になっていると考えられる。しかし本トレンチでは明瞭なタテ目地は認められない。タテ目地の間隔が本トレンチ内で補足できないほど広い可能性もあるが、斜面に対し横方向を意識して葺石を施すのは、後円部東トレンチでは認められない特徴である。

また、葺石が、後円部東トレンチでは2段目斜面途中の盛土が始まる部分から施されているのに対し、本トレンチでは地山削り出しの斜面基底部から葺かれている。このように、後円部2段目の東斜面と北斜面では、葺石の施工方に大きな違いがみられるが、墳丘のどのあたりから施工方が変わっているかということは、今回の調査から明らかにすることはできなかった。

出土遺物 前方部上面を主体として、流土中から朝顔形を含む円筒埴輪片が多数出土した。これらは墳頂部から流下してきたものと、くびれ部西トレンチの記述で触れた、本トレンチに北接する乱掘堀が前方部上面西縁の円筒埴輪列を破壊したときの埴輪片であると考えられる。

（鯉沼裕子）

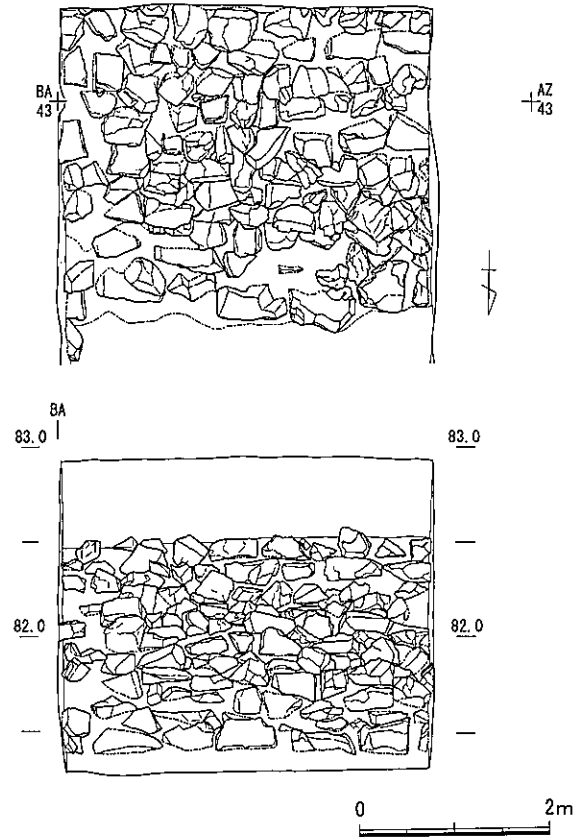


図20 くびれ部中央トレンチ葺石・平面および立面

(10) 前方部西トレンチ

前方部西側に観察される造り出し状の突出部分の性格を明らかにするため、突出部分のほぼ全面を露出するべく、南北に6m、東西に6.5mの範囲にトレンチを設定した。

造り出し状遺構形態と構造(図21・図版16-1) 地山を削り出すことにより構築した前方部墳丘面を検出し、さらにその墳丘面上に人為的な盛土を施すことによって構築されたとと思われる壇状の遺構を確認し

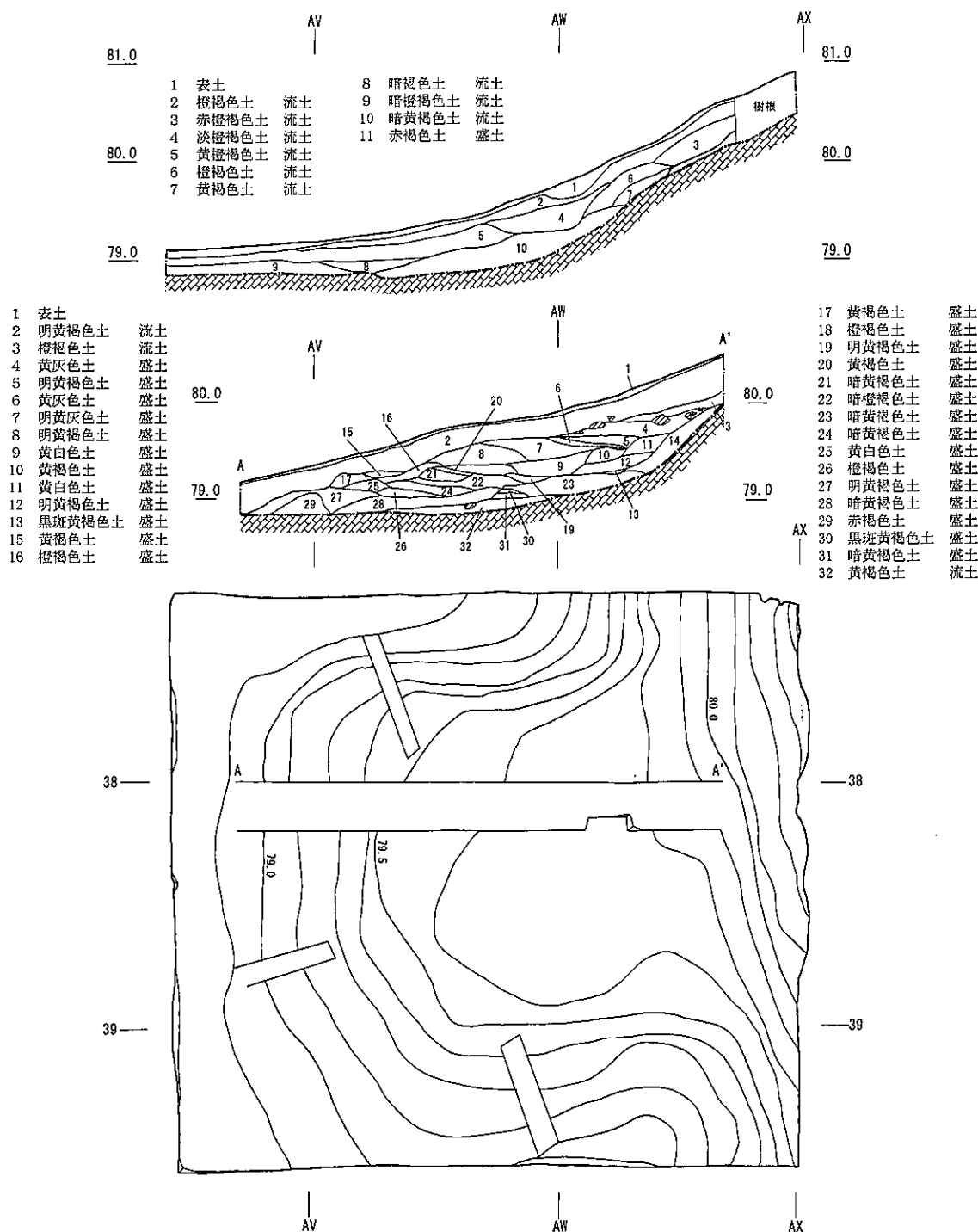


図21 前方部西トレンチ平面・土層断面

た。南北5m、東西4mの台形を呈し、上面の高さは周溝底から約1.5mである。台形の短辺が墳丘本体に接し、両側辺は墳丘外側に向かってわずかに開く形態であるが、上面の平坦部はほぼ正方形を呈する。

遺構における盛土については、厚さ5～20cm前後、平均10cmほどの盛土を、比較的細かい単位で断面レンズ状に重ねている。外側を先にやや高く盛ってから、内側を充填する手法が見受けられる部分がある。シルト質ないし細砂質で角礫をあまり交えないという点で、明らかに他のトレンチで観察された墳丘本体の盛土とは異なる。さらに地山直上には流土が一層認められることなどから(32層)、この遺構は前方部築造に伴って構築された造出ではなく、古墳築造後一定の時期をおいてから構築された造り出し状遺構であると考えられる。墳丘面から付近の周溝底などに流下・埋積した土をさらえて盛ってある可能性も考えられる。

前方部本体の築造後、どの程度の時間を経てからこの遺構が付設されたかを推定する材料は非常に乏しいが、盛土内に埴輪片が見られないことや、腐植土のような層を含まないことなどから、墳丘本体の完成からさほど著しい時間の経過はないものと思われる。墳丘面からの流土を利用して構築したものと考えても、埴輪樹立前あるいは埴輪損壊前の初期流土を利用したものと思われる。

遺構上面の状況(図22・図版16-2) 造り出し状遺構のほぼ中央に当たる位置の盛土直上に、径5～20cmの大小の角礫が散らばり、その間から陶質土器・陶質系土器・須恵器およびそれらの断片多数が出土した。注意深く観察・実測したが、明確な遺構を形成する状況は認められなかった。これらの角礫の間に、内面を上にして、上から蓋・身・蓋の順に重ねられた陶質土器2点と陶質系土器1点の計3点があり、それに近接して陶質系土器杯身1点が内面を上にして置かれていた。周囲には別の個体を含む陶質土器および須恵器の断片が散乱しており、それらのなかには1cm角未満の微細な破片も多数含まれる。これらの破片の中には礫間に挟まっているものもあった。陶質土器・須恵器と角礫が本来どのような関係をもって配置されたのかは明確でないが、両者の間に有機的な関連があったとは考えにくい。

出土遺物 遺構上面の陶質土器・陶質系土器・須恵器は、ほぼ完形で重ねられたものも含め、少なくとも22個体の存在が確認できる(図36・37-1～20)。これらについては出土遺物の項で詳述する。それ以外として、周溝内に埋積した墳丘の流土から、若干の円筒埴輪片が出土した。(藤原貴宏)

(11) 前方部北西トレンチ

第3次調査において、前方部の西隅角および周溝の形状を明らかとするために、前方部北西側にあたる位置に東西5m、南北5mの正方形の調査区を設定した。前方部北西側は北東側よりも大きな攪乱を受けず比較的保存状態がよい。

墳丘と周溝の構造(図23・図版17) 調査区内においては墳丘・周溝ともに大部分が赤く風化した地山の岩盤を削り出すことによって成形されている。墳丘上のおよそ79.750m付近から上の斜面は旧表土(29層)を挟んで盛土(28層)がなされている。すなわち、前方部の北西隅角付近の墳丘は大部分を地山削り出しで、最上部に盛土を施して築成されている。この盛土斜面からは10cm～20cm大の角礫が面をなして現れたため、葺石の残存の可能性も考えられたが、断面調査の結果、これらの角礫はこの部分の盛土中に含まれるもので葺石ではなかった。前方部斜面に当初から葺石がなかったことが、このトレンチでも確認されたことに

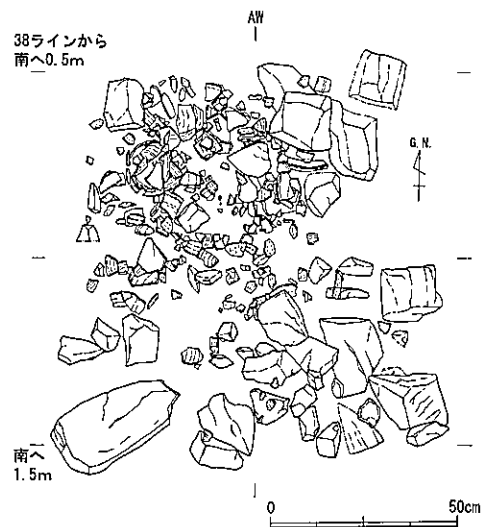
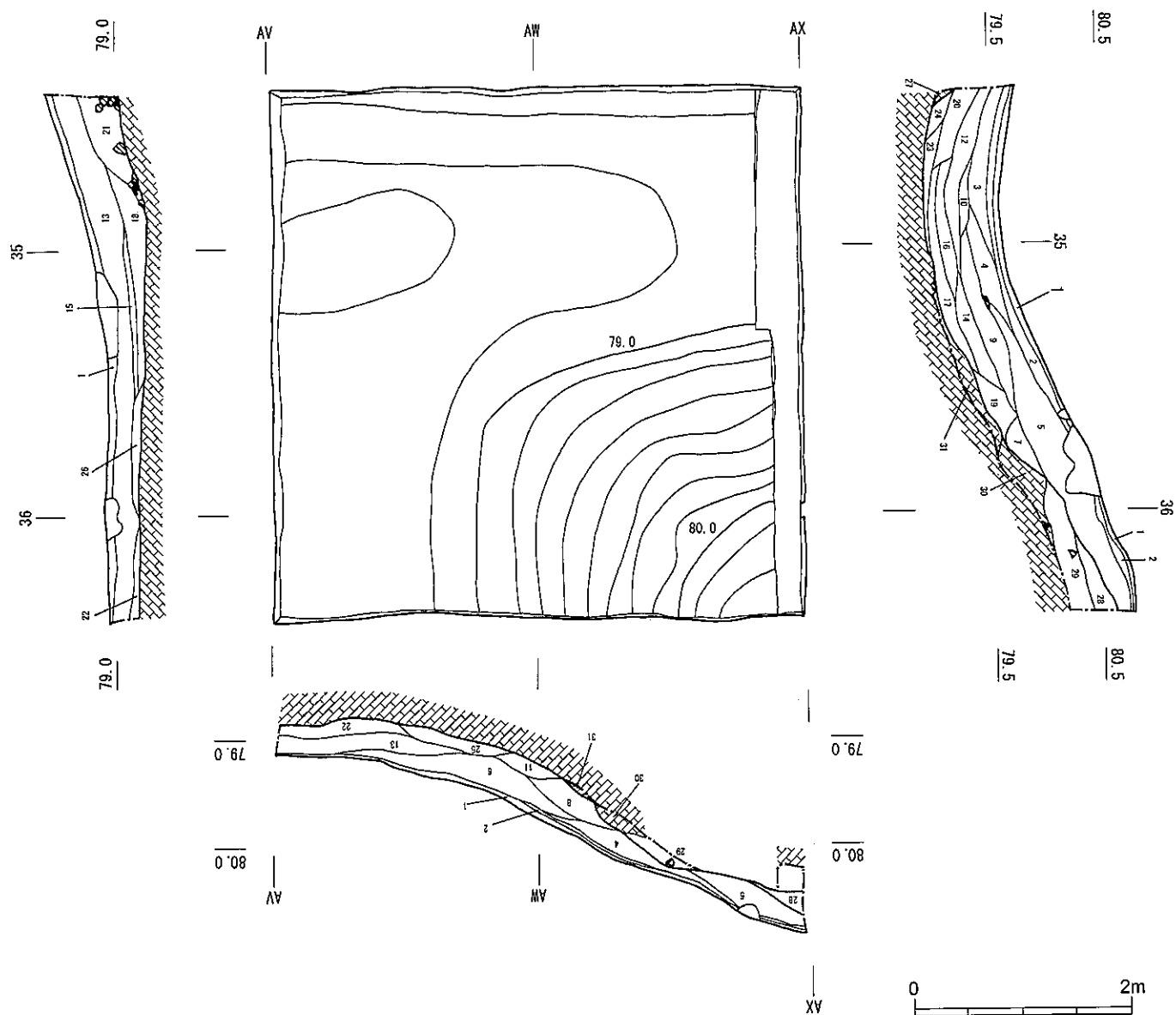


図22 前方部西トレンチ土器出土状況



- | | | |
|-------------|-------------|--------------|
| 1 表土 | 12 暗褐色土 流土 | 23 暗灰褐色土 流土 |
| 2 淡黄褐色土 流土 | 13 黄褐色土 流土 | 24 灰褐色土 流土 |
| 3 淡橙褐色土 流土 | 14 黒褐色土 流土 | 25 暗黄褐色土 流土 |
| 4 橙褐色土 流土 | 15 暗橙褐色土 流土 | 26 暗赤褐色土 流土 |
| 5 赤橙褐色土 流土 | 16 暗黒褐色土 流土 | 27 赤褐色土 周堤盛土 |
| 6 淡橙褐色土 流土 | 17 黒灰色土 流土 | 28 赤褐色土 墳丘盛土 |
| 7 暗黄褐色土 流土 | 18 黒褐色土 流土 | 29 灰黄褐色土 旧表土 |
| 8 橙褐色土 流土 | 19 暗黄白色土 流土 | 30 黄白色土 地山 |
| 9 黄褐色土 流土 | 20 暗橙褐色土 流土 | 31 赤褐色土 地山 |
| 10 暗橙褐色土 流土 | 21 暗黄褐色土 流土 | |
| 11 黄褐色土 流土 | 22 暗褐色土 流土 | |

図23 前方部北西トレンチ平面・土層断面

なる。地山は、旧表土直下に当たる上部が黄白色砂質土で、下部は赤みが増し赤褐色粘質土となる。後者には青白色の軟質岩盤が露呈する部分がある。

前方部の西隅角は周溝底から墳丘斜面への傾斜変換点となる78.875mのコンターの屈曲部付近に求められる。この前方部コーナーは直角に近い角度で折れ曲がり、そのまま造り出し状遺構へと接続している。なお、西隅角を基点として、古墳の主軸であるBAラインまでの距離および前方部北トレンチの調査成果をもと

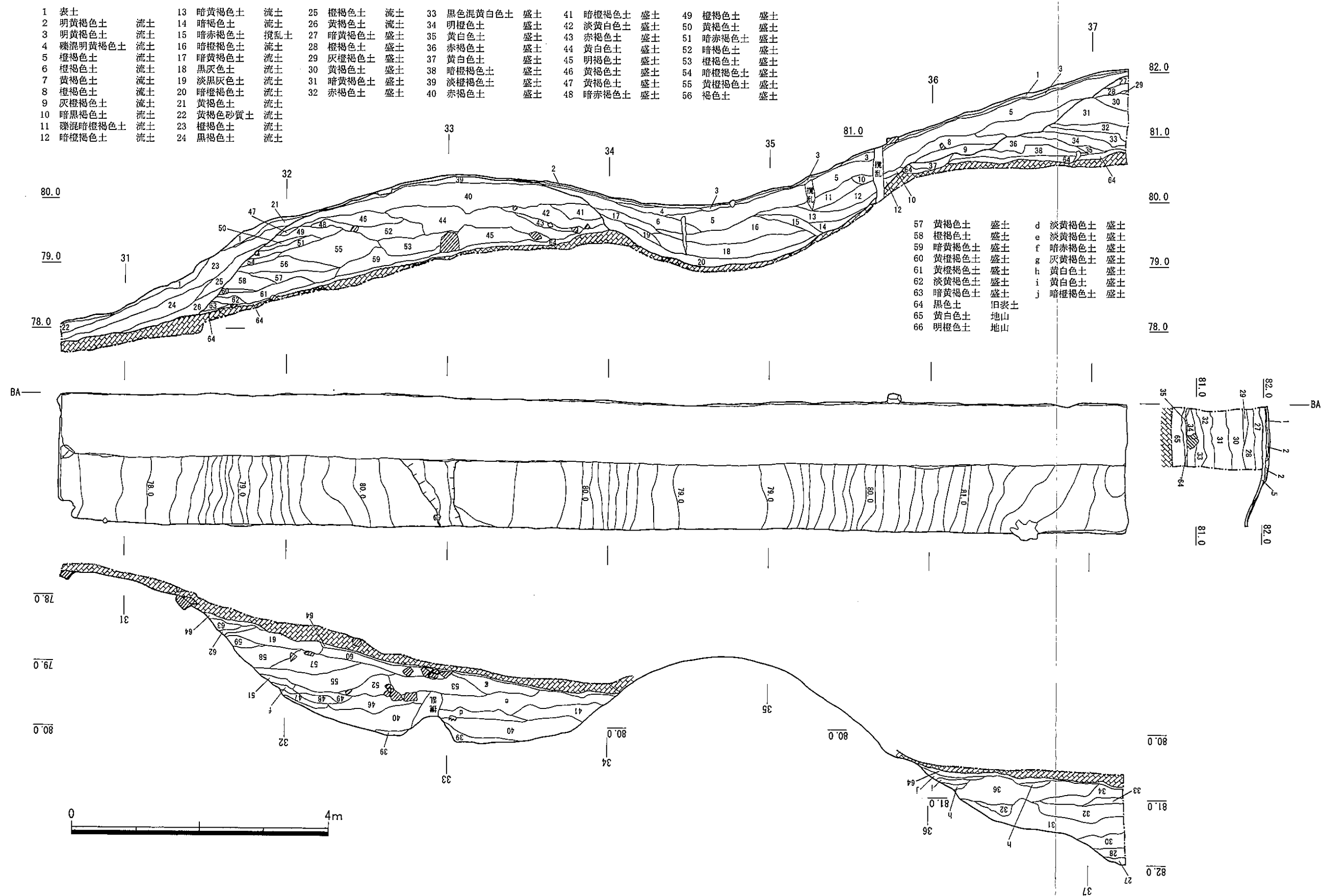


図24 前方部北トレンチ平面・土層断面

に推定すると、前方部端の幅は約22.7mとなる。

周溝底面は東から西へかけてゆるやかに傾斜する。墳丘コーナー直下から、東方すなわち墳丘主軸寄りになるほど浅くなり、トレンチ内で20cmほどの高低差がある。しかし、底面のレベルは平均78.800m前後と前方部西トレンチの周溝底と同様のレベルを示しており、周溝は全体として水平が保たれていたものと考えられる。周溝断面は逆カマボコ形を呈する。周溝底も基本的には削り出された地山の面であるが、調査区北端付近から周堤の盛土が認められる(27層)。

出土遺物 遺物は主として周溝内への流土中から出土した。周堤上からのものか、多量の円筒埴輪片と少量の須恵器片(図37-22~24)が出土している。また、調査区の北西隅付近で埋土の中位(21層)から中世土鍋(図38-4)が口縁部を下に向けるようにして出土している。(井上宗嗣)

(12) 前方部北トレンチ

前方部前端斜面や周溝・周堤の状況、埴輪列や葺石などといった外部施設を含む墳丘端の構造の把握を目的として、東西2m、南北16.5mの規模で墳丘主軸線(BAライン)沿いに設定した。そして、第1次調査では、現存する墳丘・周溝・周堤遺構面や外部施設の有無について確認を行い、第2次調査において墳丘と周堤の断ち割りを実施し、その構造を把握する作業を行った。

墳丘・周溝・周堤の構造(図24・図版18~20) 前方部墳丘の上半と周堤の大部分を盛土で、墳丘の下半と周溝とを地山掘り込みによって造っている。墳丘部分の盛土に関しては、黄褐色系、橙~赤褐色系、暗褐色系というおおよそ3種類ほどに大別できる礫まじりの土を、10~20cmの厚さでほぼ水平に重ねている。一部、36層や38層のように外側を高く盛ったのちに、内側に充填する傾向をみせる部分がある。なお、本トレンチ北側に存在していた乱掘墳の壁面を清掃して土層の観察を行ったところ、黄褐色・赤褐色・暗褐色の盛土が互層状に堆積しており、これは、トレンチ内の状況とほぼ一致している。

前方部前端については、地山削り出し部分に比べて、盛土部分の浸食・流出が著しく、地山部分の傾斜が本来のものであれば、築造当時の前方部上面の前端は現状よりも1m程度北側に存在していた可能性が高い。このように前方部前面における盛土の流出は激しいものの、周溝内において葺石が転落したものと考えられる礫の出土はなく、葺石が施されていた痕跡を確認することはできなかった。調査開始前から現地表面において、径15~20cmの角礫がある程度のまとまりをもってみえていたが、いずれの礫も表土直下層に包含されていた。類似する礫のまとまりは墳丘の他の地点でも観察でき、性格は不明であるが、古墳築造に直接関わるものではなく、後世の集石やその残滓と判断できる。

周溝は逆カマボコ形の断面形を呈するもので、後円部部分の周溝に比べてやや狭い。しかし、周堤最上部から周溝底までの深さはこの部分がもっとも深く、約1.7mを測る。周溝内には前方部前端、および周堤上の盛土を起源とする流土の堆積が最大約80cm前後認められるが、特に浸食の著しい前方部墳丘側からの流土が卓越しており、流土内からは多数の埴輪片が得られている。埴輪片は、基本的に周堤盛土を起源とする流土層により多く含まれるという傾向をもち、とくに初期の流土と考えられる20層からは、ほぼ完形に復元できる円筒埴輪2個体(図28-9)、朝顔形円筒埴輪1個体が、そのまま転落したような状況で出土した(図版19-2)。包含する土層から、周堤側からの転落であると考えられる。この層に含まれる埴輪片には底部が多く、埴輪列を含む周堤頂部付近が比較的早い段階で流失したことを示唆する。

周堤は墳丘と同様に下半部を地山削り出しによって整形したのち、その上部に盛土を施すことによって構築されている。古墳築造時の旧地表面は地形的に北側に向かって緩やかな傾斜をもつため、周堤の外側斜面はすべてが盛土によって築かれている。周堤の盛土には、黄褐~黄白色系、橙~赤褐色系を呈する礫混じりの土を用い、まず、より標高の低い周堤外側の裾部分に、細かい単位の盛土をまじえながら土手状の高まりを形成する(45層~64層)。次に、その内側に比較的大きな単位の盛土を充填して、周堤南側の裾部分を形作るとともに、盛土上面をほぼ水平な面として整えたのち(41層~44層)、それらの上部にドーム

状に厚い盛土をかぶせて周堤上半部を築いている（40層）。現存する周堤の高さは約2m前後であるが、周溝側と周堤外側にはかなりの量の流出土の堆積がみられることから、本来の周堤の上面はさらに高かったものと想定される。

周堤外側に関しては、黄白色粘質土の地山が露出しており、基盤をなす青白色の軟質岩盤が露頭・遊離するかたちで自然に形成された礫だまりが随所に認められる。ただし、この周堤外側部分には、周溝内と同様に埋積した流土との間に旧表土層が認められておらず、このことから、周堤の外縁部では、周堤築成時に表土の除去をとまなう整地が一定の範囲について行われた可能性が高い。

最後に前方部周堤上の埴輪列であるが、第1次調査において周堤頂部の比較的平坦な面を中心に精査を行い、第2次調査において周堤の断ち割りを実施したが、埴輪列の存在を示す痕跡は確認できなかった。前述した周溝への円筒埴輪の転落状況や、周堤両側への流出土の量から推測される本来の周堤の高さなどを勘案すると、前方部周堤上に円筒埴輪列が存在した可能性はかなり高いものと考えられるが、すでに流失し、現時点では姿をとどめていないと判断される。

その他の遺構など 前方部周堤上の33ライン付近において溝状の土塋を確認している。土塋は、最大幅約70cm、最大深さ36cmで、トレンチ西側に拡がりをみせる。埋土は東寄りの深い部分を中心に、しまりのごく悪い黒灰色土から成る。この土塋からは、多数の埴輪片が集積された状態で出土しており、復元すると円筒埴輪6個体、朝顔形円筒埴輪2個体分に相当する。しかし、これらの埴輪片の大部分は口縁部ないしはその周辺の破片であり、底部付近の破片はごく少量であった。当初はその位置的な関係から、この土塋が埴輪列の掘りかたを反映するものである可能性も考えられたが、平面や断面の形態、埴輪片の部位や汚染度の高い埋土の質などの諸状況からみて、後世の造作と考えられる。

出土遺物 出土遺物には、周溝内および周堤外側斜面に埋積した流土から出土した、前述のほぼ完形をなす円筒埴輪2個体を含む多数の円筒埴輪片がある。このほか、周堤北側裾部を中心とする盛土層内、および外側斜面に堆積した盛土起源の流土から、比較的多数の弥生土器片が出土しているが、これらの土器片は周堤を構築するための盛土を採取した地山内に包含されていたものと考えられる。

（福井 優・池尻伸吾）

3. 墳丘の構造と構築過程

墳丘の発掘の結果、天狗山古墳は2段築成の前方部がやや短い帆立貝形の前方後円墳で、竪穴式の埋葬施設をもつ古墳においては比較的めずらしい無墓壙であり、埋葬施設構築と墳丘への盛土が並行して行なわれた古墳であることがわかった。遺構面での精確な墳丘の計測値を示しておくと、墳丘長57.0m、後円部径46.5m・高さ9.7m、前方部長17m・高さ1.6m、前方部端幅推定22.7m、周溝底面幅2.5m（後円部）、周堤基底部幅7.5m・高さ2m（前方部）である。ここで各トレンチの成果にもとづいて墳丘の構造と構築過程を、地山と盛土の関係を中心に整理しておきたい。

（1）墳丘盛土と地山との関係（図25）

墳丘及び周堤に関しては、後円部側と前方部側において構築方法が異なる。後円部側においては、墳丘1段目・周堤・周溝底ともに地山を削り出しているが、前方部側では前方部・周堤に盛土を施している。

後円部南・東両トレンチでは、後円部第1段斜面およびテラスから周溝底・周堤にかけて軟らかい岩盤をなす地山を削り出して墳丘が造られており、後円部西トレンチにおいても岩盤ではないが地山を削り出していることがわかった。それに対し前方部北トレンチでは、前方部墳丘および周堤も大部分が盛土で造

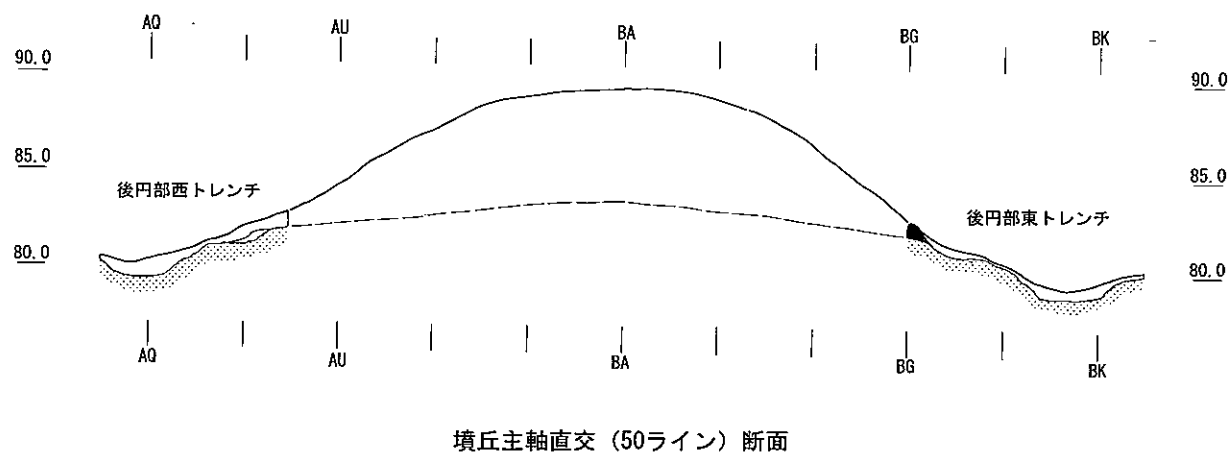
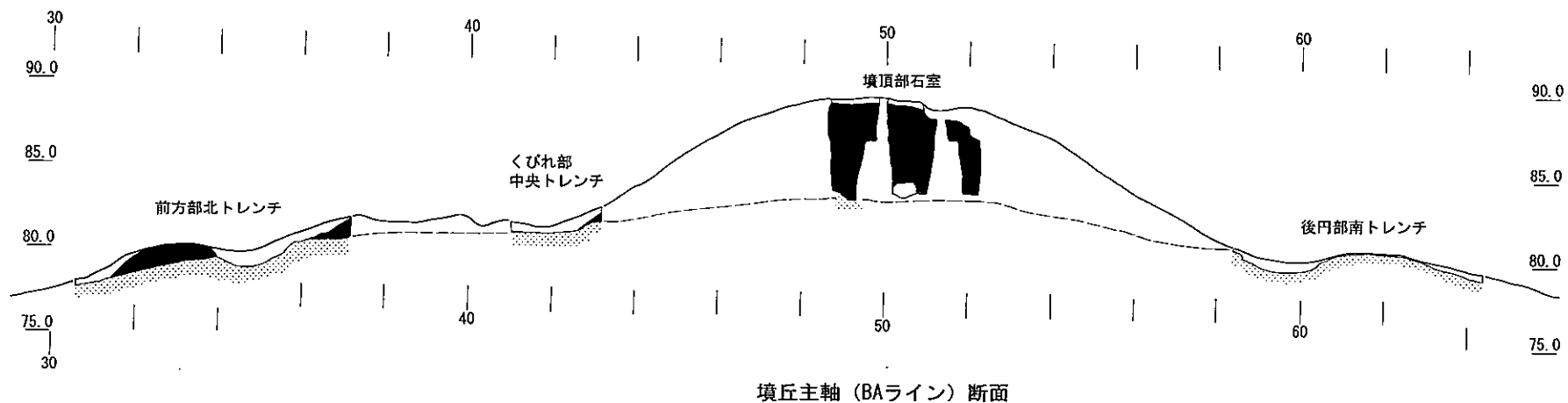


図25 墳丘の構造（黒塗り部分は盛土、アミ目部分は地山）

られている。くびれ部中央トレンチでは、前方部上面は地山を削り出していることが判明しているため、後円部と前方部との接続部分から前方部前端に近づくにしたがって地山のレベルが低くなり、かつ前方部を高くするために前方部前端部分には盛土が施されたと考えられる。

墳頂部石室においては、石室の基底が地山上に載っており、壁体は棺床の最基底となる部分を残してその周囲を10cm程度掘り下げた面から築かれていることが判明した。石室基底部分での地山レベルはおよそ83.700mであり、墳丘主軸上の後円部南トレンチにおける地山削り出しの周堤上面レベルは80.500mで、約3mの比高差がある。後円部中心付近では地山レベルが周囲よりやや高くなっていることがわかる。

以上の事実を把握した上で、墳丘主軸上における各トレンチの遺構面と現墳丘上面のラインとを比較したものが図25である。図から原地形を推定復元すると、後円部付近が3mほど高く盛り上がり、南側と北側にかけてそれぞれやや低く傾斜した地形が復元できる。そしてそのやや高くなった部分に石室を構築し、盛土を施していったと考えられる。また、前方部では旧表土と考えられるいわゆるブラックバンドを検出しており、周溝部分の地山を掘削し、その土を周堤に盛ったと考えられる。これは、地山が後円部から前方部に向けて低くなっていることから、前方部側の周堤上には盛土を施すことで、後円部側の周堤上面と同じレベルにしようとしたためであろう。

(2) 埋葬施設

天狗山古墳の埋葬施設は竪穴式石室と考えられるが、現在の後円部墳頂平坦面からの深さは石室基底面レベルにおいて約6mであり、異例の深さである。そのためか、墳頂平坦面に墓壙のラインは確認できず、また石室周辺および上部の土層観察の結果においても、この石室に伴う墓壙ないしそれを反映する土層の堆積状況は認められず、盛土を施した後に墓壙を掘り埋葬施設を構築するのではなく、石室構築と盛土を並行して行なう、無墓壙の古墳である可能性が高い。同様の無墓壙の古墳としては、5世紀末～6世紀初頭の築造と考えられる大阪府羽曳野市峯ヶ塚古墳が挙げられるが、峯ヶ塚古墳の石室は墳頂から約3m下で検出されており（下山・吉澤編2002）、天狗山古墳の石室の深さが特筆できる。また石室石材の目地の間に粘土を補填する点でも峯ヶ塚古墳との共通性がある。

石室上部の盛土に関しては、何回かの作業工程を把握できる（図5）。地山直上に石室を構築し人体並びに副葬品を納め、蓋石を構築して白色粘土で覆った後に、その上に盛土を施す。盛土は墳丘の中心側を高くする形で土が盛られ、その後周囲に盛って一度平坦面を作る。その工程が4回繰り返されるが、ほぼ1mごとに平坦面を作っていることがわかった。

(3) 外表施設（葺石・埴輪）

古墳の外表施設としては、葺石と埴輪列が確認されている。

葺石は後円部の2段目斜面のみで確認され、1段目斜面にはみられず、また前方部においても検出されなかった。後円部東トレンチとくびれ部中央トレンチにおいて検出されており、後円部を取り巻くように2段目斜面全体に葺かれていたとすると、墳丘2段目の高さが約5mあるため、かなり大量の石が用いられていたと考えられる。

葺石と盛土の関係については、調査範囲も限られているため一部分しかわかっていないが、後円部東トレンチのサブトレンチにおいて、粘土質の盛土の最上層中に深く埋め込まれている状況から、墳丘中心側をある程度の高さまで盛った後に、墳丘の一番外側を形作る段階で盛土と一緒に埋め込み、整形を行なったと考えられる。ただし、これが墳頂部石室の調査で判明した平坦面を一旦形成する工程と同じ段階でのことなのか、あるいは墳頂部上面まで盛土を施してから一度に石を葺いたのかは、今回の調査だけでは不明であるといわざるをえない。

さらに後円部2段目東側斜面（後円部東トレンチ）と北側斜面（くびれ部中央トレンチ）で、石の葺き

方が異なり、墳丘の場所によって積み上げる手法が違っていることが判明した。しかしその葺き方の境界が墳丘のどの部分にあって、どのようになっているのかは今回の調査範囲では知ることができなかった。前方部側と後円部側でこのような石の葺き方に差異がある事実は、単に墳丘構築過程における作業上の問題なのか、あるいはそこになんらかの意図があったのか、現段階でははっきりと断言はできないが、今後の類例の増加を待ちたい。

埴輪列は後円部とくびれ部の墳丘1段目テラス上および墳頂部と、周堤上において確認された。墳丘テラス上と後円部側周堤上の埴輪列は残存状況も良く掘りかたなども検出されているが、周堤の前方部側では埴輪列そのものが検出されなかった。これは、テラス上や後円部側周堤では、軟岩盤の地山に溝状の掘り形を掘ってそこに据え付けられているため、比較的残存状況が良かったが、一方の前方部側周堤は盛土で形成されており、そこに樹立された埴輪列も盛土の流出とともに流れてしまったことが考えられる。また墳頂部においても2個体のみでかつ残存状況は悪く、本来どのように墳頂平坦面に配置されていたのかは不明である。

(4) まとめ

以上のように天狗山古墳の墳丘の構造と構築過程について述べてきたが、標高80mほどの山頂に築造されているながらも周溝・周堤をもち、埴輪をテラスや墳頂部、周堤上にまで並べ、腰高の後円部斜面には葺石を施し、竪穴式石室は現墳頂面下約6mの深さに作られるという、天狗山古墳の様々な特徴がみてとれる。これらにはかなりの労働力が必要とされるであろうし、古墳を築造した人間の政治的な地位や権力なども密接に関係してくることが考えられる。一方で、これだけ墳丘に特徴的な要素を備えながら、墳形という点に関しては、典型的な前方後円墳ではなく、前方部の短い帆立貝形の古墳であることは、天狗山古墳の被葬者の性格を考える上でも重要な要素となるであろう。

(寺村裕史)

参考文献

- (1) 下山恵子・吉澤則男編2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第48号、羽曳野市教育委員会

4. 出土遺物

(1) 鉄製武器 (図26、図版23-1)

竪穴式石室から、鉄鉾1点、鉄やり3点が出土した。いずれも石室南隅において石室棺床形成土中から出土しており、木棺埋葬以前の何らかの儀礼に伴って配置されたことが明らかである。いずれも石室長壁に並行に鋒を南東方向に向けて置かれていた。その状況は図7に示したとおりである。個々の資料の特徴について記す。

鉄鉾 (図26-1、図版23-1左端) 全長30.5cm、身部長15.7cm、身部最大幅1.2cm、身部最大厚0.9cmを測る。全体的に細長の身部で、その断面は厚みを持つ菱形である。身部先端はふくらが強い。平面における身部両側縁は直線的であるが、関付近で緩く末広がりとなる。また、側面形態をみると、身部両側縁は直線的に並行し、身部先端部でふくらを持って収束する。関はやや突出したナデ関で、袋部との境の断面は横長楕円形である。袋部形態は銹化や木質付着のため明確ではないが、関との境付近に比して、袋端部が幅広く仕上げられており、先端が円錐状に加工された木柄を袋部に取り付けたことがわかる。袋部断面形態もはっきりしないが、意図的に多角形に仕上げられたとは考えにくく、おそらく円形であろう。袋端部は山

形に挟られている。袋部の合わせ位置はほぼ身部軸線上に位置し、丁寧に合わせている。

鉦先と木柄を固定する鉄製目釘が2ヶ所で確認できた。まず袋端部から1.6cmの位置に打たれた目釘は、側面からみると軸線から0.5cm程ずれていることがわかる。また、袋端部から5cmの位置に打たれた目釘も側面軸線から大きくずれており、一般的な目釘の位置ではない。補修用に打たれた可能性も考えてみる必要がある。袋部内側には木質が充填しており、柄を装着したことがわかる。また、袋部下半部には、それを取り囲むように木質が残存しており、鞘材の可能性はある。

鉄ヤリ1（図26-2、図版23-1右端） 茎尻と身部のごく一部を欠損するが、ほぼ完形である。出土状態や共伴遺物から考えて、ヤリ身である可能性が高い。全長26.1cm、身部最大幅2.7cm、身部厚0.5cmを測る。2・3に比して細身の身部である。身部断面形は薄凸レンズ形で、鑄は確認できない。身部両側縁の刃部はほぼ平行に鋒方向に伸び、身部最上部でなだらかに収束する。ただ、関付近でやや末広がりとなる。関は鈍角関で、長さ3.1cmの茎を有する。身部に比して茎は短い。茎の両側縁はほぼ平行する。茎尻の形態は不明である。茎幅1.5cm、茎厚0.5cmで、茎端部に径0.2cmの目釘孔が確認できる。

鉄ヤリ2（図26-3、図版23-1右から2本目） 柄先金具の可能性のある鉄製品を伴って出土した鉄ヤリである。ヤリ身はほぼ完形で、全長24.4cm、身部最大幅3.3cm、身部厚0.5cmを測る。身部断面形は薄凸レンズ形で、鑄は確認できない。身部両側縁の刃部はほぼ平行に鋒方向に伸び、身部最上部でなだらかに収束する。関は木質が厚く付着しており判断しにくい、1と同様にやや突出したナデ関である可能性が高い。長さ3.8cmの茎を有し、茎の両側縁はほぼ並行する。茎尻は山形を呈する。茎幅2.0cm前後、茎厚0.3cmで、茎断面は扁平な矩形である。全体的に1よりも扁平である。二つの鉄製目釘が、それぞれ茎尻から1.0cm、4.2cmの位置に打たれていた。断面径0.4~0.5cm程の目釘で、うち一方は頭部が残存する。身部下部和茎には柄木の木質が残存している。柄先金具の可能性のある鉄製品は、残存状態が悪く全体の形態を復元することはできないが、出土状況や漆膜の付着などから、3のような柄先金具であった可能性は低くない。また、取付部以外にはヤリ身に木質が観察できず、抜き身で副葬された可能性が高い。

鉄ヤリ3（図26-4、図版23-1左から2本目） 柄とヤリ身の取付部を覆う鉄製柄先金具を伴う鉄ヤリである。ヤリ身は完形で全長25.3cm、身部最大幅3.4cm、身部厚0.8cmを測る。身部断面形は薄凸レンズ形で、鑄は確認できない。身部両側縁の刃部はほぼ平行に鋒方向に伸び、身部最上部でなだらかに収束する。関はやや突出したナデ関で、長さ5.2cmの茎を有する。ナデ関との境は明瞭ではない。茎の両側縁はほぼ並行し、茎尻は山形を呈する。茎断面は扁平な矩形で、関付近から鞘尻に向かって若干厚みを増すようである。二つの鉄製目釘が、それぞれ茎尻から1.2cm、5.6cmの位置に打たれていた。断面径0.4cm程の目釘で、いずれも（打ち込みの際の加圧によって？）頭部が若干つぶれている。身部下部和茎には柄木の木質が残存しており、その残存状況や柄先金具との関係から、柄木先端が山形を呈していたことがわかる。

柄先金具はヤリ身に装着された状態で出土したが、一部欠損している。全体を復元し図化したものが図26-4の右端の状態である。最大残存長12.1cm、最大残存幅3.9cmを測る。柄とヤリ身の取付部の形状に合わせて製作されたもので、先端部は山形を呈し、上半部断面形は菱形に近い凸レンズ形、下半部は柄に合わせてすばまり断面形が横長楕円形となる。残存状態から判断して表裏2枚の金具を接合したものである可能性が高い。金具内面には漆膜、布目痕跡、柄木木質が残存し、内面側からこの順で重なり合っている。布目は柄に対して斜行しており、布が柄に格子状に巻かれていたことが推測できる。さらに、目釘頭部が接着していたと考えられる痕跡が金具下端部内面から0.6cmの位置で確認できた。

以上の残存状況から柄、ヤリ身、柄先金具の装着状況を推測すると、以下ようになる。

①先端に切り込みが入った呑口式の木柄を取り付け、三つの目釘で固定する。この際、二つの目釘は木柄片面-茎-木柄片面、もう一つの目釘は木柄片面-木柄片面を、それぞれ固定したと考えられる。②柄に布を格子状に巻き、その上に漆を塗布する。③取付部を表裏から挟み込むように柄先金具を装着する。この時、柄先金具の固定方法が問題となる。明らかに茎の目釘は柄先金具に達していないため、目釘によ

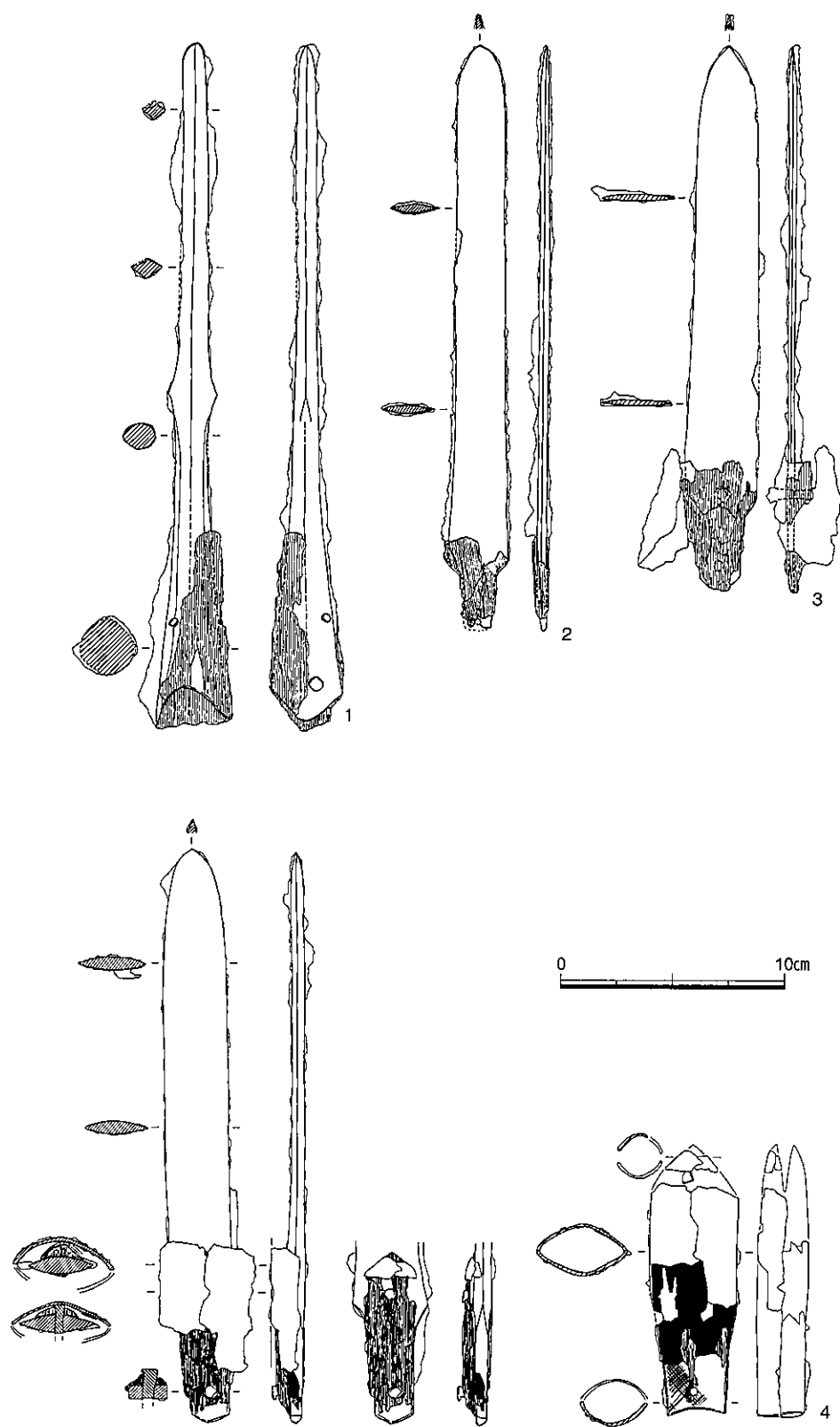


図26 鉄製武器

る固定は考えにくい。漆が接着剤としての役割も果たした可能性を考える必要がある。また、取付部以外にはやり身に木質が全く確認できないため、鞘に納められていたのではなく、抜き身の状態で副葬されたと考えられる。

以上、棺床形成土中で確認できた鉄器はいずれも長柄の武器であった。この中で特に注目できるのは、4の柄先金具付鉄やりである。このような鉄やりの類例は少なく、香川県川上古墳、京都府宇治二子山古墳南墳、千葉県八重原1号墳、石川県二子塚狐山古墳出土品などがある。これらの古墳はいずれも5世紀中後葉代に造営されており、特に前二者と天狗山古墳の副葬品組成は類似する。これらの鉄やりについての系譜、入手経路の検討が今後必要であろう。

棺床上（木棺内）に副葬されていた武器が鉄刀剣であったことを考えると、何らかの理由で鉄製武器を区分して置き分けていた可能性が高い。木棺に納められた武器が被葬者との関わり（着装・保有品、被葬者の何らかの社会的地位を表象する器物、被葬者と造営集団との社会的関係において供えられた器物）がより強い副葬品と把握できるのであれば、棺床形成土中に副葬された武器は、石室構築過程で行われる様々な埋葬儀礼との関係がより強い副葬品として判断することもできるであろう。一方で、木棺内の武器も、被葬者とはそれほど関わりなしに、より一般的な葬送儀礼慣習の中で納められた副葬品とするのであれば、副葬武器の置き分けは、石室構築から被葬者埋葬までの儀礼の段階を示すものと理解すべきであろう。

（高田貫太）

（2）円筒埴輪（図27～33、図版24～34-1）

天狗山古墳からは墳丘各トレンチより多数の円筒埴輪が出土している。その総数は整理箱にして140箱にも及ぶが、細片がその大半を占める。後述するように埴輪表面の残存状況はからずしもよいとは言えず、整理作業時に接合した個体は少ない。そのため、今回図示可能であった個体もその数は少なく、埴輪列の原位置において出土した資料を中心に円筒埴輪30個体にとどまる。

円筒埴輪の特徴 天狗山古墳から出土した円筒埴輪のうち、完形に復元可能であったのは4個体である（7～10）。また、二つの規格が存在するとみられ、口縁径38cmを測る大型のものと、口縁径27～30cmを測る小型のものの2種類に大別できる。このうち小型のものの全高は55cm程度にほぼまとまるが、底径は18～25cm、口縁径は25～30cmと個体差が大きい。ここではまず各資料の概要を記述し、後に小分類を試みたい。なお、全体として黒斑を残す資料は存在せず、窖窯焼成である。

1は復元口縁径38.0cmを測る。今回出土した円筒埴輪中、最も大形の個体である。口縁端部は直立し、外面はタテハケ、内面はハケ及びヨコナデにより丁寧に仕上げられている。突帯が一部残存しているが、その剥離痕跡には水平方向に幅3mmの沈線が2条みられることから、突帯を貼り付ける際の割付と考えられる。その断面は鋭角であり、割り付け工具としてはハケ工具の角を使用した可能性がある。上下にぶれることなく直線的に引かれており、回転台の使用を想定できる。2～6は筒部から口縁部にかけての個体である。2・4は口縁がやや外反し、いずれもヘラ記号がみられる。ヘラ記号は2本の直線とX字形を組み合わせたもので、鋭利な工具により描かれている。口縁端部はくぼんでおり、ヨコナデにより仕上げられている。外面はハケ、内面は粗いタテナデにより仕上げられている。内面には1.8～2.0cmを1単位とする粘土紐の痕跡が明瞭に観察される。粘土紐はほぼ水平に積まれており、紐作りの単位を観察できる。4の突帯剥離痕跡には1と同様に割り付け工具の痕跡がみられる。これは2本の平行する沈線であり、その幅は4mm程度である。断面はかなり鋭利であり、こちらもハケ工具の角を利用したものともみてよいであろう。3も口縁部が外反し、端部をヨコナデして仕上げている。外面はタテハケ、内面はタテナデ調整によるが、タテナデ調整はかなり粗く、2・4同様に粘土紐の単位を明瞭に観察できる。6は口縁端部が外傾する特徴をもち、弧状のヘラ記号がある。7は全形に復元可能な個体である。筒部は3条の突帯に区切られ、4段構成をとり、その復元高は55.0cmを測る。口縁径は28.0cm、底径は22.0cmをそれぞれ測る。底部

から口縁部に向かって逆ハの字形に開いている。基底部（1段目）高は11.6cm、突帯間高は2段目において11.0cm、3段目において11.3cm（復元）をそれぞれ測り、各段は11cm前後に等分割されている。外面にはタテハケ調整が入念に施されており、内面は基底部にはタテ方向のナデ、2段目～3段目にかけては左斜め方向に、口縁部裏はヨコナデとなっている。このナデ調整の方向は概ね各段に対応して変化しているのがわかる。突帯は断面台形で、高さは0.8cmとかなり低平である。2段目に透かし孔が相対するように2孔穿孔されており、外形はかなりいびつな楕円形である。また、正確に対向する位置関係ではなく、正面から見て5cmほどずれているのがわかる。口縁部にはヘラ記号がみられる。9も完形に復元可能な個体である。7と同じく4段構成をとる。2段目、及び3段目に透かし孔が穿孔されている。外面はタテハケ、内面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。直立する口縁部にはD字形に似たヘラ記号がみられる。8は図上復元、10はほぼ直立し、焼成は硬緻である。

11～13は口縁部の破片である。口縁径は22.4～26.3cmを測る。いずれも外面の口縁端部から1cmほど下のところに1条の沈線文がみられる。その断面は割り付け痕跡同様に鋭く、ハケ工具の端部を利用して施したものと同推察される。外面はハケ調整、端部をヨコナデにより仕上げているが、12の口縁端部は平滑になっており、工具ナデ仕上げによると考えられる。14・15は後円部東トレンチから出土したもので、出土状況や特徴から考えて、同一個体の可能性がある。底部径は21.8cm、14の口縁径は25.8cmをそれぞれ測る。基

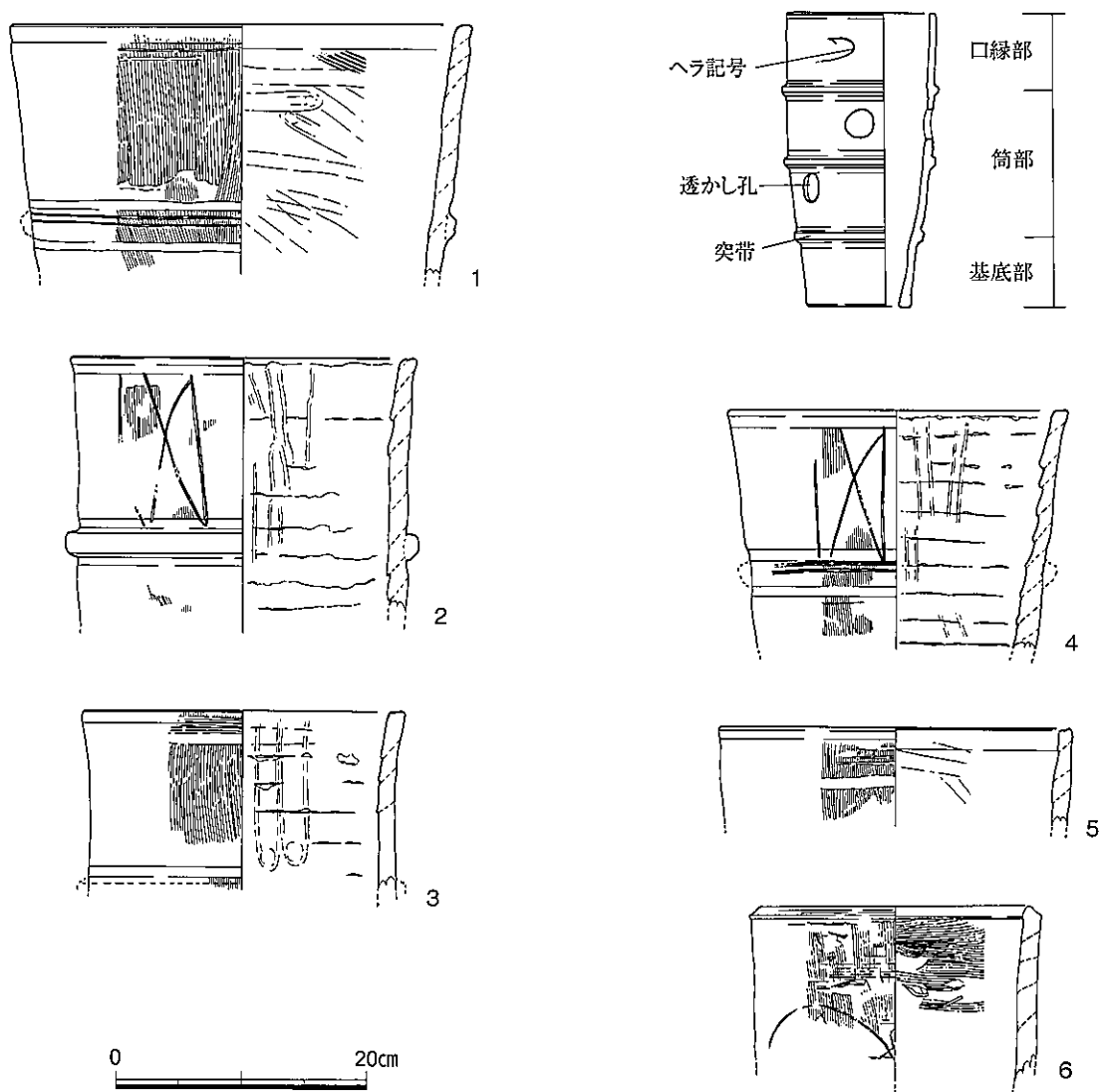
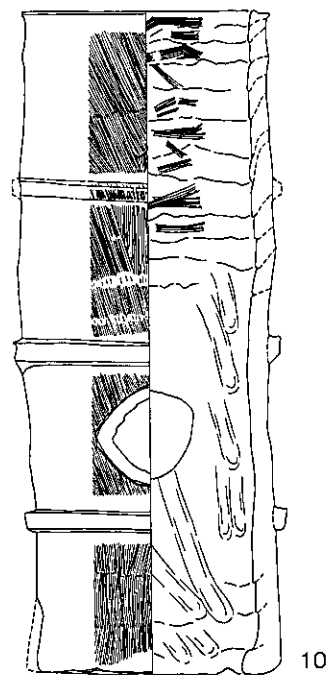
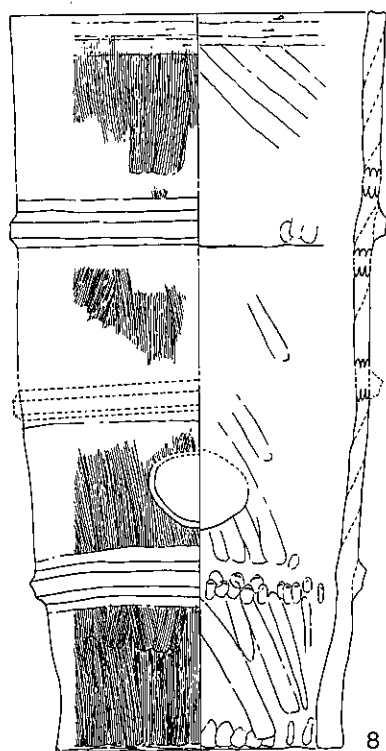
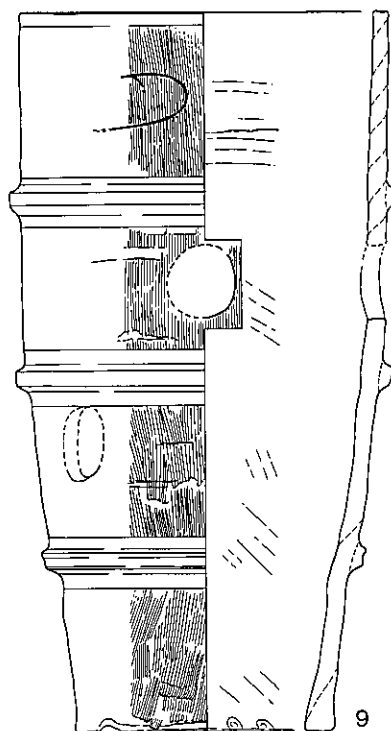
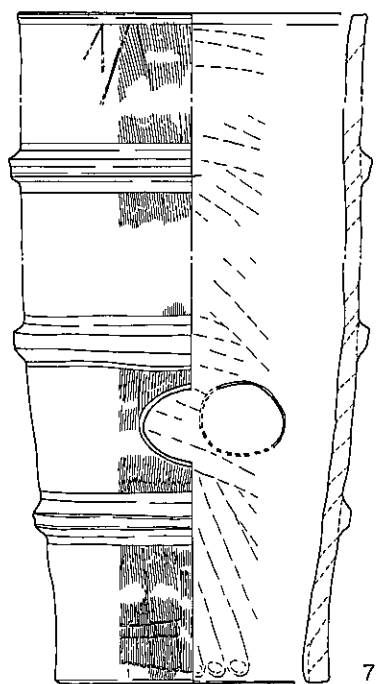


図27 円筒埴輪（1）



0 20cm

図28 円筒埴輪 (2)

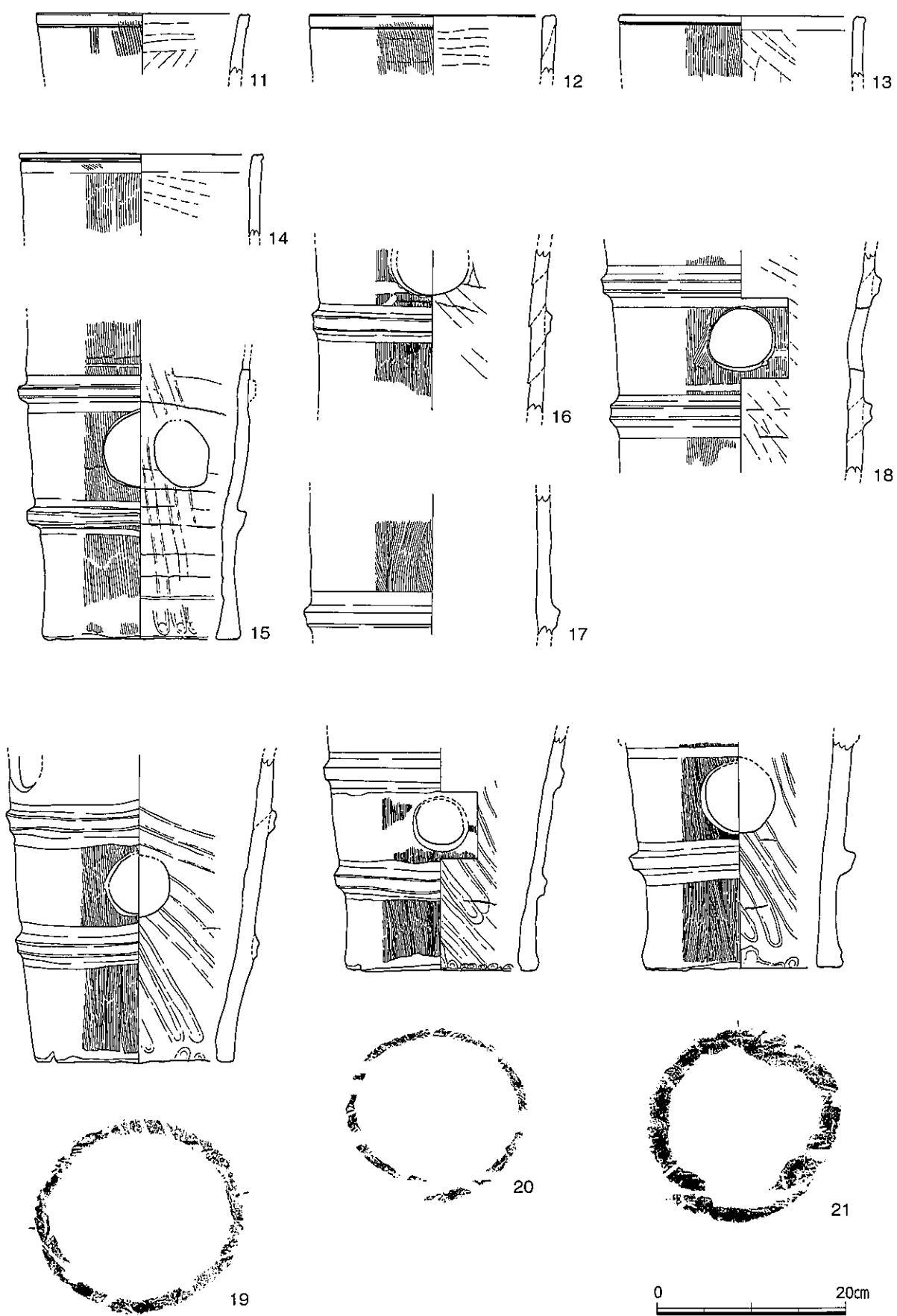
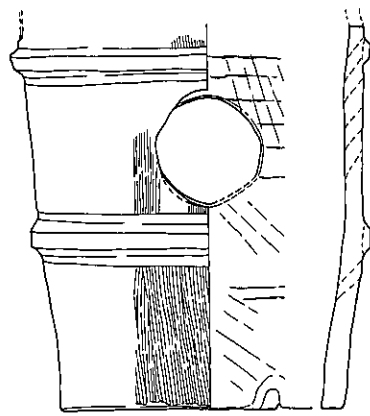
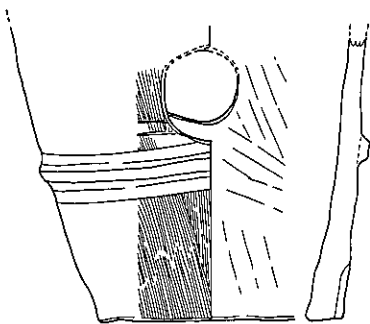
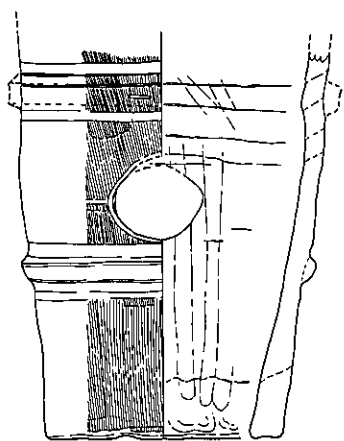
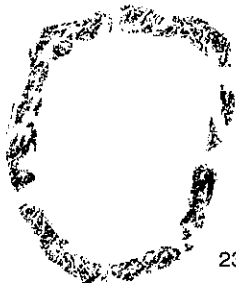


图29 円筒埴輪 (3)



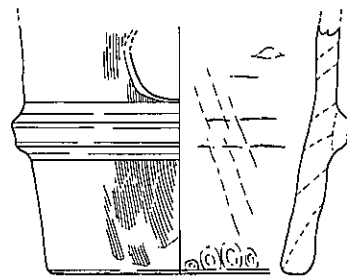
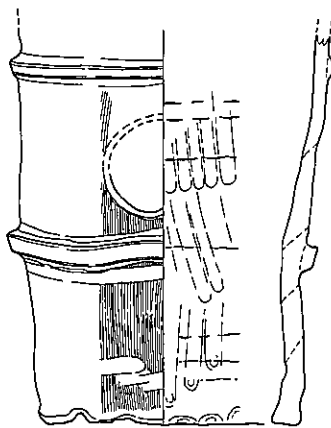
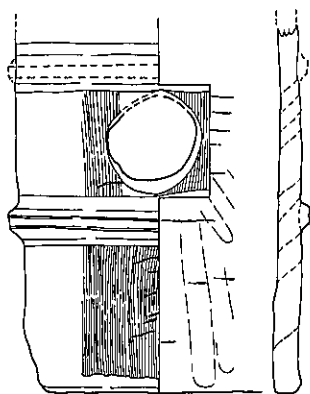
22



23



24



25



26



27

0 20cm

图30 円筒埴輪 (4)

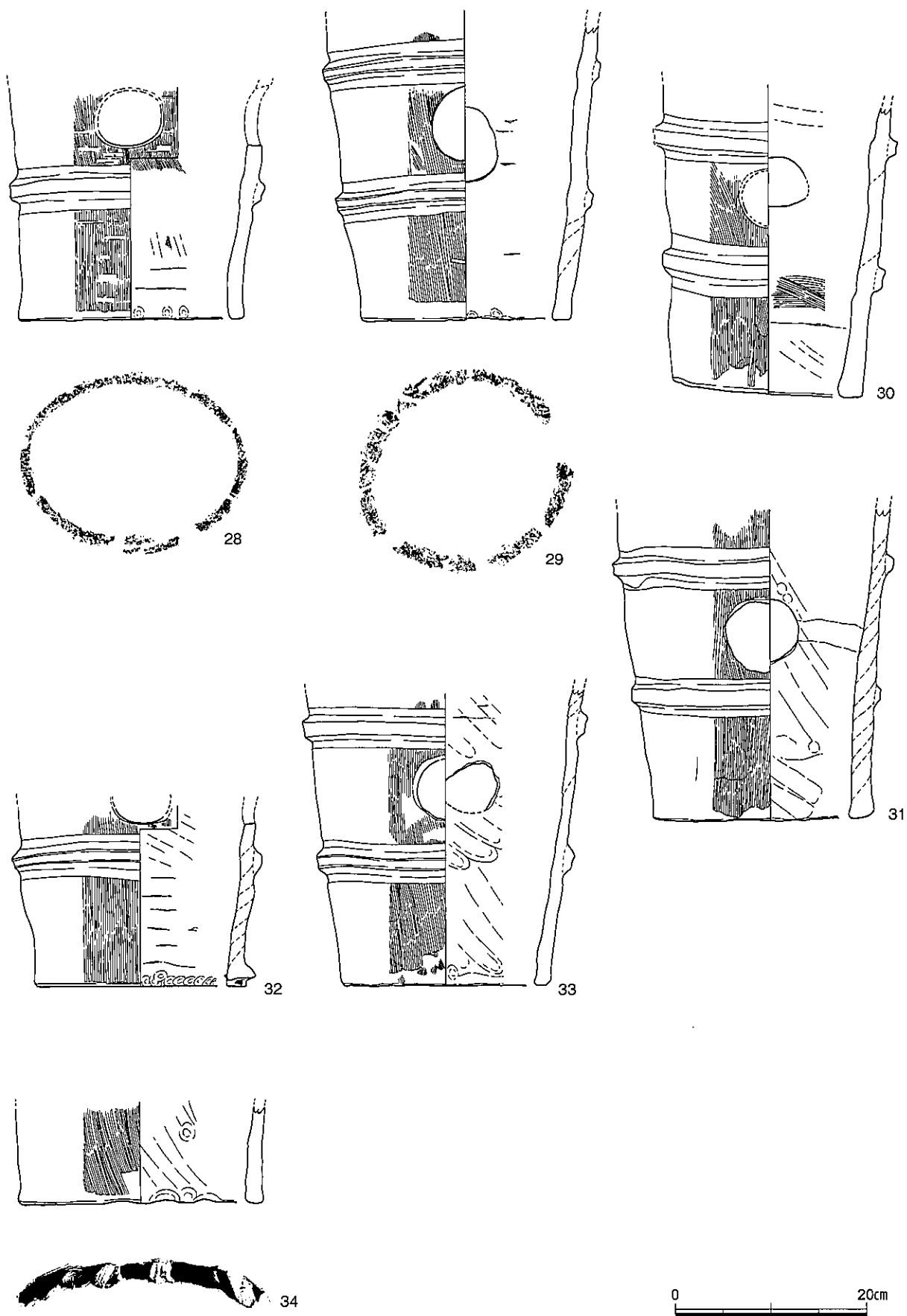


図31 円筒埴輪 (5)

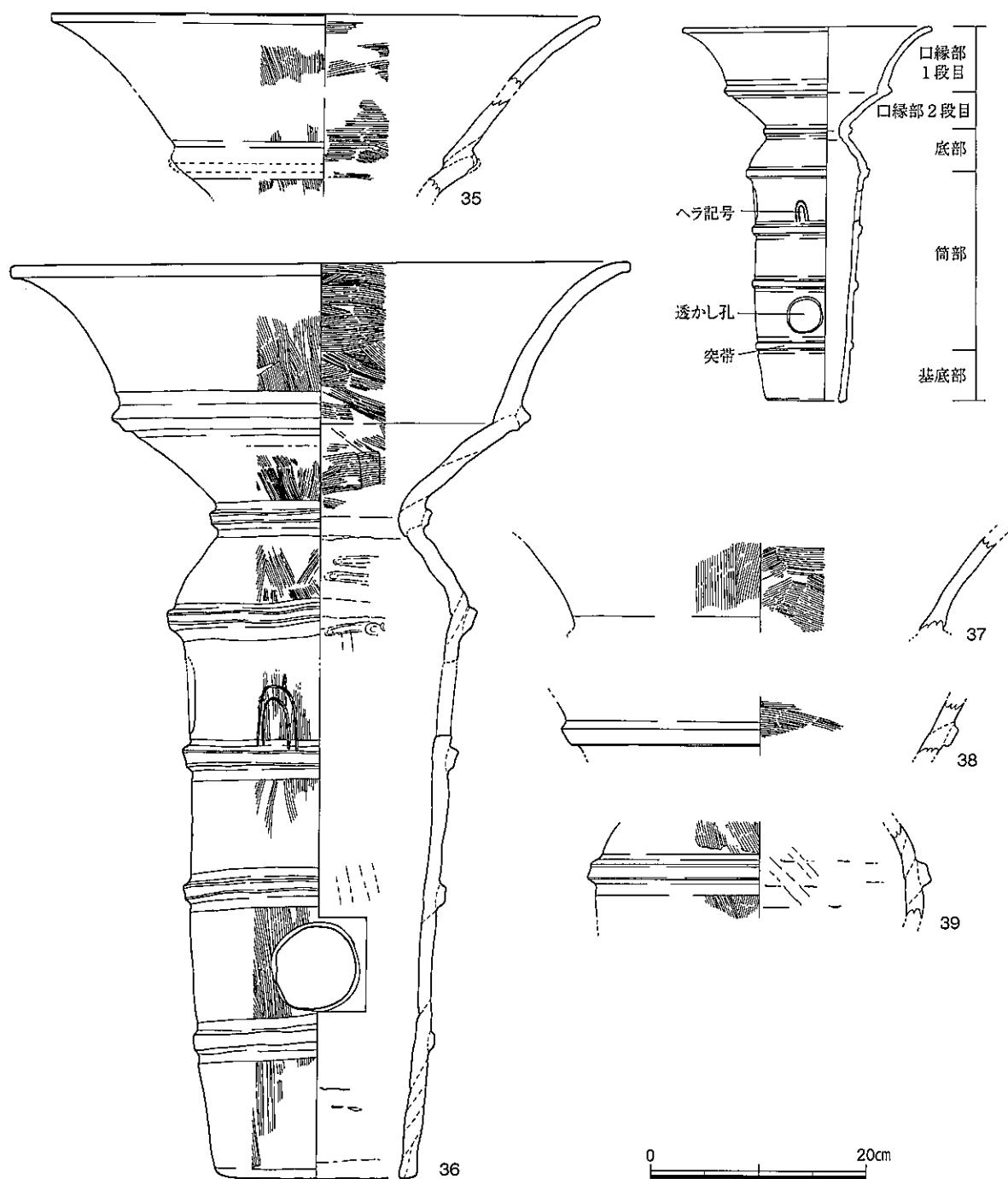


図32 円筒埴輪（6）朝顔形とわかるもの

表1 円筒埴輪 (図27～32) 観察表

図 番号	図版 番号	出土 トレンチ	器種	部位	計測値(cm)			調整		突帯断 面形状	突帯計測値		色調	胎土	焼成	分類	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		高さ	幅					
1	24-1	前方部北	普通	口縁	(38.0)			タテハケ(7)	ナデ、ハケ(7)	M字	0.8	2.5	暗橙褐色	0.5～1cm大の白色砂粒をまばらに、1mm大の褐色砂粒を多く含む	普通	A	
2	24-2	前方部北	普通	筒～口縁	(27.4)			タテハケ(8)、ナデ	ナデ	台形	1.1	2.0	淡黄褐色	石粒をまばらに含む	不良	B1b	ヘラ記号
3		前方部北	普通	筒～口縁	(25.8)			タテハケ(8)、ナデ	ナデ				暗橙褐色	1～2mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B3	
4		前方部北	普通	底～口縁	(27.0)			タテハケ(8)、ナデ	ナデ				明黄褐色	1～3mm大の白色砂粒を多く含む	良好	B1b	ヘラ記号
5		前方部北西	普通	口縁	(28.2)			タテハケ(7-8)、ナデ	ナナメナデ、ヨコナデ				暗赤褐色	1～3mm大の砂粒をまばらに含む	良好		
6	24-3 ～5	前方部北	普通	口縁	(23.2)			タテハケ(4-5)	タテハケ(4-5)、ナデ				暗赤褐色	1mm大の白色砂粒を多く、3-5mm大の白色砂粒をやや多く、暗褐色の砂粒をまばらに含む			
7		くびれ部西	普通	全形	28.0	22.0	(55.0)	タテハケ(8)	ナデ	台形	0.8	3.0	暗橙褐色	1cm大の白色砂粒をまばらに、1～3mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B1a	
8	26-1 2	くびれ部西	普通	全形	(30.0)	23.5	(58.0)	タテハケ(6-7)	ナナメナデ、オサエ	台形	1.0	3.0	橙褐色	5mm程度の砂粒を多く含む	普通		埴輪列8号
9	25-1	前方部北	普通	全形	30.0	21.0	(56.0)	タテハケ(8)、ナデ	ヨコナデ、ナナメナデ	M字形	1.1	2.5	暗橙褐色	1cm大の白色砂粒をまばらに、1～3mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B1a	ヘラ記号
10	25-2 ～4	後円部東	普通	全形	20.0	20.2	51.2	タテハケ(10)	タテハケ(10)、ナデ	台形	1.0	1.2	橙褐色	3～5mmの砂粒をやや密に、10-20mmの砂粒を稀に含む	良好		埴輪列1号
11		前方部北	普通	口縁	(22.4)			タテハケ(5)	ナデ				暗褐色	1cm大の白色砂粒を稀に、1mm大の白色砂粒、褐色砂粒をまばらに含む	普通	B2	
12	26-3	前方部北	普通	口縁	(25.8)			タテハケ(5)	ナデ				橙褐色	1～2mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B2	
13		前方部北西	普通	口縁	(26.3)			タテハケ(5)、ヨコナデ	ナデ				橙褐色	1～2mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B2	
14		後円部東	普通	口縁	25.8			タテハケ(5)、ヨコナデ	ナナメナデ				明橙褐色	3～5mm大の砂粒をやや多く、1～2cm大の砂粒をまばらに含む	普通	B3	
15	26-4	後円部東	普通	底～筒		21.8		タテハケ(5)	タテナデ	台形	1.0	3.0	明橙褐色	3～5mm大の砂粒をやや多く、1～2cm大の砂粒をまばらに含む	普通	B3	埴輪列6号
16	27-1	くびれ部西		筒				タテハケ(7)	ナナメナデ	M字形	0.6	3.4	暗橙褐色	2～3mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B3	埴輪列1号
17	27-2	埴頂部石室		筒				タテハケ(8)、ナデ	ナデ	M字形	1.2	2.4	橙褐色	1～3mm大の長石粒を多く含む	普通	B3	
18	27-3	くびれ部西		筒				タテハケ(8)、ナデ	ナデ	M字形	1.0	3.0	暗橙褐色	1mm以下の白色砂粒を多く、1～3mm大の白色砂粒をまばらに含む	良好	B1	
19	27-4	くびれ部西		底～筒		22.1		タテハケ(7)	ナナメハケ	M字形	0.6	3.9	暗橙褐色	1～5mm大の白色砂粒をやや多く、10～15mm大の白色砂粒をわずかに含む	普通	B3	埴輪列5号
20	28-1 2	くびれ部西		底～筒		20.2		タテハケ(8)	ナナメナデ	台形	0.7	2.3	暗橙褐色	1～5mm大の白色砂粒をやや多く、6～10mm大の白色砂粒をわずかに含む	普通	B1	埴輪列4号
21	28-3 4	くびれ部西		底～筒		20.5		タテハケ(8)	ナナメナデ	台形	1.3	3.4	明橙褐色	1～5mm大の白色砂粒をやや多く、10～15mm大の白色砂粒をわずかに含む	普通	B1	埴輪列2号
22	29-1 2	くびれ部西		底～筒		19.0		タテハケ(6)、ヨコナデ	タテナデ	台形	0.7	2.6	暗黄褐色	5mm大の白色砂粒をまばらに、1～2mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B3	埴輪列6号
23	29-3	くびれ部西		底～筒		18.9		タテハケ(6)、ヨコナデ	ナナメナデ	台形	1.2	2.4	赤褐色	5mm大の白色砂粒をまばらに、1～2mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B3	埴輪列7号
24	29-4	くびれ部西		底～筒		22.2		タテハケ(6)、ナデ	ナナメナデ、オサエ	台形	1.0	2.6	赤褐色	5mm大の砂粒をまばらに含む	普通	B3	埴輪列9号
25	30-1	くびれ部西		底～筒		21.0		タテハケ(7)、ナデ	ナナメナデ	M字形	0.8	2.3	淡褐色	2～5mm大の白色砂粒をまばらに含む	不良	B3	埴輪列11号
26	30-2	くびれ部西		底～筒		21.0		タテハケ(7)	ナナメナデ	台形	1.0	2.4	黄橙褐色	1～5mm大の白色砂粒を多く含む	良好	B3	埴輪列12号
27	30-3	くびれ部西		底～筒		21.7		タテハケ(8)	ナナメナデ	台形	1.1	2.9	明橙褐色	4mm大の白色砂粒をまばらに含む	普通	B1	埴輪列14号
28	30-4	くびれ部西		底～筒		20.2		タテハケ(10)	ナナメナデ、ナナメハケ(8)	台形	0.7	2.7	橙褐色	2～6mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B1	埴輪列16号
29	31-1 2	くびれ部西		底～筒		21.6		タテハケ(10)	ナナメナデ	台形	0.9	3.1	明赤褐色	1～3mm程度の白色砂粒を多く含む	良好	B1	
30	31-3 4	後円部東		底～筒		20.0		タテハケ(7)	ナデ、ヨコハケ(7)	M字形	0.8	2.5	明橙褐色	2mm大の白色砂粒を多く、5～15mm大の白色砂粒をまばらに含む	普通	B3	埴輪列5号
31	32-1 2	後円部東		底～筒		22.9		タテハケ(5)	ナデ	M字形	0.7	1.6	暗橙褐色	1～5mm大の白色砂粒を多く、7～15mm大の砂粒をまばらに含む	良好	B3	埴輪列7号
32	33-1	くびれ部西		底～筒		23.4		タテハケ(7)	不明瞭	台形	1.2	3.1	黄褐色	2～6mm大の白色砂粒を多く含む	普通	B3	埴輪列17号
33	32-3 4	くびれ部西		底～筒		21.6		タテハケ(10)	ナナメナデ	台形	0.9	3.1	明赤褐色	1mm未満の白色砂粒を多く含む	良好	B1	
34	33-2	くびれ部西		底～筒		25.8		タテハケ(10)	ナナメナデ				灰黄褐色	1～5mm程度の白色砂粒をまばらに含む	普通	B1	埴輪列18号
35	33-3	前方部北	朝顔形	口縁	51.0			タテハケ(8)	ヨコハケ(8)				暗橙褐色	3mm大の白色砂粒をわずかに、1～2mm大の白色砂粒を多く含む	普通		
36	33-4 5	くびれ部西	朝顔形	全形	56.6	18.6	(84.7)	タテハケ(10)、ナデ	ナナメナデ、ヨコハケ(5)	台形	0.8	2.2	明黄褐色	5～10mm大の白色砂粒をわずかに含む	不良		埴輪列13号
37		前方部北	朝顔形	口縁				タテハケ(8)	ヨコハケ(7)、ナデ				橙褐色	5mm大の白色砂粒をまばらに、1～2mm大の白色砂粒を多く含む	普通		
38		前方部北	朝顔形	口縁				ナデ	ヨコハケ(6)				橙色	5mm大の白色砂粒をまばらに、1～2mm大の白色砂粒を多く含む	不良		
39		前方部西	朝顔形	肩				タテハケ(8)、ヨコナデ	ナナメナデ	M字形	0.9	1.4	暗橙褐色	3～10mm大の白色砂粒をまばらに含む	普通		

*計測値カッコ内数字は復元値、ハケのカッコ内数字は1cm当たりの本数。器種「普通」は朝顔形とならない普通の円筒埴輪。

底部高は12.0cm、2段目の突帯間高は11.0cmである。外面調整はタテハケ。2段目には透かし孔が2つ穿孔されているが、対向する位置ではなく、向かって5cm程中心がずれた位置関係にある。いずれもいびつな円形ではあるがその断面は鋭く、穿孔には鋭利な刀子状の工具が使用されたものとみられる。内面は基底部から2段目内面で粗いタテナデ、口縁部の内面は丁寧な斜めナデ調整で仕上げられている。また口縁端部付近の外面には11~13同様に1条の沈線文がみられる。

以下は筒部から基底部にかけての個体である。これらの中には普通の円筒埴輪以外にも、朝顔形円筒埴輪や形象埴輪の一部が含まれている可能性がある。

16~18は筒部の破片である。残存径から考えて、16・17が2段目から3段目にかけての、18が基底部から2段目の破片とみられる。外面調整はいずれもタテハケ、内面は丁寧なナデ調整である。18の突帯間高は12.0cmを測る。16・18には透かし孔が穿孔されており、18ではいびつな長楕円を呈している。突帯はいずれも断面M字形で、高さは0.6~1.2cmをそれぞれ測る。

19~21は基底部から筒部にかけての個体である。いずれもくびれ部西トレンチから出土したものである。19は基底部から3段目までの個体であり、基底部高は11.0cm、2段目の突帯間高は10.6cmを測る。外面はタテハケ、内面は粗いナメナデにより仕上げられている。指を立てて、強くなで上げられており、稜をはっきりと観察することができる。底径は長径22.1cm、短径20.8cmを測り、いびつな楕円形を呈する。底面に蕁状の植物茎の痕跡の他、太さ0.8~1.2cmを測る木の枝状の痕跡が多数みられる。この痕跡は埴輪本体の内側部分でケバ立っている状況がみられる。20は基底部から2段目までの資料である。基底部高が他の例と比べてかなり低く、最大でも9.6cmである。いっぽう2段目の突帯間高も最大で8.0cmをはかり、やや低くなる。底面は長径20.2cm、短径18.0cmをそれぞれ測る。底面には棒状の工具痕跡の他、ハケ工具の痕跡がみられる。これは作業台からの切り離しの際に、埴輪本体と作業台の間にハケ工具を差し込んだ痕跡と考えられる。なお、最下段の粘土紐はきちんと円形に成形されておらず、粘土紐を内側に重ねた状態のままとなっている。21も同じく基底部から2段目まで残存している。基底部高は10.4cm、2段目の突帯間高も同じく10.4cmを測る。基底部はかなり外側にふくれており、自重により歪んだ状況を見て取れる。外面はタテハケ、内面は強いナメナデで仕上げられている。特に1段目は複数回にわたってハケ調整を施した痕跡がみられ、自重による歪みを修正したものと推察される。2段目には長径8.0cmの透かし孔が穿孔されている。また、20同様に最下段の粘土紐は円形にきちんと整形されておらず、内側に粘土紐を重ねた状況がみられる。

22~27も円筒埴輪の基底部から2段目、ないしは3段目までの資料である。いずれもくびれ部西トレンチから出土したものである。22は基底部から3段目までが残存している。底部径は19.0cmを測る。基底部高は11.4cm、2段目の突帯間高は11.2cmである。外面はタテハケ、内面は2段目中央付近までタテナデ、2段目上部から3段目にかけては左斜め上方向にナデ上げている。2段目には長径7.0cmほどの透かし孔が穿孔されている。突帯は1条のみ残存している。断面の形状は台形で、高さは0.7cmと低平である。2段目の突帯剥離痕跡の下には太さ0.2cmほどの割り付け線が1条、水平方向に引かれており、さらにその下に幅2.0cmほどの長方形の工具痕跡がみられる。おそらくはハケ工具の先端ではないかと考える。23は基底部から2段目にかけての個体であり、基底部高は11.0cmを測る。全体に自重でかなり歪んでおり、底面の形状もいびつな楕円形を呈する。外面はタテハケ、内面は丁寧なナメナデ調整の痕跡が認められる。2段目には長径6.8cmを測る透かし孔が穿孔されている。24~26は基底部から3段目にかけての資料である。いずれも外面はタテハケ、内面はナデ調整により仕上げられている。24は底径21.0cm、基底部高12.0cm、2段目の突帯間高11.0cmをそれぞれ測る。底面に蕁状草本類の痕跡のほか、直径0.8~2.4cmを測る細い棒状の痕跡が認められる。これは作業台に敷いてあった木の枝の痕跡とみられ、内側で一部山形に盛り上がっている状況を見て取れる。25は底部径22.2cm、基底部高12.0cm、2段目の突帯間高は10.0cmを測る。外形には自重による歪みが認められ、表面にはひび割れ痕跡をそのまま残している。2段目には長径7.6cmを測るい

びつな円形の透かし孔が穿孔されている。突帯の断面は M 字形で、高さは 0.8cm とやや低い。26 も同じく基底部から 3 段目にかけての資料である。基底部径は 21.0cm、基底部高は 12.6cm、突帯間高は 11.0cm をそれぞれ測る。底面には、外部から棒状工具を差し込んだ痕跡が 4 箇所みられるほか、外面にはヨコナデの痕跡が認められる。内面は指を立てた強いタテナデで仕上げられるが、あまり丁寧ではなく、粘土紐の痕跡が散見される。突帯は波打つように貼り付けられている。また、2 段目には透かし孔が穿孔されている。27 は基底部から 2 段目にかけての資料であるが、基底部高が 9.0cm と他の資料に比して低い。外面はタテハケ、内面はナメナデにより調整され、底部付近にはオサエの痕跡を残している。突帯の高さも 1.3cm と他の個体に比べて高く、他の個体とは意図的に作り分けされているような印象を受ける。蓋形埴輪など、形象埴輪を支える基部である可能性があるのではないかと考える。

28～34 も同じく円筒埴輪の基底部から筒部にかけての資料である。28 と 32 は基底部から 2 段目まで残存している。28 は底部の長径 21.7cm、短径 18.8cm を測る。また最下段の粘土紐はきちんと円形に整形されており、内側に粘土帯を重ねた状態のままとなっている。基底部高は 12.6cm を測る。外面の調整はタテハケ、内面はナメハケ調整と丁寧なヨコナデ調整で仕上げられており、底面付近にはオサエの痕跡を残している。32 は基底部径 23.4cm、基底部高 12.0cm を測る。外面はタテハケ、内面は底面付近に多数のオサエの痕跡が認められるが、これは粘土帯成形時の痕跡と考えられる。29～31・33 は基底部から 3 段目にかけて残存している。29 の基底部径は 21.7cm、基底部高、突帯間高はともに 11.2cm である。2 段目に透かし孔が対向するように二つ穿孔されている。外面はタテハケ調整、内面は丁寧なヨコナデ調整により仕上げられている。タテハケ調整は 1 段目から 2 段目までつながる長いストロークで施されている。ナデ調整で上げられるが、底面付近に多数のオサエ痕跡が認められる。1 段目の外面にはハケ工具の痕跡とみられる、幅 2.5cm ほどの板状工具の痕跡が残っている。また底面には藁状草本類の痕跡のほか、棒状の工具を差し込んだ痕跡が 3 箇所認められる。30 は基底部径 21.6cm、基底部高 11.2cm。2 段目の突帯間高は 9.6cm を測る。外面は基底部から 2 段目まで連続するストロークの長いタテハケ、内面はナデ調整のほか一部にハケ調整がみられる。2 段目には、長径 7.6cm を測るいびつな円形の透かし孔が穿孔されている。31 は同じく基底部径 22.9cm、基底部高は 11.2cm、2 段目の突帯間高は 11.0cm を測る。外面はタテハケ、内面はナメナデ調整により仕上げられており、一部ではオサエの痕跡が認められる。外面のタテハケは基底部の中程から筒部 2 段目まで連続する長いストロークが認められ、内面のナメナデの単位とも対応している。2 段目には直径 7.4cm を測る円形の透かし孔が穿孔されている。突帯断面の形状は M 字形であり、高さは 0.7cm を測る。突帯表面には水平方向に削痕がみられた。これはナデ調整の際に使用した皮革の痕跡と考えられる。33 は底径 21.6cm、基底部高及び 2 段目の突帯間高は 11.2cm を測る。外面は基底部から筒部 2 段目まで連続するストロークの長いタテハケ調整、内面はナメナデ調整により上げられる。ナメナデは基底部と筒部 2 段目の境付近で上下に重なっており、これは製作時の作業単位を示しているものとみられる。筒部 2 段目には長径 6.0cm 程のいびつな円形の透かし孔が二つ穿孔されている。きちんと対向する位置関係ではなく、孔の中心位置が 6cm 程ずれている。突帯は基底部、2 段目ともに残存しており、断面形は M 字形で、高さは 0.9～1.0cm を測る。34 は基底部の破片である。底面には棒状の痕跡が 4 箇所認められる。外面はタテハケ、内面はナメナデにより上げられている。

朝顔形円筒埴輪 天狗山古墳の墳丘各所で円筒埴輪に加えて朝顔形円筒埴輪の出土をみた。その個体数は円筒埴輪に比べて圧倒的に少ないが、これは口縁部、ないしは肩部など特徴的な部位との比較であり、実際は円筒埴輪中に朝顔形埴輪となるべき個体があることを勘案しなければならない。ただし、原位置から出土した朝顔形埴輪は 1 点（くびれ西トレンチ 13 号埴輪）のみであることから、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪がどのような数量比的関係でもって配列されたかについては言及できない。

35 は口縁部 1 段目から 2 段目にかけての個体である。口縁径 51.0cm を測る。口縁は大きく外反し、端部はヨコナデ仕上げである。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整により丁寧に仕上げられている。

36は今回唯一完形に図上復元できた資料である。原位置が特定できたのもこの資料である。全高は復元で84.7cm、口縁径は56.6cmをそれぞれ測る。大きく外反する口縁端部はヨコナデ仕上げである。外面は全体にタテハケ調整が認められる。口縁内側はヨコハケ調整が認められ、何度もストロークを重ねて丁寧に施している。基底部から筒部にかけては円筒埴輪とほぼ変わらない形状を呈するが、円筒埴輪が2段目と3段目に透かし孔を穿孔するのに対して、2段目と4段目に透かし孔が認められることは注意しておきたい。また、4段目には逆U字形を二つ重ねたヘラ記号が見られる。3・4は口縁部、5は肩部の破片であるが、小片であるので詳細はわからない。

円筒埴輪の細分類 以上、円筒埴輪について記述してきた。続いて、その型式的特点をまとめておきたい。今回出土した普通円筒埴輪はA類（口縁径38cm）とB類（口縁径22～27cm、基底部径18～22cm、全高55cm～56cm）の2種類の規格が存在する。うちB類は基底部から口縁部にかけて逆ハ字形に広がり、3条の突帯に仕切られる4段構成をとる。B類は突帯形状、あるいはハケ工具の特徴とあわせて、さらに3種類に細分することが可能である（表1）。こうした細分類は特徴全体をとらえたものであるため、完形、あるいは口縁部の残存する資料を標識とするが、ハケ工具や焼成、突帯形状などから、破片資料でもどの類の属するのかを推測することは可能である。

< A 類 >

1を標識とする、大型の一群である。口縁部は直立し、ヨコナデにより端部を丁寧に仕上げている。外面は1cmあたり7本を1単位とするストロークの長いタテハケで仕上げられる。内面は丁寧なヨコナデがみられる。ただし、これに対応する筒部や基底部の出土をみていないことには、若干の不安が残される。

< B 1 類 >

7・9あるいは2を標識とする一群である。外面調整に使用されるハケ工具は1cmあたり8～10本ほどの単位を観察できる。このB 1類は7・9のように直立する口縁部と、内面を丁寧なヨコナデで仕上げるもの（B1a類）と、2・4のように口縁部がやや外反し、口縁裏の調整は粗いタテナデとなり粘土帯が明瞭に観察されるもの（B1b類）に分かれる。突帯は断面台形となるものが多く、高さ1cm以下のものが大半である。焼成は様々であるが、概して普通であり、色調は明黄褐色から明橙褐色となる。B1b類には2本の直線の間をX字形で埋めたヘラ記号が施されている。

< B 2 類 >

11を標識とする。口縁部は直立し、端部は平坦でナデ（工具ナデ？）により成形される。口縁直下、外面にハケ工具の角を使用したとみられる沈線が1条認められる。口縁内面の調整は丁寧なヨコナデ。突帯は断面M字形で高さは0.7cmである。工具原体は1cmあたり5本の単位が認められ、今回出土した資料の中では最も粗い。焼成は普通で色調は暗橙色～橙褐色を呈する。

< B 3 類 >

14ないしは19を標識とする。口縁の形態は明らかではない。ハケ工具原体は1cmあたり6～7本の単位が認められる。焼成はややあまい個体が多く、橙褐色、ないしは黄褐色を呈するものが多い。

ここで、B類に共通する特徴についてまとめれば、筒部の厚さは1.3～1.5cmに統一されている。同じく底部近辺では2.5～3.0cm。外形は緩い逆ハ字形であり、突帯により各段が10～12cm間隔に仕切られる「等分割形」になると考えられる。外面にのこるタテハケ調整の痕跡も、ストロークの長い、回転性を持ちながら施されるもので、回転台の使用が想定できる。一方で口縁形態、突帯形態、ハケ工具の原体などに違いが表れるが、これが製作にあたった工人の単位を示しているかは、分析した資料が少ないこともあって、検討の余地がある。

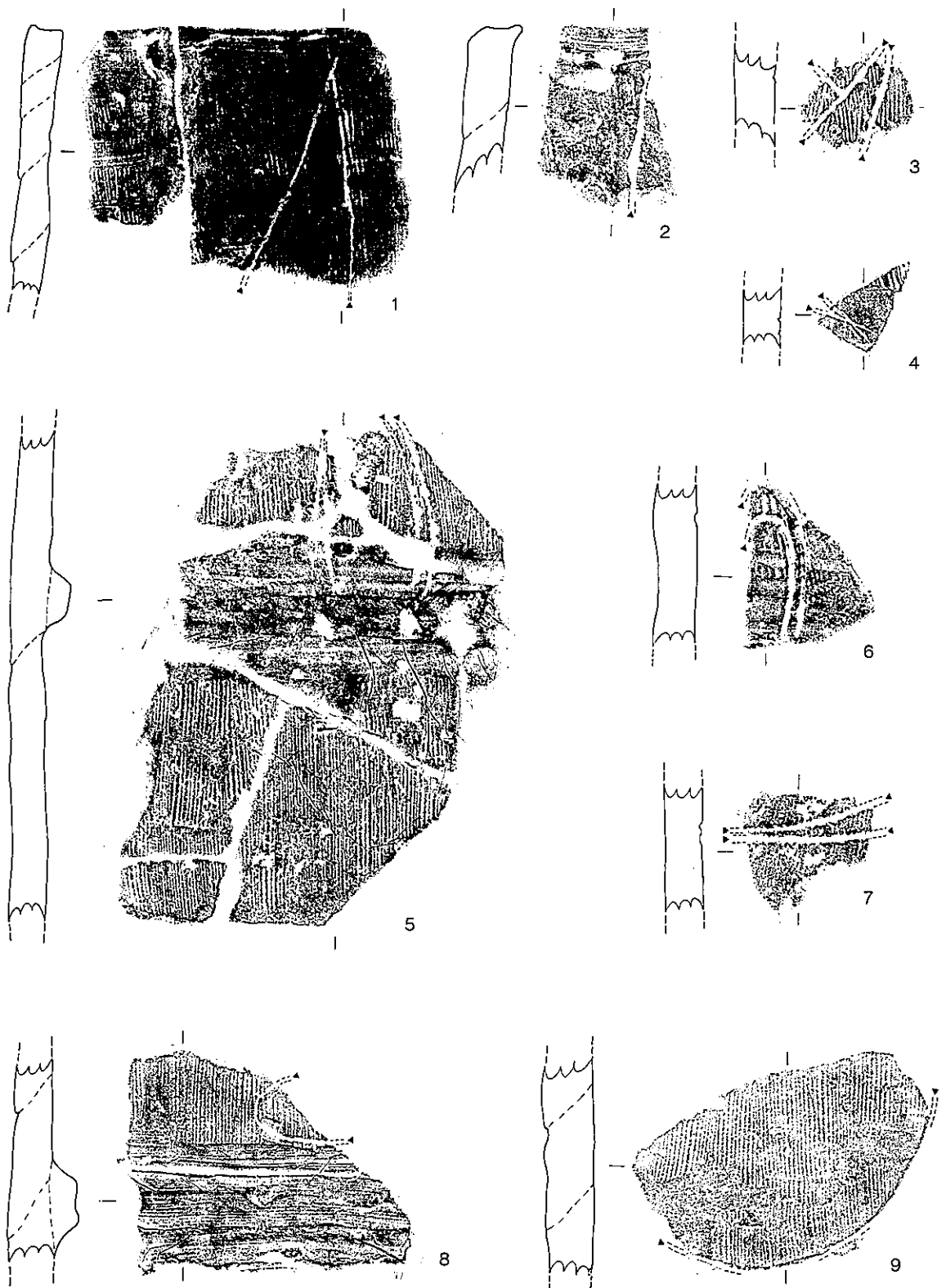


図33 線刻のある円筒埴輪片

また、7にみるように、内面のナデ調整が概ね各段の高さに合わせて方向を変えていることは、川西宏幸の指摘する小工程のなごりとみてよい。これらの特徴から考えて、天狗山古墳の円筒埴輪の製作年代は、川西氏による編年のV期前半ごろと考えられる。

円筒埴輪の製作工程 ここまでは、円筒埴輪の特徴や分類について述べてきた。続いて、これまでの観察結果に基づいて円筒埴輪の製作工程を明らかにしておきたい。製作工程を明らかにし、それを比較することは、製作時期の違いや、工人の技術系統の違いにアプローチする上で有効な手段と考えられる。検討した個体が少ない点は問題であるが、ここで試案として提示しておきたい。

1 準備工程

胎土を作る・・・粘土を採取し、長石、石英、角閃石、砂岩、雲母などを混ぜ生地にする。

作業場の設定・・・作業台（回転台）に藁・茎または木の枝状の植物を敷く。

2 製作工程

第一工程・・・高さ3～5cm程度の粘土帯を輪状に成形し、回転台の上に設置。

第二工程・・・太さ3cm程度の粘土紐を6～7段積み上げた後、外面はハケ工具、内面ナデにより調整。ハケ工具により割り付けた後、突帯を貼り付ける。（基底部）

第三工程・・・粘土紐を6～7段積み上げた後、外面はハケ工具、内面はナデにより整形。ハケ工具により割り付けた後、突帯を貼り付ける。透かし孔を穿孔する。（第2段）

第四工程・・・粘土紐を6～7段積み上げた後、外面はハケ工具、内面はナデにより整形。ハケ工具により割り付けた後、突帯を貼り付ける。透かし孔を穿孔。（第3段）

第五工程・・・粘土紐を6～7段積み上げた後、外面はハケ工具、内面は布を用いてナデにより整形。ヘラ記号を施す例もある。（口縁部）

搬出・・・回転台から分離して、窖窯での焼成後、古墳へ搬出される

以上のように、天狗山古墳の円筒埴輪製作工程は単純化されたものである。こうした作業工程の単純化は円筒埴輪を大量生産するための条件でもあったろう。

ところで、全体に自重で歪んだ個体が多いことから考えて、各工程の間に十分な乾燥が行われたとは考えがたい。乾燥工程は埴輪製作にあたって重要な要素であるが、天狗山古墳の場合は作業省力化のほうに主眼が置かれていたような印象を受ける。基底部最下段の粘土帯が、きちんと輪状に成形されていない個体や、自重による歪みや発生したひび割れをそのままに残す個体の存在は、このことを支持する。一方で先述したとおり小工程が認められるほか、突帯を貼り付ける際に割付が行われていることなど、古式の製作技法に倣う点もある。

線刻について（図33、図版34-1） 天狗山古墳の円筒埴輪には、ヘラ状の工具により線刻（いわゆる「ヘラ記号」）をもつ例が、線刻の全体像を確認できない微小な断片も入れると30点ほど確認できる。図33にその代表的な拓影を集めたが、線刻をもつ例は図27～32にも含まれる。線刻の断面を観察すると、稜を鋭く立てるものが多く、刀子状の工具先端を使って施描されたものとみられる。破片資料が多く、器種や線刻位置は断定しにくい、普通の円筒埴輪では口縁部、朝顔形円筒埴輪では4段目に施描されるようである。

線刻の型式は、概ね3種に分類可能である。まずは1～4のように逆V字、X字、N字形など、直線を組み合わせるものである。つぎに、5～7に見るように弧線を二重に組み合わせるものである。5ではアーチ形を、突帯に接するように施描している。6も同様の形状と思われるが施描位置はわからない。なお、このアーチ形のヘラ記号は朝顔形円筒埴輪36（図32）でみられるものである。7は水平方向の沈線で施描されている。最後は8・9にみるように一重の弧線を施描するものである。全形はわからないが施描角度から見て大形のものと小形のものと2種類が存在したことは間違いない。（和田 剛）

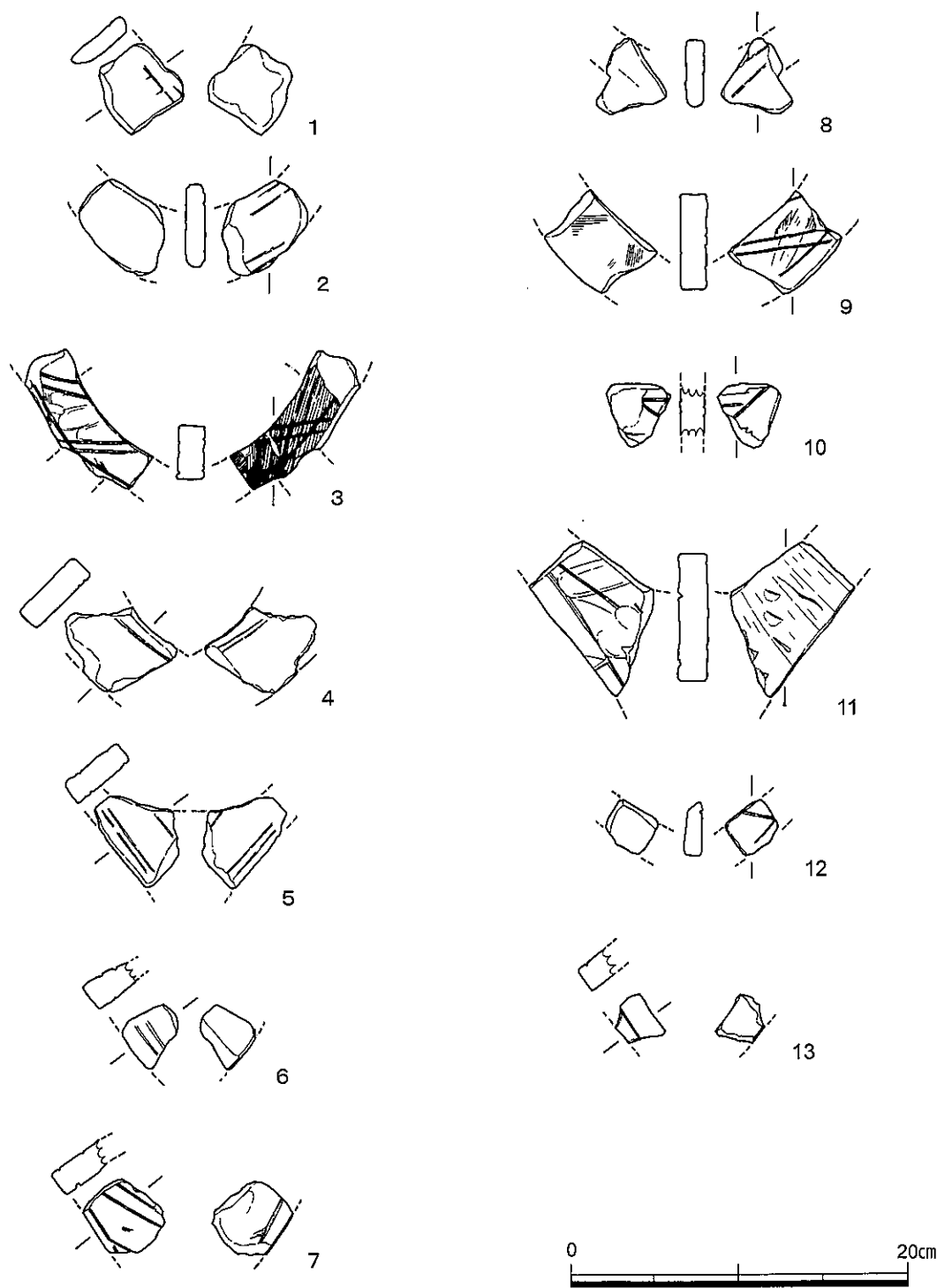


図34 形象埴輪 (1)

(3) 形象埴輪 (図34・35、図版34-2、図版35)

蓋形埴輪 器種が確認できるものは蓋形埴輪のみで、そのうち図化できたものは立ち飾り部 (図34) 13点、軸部および軸受部 (図35、1～3) 3点、笠部 (4～7) 4点、台部 (8・9) 2点である。

立ち飾り部は全形を窺い知る資料はないが、外縁に沿う1条の沈線とともにそれを横切る沈線が2条一組で施されるもの (図34、3・7・9・10・12) と、2条一組の沈線が外縁に沿って施されるもの (1・2・4～6・8) がある。基本的に両面ともに同様の沈線を施すが、9・11は沈線が片面のみに施されており、ナデやハケなどの調整が残存していることから、沈線が省略されていた可能性がある。3も内外面で調整

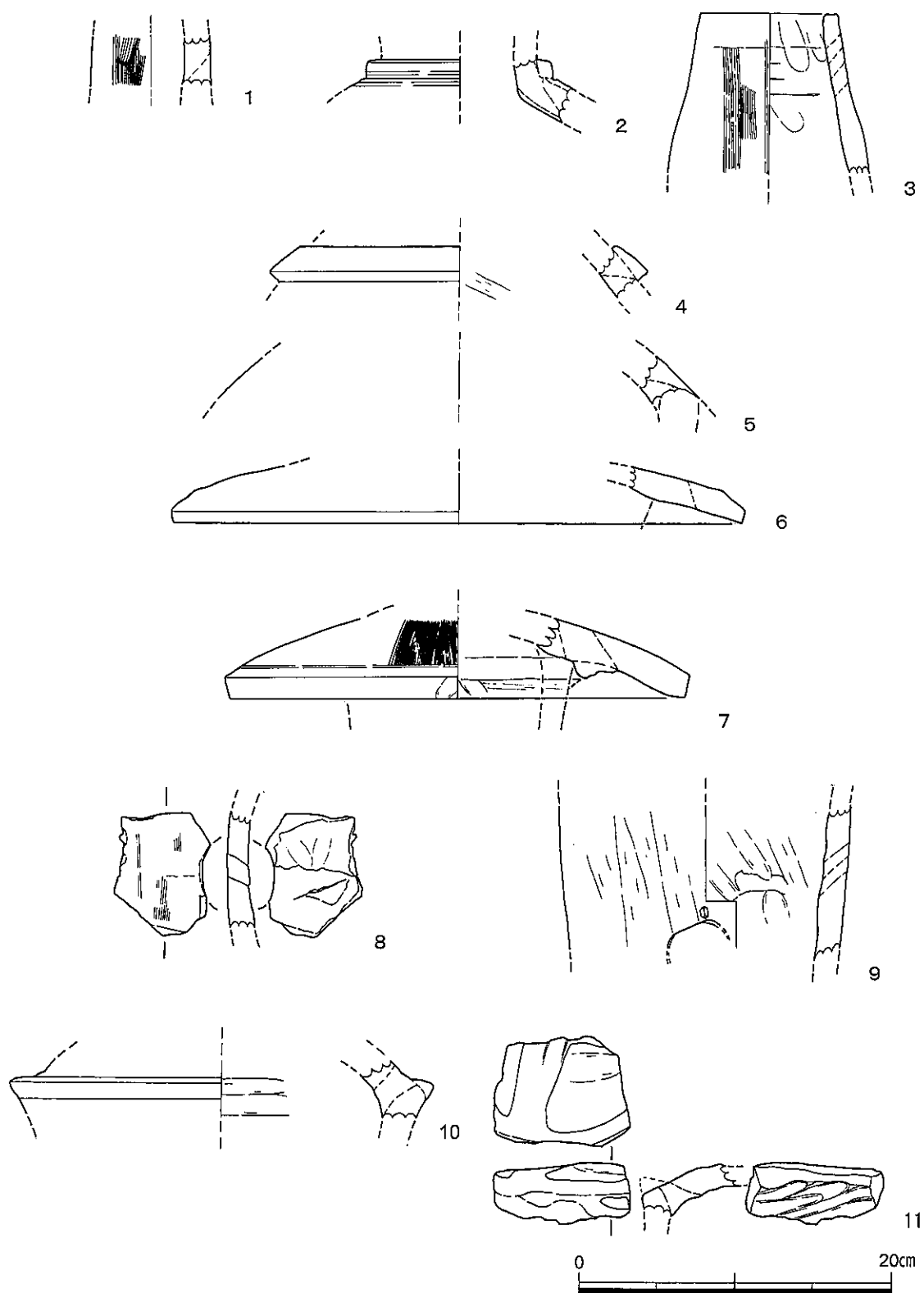


图35 形象埴輪 (2)

表2 形象埴輪 (図34・35) 観察表

図番号	図版番号	出土トレンチ	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	色 調	胎土	焼成	備 考
図 34-1	34-2	墳頂部石室	蓋	立ち飾り	沈線2条同士がほぼ直に接す	磨滅のため不明	淡橙褐色	0.5～5mm 程度の砂粒を多く含む	不良	
2		後円部南	蓋	立ち飾り	ナデ?両側縁に沿う沈線2条	ナデ?沈線なし	橙褐色	1～3mm 大の砂粒を普通に含む	普通	
3		後円部西	蓋	立ち飾り	ハケ(7)、1側縁に沿う沈線1条に2条一組の沈線二組が交わる	ナデ、沈線の特徴は同左	橙褐色	2mm～1cm の砂粒をまばらに含む	良好	方形透かし孔
4		前方部北	蓋	立ち飾り	ナデ。両側縁に沿う沈線2条	同左	灰橙褐色	3mm 大、1mm 大の白色砂粒を多く、5mm 大の褐色の砂粒をまばらに含む	普通	
5		前方部北	蓋	立ち飾り	ナデ、阿側縁に沿う沈線2条	同左	橙褐色	1mm 大の白色砂粒を多く、4mm 大の褐色の砂粒を少し含む	不良	
6		前方部北西	蓋	立ち飾り	側縁に沿う深い沈線2条	より側縁に近く浅い沈線2条	橙褐色	1mm 大以下の砂粒を少量含む	不良	
7		前方部西	蓋	立ち飾り	ナデ。側縁に沿う沈線1条とそれに斜交する2条一組および1条(一組の片方?)	ナデ。沈線の配置は同左であるが、斜交する2条一組は欠損のためか見えす	橙褐色	1mm 未満の砂粒をわずかに、2mm 前後の白色砂粒を稀に含む	良好	
8		墳頂部石室	蓋	立ち飾り	磨滅のため不明	ナデ、沈線2条	橙褐色	0.5～1mm 大の砂粒を稀に含む	普通	方形透かし孔
9		後円部東	蓋	立ち飾り	直交するハケをナデ消し、沈線なし	側縁に沿う沈線1条に2条が斜交、上方で別の1条(2条一組のうちの1条?)が斜交	明橙褐色	1mm 大未満の砂粒を稀に含む	良好	方形透かし孔
10		くびれ部中央	蓋	立ち飾り	ナデ、沈線は側縁に沿う1条に1条が斜交、さらに側縁寄りに別の1条	ナデ、沈線は側縁に沿う1条に1条が斜交、さらに側縁寄りに変則的沈線跡	暗橙褐色	1mm 大未満の砂粒を稀に含む	良好	鯖部分か
11		前方部北	蓋	立ち飾り	阿側縁にほぼ沿う沈線1条	直交方向に強いナデ	暗橙褐色	1mm 大の白色砂粒を多く、4mm 大の褐色の砂粒を少し含む	良好	
12		注記欠損	蓋	立ち飾り	磨滅のため不明	沈線1条ずつが斜交	黄橙褐色	1mm 大未満の砂粒を稀に含む	普通	
13		前方部北	蓋	立ち飾り	ナデ?沈線見えす	側縁に沿う深い沈線1条	暗橙褐色	1mm 未満の砂粒を稀に含む	良好	
図 35-1	35	後円部西	蓋	軸部	ハケ(10)、赤彩痕	ナデ?	暗橙褐色	最大 2mm の砂粒を少し含む	良好	
2		後円部西	蓋	軸受部	ナデ	ナデ	暗橙褐色	2mm 大の砂粒をまばらに含む	普通	
3		後円部南	蓋	軸受部	タテハケ(8)	ナデ、粘土紐接合痕残る	橙褐色	1～3mm 大の砂粒をまばらに含む	良好	
4		後円部西	蓋	笠部	ナデ	ナデ	暗橙褐色	1mm 未満の砂粒をまばらに含む	良好	
5		後円部西	蓋	笠部	ナデ	ナデ	暗橙褐色	5mm 大の砂粒をまばらに含む	普通	
6		前方部北	蓋	笠部	磨滅のため不明	磨滅のため不明	明橙褐色	1～5mm 大の砂粒を比較的多く含む	不良	
7		前方部北	蓋	下半部	タテハケ(7)、沈線2条、端部ナデ	ナデ	明橙褐色	1mm 大の砂粒を多く、1cm 前後の砂粒を稀に含む	普通	復元径 36cm
8		後円部東	蓋	台部	タテハケ(5-6)、上からナデ?	ナデ	暗橙褐色	1～5mm 大の白色砂粒をまばらに含む	良好	
9		墳頂部東	蓋	台部	強いナメナメナデ	強いナメナメナデ	暗橙褐色	1～5mm 大の砂粒を比較的多く含む	良好	
10		後円部南	不明		ナデ	強いヨコナデ	橙褐色	1～5mm 程度の白色砂粒を含む	良好	
11		後円部南	不明		磨滅のため不明	強いヨコナデ	橙褐色	1～5mm 程度の白色砂粒を含む	良好	

*計測値カッコ内数字は復元値、ハケのカッコ内数字は 1cm 当たりの本数

に差が認められるなど、製作の際に内外面の区別がなされていたものと思われる。幅の狭い個体が多いが、8・3に見られるように透かし孔を有していたと思われるものも存在する。透かし孔は横方向の2条沈線を分断するように穿たれている。

軸部および軸受部は、後円部西トレンチ(図35-1・2)と後円部南トレンチ(3)から出土している。2は、軸受部下端突帯の破片で、内外面ともにナデが施されている。色調・胎土から同トレンチ出土の笠部(4・5)と同一個体になる可能性が高い。また3は上端径が7.0cmと小さいことから軸受部としたもので、外面にタテハケを施し、外面の一部にタテ方向の、また上端付近にヨコ方向のナデがみられる。内面は粘土紐の痕跡もみられ、やや粗雑なナデがみられる。1は軸部の可能性が考えられ、外面に赤彩の痕跡が残る。笠部は、後円部西トレンチから1個体分(4・5)、前方部北トレンチから2個体分(6・7)がそれぞれ出土している。5は、内外面ともにナデが施され、同トレンチ出土の笠部中位突帯と思われる破片(4)と同様の色調・胎土を呈することから、同一個体であると考えられる。笠部中位突帯(4)は、低平で幅広の突帯である。また6は風化しており調整は確認できないものの、端部はナデによって成形されている。内面に剥離痕が認められることから、後述する7と同様の接合方法であったと考えられる。いっぽう、7は外面に放射状のハケが施されているもので、一部に2条一組の沈線と思われるものもみられるが不明瞭である。端部はナデにより丁寧に成形されており、内面には台部との接合を強化するための粘土が残存している。6は復元径37cm、7は復元径30cmとややばらつきが見られるものの、総じて小型の蓋形埴輪であるといえるだろう。

台部は、後円部東トレンチ(8)と墳頂部東トレンチ(9)があり、外面がタテハケののちに丁寧にナ

デが施されていることから形象埴輪の台部の可能性を考えたものである。9は復元径が14.8cmで、円筒埴輪よりも径がかなり小さい。透かし孔上方に何らかの工具による刺突痕が認められ、透かし孔の穿孔に際しての目印であった可能性が考えられる。

本古墳出土の蓋形埴輪資料は、断片的であるにしてもその製作技法や形態的特徴をいくつか指摘しうる。まず笠部に関しては、外面調整が放射状のハケとナデとで少なくとも2種類のあり方を示すが、製作技法においては共通点が認められる。すなわち笠部と台部を別々に成形した上で接合し、内外面より粘土によって補強するというもので、伊賀高弘分類（伊賀1989）の笠部一括成形に属するものと考えられる⁽¹⁾。小型品に一括成形が用いられることも指摘されており（高橋1988）、天狗山古墳出土蓋形埴輪も総じて小型をなすことと矛盾しない。しかし、形態的には笠部中位突帯を伴う点から松木分類（松木1990）の蕃上山タイプ、川村分類（川村1997）のC類型に属するものと考えられるが、法量が30～40cm程度と小型であり、放射状のハケを施すことなどから、松木の指摘する「最末期の蓋形埴輪」（松木1990）に位置づけられるものである。また、それらの蓋形埴輪は時期的には5世紀末～6世紀初頭の年代が与えられており、本古墳の年代観と矛盾するものではない。

次に立ち飾りに関しては、全形が判然としないため、従来指標とされていた鰭部の誇大化や長辺部の湾曲化などの点から推察することはできない。文様構成からみると外縁に1条沈線を施し、横方向の2条沈線を施す点は5世紀中葉以降にみられるものであり、同様に方形を透かし孔を施すものもみられる。沈線を分断するように穿たれる例は、奈良市平城宮第一次大極殿下層SX7800例にみられ、いずれにしても笠部の年代観よりやや古い様相を呈している。笠部中位突帯や立ち飾りの文様構成など外形的な要素に古い特徴を有しているものの、法量の点で小型化が著しいことから、時期的には新しいものと考えられよう。

出土地点を検討すると、後円部周辺を中心にほぼすべてのトレンチから出土しており、墳丘各所に配置されていたものと考えられる。また後円部墳頂より台部が出土していることから、墳頂部と墳丘テラス上に配置されていたと考えられるだろう。円筒埴輪の総数に比べて破片数も少ないことから、まばらに配置されていたものと考えられる。

その他 この他に不明形象埴輪が数点出土しており、そのうちの2点を図化した。図35-10は後円部後円部南トレンチ出土のもので、屈曲部分に断面三角形の突帯を貼り付けたものである。内面は横方向のナデが施され、復元径が突帯部分で27.2cmである。朝顔形円筒埴輪の肩部に類似するが、本古墳出土のものはいずれも断面台形の突帯であり、様相を異にする。また同トレンチ出土の11は、色調・胎土から同一個体と考えられるものであり、屈曲部分に剥離痕が認められることから、突帯が貼り付けられていたものと考えられる。上面には剥離痕が認められることから、何らかの形象埴輪の台部であった可能性が考えられる⁽²⁾。（渕ノ上隆介）

（4）陶質土器・陶質系土器・須恵器（図36・37、カラー図版7・8、図版36～39）

陶質土器・陶質系土器・須恵器は、復元・図化できたもので計27点が出土している。それらの大半は造り出し状遺構（前方部西トレンチ）からの出土である。すべて蓋坏で計22点にのぼる。同遺構出土土器のなかにはこれらのほかにも復元できなかった細片が多数あり、それらも含めるとさらに点数は増える。また同遺構以外では、くびれ部西トレンチから坏身片1点、前方部北西トレンチから無蓋高坏片1点と甕胴部片2点、後円部西トレンチから甕胴部片1点が出土した。

造り出し状遺構から出土した蓋坏には須恵器、陶質土器のほか、陶質土器ではないがその製作技法で作られた陶質系土器が含まれている。

陶質土器（図36、カラー図版7） 坏蓋が2点出土している。いずれも造り出し状遺構上からの出土である。

1は、ほぼ完形の坏蓋である。天井部頂は広く平らな面をもち、この平坦面と稜にいたる斜面は直線的で傾斜変換がはっきりしている。稜は鋭く突出し、口縁部は下半3分の2が外反する。また口唇部は平ら

な面になっており、ごく浅い沈線がめぐる。天井部平坦面の外郭線にあたる部分の内面には粘土をナデのばした痕跡が認められる。これは円形粘土盤成形技法による成形であったことを示している。天井部の調整は、回転ヘラケズリが天井部頂の平坦面・天井部斜面から稜付近まで、さらに両者の境を1周と大きく3回に分けて施されている。このヘラケズリの順序は、前2者の前後関係が不明であるが、境界部分のヘラケズリがいちばん最後に施される。いずれも丁寧に削られているが、須恵器のようにロクロの回転に勢いが感じられず、ケズリの単位がわかりにくい。また、天井部頂には「二」のヘラ記号が刻まれている。内面は回転ナデが施されている。焼成は非常に堅緻で、内外面には火だすきが認められる。

2は、ほぼ完形の坏蓋である。1と比較して全体的に丸みと鈍さを感じられる器形である。天井部頂は中心が凹んでいるが、平坦面を作ろうとする意図がうかがえる。天井部斜面はやや丸みを有し、稜は鈍く突出する部分と上外方へ鈍く突出する部分とがある。口縁部は直線的に外に開き、口唇部を丸くおさめる。

また2にも1と同様に、天井部頂の内面に円形粘土盤成形技法による成形を示す粘土をのばした痕跡が認められる。天井部頂は本来ケズリを施してあったのか判然としないが静止ナデのみが確認できる。また頂部の平坦面外周から稜付近にかけては回転ヘラケズリを施し、最後に平坦面と斜面の境にさらに1周ケズリを施している。回転ヘラケズリは1と同様、ロクロの回転に勢いが感じられず、ケズリの単位がわかりにくい。内面には回転ナデが施されている。また焼成は非常に堅緻で、内外面には火だすきが認められる。

これら陶質土器の特徴をあげてみよう。

①円形粘土盤接合による成形である。

円形の粘土盤に粘土紐あるいは粘土帯を積んで成形したもので、平坦面外郭線付近の内面にみられる円形に残っている粘土をナデのばした際にできた接合痕から確認できる。

②外面調整の回転ヘラケズリを複数回施す。

天井部平坦面と斜面というように回転ヘラケズリが複数回にわけられている。

③天井部頂に平坦面をもつ。

成形時の粘土盤と平坦面のみを範囲とする回転ヘラケズリによって、独特の器形を特徴づける天井部頂の平坦面が作られていると考えられる。

④内外面に火だすきがみられる。

火だすきは焼成時の融着を防ぐために、土器の間にはさんだ藁の痕跡である。これが坏蓋の内外面にみられるということは、焼成時に身に蓋をするようにセットで焼成したのではなく、それぞれ口縁部を上にして間に藁をはさんで焼成したことを示している。

このような特徴をもつ陶質土器の故地は韓国のどの地域であるのだろうか。5世紀から6世紀にかけての時期、日本列島内で出土する土器の多くはその故地を加耶地域に求めることができる。岡山県内においてもそれは例外ではなく、山陽町斎富遺跡や総社市高塚遺跡など、加耶系の陶質土器が多く出土している。しかし、この時期の加耶地域では蓋坏ではなく高坏が多く生産されているうえ、天狗山古墳出土の陶質土器のような器形をもつものや外面調整に回転ヘラケズリのみを用いるものは加耶地域にはない。加耶地域ではヘラケズリの後、その上からさらにナデを施すため、ヘラケズリの痕跡が消えてしまっている。つまり天狗山古墳から出土した陶質土器の諸特徴をもつものは加耶地域には認められないのだ。そこで天狗山古墳出土の陶質土器と特徴が類似する陶質土器が出土する地域として浮かび上がってくるのが韓国全羅道

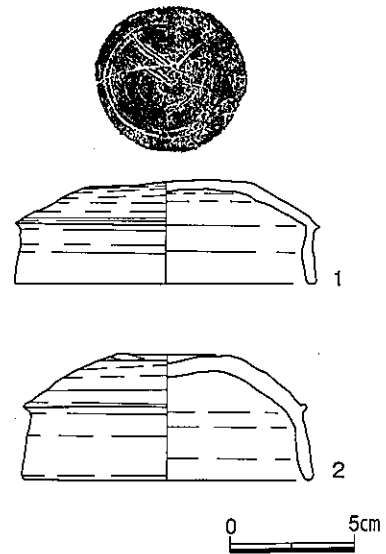


図36 陶質土器

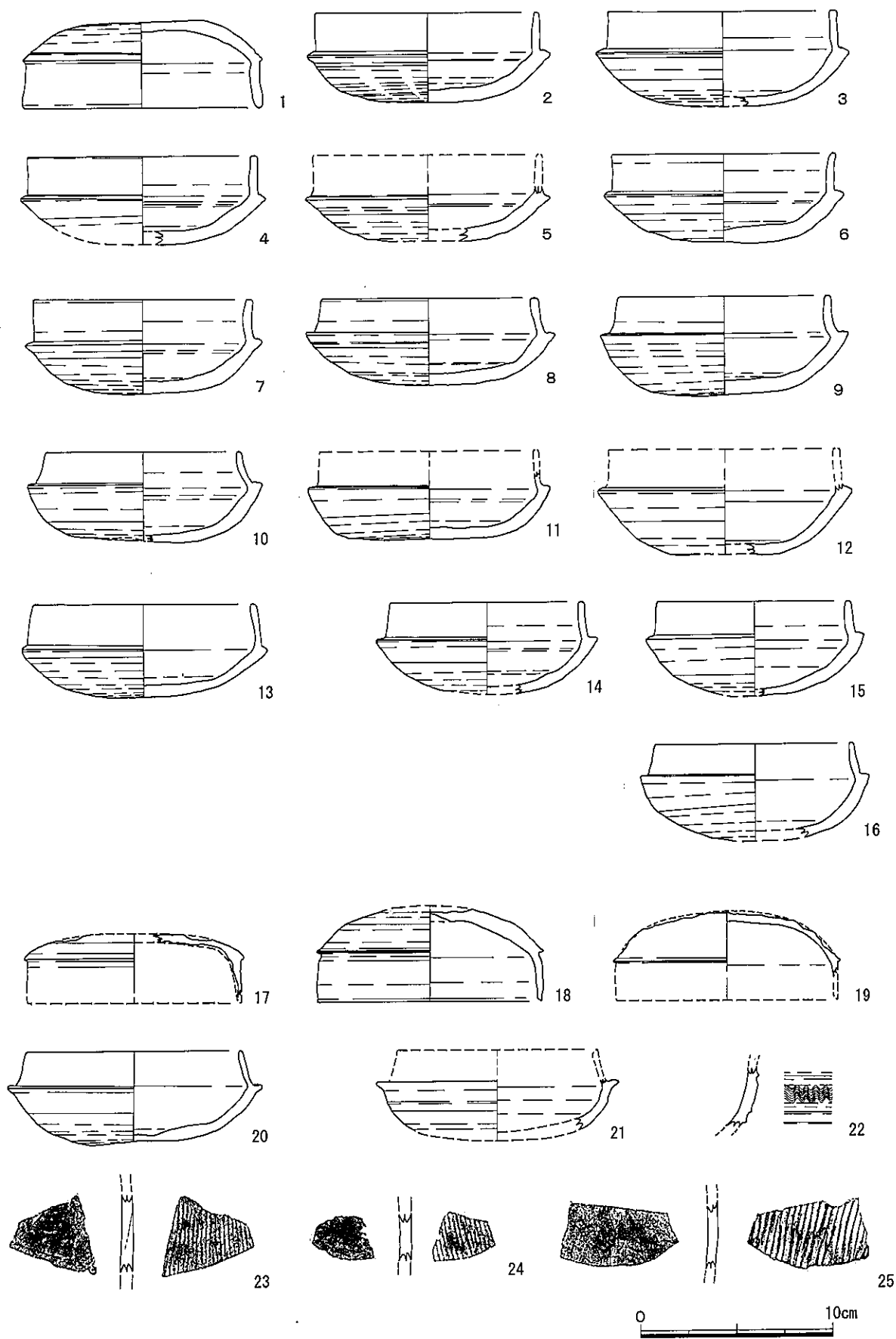


図37 陶質系土器・須恵器

表3 陶質土器・陶質系土器・須恵器（図36・37）観察表

図番号	図版番号	器種	計測値(cm)		調整		色調	胎土	焼成	備考
			口径	器高	外面	内面				
図36-1	カラー7	坏蓋	12.4	4.3	回転ヘラケズリ(時計)	回転ナデ	暗青灰色	1mm程度の砂粒をまばらに含む	良好	火標、ヘラ記号、断面内部セピア色
2	カラー7	坏蓋	11.8	5.2	回転ヘラケズリ(時計、中央のナデ部分と接する上縁部のみ反時計)、回転ナデ、中央部静止ナデ	回転ナデ	暗青灰色	1~2mm大の砂粒をまばらに含む	良好	外面火標、内面自然釉付着、断面内部セピア色
図37-1	カラー8	坏蓋	12.5	4.6	回転ヘラケズリ(時計)、回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	1~3mm大の白色砂粒を多く含む	不良	体部高2.45cm
2	36-1	坏身	11.8	4.7	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色、一部青灰色	1~2mm大の砂粒をまばらに、3~4mm大の砂粒をごく稀に含む	不良	
3	36-2	坏身		5.0	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1mm程度の砂粒を稀に含む	不良	立ち上がり部欠損
4	36-3	坏身	12.0	(5.0)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1mm程度の砂粒を含む	不良	
5	36-4	坏身			回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1~2mm程度の砂粒を含む	不良	体部の2/3と立ち上がり部を欠損
6	カラー8	坏身	11.5	5.0	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	2~3mm大の砂粒をまばらに含む	不良	
7	36-5	坏身	11.5	5.1	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1mm未満の砂粒を稀に含む	不良	
8	36-6	坏身	11.4	4.2	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	2mm以下の砂粒をまばらに含む	不良	
9	36-7	坏身	10.8	5.1	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1~3mm大の砂粒をまばらに含む	不良	
10	36-8	坏身		5.2	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1mm未満の砂粒を稀に含む	不良	立ち上がり部の大半を欠損
11	37-4	坏身			回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1mm未満の砂粒を稀に含む	不良	立ち上がり部を欠損
12	37-5	坏身			回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1~3mm大の砂粒を少し含む	不良	体部の3/4と立ち上がり部を欠損
13	37-1~3	坏身	11.65	4.9	回転ヘラケズリ(時計)後に中央部ナデ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色、一部赤褐色	1~2mm程度の砂粒をやや多く、5mm程度の砂粒をまばらに含む	不良	
14	37-6	坏身	10.3	5.0	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1mm未満の砂粒を稀に含む	不良	
15	37-7	坏身	9.6	5.1	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	不良	
16		坏身	(10.8)	(5.0)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	砂粒を密に含む	不良	
17	38-1	坏蓋			回転ヘラケズリ、回転ナデ、クレーター状に風化	回転ナデ	青灰色	1mm未満の砂粒を含む	良好	
18	38-1	坏身			回転ヘラケズリ、ナデ、クレーター状に風化		青灰色			
19	38-1	坏身				回転ナデ	青灰色			
20	38-2	坏身	11.3	4.9	回転ヘラケズリ(時計)、回転ナデ	回転ナデ	青灰色	1~2mm大の砂粒をまばらに、4mm大の礫を稀に含む	良好	立ち上がり部高1.8cm

*計測値カッコ内数字は復元値、ヘラケズリ方向はクロ回転方向ではなく見た目のケズリ目方向

の栄山江流域である。近年、栄山江流域では前方後円墳や埴輪が見つっている。天狗山古墳出土陶質土器は、成形技法、器形、調整技法、焼成方法いずれをとっても栄山江流域、特に羅州に多くみられる「羅州系土器」（酒井2004）と呼ばれている陶質土器と類似している。類例として羅州市伏岩里1・2・3号墳、羅州市新村里9号墳などで出土している蓋坏があげられる。

胎土も類似しており、天狗山古墳出土陶質土器はいずれもこの羅州を中心とした地域から搬入された陶質土器と考えられる。

また1・2は、天井部平坦面の大きさなどに差異がみられるが、これは時間差のなかでとらえられる。天井部の平坦面は広いものから時期が経るとともに狭いものへとなる（酒井2004）ことから、2はやや後出するものと考えられる。

陶質系土器（図37-1~16、カラー図版8、図版36・37）造り出し状遺構上から須恵器とは異なる、むしろ陶質土器の技術系譜で捉えたほうがよいと思われる土器が出土している。器種は坏蓋と坏身である。

<坏蓋>（1）

ほぼ完形の坏蓋である。天井部は扁平で頂部は平坦面になっている。稜は鈍く突出し、口縁部は2分の1下半からやや外反している。また口唇部は丸くおさめている。この坏蓋は、胎土が陶質土器と異なることや焼成があまう灰黄色を呈していることから陶質土器とは区別されるが、図36の陶質土器との類似点もある。それは成形技法と調整技法にみられる。成形には円形粘土盤を用い、外面調整には天井部頂の平坦面上には不定方向のケズリ、天井部斜面には回転ヘラケズリと異なる調整を施していることである。また天井部斜面の器壁が厚いことも陶質土器との類似点としてあげられる。

<坏身>（2-16）

図化できたものは15点であるが、接合・復元することができなかった破片が多数ある。それらも含めると20点を越す数の坏身が出土したことになる。

いずれも坏蓋（1）と同様に焼成があまう、1点を除くすべてが同じ色調である。また、ほぼ共通した特徴として受け部が下外方へ下がり口唇部が平坦に作られること、内面底部の調整が回転ナデではなく不

定方向のナデであること、などがあげられ、なかには外面調整の回転ケズリを底部の中心には施さない個体、円形粘土盤成形の痕跡を示すもの（3）も存在している。

また法量と形態によって2種類に大別できる。Ⅰ類は口径が11～12cmで底部が扁平であり、Ⅱ類は口径が10.1～10.4cmでⅠ類に比べて底部が丸い。そして、Ⅰ類は体底部と立ち上がりの形態によってさらに5種類に細別できる。

Ⅰa類（2-5）は、底部が平坦で体部にかけての屈曲が緩やかである、底体部が扁平な一群である。また受け部は下外方へ下がり、立ち上がりは垂直にのびて端部を平坦におさめる。外面調整は、体部には受け部付近まで回転ヘラケズリを施すが底部全面には施さない、あるいは削ったのちにナデている。内面調整は、体部の2分の1上から口唇部までに回転ナデ、以下に不定方向のナデが施されている。

Ⅰb類（6-7）は、Ⅰa類と立ち上がりの形態以外はほとんど同じである。Ⅰb類の立ち上がりは垂直にのびたのち、口縁部付近でわずかに外反する。調整はⅠa類と同じである。

Ⅰc類（8）は、Ⅰa・Ⅰb類と類似した器形であるが、体部にかけての屈曲がややきつく、起きあがっている。また、立ち上がりが内傾する。外面調整の回転ヘラケズリは体底部全面ではなく、底部の中心は削らずにそのまま残し、受け部付近まで施している。内面調整は、口唇部から体部までに回転ナデ、底部に不定方向のナデが施されている。

Ⅰd類（9-12）は、Ⅰc類よりさらに体部にかけての屈曲がきつくなり、その傾斜変換点がより明瞭になったため腰が張ったようになり、底部の平坦面が強調された器形となっている。立ち上がりを欠失しているものもあるが、残存しているものに関しては、内傾したのち上方へのびる。外面調整は個体の状態によって判然としないものもあるが、概ねⅠa類と同じである。

Ⅰe類（13）は、Ⅰa・Ⅰb類と同様に、底部は扁平で、体部にかけての屈曲が緩やかである。しかし受け部は、丸みを有しながら短く下外方へ下がり、立ち上がりは内彎し、口唇部付近でわずかに肥厚するという点で異なる。また、外面調整の回転ヘラケズリが不明瞭ながらも非常に細かい単位で施されており、他の資料と比較して精緻に作られている印象を与える。全体的に器壁が薄い。内・外面調整はⅠc類と同様である。

Ⅱ類（14-16）は、口径がⅠ類に比して小さく、また底部が丸い一群である。受け部は下外方へ下がり、立ち上がりはやや内傾し、口唇部は平坦におさめる。外面調整は底部が残っている15では、底部の中心部には回転ヘラケズリを施していない。内面調整は、いずれも体部の2分の1上から口唇部までに回転ナデ、以下に不定方向のナデが施されている。

須恵器（図37-17～25、図版38-1～3） 須恵器は、造り出しはもちろん、墳丘の各所で出土している。その特徴と時期について以下述べていく。

<坏蓋>（17-19）

いずれも造り出し状遺構上から出土している。

17は、天井部が扁平で、口縁部高に比べて天井部が低く復元される坏蓋である。天井部の3分の1から口唇部近くまでの外面がかるうじて残存するほかは、内外面に及ぶクレーター状の剥離によって欠損している。天井部が平坦で口縁部高の2分の1強の高さしかないなど他の須恵器と比較して古式の特徴を有しているが、稜は短く丸みをもち、鈍く突出する。外面調整の回転ヘラケズリは天井部の4分の3まで施されている。時期はTK23型式併行期。

18は、天井部が丸く、稜は鋭く突出する。稜の下には凹線がめぐり、明瞭に区画されている。口縁部はわずかに内彎し、口唇部は内傾する面をもつ。天井部頂にはクレーター状の剥離が内外面に認められる。天井部外面の3分の2まで回転ヘラケズリを施したのち、これを完全に消すほどではないがケズリの上からさらにナデを施している。内面には回転ナデを施している。他の3点と比較して天井部の器壁が厚い。焼成は非常に堅緻で、断面がセピア色を呈している。時期はTK23型式からTK47型式への過渡的段階。

19は、天井部が丸く、稜は短く鈍い。外面のほぼ全体がクレーター状に剥離しており、稜付近と天井部

のごくわずかな部分で本来の表面を確認できるのみである。外面調整は不明であるが、内面には天井部頂から稜付近までは不定方向のナデ、以下、口唇部までは回転ナデが施されている。天井部頂が円形に割れており、円形粘土盤成形技法を用いて製作されている。時期は TK23型式から TK47型式への過渡的段階と考える。

ほかにも図化しえなかった坏蓋が1点ある。これも同様に外面がクレーター状に剥離している。破片から天井部は丸く、稜は突出していたと推測でき、18に似た形であったと思われる。

18の回転ヘラケズリ後にさらにナデを施す調整技法、19の円形粘土盤成形技法と内面の調整方法は、陶質土器にみられる技法である。形態的には須恵器と同様であるが、陶質土器製作技術との技術交流が伺える。
＜坏身＞（20・21）

20は造り出し状遺構から出土した、ほぼ完形の坏身である。体底部は比較的扁平で、受け部端は丸みを帯び短く、わずかに上外方へのびている。立ち上がりはやや内傾し、口唇部は細く丸くおさめている。全体的につくりがamai印象を与え、口唇部や受け部など細部のシャープさに欠ける。全体的に器壁が薄い。底体外外面の4分の3までに丁寧な回転ヘラケズリが施されている。また内面には回転ナデが施される。時期は TK47型式併行期。

20は同時期の陶邑窯の須恵器や岡山県内で出土している須恵器と比較しても口唇部や受け部などのシャープさやつくりの丁寧さに欠けている。この坏身が作られたと考えられる TK47型式併行期は陶邑窯での須恵器製作技法の地方への拡散期にあたり、陶邑系の技術をもちいた地方窯が築かれる時期である（植野1998）。数はまだ少ないが、畿内以外でも須恵器生産が行われていた。そのような陶邑系技術で生産を開始した地方窯の製品は、その開窯当初は陶邑窯の製品に類似したものが作られるが次第に独自の変化を遂げ、古い要素がのちまで残るなどの地方色が認められる（菱田1992）。20の場合、陶邑窯よりも先取的に退化するという地方色が現れている可能性があり、地方窯との関係で考えた方がよい資料かもしれない。

21は、立ち上がりの基部から体部にかけての破片である。受け部は比較的長く上外方へのびており、シャープさを感じさせる。体部の外面4分の3まで回転ヘラケズリが施されている。小破片ではあるが、20と比較して全体的にシャープで丁寧に作られていることがわかる。時期は立ち上りを欠損しているので判断しにくい。TK23型式から TK47型式への過渡的段階と考えるのが妥当ではなかろうか。21はくびれ部西トレンチから出土しているが、そのなかでも前方部西トレンチとの境界に近い地点から出土している。したがって、造り出し状遺構上から流れてきた可能性も考えられる。

＜無蓋高坏＞（22）

坏部の口縁部下、波状文を施した文様帯とその上下を区画する断面三角形の凸帯の部分の小破片である。波状文は比較的細かく丁寧に描かれているが、突帯は鋭さを欠いている。破片の下方は内側へしっかりと屈曲しており、このことから坏底部に近い部分の破片であると考えられる。時期は TK47型式併行期。前方部北西トレンチから出土している。

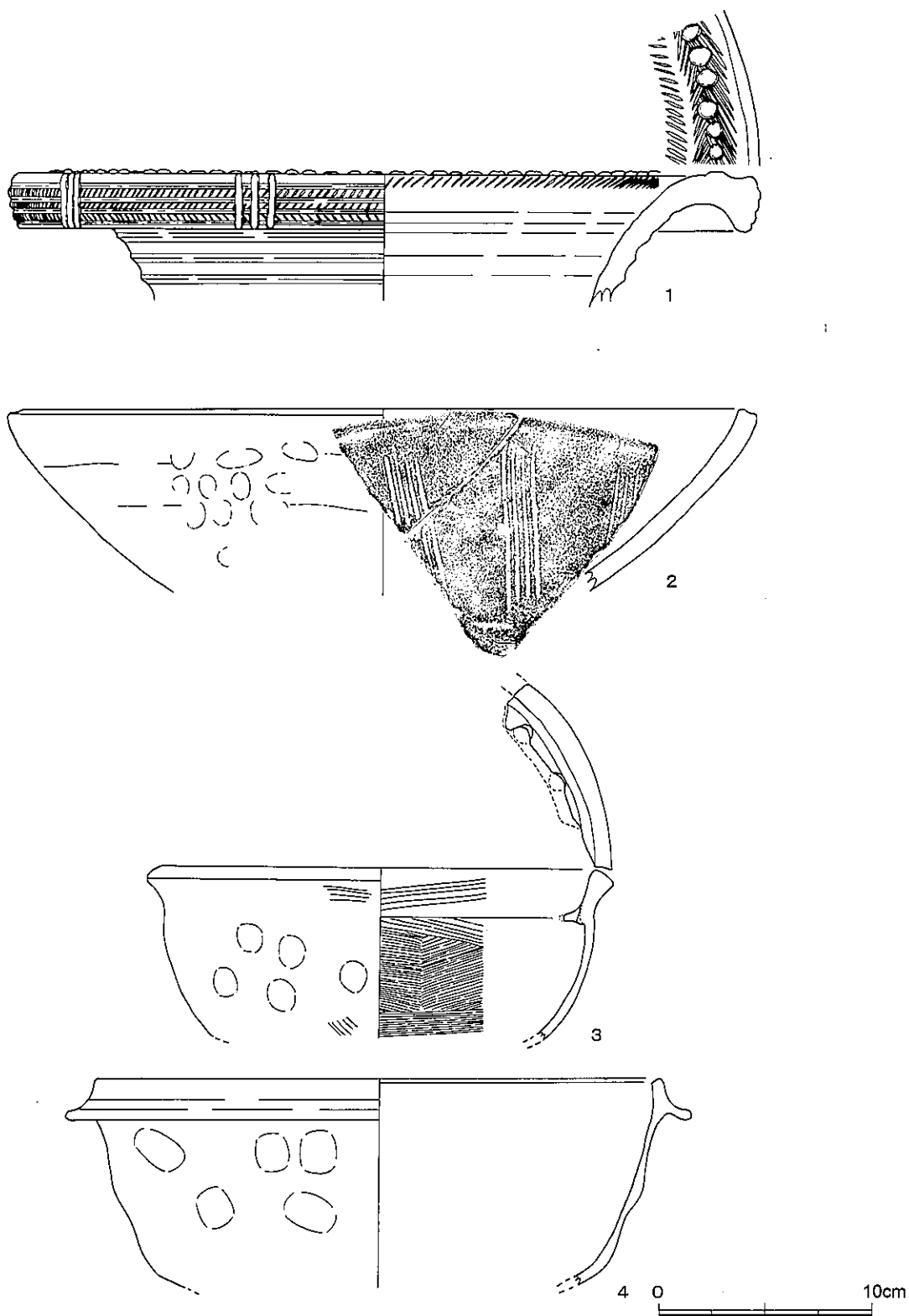
＜甕＞（23-25）

いずれも胴部片である。

23は、焼成が堅緻で断面がセピア色を呈している。外面には平行叩きが施されており、内面には不明瞭ではあるが同心円文当て具痕が認められる。タタキで成形した後、内面に残った同心円文当て具の痕跡を消そうとしたものと考えられる。また断面には成形時の内傾接合痕が認められる。時期は胴部片であるので判断しがたいが TK47型式併行期ではなかろうか。前方部北西トレンチから出土している。

24は、焼成や色調、調整など23と類似しており、出土位置も同じであることから同一個体である可能性が高い。内面の下半分にはナデ消された同心円文当て具痕が認められるが、上半分には認められずナデ調整のみとなっている。

25は、23・24と比較して器壁が薄い。焼成が堅緻で断面がセピア色を呈している。外面には平行叩きが



国内番号	図版番号	器 種	計測値 (cm)		調 整		色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口径	器高	外面	内面				
1	38-4	弥生土器・広口壺	(35.6)		凹線を伴う強いナデ	ナデ	淡褐色	よく締まるが砂粒を多く含む	良好	
2		中世土器・摺鉢	(35.4)		ナデ、指オサエ	ナデ、4条一組の摺目	淡黄褐色	よく締まり砂粒を含む	良好	
3		中世土器・内耳付土鍋	(17.8)		ナデ・指オサエ	ヨコハケ (5本/cm)	黄灰色	1mm程度の砂粒を均等に含む	良好	内外面に煤付着
4		中世土器・土鍋	(26.4)		ナデ・指オサエ	ヨコナデ	黄灰色	1mm程度の砂粒を均等に含む	良好	

*計測値カッコ内数字は復元値

図38 その他の出土遺物

施されているが、このタタキ具は使い古されたものであったようで、平行な筋の間に微細な木目が浮き出ている。内面にはナデ消されて、ほとんど見えなかった同心円文当て具痕が認められる。時期は TK47 型式併行期。後円部西トレンチから出土している。(大熊美穂)

(5) その他の出土遺物と、弥生時代高地性集落の存在

墳丘の各所および周辺からは、弥生時代と中世を中心とした時期の土器片が、形のわかるもので 30 点ほど出土している(図 38、図版 38-4)。周辺には次章で報告する天狗山西古墳の墳域も含むが、天狗山古墳および天狗山西古墳とは関連しない時代の遺物であるので、ここであわせて報告する。

1 は天狗山西古墳の乱掘堀内埋土内から出土した弥生時代中期後半の器台口縁部とみられる破片で、復元径は 35.6cm となる。外側に大きく開いた口縁部の内面に円形浮文、外面には棒状浮文をもち、以下胴部にかけては凹線文で飾る。2 は天狗山古墳くびれ部西トレンチの流土内から出土した中世の摺鉢で、淡黄褐色を呈して焼成は良く、径 35.4cm に復元される。13 世紀後半～14 世紀前半のものであろうか。3・4 も中世土器で、いずれも鍋の断片である。3 は天狗山西古墳南西トレンチの、4 は天狗山古墳前方部北西トレンチの、それぞれ流土内から出土した。

その他の細かい断片も含めて検討すると、天狗山古墳周辺から得られる古墳時代以外の土器片は、弥生時代中期後半以降のものと中世のものとが多い。前者のほとんどは前方部北トレンチの周堤外斜面および裾と、後円部南トレンチの周堤外緩斜面から出土する。この 2 ケ所は天狗山古墳築造前の尾根の脊梁に沿った部分であり、この場所に中期後半を中心時期とする、いわゆる高地性集落が存在した可能性を物語る。後円部南トレンチで検出された「周堤外側の遺構」(図 11)は、この集落に伴う遺構である可能性も捨てきれない。

いっぽう、後者は後円部西トレンチや天狗山西古墳など、天狗山古墳墳丘の南西斜面に当たる部分で多く出土する。後円部西トレンチで確認された後世の攪乱がこの時期のものであるとすれば、鍋などの生活雑器が含まれることを考えて、さほど大規模ではないが、生活を伴うような活動がここで行われたと推測される。

その他、6 世紀後半とみられる須恵器片(図版 38-5)なども確認されているが、この時期のものは他にはあまりみられず、由来は不明である。(松木武彦)

5. 天狗山西古墳の調査成果

(1) 調査の経緯と発掘区の設定

天狗山西古墳は、天狗山古墳の後円部西側、ほぼ東西主軸ライン上に墳頂が位置するという立地にあり、天狗山古墳と何らかの関係を持って築造されたと考えられる古墳である。このような点から、天狗山古墳に隣接する古墳としての性格、両者の関係について検討する知見を得るために発掘調査を行うこととなった。なお従来、本古墳は天狗山古墳周辺に所在する南山古墳群の 1 基として認識されていたが、今回の調査にあたり、天狗山古墳との関係性を評価して「天狗山西古墳」と命名した。

調査以前の段階で、墳頂部を東西に走る窪みが認められ、主体部付近にはすでに盗掘が及んでいる可能性が考えられた。また墳形は測量調査の結果、円墳、方墳のいずれであるのか確定することができなかったうえ、墳丘北側に張り出し状の高まりが認められ、前方部あるいは造り出しを伴う可能性がでてきた。このため、高まりが本古墳に伴うものである可能性を考慮に入れた主軸設定を行う必要性が生じた。測量図を検討した結果、主墳である天狗山古墳で使用したグリッドにのせた主軸の使用が妥当となった。そこで、

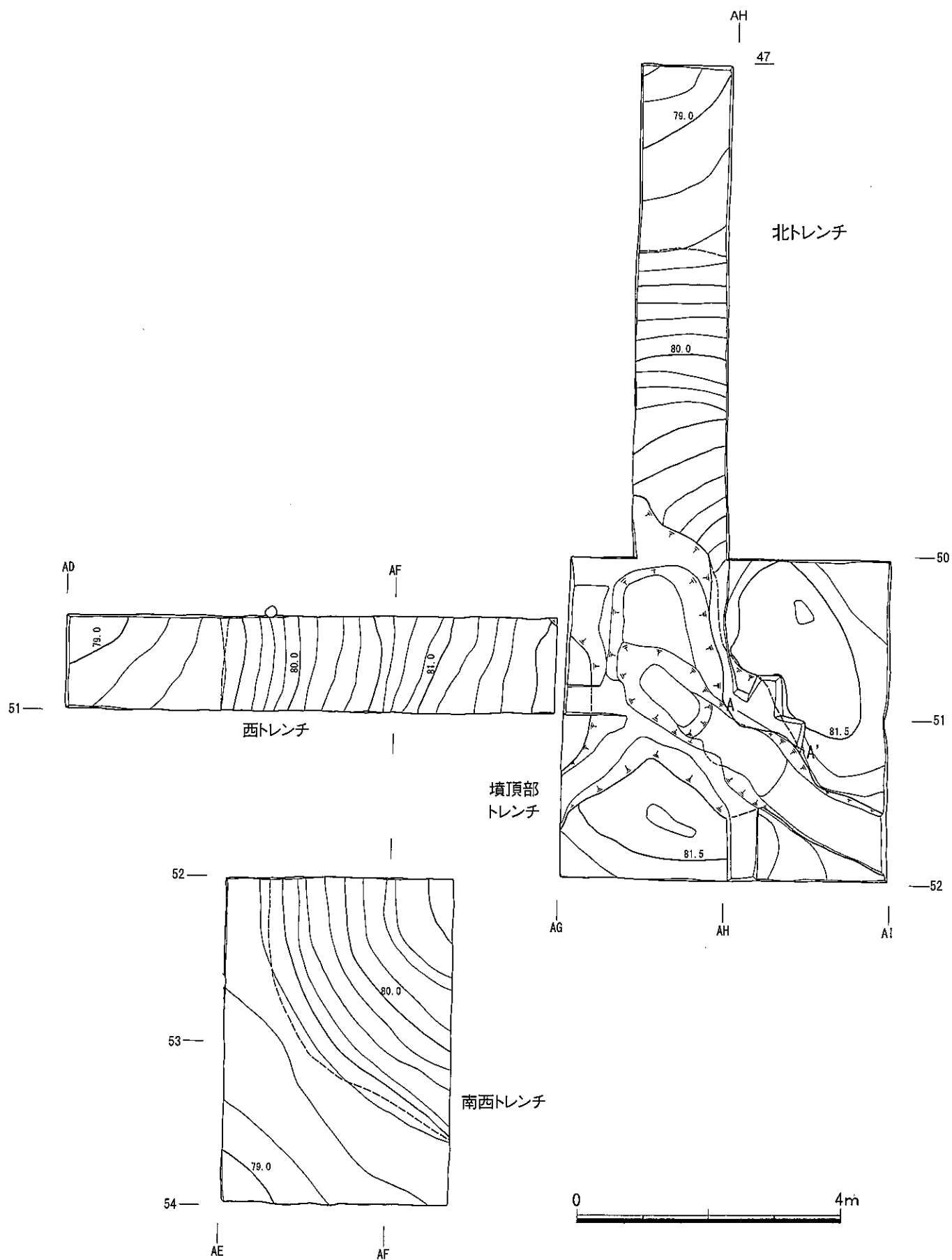


図39 天狗山西古墳・トレンチの配置と平面

AH ラインを南北主軸、51 ラインを東西主軸とし、4 つのトレンチを設定した。

第2次調査では墳頂部トレンチ、北トレンチを、第3次調査では南西トレンチ、西トレンチを調査した(図39)。(大熊美穂)

(2) 墳頂部トレンチ

(図39～41、図版22-1)

墳頂部に、埋葬施設の確認とその構造の解明を目的として設定したトレンチである。調査以前から認められていた乱掘坑とおもわれる窪みの全体をほぼ覆う形で、南北5m(AI-AGライン)、東西5m(50-52ライン)で設定した。

乱掘は、調査前の状況から想定された規模を遥かに上回る規模で行われていた。乱掘坑は、幅約1～2mでトレンチ内を北西から南東に貫いており、トレンチのなかでは納まらないほど大規模なものであった。特に墳丘中心部にあたるAG・AH51ライン付近では残存している盛土上面から約2.5mの深さにまで及び、厚い盛土の下の地山をも掘り込んでいた。いっぽう、あまり乱掘が及んでないAH50区、AG51区では、ほぼ表土直下で盛土が検出された。

埋葬施設は、乱掘によって痕跡がまったくわからないほどに破壊されていた。しかし乱掘坑内から、石室石材と考えられる角礫や円礫、天井石と考えられる扁平な石が出土しており、断片的ではあるが埋葬施設の様相などを推測させてくれる。特に天井石と考えられる石材の1枚は、乱掘坑内でも土坑状に一段深く掘られた空洞部分に蓋をするような状況で出土しており(図41、墳頂部トレンチ15層)、また角礫の一部も、あたかも側壁が築造当初のまま現存しているかのように積み上げた状況で出土した。これらは埋土の堆積状況から、いずれも乱掘の際に二次的に築かれたものであることは明らかである。しかし一方でこの出土状況は、この土坑状に一段深く掘られた部分に埋葬施設があった可能性を示している。そしてその埋葬施設は、出土した石材から、天井石5枚からなる長側辺2m、短側辺0.5m、内高50cm程度の規模で、南北に斜交する方向を主軸とする小形の竪穴式石室であったと想定される(図版21-2)。

また墓坑については、乱掘坑の壁面観察では確認できなかった。したがって墓坑をもたなかった可能性が高い。この竪穴式石室があったと推定される位置の乱掘が地山の下まで及んでいたことと、あとで述べるように旧表土が乱掘坑壁面で認められることを考慮に入れると、石室の床面は旧表土に近いレベルにあったと考えられよう。

墳頂部付近の墳丘は、整地を行わず旧表土面に直接土を盛って築造していた。盛土の高さは、中心付近で旧表土面から約1.6mあり、墳丘のほとんどが高く積まれた盛土によって築かれていた(図41)。また盛土は中心から外側へと積まれており、構築過程で大きく3回に分けて盛土の面をそろえたことが確認できる。

遺物は、表土と乱掘坑埋土から須恵器広口壺の口縁部破片と胴部破片(図43-9)、弥生土器の器台破片(図38-1)と壺底部破片が出土している。須恵器は同一個体のものと考えられる。墳丘西トレンチからもこ

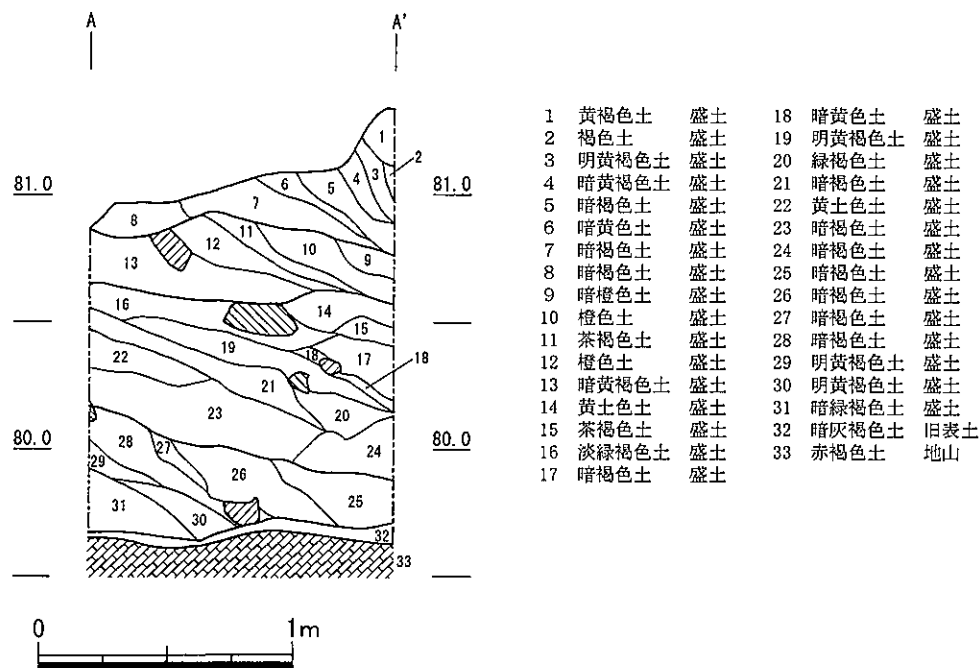


図40 天狗山西古墳 乱掘坑土層断面

れらと同一個体になる胴部破片が出土している。石室内に副葬したものか、墳頂部に置かれていたものかは判然としない。弥生土器は、天狗山古墳においても古墳築造以前の遺構、遺物が出土していることから、両古墳が築造される以前の弥生時代の集落に伴うものであると考えられる。(大熊美穂)

(3) 北トレンチ (図39・41、図版22-2)

墳形と墳丘規模、墳丘の構造、外表施設の有無を明らかにするために、墳丘北側斜面に設定したトレンチである。墳丘測量で認められた張り出し状の高まりを通るように、南北主軸である AH ライン西側に南北7.5m、東西1.5mで設定した。トレンチ上半部分では表土下約10cm で、墳端付近では表土下約30cm で盛土を検出した。盛土を検出する際、表土中から埴輪片がわずかに出土したが、埴輪を並べた痕跡は確認されなかった。したがって、埴輪や葺石といった外表施設はなかったと考えられる。

墳形が、円墳と方墳のいずれであるのか確定するにはいたらなかった。しかし、墳丘測量で認められていた張り出し状の高まりは、古墳に伴うものではなく、前方部や造出しといった施設ではないことが明らかとなった。墳端は、地山である暗黄褐色土層(38層)と盛土である明赤褐色土層(27層)が交わる付近であると考えられる。墳端から北側の地山は盛土直下から続いてくる平坦な面であり、周溝は存在しない。また墳丘中心から約7.2m に墳端は位置しており、この結果から復元できる南北方向の径は約14.4mとなる。

墳丘構築の過程は、墳頂付近とはやや異なっている。旧表土が認められず、墳端での地山の高さが、墳頂部トレンチの乱掘壊壁面で認められる地山面よりも30cm ほど低い。天狗山古墳の調査成果から、旧表土のレベルが北へ向かって下がっていったことがわかっており、天狗山西古墳においても自然地形が北へ向かって下がっていた可能性が高い。さらに旧表土が認められない点も考慮に入れると、墳丘北側部分は盛土を行う前に、表土面を、あるいは地山も含めてある程度掘削し、整地したと考えられる。そして、こののち墳頂部と同様に盛土を中心から外側に向かって積んでいったと想定される。また墳頂部トレンチで認められた、段階的に高さをそろえて盛土を行う工程は、地山付近にまで達する墳丘の断ち割りをトレンチ内全体にわたって行っていないため確認できていない。

遺物は、表土中から埴輪片がわずかに出土したのみである。数が少なく小片であり、墳丘に埴輪列などがあった痕跡は認められないため、何らかの原因で天狗山古墳の埴輪片が紛れ込んだものと考えられる。

(大熊美穂)

(4) 西トレンチ (図39・41、図版22-3)

墳丘西端、墳丘の構造、外表施設の有無等を解明する目的から、51ライン北側に、南北1.5m、東西7.5mの規模で設定した。

トレンチ上半部分では表土直下で、墳端付近では表土から約50cm 下で盛土を検出した。また、盛土を検出する過程において埴輪・葺石等は確認し得ず、外表施設は存在しなかったと考えられる。

79.375mのコンターライン付近に傾斜変換点がみられ、地山の暗黄灰色土層(24層)と盛土の明赤褐色土層(22層)の交点がこの位置に来る。ゆえにこの部分を墳丘端と見なせよう。墳端から西側の地山は、盛土下からほぼ平坦に続いてきており、周溝は存在しなかったと考えられる。AH51を墳丘の中心と考えると、AH51から墳丘端までの長さは51ライン上で約7.5mとなり、墳丘東西径を約15mと推定できる。

旧表土面がみられない点は北トレンチと共通するが、土層断面から観察される墳丘の構造は、北トレンチとはやや異なる。地山のレベルは、墳丘端付近が墳丘中央部に比べ15cm 程低くなっており、地山は西へ向かって僅かに傾斜していると考えられる。墳丘築造については、まず墳丘の外側から、22・23層の盛土が大きく盛られ、次に墳丘中心側から21～7層までの盛土が小刻みに積み上げられていく二つの工程を復元できる。この構築過程は、南西トレンチで看取されたものとほぼ同じである。

墳丘斜面、裾部の流土(5層)中から須恵器の広口壺片が多数出土した。これらは整理段階において中

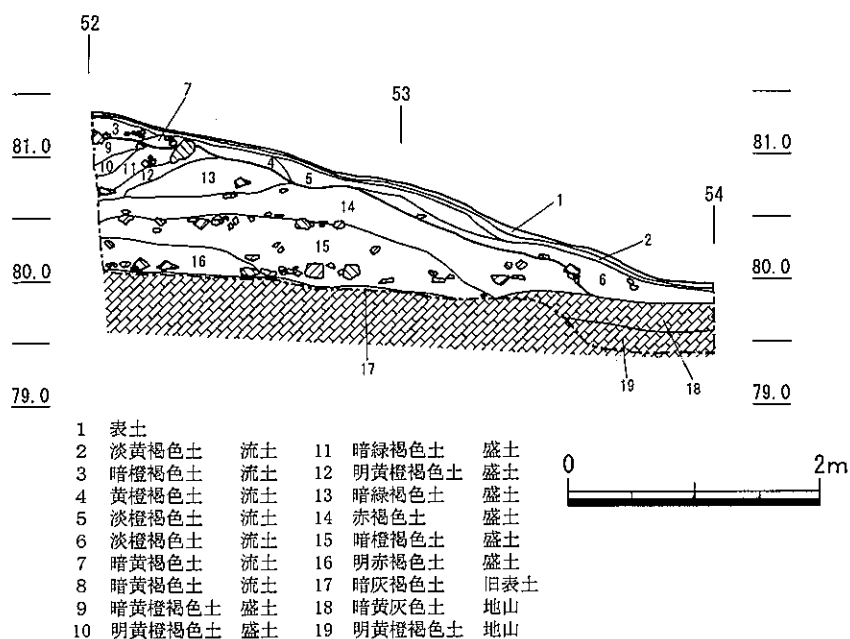


図42 天狗山西古墳 南西トレンチ土層断面

このような問題にも関わらず、遺構面の写真（図版22-4）や墳丘全体の測量図（図39）から、本古墳が円墳であることは確言できる。

（飯田浩光）

（5）南西トレンチ（図39・42、図版22-4）

墳丘の形状、墳丘の構造、外表施設の有無等を把握するため、南北5m（AFラインから東へ1mのライン・AEライン）、東西3.5m（52・54ライン）に設定した。

トレンチ北東隅から79.375mのコンターライン付近の墳丘端部にかけて遺構面を検出した。流土中から埴輪片が出土しているが、僅か1点であり、また葺石等も確認し得なかった。したがって、外表施設は存在しなかったと考えられる。

墳丘端は、地山である暗黄灰色土層（18層）と盛土の赤褐色土層（14層）の交わる部分と考えられる。墳丘は、墳丘端ラインおよび遺構面コンターが弧状を描くことから、円墳であることが判明した。また東壁側に設けた断ち割り断面の土層において、墳丘盛土のほぼ下に旧表土面を確認し、墳丘の大部分が盛土によって形成されていることが判明した。墳丘の構築過程については、旧表土の上に16～14層が比較的大まかに盛られ、さらに墳丘中心に向かって小刻みに13～9層が積まれていく状況を復元しうる。

墳丘上面および裾部の流土（3・7・6層）中から須恵器有蓋高坏の蓋・坏などの破片8点（図43-1～8）、AE52付近の流土（7層）中より鉄鏃1点（図44）が出土した。鉄鏃については、埋葬施設内の副葬品が乱掘時に掘り出され、流出したものと考えられる。須恵器片は、鉄鏃と同じ様に、埋葬施設内に副葬されていたものが乱掘時に流出した可能性、あるいは埋葬施設上ないし墳丘上に置かれていた供献品が流れた可能性などを想定できる。その他に、墳丘裾部流土（6層）中から中世土鍋片（図38-4）が多数出土した。また流土中から埴輪片が1点出土しているが、北トレンチ例と同様に天狗山西古墳の埴輪が紛れ込んだものと思われる。

（飯田浩光）

（6）出土須恵器と年代

天狗山西古墳の調査では、須恵器が出土している。いずれも破片である。このうち接合・復元できたものは9点である。そのほとんどは南西トレンチの墳丘斜面および墳丘裾の流土中からの出土で、有蓋高坏

中央トレンチから出土していた大口壺口縁片と接合し、同一個体であることが判明した（図43-9）。この須恵器片についても、南西トレンチの例と同様の流出状況を想定している。

なお、80.500m～79.375mの等高線10本が、南西トレンチと西トレンチとの間でやや整合しない。北トレンチと西トレンチの間では辻褄が合うため、おそらく南西トレンチ北側のコンターラインに若干問題があると考えられる。調査者が実測時に図面の確認を怠った故に生じた過失であり、深く反省し、お詫びを申し上げる次第である。ただし、

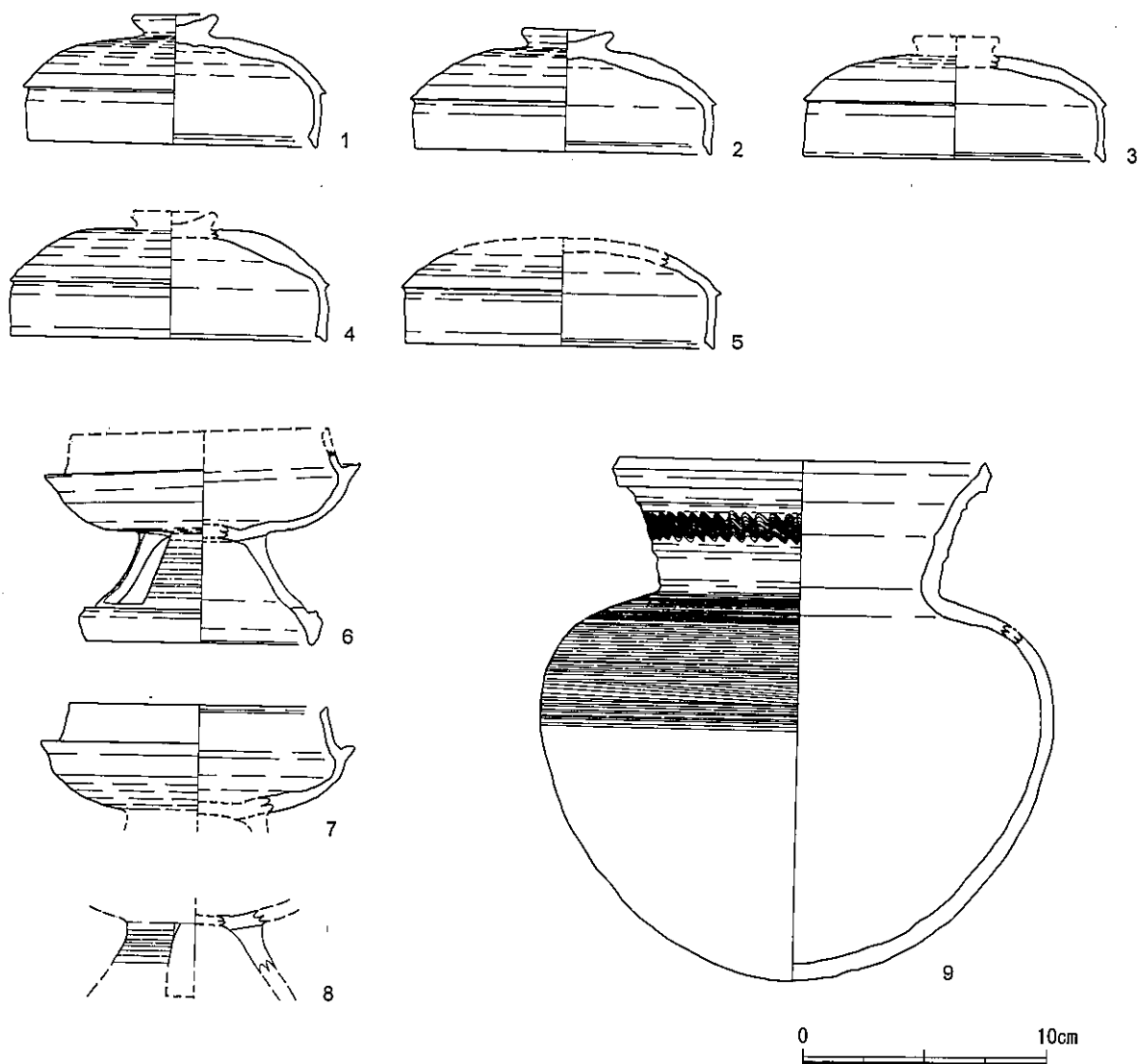


図 番号	図版 番号	器種	計測値 (cm)		調整		色調	胎土	焼成	備考
			口径	器高	外面	内面				
1	39-1	有蓋高坏蓋	(11.8)	5.4	回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	灰色	1mm 大の砂粒を多く含む	良好	
2		有蓋高坏蓋	(12.6)	4.7	回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	青灰色	1～2mm 大の白色砂粒を含む	良好	
3		有蓋高坏蓋	(12.2)		回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	灰色	1mm 大の砂粒を含む	良好	
4		有蓋高坏蓋	(14.6)		回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	青灰色	0.5mm 大の細砂粒を多く含む	良好	
5		有蓋高? 坏蓋	(12.8)		回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	灰色	1mm 大の砂粒をまばらに含む	良好	
6		有蓋高坏身			回転ケズリ、回転ナデ、脚部カキメ	回転ナデ	青灰色	1mm 大の白色砂粒をまばらに含む	良好	脚部に長方形透かし孔3ヶ所
7		有蓋高坏身	(10.2)		回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	青灰色	0.5mm 大の細砂粒を多く含む	良好	
8		有蓋高坏脚			脚部カキメ	回転ナデ	灰色	1mm 前後の砂粒を含む	良好	
9	39-2	広口壺	(16.3)		口縁部回転ナデ、胴部カキメ・格子目タタキ	回転ナデ、同心円文タタキ	青灰色	3mm 大の白色砂粒をまばらに含む	良好	頸部に波状文

*計測値カッコ内数字は復元値

図43 天狗山西古墳 須恵器

蓋4点、有蓋高坏3点、坏蓋1点である。有蓋高坏と蓋はセットをなしていたであろうから、蓋の数から推定して高坏が最低4セットはあったものと考えられる。また墳頂部トレンチの盗掘壊埋土中と西トレンチの墳丘裾流土中の異なる地点から同一個体である広口壺1点が出土している。

以下、器種ごとに概観していく。

有蓋高坏蓋（図43-1-4、図版39-1）4点が出土しており、1は墳丘斜面と墳丘裾の流土中から、2～4は墳丘裾の流土中から出土した。3・4はつまみが出土していないが、天井部につまみを貼り付け

た痕跡が認められたため有蓋高坏蓋とした。いずれも焼成は良好である。

1は、中央が凹む扁平なつまみをもち、天井部はやや丸みをおび、稜は短いながらも突出する。口唇部は内傾する面をなし、ゆるやかなながらも段をもつ。また、口縁部はわずかに内彎するとともに、下半3分の2辺りから口唇部に向かって肥厚する。天井部には稜近くまで丁寧な回転ヘラケズリが施される。全体的に器壁は薄い。

2は、天井部が全体的に丸みを有し、口縁部が短くあまり肥厚しない。稜、口唇部の形態は1と類似している。天井部には稜近くまで丁寧な回転ヘラケズリが施される。

3は、天井部が扁平で、稜は短いながらも突出し、口縁部はわずかに外反する。口唇部は内傾する有段の面をもつ。また口唇部付近で肥厚する。天井部には稜近くまで回転ヘラケズリが施される。全体的に器壁が薄い。

4は、天井部はやや丸みをおび、稜は短く鋭さに欠ける。口縁部はわずかに内彎し、下半から口唇部にかけて肥厚し、口唇部の内傾する面には明瞭な段が認められる。また天井部2分の1から稜付近まで器壁が厚い。天井部には稜近くまで丁寧な回転ヘラケズリが施される。焼きゆがみがあるようで正確な口径が計測できなかった。

坏蓋(図43-5、図版39-1) 天井部3分の1から口縁部の破片である。天井部頂を欠失しているため、つまみの有無が不明である。このため坏蓋としたが、今回出土した須恵器の器種構成から考えて有蓋高坏蓋である可能性も十分ありうる。

残存破片から、天井部は扁平であったと考えられる。稜は短いながらも突出し、口縁部は直立する。口唇部は内傾する面をなし、ゆるやかな段をもつ。天井部には稜近くまで丁寧な回転ヘラケズリが施される。

有蓋高坏(図43-6-8、図版39-1) 有蓋高坏片のうち図化できたものは以下の3点であるが、これらのほかに脚端部片が2点出土している。この2点は互いに異なっており、別個体であると考えられる。また6の脚端部とも異なっており、7・8いずれかの、あるいは未発見の高坏脚端部の可能性が考えられる。

6は、坏部・脚部が不完全ながらも残っていたものである。脚部に対して坏部は傾いている。坏底部は扁平で、受け部はわずかに上外方へのびる。また成形の際に受け部端を上方へつまみ出したと思われ、受け部上には浅く鈍い凹みがめぐり、そのぶん長くなっている。立ち上がりは受け部からやや内傾して作り出されているが、上半部を欠失しており、口唇部の形状は不明である。坏外面の4分の3まで回転ヘラケズリが施されている。脚部はハの字形に外反したのち、端部が下方へ屈曲する。脚体部には回転カキ目が施されており、その上から3方向に長方形透かしが開けられている。坏底部にはこの透かしを開けた際の工具痕が残っている。全体的に器壁が薄い。

7は、坏部のみの破片である。口縁部から脚部との接合部分までが残存している。底部は扁平であったと推定される。立ち上がりはやや内傾しており、口唇部は内傾する有段の面をなしている。坏外面の4分の3まで丁寧な回転ヘラケズリが施されている。底部には脚に透かしを開けた際の工具痕が残っており、これらから3方向に長方形透かしが開けられていたことがわかる。

8は、坏部と脚部との接合部で、脚基部径の4分の1の破片である。脚体部には回転カキ目が施されており、その上から長方形透かしが開けられている。3方向に開けられていたものと推測される。

広口壺(図43-9、図版39-2) 口頸部は墳頂部トレンチから、胴部は主に西トレンチから出土しており、墳頂部トレンチで出土した胴部片が西トレンチから出土した胴部片と接合している。しかし完形に復元するには破片がたりず、大きく口縁部から肩、胴部上半、胴部底部の3つに分かれており、それぞれは接合しない。口頸部はゆるやかに外傾し口縁部付近で外反し、端部を上方へ屈曲させて口縁部を作り出しており、口縁部内面は凹面をなしている。口頸部外面には鈍い断面三角形の2本の凸帯により上下3段に区画され、2段目には細かい間隔の波状文が描かれている。図上復元では胴部最大径が上3分の1にあり、肩が張っている。底部は丸い。

胴部は外面に格子目タタキ痕、内面に同心円文当て具が認められ、外面の頸部付近から胴部3分の1上までには、格子目タタキの上からさらに回転カキ目が施されている。また内面の同心円文当て具痕は、頸部から胴部最大径となる辺りまでは不完全ながらもナデ消している。

須恵器の相対年代 有蓋高坏蓋、坏蓋は天井部が丸みをおび、稜の突出が短いなどの退化傾向が認められる一方で、調整は丁寧に施されている。TK23型式に残っている器形のシャープさや丁寧な成形や調整が失われつつある段階のものと考えられる。TK23型式からTK47型式への過渡的段階の須恵器と考える。

有蓋高坏は、坏底部が扁平である点などTK23型式の要素をもつが、細部を見ると立ち上がりが内傾し、口唇部の形態にシャープさが失われている。有蓋高坏蓋・坏蓋と同様TK23型式からTK47型式への過渡的段階の須恵器と考える。

壺は胴部の肩の張り方、胴部最大径の位置などからTK23型式の要素が認められるが、これは図上復元での形態であり必ずしも実態を表しているものではないかもしれない。口縁部の形態や口頸部の断面三角形の凸帯の鈍さ、内面の当て具痕を完全には消さずに残していることなどからTK47型式期と考える。

(大熊美穂)

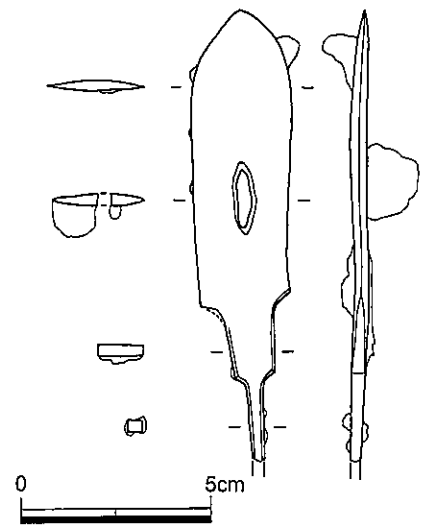


図44 天狗山西古墳 鉄鎌

(7) その他の出土遺物 (図44、図版23-2)

南西トレンチ AE52付近の墳丘流土(7層)中より平根・柳葉式鉄鎌が1点出土している。鎌身部には鏑が認められず、中央に杏仁形の透孔が認められ、頸部・基部断面は方形を呈している。全体的に残りは良いが、基部先端と頸部の一部が僅かに欠けている。全長は、残っている部分で11.9cmを測り、鎌身長7.6cm、鎌身最大幅2.7cmである。透孔は長径1.5cm、短径0.4cmを測る。

(飯田浩光)

(8) まとめ

ここでは、4つの調査区で得られた成果を総括し、併せて天狗山古墳との関係について考える。

墳丘については、南西トレンチの墳丘端ラインや遺構面コンターの形状から、円墳であることが明らかとなった。また墳丘径は北トレンチで14.4m、西トレンチで15mを復元でき、天狗山古墳は径15m前後の円墳であることが判明した。この15mという値は、天狗山古墳の後円部径約46mのおよそ3分の1、墳丘長約60mの4分の1に相当する。測量図から、本古墳が天狗山古墳後円部との位置関係を意識して築かれていることが明らかである。

墳頂部・南西の両トレンチでは、墳丘盛土と地山の間に旧表土面が遺存していた。これらに対し北トレンチ・西トレンチでは旧表土はみられなかった。地山上面のレベルは、墳頂部トレンチで約79.650m、北トレンチで約79.200m(墳端付近)、南西トレンチと西トレンチでは約79.380m(墳端付近)を測り、旧地形は墳丘中央部がやや上り、墳丘北側で若干下がっていた様である。以上から、墳丘は、自然地形の形状をある程度利用しつつ、墳丘北側など旧表土を欠く部分では、表土や地山を掘削し整地することにより、築造されたと考えられる。天狗山古墳においても、地山の高まりを利用し、また地山を削ることによって墳丘が形成されており、両古墳の墳丘築造の仕方に共通点を見出せる。

北トレンチと西トレンチ・南西トレンチとの間で、墳丘築造過程にやや相違がみられる。前者では墳丘中心から外側に向かって盛土が施され、特に段階的な工程を復元しえないのに対し、後者ではまず墳丘外側に墳丘端を強調するかの如く比較的大まかに盛土が積まれ、続いて墳丘中心部を形成すべく小刻みに土

が盛られていくというおよそ2段階の工程を想定しえた。こうした同一墳丘における築造過程の相違の理由については、現時点で類例を見出せていないため多くを語りえない。墳丘築造中における墳丘規模や墳形などの計画変更が存在したかもしれず、あるいは地山の高低などが起因しているかもしれない。天狗山古墳では、前方部北トレンチにおいて、墳丘の輪郭を明確にするように、前方部周縁に盛土が施され、続いて内側に盛土が積まれるという築造過程が復元されている。これは西トレンチ・南西トレンチで想定された築造過程と類似しており、興味深い。

主体部は、乱掘によりほぼ完全に破壊されていた。しかしかろうじて遺存していた石室石材と考えられる石や礫から、埋葬施設として2m×0.5mの小型の竪穴式石室を復元可能である。天狗山古墳の竪穴式石室の規模は、長さが主軸上で約3.8m、幅は南小口が約1.06m、北小口が1.18mであり、天狗山西古墳の石室はこの約2分の1の大きさであったのだろう。

天狗山西古墳では墓壙が検出されず、墓壙はなく石室の上に墳丘を構築したと考えられる。やはり天狗山古墳においても墓壙は確認されていない。

築造時期については、流土中から出土した須恵器が、TK23型式からTK47型式への過渡段階、あるいはTK47型式のものであり、5世紀後半から末葉と考えられる。天狗山古墳造り出し状遺構から出土した土器の中に、TK47型式に相当すると考えられる須恵器を確認でき、これが築造時期を反映しうるなら、両古墳の築造はほぼ同時期と考えられよう。

以上から、天狗山西古墳と天狗山古墳との間には、検出された遺構・出土遺物に少なからぬ共通性や類似点を見出せる。両古墳における被葬者の間の関係を、類例の比較などを通して今後具体的に解明する課題が報告者に課せられることとなった。
(飯田浩光)

注

- (1) なおこの製作技法は、市橋芳則氏や高橋克壽氏によっても指摘されている(市橋1986・1987、高橋1988)。
- (2) これらの不明形象埴輪は、類例が乏しいものの大阪府高廻り2号墳出土(永島編1991)の翳形埴輪の台部との類似点も多く、翳形埴輪の台部となる可能性が考えられる。また同古墳からは片面のみに沈線が施された鱗状の破片も出土していることから、天狗山古墳と同様の様相を示しているといえるだろう。しかし、これまで翳形埴輪は中期前半に位置づけられるもので、時期的に大きな隔たりがあることから、ここでは可能性を指摘するに留めておく。
- (3) 陶質系土器の場合、焼成があまく、表面が溶けたようになっていることもあり、図36の陶質土器のように内面に粘土の接合痕が認められるものはない。しかし、粘土盤を示すように粘土の継ぎ目で円形に割れており、円形粘土盤成形技法が用いられたことがわかる。

参考文献

- 伊賀高弘1989「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪—14号墳出土の蓋形埴輪を中心として—」『京都府埋蔵文化財情報』第32号、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 市橋芳則1986「付載2 蓋形埴輪の製作技法について」『能田旭古墳—第2次発掘調査報告—』人類学博物館紀要第1号、南山大学人類学博物館
- 市橋芳則1987「蓋形埴輪の製作技法について」『歴史と構造—文化人類学的研究—』南山大学大学院文化人類学研究室
- 植野浩三1998「須恵器生産の展開」『中期古墳の展開と変革—5世紀における政治的・社会的変化の具体相(1)—』第44回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会
- 川村和子1997「5世紀代の蓋形埴輪の変遷」『西墓山古墳—古市古墳群の調査研究報告Ⅲ』藤井寺市文化財報告書第16集、藤井寺市教育委員会
- 国立光州博物館1998『羅州藩南面古墳群総合調査報告書』光州博物館学術叢書第13冊
- 国立文化財研究所2001『羅州 伏岩里3号墳』
- 酒井清治2004「5・6世紀の土器から見た羅州勢力」『百済研究』第39輯、忠南大学百済研究所
- 全南大学校博物館 1999『伏岩里古墳群』
- 高橋克壽1988「器埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号
- 永島暉臣編1991『長原遺跡発掘調査報告書』Ⅳ、財団法人大阪市文化財協会

菱田哲郎1992「須恵器生産の拡散と工人動向」『考古学研究』第39巻第3号

松木武彦1990「蓋形埴輪の変遷と画期―畿内を中心に―」『鳥居前古墳―総括編―』大阪大学文学部考古学研究報告第1冊
大阪大学考古学研究室

松木武彦1992「蓋形埴輪の型式と範型」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集、埋蔵文化財研究会

松木武彦1994「吉備の蓋形埴輪―器財埴輪の地域性研究に関する予察―」『古代吉備』第16号

6. 地理情報システムによる墳丘分析の成果と展望

天狗山古墳の発掘調査に際しては、地理情報システムを用いて墳丘の形態等を分析するために、従来の等高線を用いた測量図の作成とは別に、50cm 間隔の方眼で標高を測定し、DEM（デジタル・エレベーション・モデル）を作成することを試みた。DEM は、国土地理院が作成している数値地図のように、地形によるさまざまな分析を行うのに役立つと考えたからである。

実際の方法としては、墳丘やその周辺で、グリッドを細分する形で50cm のメッシュを組み、それぞれの点の標高をレベルで測定するという方法をとった。しかし、傾斜が急な部分については、メッシュを組むのが容易でないことと、等高線図から標高を推定しても大きな誤差は生まれないことから、等高線図から標高を読みとる方法をとった。この方法は、等高線の間隔があいており、傾斜が緩やかに変換する場所で優れているといえることができる。

なお、こうしたメッシュによる測定法とは別に、傾斜の変換点に従って自由な点の標高を測定し、そうした点から不定形の三角形をつくりそれを連ねていく TIN という方式が用いられ始めている。精度を高めれば、この TIN の方式も、墳形の記録にきわめて有効であるものと思われる。デジタル情報としての墳形の記録に、DEM と TIN のいずれがより適しているのか、それを検討するというのも、ここでのひとつの課題であった。

天狗山古墳の DEM は、160×200（80×100m）の範囲で、1cm を単位として作成した。この DEM を画像化したところ、等高線図から起こした立体形に比べて細部の特徴のよくでたものが作成でき、今後の盛土量の復元や、古墳築造当初の墳形の復元などに役立つという見通しが得られた。

今回は、標高の測定データを方眼紙に書き取り、それをデータ入力するという方法を取ったが、記入ミスや入力ミスのために、0.5% 弱の点が、画像化してみると不自然であり、データの再確認が必要となった。画像化しても不自然ではないが数値が誤っている可能性も隠れており、その点では、手入力による限界を感じさせるものでもあった。この点では、今後、測定データをそのままファイルに記録する方法を模索するか、トータルステーションを用いて精度の高い TIN を作成するかといういずれかの方法にシフトされていくのではないかとと思われる。

なお、以上の記述は調査当時のものであり、状況は今では大きく変わっている。（新納 泉）

7. 東京国立博物館の所蔵資料

（1）調査の経緯

大正末年から昭和初年のいずれかの時期に、遠山荒次が竪穴式石室から掘り出した副葬品の大半は、現在、東京国立博物館の所蔵となっている。これらについては、1966年に村井崑雄が詳細を報告しており、さらに1986年には『岡山県史』考古資料編の1項目として西川宏の記述がある。副葬品のデータは、図や写真も交えながら、二度にわたってかなり詳細にはなされているということである。

今回、天狗山古墳の発掘成果をまとめるに当たり、古墳の理解を確実なものとするために、東京国立博物館に所蔵されたこれらの副葬品を実地調査することを決め、同館に依頼したところ快諾を得た。そこで、この機会に、副葬品に関して可能なかぎり記録をとり、新たに作成した図および写真を、観察所見とともに本報告書に掲載することにした。

調査は、2001年2月19日から同22日まで、東京国立博物館にて実施した。調査参加者は、宇垣匡雅・大熊美穂・張允禎・寺村裕史・野崎貴博・松木武彦・和田剛の7名である。さらに、挂甲と馬具の一部については、図版完成直前の2004年10月4日になって、同館にて観察と記録の補足を行った。この補足調査は、野崎・松木の2名が担当した。なお、東京国立博物館からは、X線写真の提供も受けた。同館および古谷毅氏・日高慎氏にあたらめて感謝の意を表したい。

(松木武彦)

(2) 副葬品の概要

竪穴式石室から掘り出され、現在東京国立博物館に現存する品目から知られる副葬品の種類と点数を記す。

鏡 1 面

挂甲 1 領

籠手 1 対

馬具 1 組 … 轡 (銜 1・鏡板 2)、鞍 (鞍金具 1 対)、鐙 1、杏葉 3、雲珠 1、鉸具 3

胡禄 1 具 … 金具 2 (うち 1 は行方未確認)

刀剣 … 鉄刀 2、鉄剣 1

鉄鏃 … 100 以上

農工具 … 刀子 3、鋤先 1

その他

これらの品目の多くは、すでに村井氏報文や『岡山县史』に詳しい記述や図面・写真が掲載されている。今回の調査では、これらの記載を極力補う目的で、これまで図や写真が出されていないものの実測と撮影を優先して行った。本書において初の公表となる図は、鏡、挂甲、籠手、鉸具の一部、刀剣、および鉄鏃

の一部である。また、馬具を中心として、本古墳の年代や特性を考えるうえでとくに重要と考えられる品目については、可能な範囲で再実測を試みた。

ただし、状態や時間の都合などで再実測できなかった品目も少なくない。したがって、全副葬品の図が体系的・網羅的に並べられたわけではなく、副葬品の全容紹介としては不完全なものにとどまっている。また、写真も万全でない。満足できる内容のものとはいえないが、取り急ぎ現状での報告として諒とされたい。

(松木武彦)

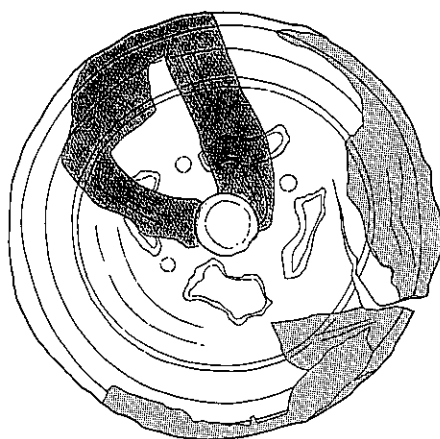


図45 鏡

(3) 鏡 (図45、図版40-1)

径11.2cmの上方作系半肉彫獣帯鏡である。

鏡面には白色の粘土が付着する一方、鏡背には有機物を含む表土状の土の付着が認められ、鏡面を下にして副葬されていたとみられる。

周縁の1ヶ所に亀裂を生じており、内側にむかってY字形に広がるほか、微細な亀裂が全体に生じている。明緑色～白緑色

を呈し、気泡を含んだ皮膜とでも言うべき厚い錆に覆われているため鏡背の文様や形状の観察はかなりむずかしく、獣像や乳がかろうじて判別できる。他の副葬品－挂甲の下端や籠手に形成された錆の形状から一時期石室内に浅く水が溜まっていたとみられるが、鏡の状態の悪さはそれに起因すると考えられ、本来の銅質を推定することはむずかしい。反面、溶け出した銅の作用により、以下に述べるように鏡にはそれを包んでいた布が遺存し副葬時の状態をとどめるが、そのことと亀裂の存在は観察をきわめてむずかしいものになっている。

図の右半、周縁付近を中心に布の付着が認められる。きわめて細かい織りの布が二重に遺存しており、絹布に包まれていたとみられる。また、かなり崩壊しているが、それとは別に、鈕でV字形に折れた形をなす幅1～1.5cmの布が認められる。鈕孔を通っているかに見られ、鈕紐が遺存していると考ええる。なお、鈕上面の布の状態は判然としない。布は褐色～明褐色を呈する。

鈕は半球径で径17mm、高さ8mm、鈕孔は幅6mmを測る。鈕の周囲には狭い鈕座がめぐる。内区には4つの乳と獣像4体を配し、その外周に銘帯、櫛歯文帯がめぐる。乳には円形の座が伴い、獣像は2体が向き合う配置である。外区には鋸歯文帯が2帯配され、その外側が斜縁をなす縁となる。

岡山県内の類例として岡山市尾籠山古墳出土鏡（後藤1926）があり、径10.9cmと本鏡よりもわずかに小さいが文様の構成はほぼ同じである。また、管見の範囲で径および文様の構成がほぼ一致するものとして、愛媛県妙見山古墳2号石槨鏡（11.3cm）、岐阜県舟木山24号墳出土鏡（11.3cm）がある。漢鏡7期に編年される上方作系半肉彫獣帯鏡は多くが出現期～前期の古墳から出土することが明らかになっており（岡村1990）、上記の諸例も前期・集成2期ないしその前後に編年される古墳である。

それに対して本例は8期の古墳への副葬であり、長期にわたる伝世を想定するよりも六朝期の踏返鏡の一例と考えるべきであろうか。なお、本鏡と同様に鏡の製作年代と古墳の年代が懸け離れる例として、吉備では宿寺山古墳がある。この古墳は7期に位置付けられるが、出土鏡の1面は後漢の竜虎鏡である。製作時期と副葬時期が大きく異なる資料であり、今後検討が必要である。（宇垣匡雅）

（4）挂甲（図46、図版40－2）

胴丸式挂甲1領である。引合せを正面に置く胴一連・草摺一連の構成で、前胴は左右の豎上3段、後胴は豎上4段、長側は3段、草摺は4段となる。本体は現在、それぞれの小札が錆着し、平面形は前後の辺、左右の辺がほぼ平行な平行四辺形、前面からみた立面形は、前面向かって左側の草摺最下段が大きくせり上がる形状となっている。これは末永雅雄の報告にもあるように（末永1934）、木箱に納められた状態で錆着したためであろう。このような状態にある天狗山古墳出土挂甲を観察した結果、他の挂甲と同様、鉄製の小札を革紐で連結し、これにワタガミや引合緒などの布が付されて形成される構造物であることがわかった。この挂甲を構成する小札、綴の方法、威の方法、各段の構成、その他の構成要素については、第Ⅲ部第1章の考察で詳述する。（野崎貴博）

（5）籠手（図47、図版40－3）

左右一対からなる鉄製の筒状籠手である。籠手の先端には小札を綴じ合わせた手甲が残存しており、筒状籠手全体の構造を明らかにすることができる好資料といえる。1は手甲を含めた全長で32.2cmを測る。2は同じく32.9cmを測る。半筒状に打ち出した2枚の板から構成され、筒上部位は左右とも28cmほどを測る。側面は手の構造にあわせて緩い弧を描くように打ち出されており最大高で8.9cmを測る。外筒は内筒に対して大きく、2では28cmを測る。外筒は上部で山形に切り出されているが、装着時にはこの部位が肘当てになる。一方で、内筒は14cmとほぼ外筒の半分の大きさである。外筒とは逆に上部が弧状に切り出されている。端部は外筒、内筒とも革を二つに折り合わせ、それを用いて挟み込まれ、これを覆輪としている。覆輪は1で最大幅0.9cm、2で最大幅1.0cmほどになる。外筒、内筒とも、外側に四角い形状の鉄器の剥離

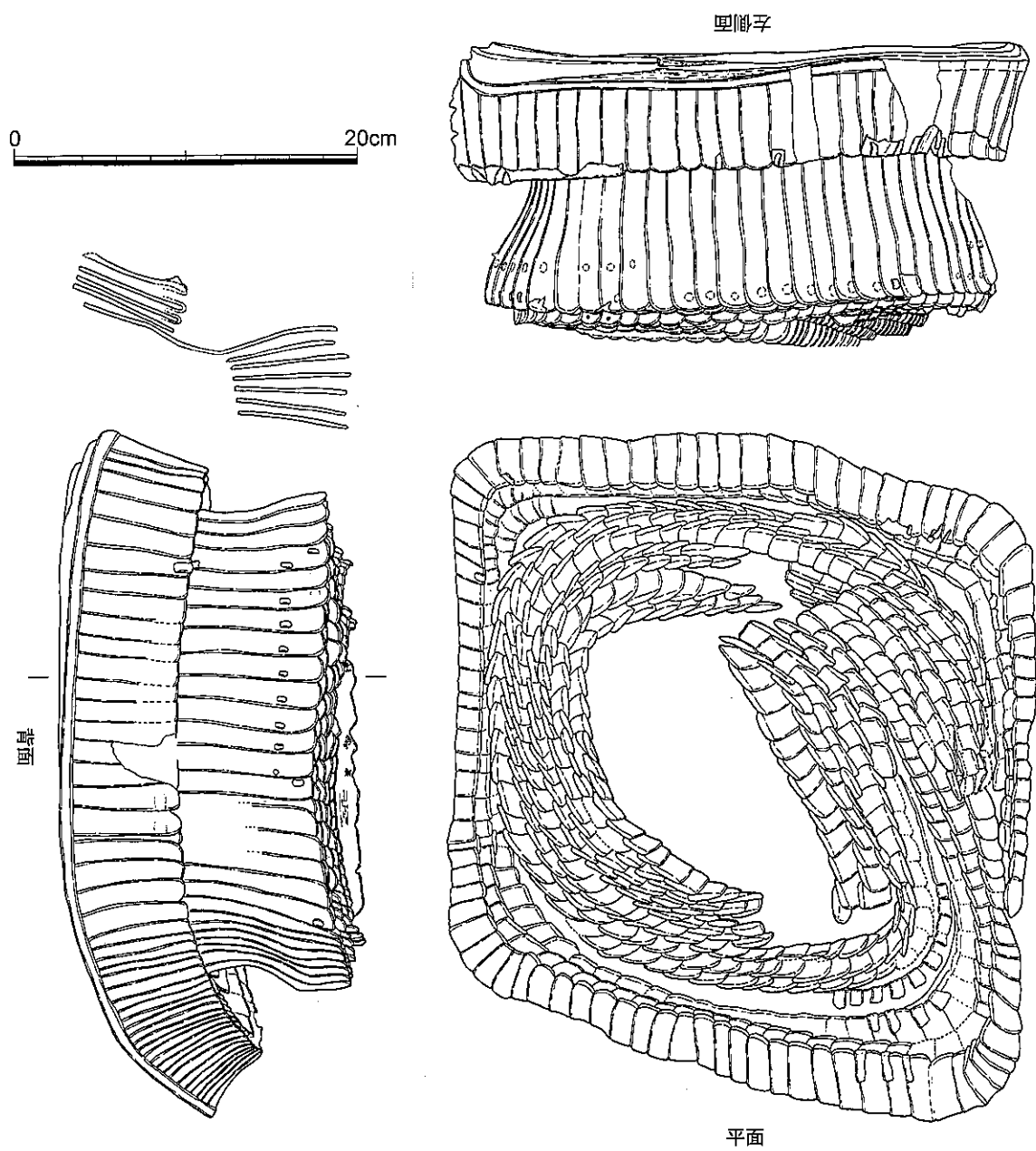
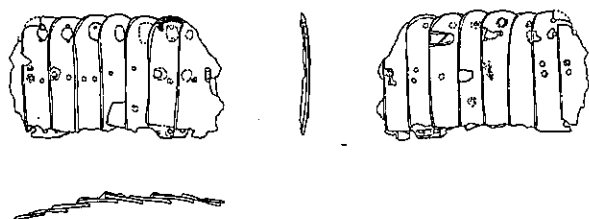
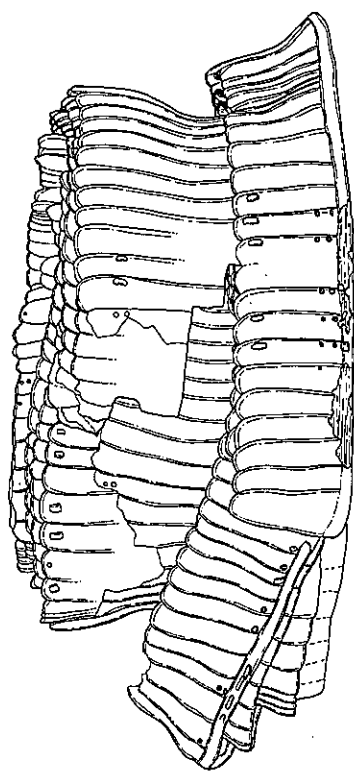


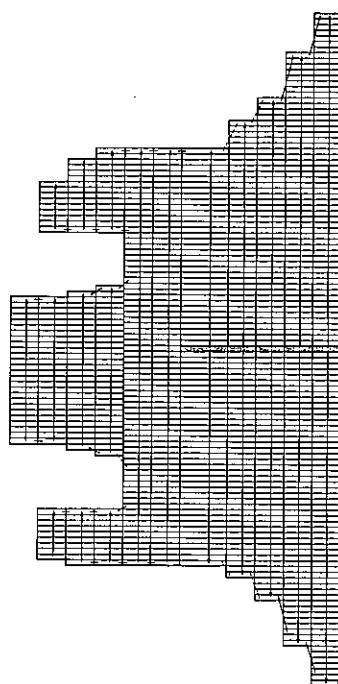
图46 挂甲



右前豎上



正面



展開模式図

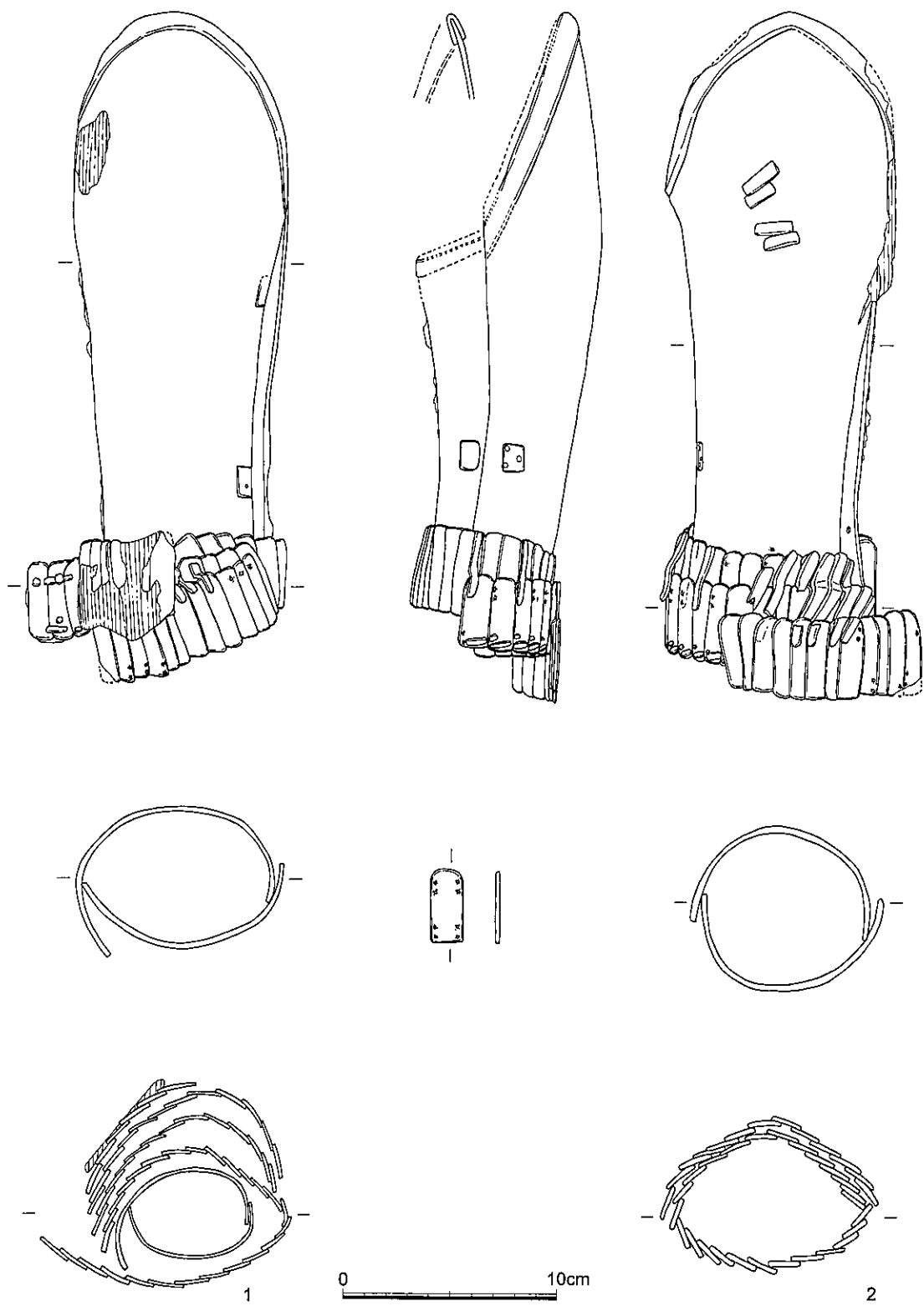


図47 籠手

痕が観察できる。鉄鋌の痕跡が残ることに加えて、その位置関係から考えて蝶番が付けられていたと考える。

手甲は小札15～18枚を4段に重ねて拵えられている。小札は上部を山形に切り出し、それぞれ緘革を用いて横、ならびに縦方向に綴じられる。縦方向の緘革は筒籠手の先端に穿孔された直径5mm程度の小孔に通され、籠手本体と手甲を連結している。緘革の保存状況はよいとは言えず、連結方式を厳密に明らかにすることはできなかった。

末永雅雄は『日本上代の甲冑』で、この籠手が「木製の箱に収めて、最も身体に近く古墳中央部に副葬してあった。」(末永1934)と述べている。箱に収められていたことは、表面に木質が残ることからも肯定できる。また、「籠手の中に二本の鹿角柄小刀子を挿入していた」(末永1934)としており、副葬習俗を考える上で注目できる。(和田 剛)

(6) 馬具 (図48・49、図版40-4～41-3)

今回実測したものは、f字形鏡板付轡と、杏葉3点と、鉸具2点と、不明有機質製品片である。まず、今回実測したものから紹介する。

f字形鏡板付轡 (図48、図版40-4) 二連式のf字形鏡板付轡である。まず、残存状態がよくないが、一条線引手と直線の銜は鏡板の表側で遊環により連結されている。銜は図面復元すると約9cmで、引手は13.2cmである。引手は別造りの引手壺が存在した可能性が高い。鏡板はf字形として2.5mmの鉄板に0.7～0.8mmの金銅板を被せて地板を作った後、また鉄地金銅板を周縁部のみににおいて鋌で固定している。さらに、本来は一つの個体として二つの鏡板が存在したが、片方の鏡板のみに図面復元ができる。

杏葉 (図49-1～3、図版40-5) 剣菱形杏葉が鉤金具を伴って3点出土している。杏葉は剣菱形として2.0mmの鉄板に0.7～0.8mmの金銅板を被せて地板を作った後、また鉄地金銅板を周縁部のみににおいて鉄地金銅の鋌13個で固定している。杏葉自体は15.2cmの前後であり、鉤金具も合わせたそれぞれの全長は17.5cm、16.9cm、16.4cmである。全体に錆化が著しく、一部に欠損部がある。また、表面には布痕がみえるものがある。

鉸具 (図49-4・5、図版41-3右端) すべて鉄製で5点報告されている。まず、今回実測した2点のうち、一つは鞍金具で脚が欠損しているが、座金具は0.5×0.6～0.7cmの隅丸長方形である。もう一つは、T字形の刺金が付いており、この刺金の軸は幅0.4～0.6cmの鉄板の一部を表側から裏側へ曲げて固定している。

その他 以上のほか、今回は実測ができなかったものとして、木心輪鍔片 (図版41-1)、雲珠 (図版41-2)、鉸具3点 (図版41-3、中・左端) および不明有機質製品編など、馬具の部品がいくつかある。木心輪鍔片とみられるのは、柄と輪の接合部に張ったと思われる逆T字形の鉄板片である。裏側には1本の木をたも状に彎曲させ、その両端部を寄せ合わせて軸部とし、接合部の股のところに別の当て木を挿入した痕跡が残っている。雲珠は、中央部分は鉄棒で環状になり、径6cmほどの円環に脚部が放射状につく環状形雲珠であり、現在は2個の脚部が残存している。脚部は断面0.5cm程度のものを中央の鉄棒にかけて折り返し、それを輪で固定している。鉸具は、今回実測したもの以外に、鞍金具1点と、鉸具2点がある。鞍金具は、断面0.5cm程度の鉄棒を曲げてT字形の刺金を差し込んでいる。座金具は栗の実形を呈している。その他の2点はT字形の刺金が付いており、この刺金の軸は幅0.4～0.6cmの鉄板の一部を表側から裏側へ曲げて固定している。

不明有機質製品片は、全体的に革製で、表側と裏側の一部に布が付いている。革の表面は黒褐色で、断面は赤褐色である。雲珠関係のものとして考えられるが、用途は不明である。(張允禎)

(7) 胡録金具 (図50・図版41-4)

胡録金具とこれに関連すると考えられる資料としては、1～4に図示した資料が遺存している。今回図示した以外に、金銅製U字形方立飾金具、金銅製勾玉形飾金具、金銅製コ字形飾金具の出土を伝えるが(末

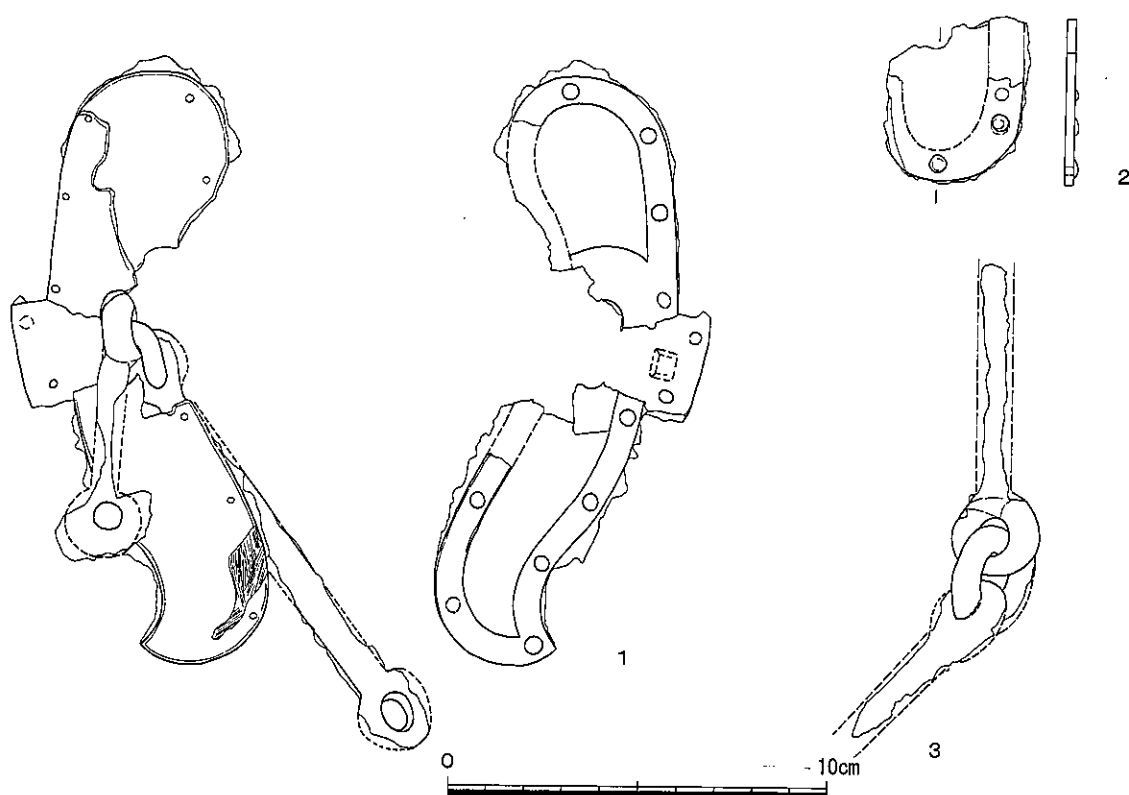


図48 馬具 (1)

永1944、村井1972)、これらは所在不明となっている。また、ここでは両頭金具についても合わせて報告する。

1は全長19.8cm、最大幅2.5cmを測る吊手金具である。金具の中央に左右から山形に4箇所のかぎを入れ、直径2.6cmの円形を作る。表面には現状で7つの鉄釘を確認できる。吊手金具の上部には鉸具が装着されている。これは鉄棒を曲げて長軸3.5cm、短軸3.0cmほどのコ字形とし、その下端にT字形の鉤を取り付けた構造となっている。

2・3は口縁金具とみられる。その形態から考えて、胡録本体の左右側面に取り付けられていたものと考えられる。幅1.0cmの鉄板を折り曲げたもので、頭頂径0.7cmの鉄釘3本を用いて胡録本体と接合されていたものと推測される。また、残存する木質の繊維方向からみて、胡録本体は板材を縦方向に組み合わせた構造であったことが窺える。

5は両頭金具である。その構造は、直径0.6cm、長さ2.7cmの鉄筒の左右から最大厚0.8cmを測るドーナツ状の鉄板を装着し、頭頂径0.8cmの鉄釘を用いて固定している。(和田 剛)

(8) 鉄刀・鉄剣 (図51・図版41-5・6)

鉄刀1 (鹿角装鞘口付き、図51-3) 全長97.5cm以上、茎長13cm以上、刃部長約84.5cm、刃部幅3.5cm、棟幅0.7~0.8cmである。切先のわずかと茎端部を欠損している。関は片関で、斜めにカーブを描いて造り出されている。茎部はわずかに内反しながら細くなっていく。茎尻の形態は不明であるが、その他の様子から撫角片関細茎(臼杵1984)と考える。また、茎部の関に近いところに0.5cm大の目釘穴が1つあけられている。他にも目釘穴があけられていたのかは、欠損により判然としない。

装具では、鹿角装鞘口が残っていた。欠損が激しく背部にあたる部分で両端が残っており、これによって鞘口の幅と刻まれた文様を知ることができた。幅は2.7cmであり、上3本、下2本の線刻の間に直弧文が

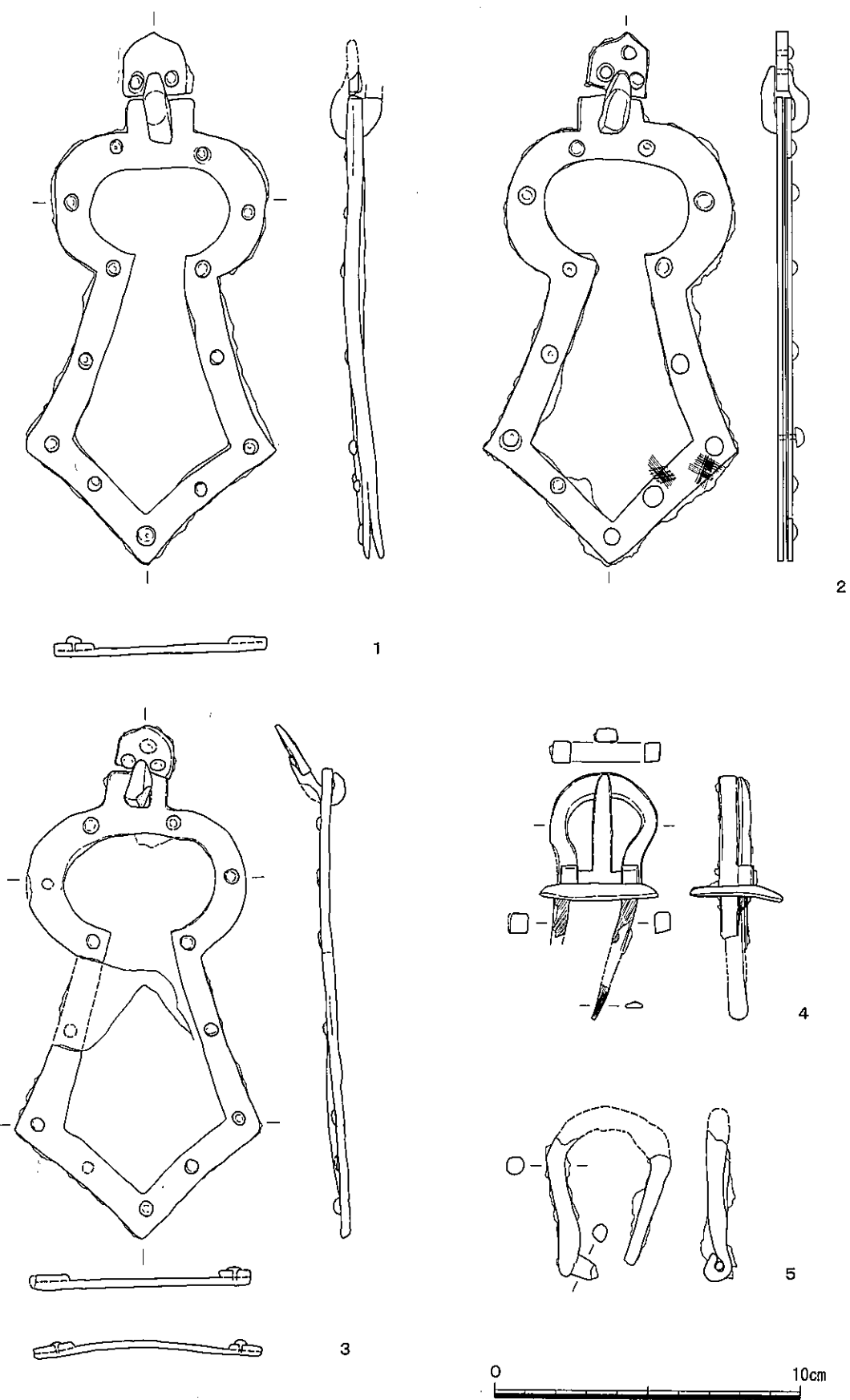


图49 马具 (2)

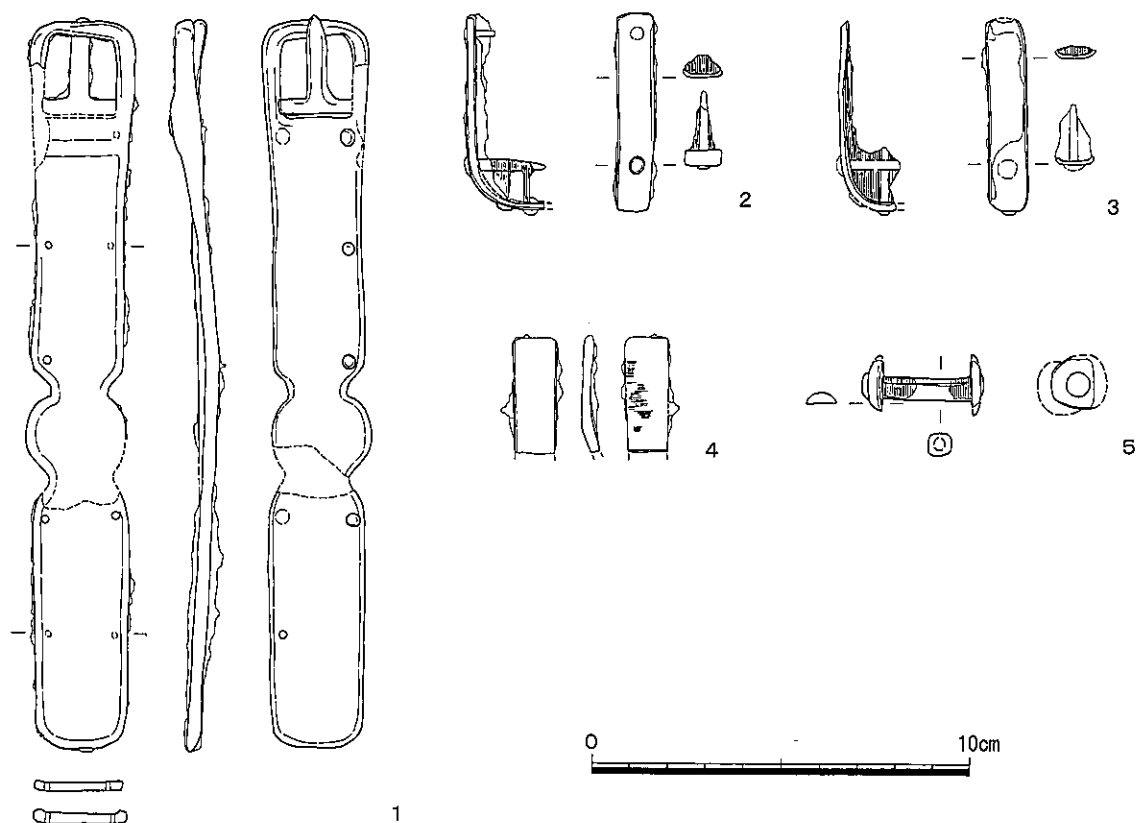


図50 胡鑠金具ほか

刻まれている。直弧文は、半截していない連接表現であったと思われるが、その大半を欠損しており一部を知ることができるのみである。残存しているのは、X字状の斜交軸交点を中心とした表現である。詳しくみると、斜交軸交点に向かって外側から入って来て渦状にめぐる簡略化された帯表現と、その外側から中心に向かってほぼ直交するように入ってくる帯表現が認められる。

刀身部両面には、断片的ではあるが全体にわたって鞘のものと思われる木質が、茎部両面には柄木のものであると思われる木質が付着している。また茎背部のほぼ全体と胴部片面には幅2mm前後の糸が付着している。特に背部での残存状況が良好であり、茎に直接、隙間なく丁寧に巻き付けてある様子が観察できる。現状では、この巻き付けられた糸と柄木と思われる木質の前後関係を確認することができない。しかし、柄木を装着する前にこの糸を巻き付けたと考えるのが妥当であろう。

また、同一個体と思われる茎部の破片が出土している。長さは約9cmで、後世の修復による接合がなされている。他の鉄刀、剣の茎には糸が巻かれていないことから、この鉄刀に伴う破片で、茎尻に近い部分になる可能性が考えられる。

鉄刀2（図51-2） 全長89.3cm以上、茎長15.3cm以上、刃部長約75.5cm、刃部幅約2.9cm、棟幅0.7～0.8cmである。切先をわずかと茎尻を欠損している。関は鉄刀1同様に片関で、斜めにカーブを描いて造り出されている。茎尻の形態は不明であるが、その他の様子から撫角片関細茎（臼杵1984）と考える。また、茎部には目釘穴が2つ開けられている。茎尻近くを開けられている目釘穴は錆によってつぶれており、X線写真によって確認できた。この結果、目釘穴は0.5cm大であることがわかった。

装具は、刀身部両面に付着している木質によって鞘に納められていたことがわかるのみである。また、刀身部の片面には粘土が付着している。鞘と考えられる木質の上にも付着していることから、この面を下にして床面に直接副葬していたと考える。

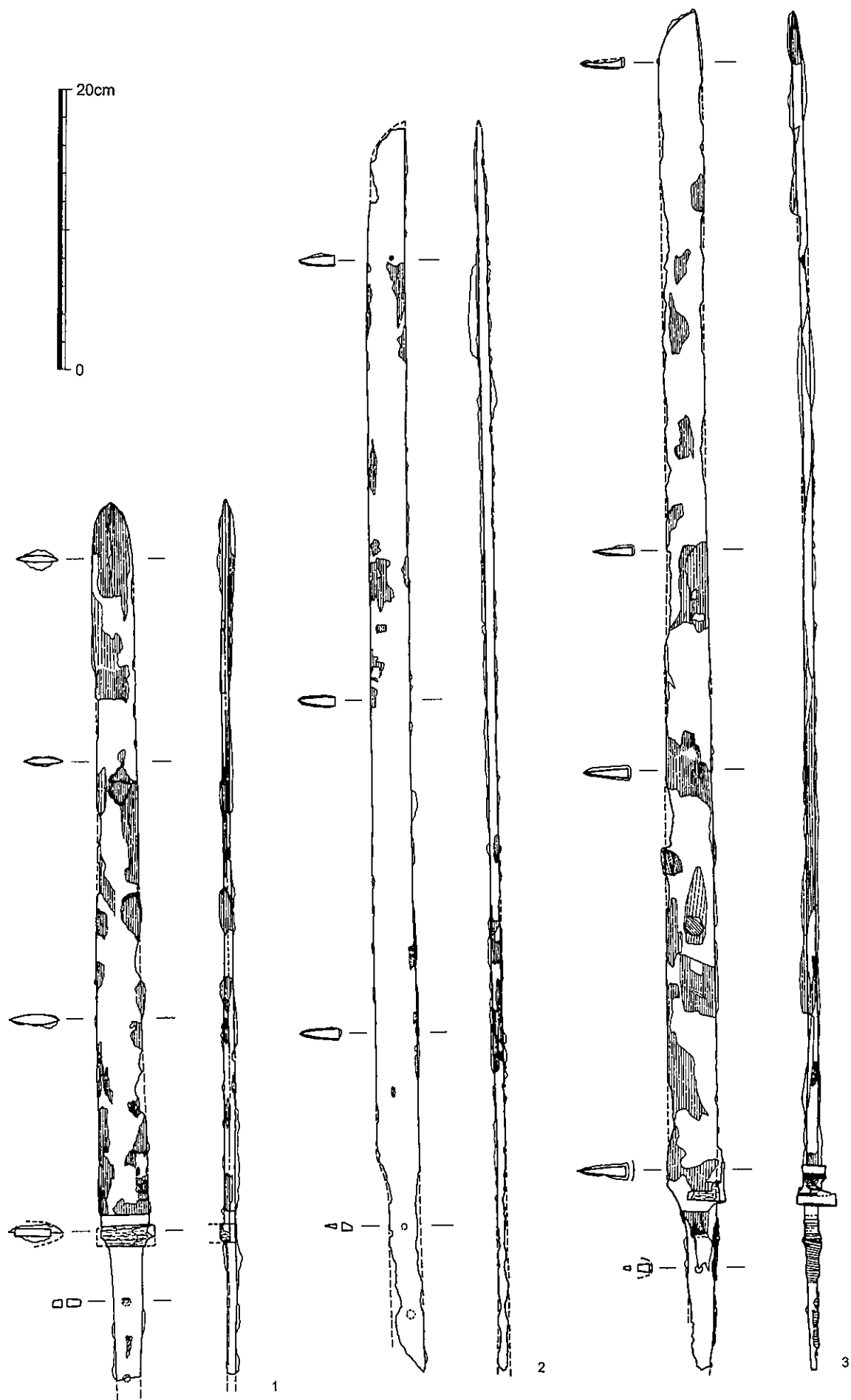


图51 刀·劍

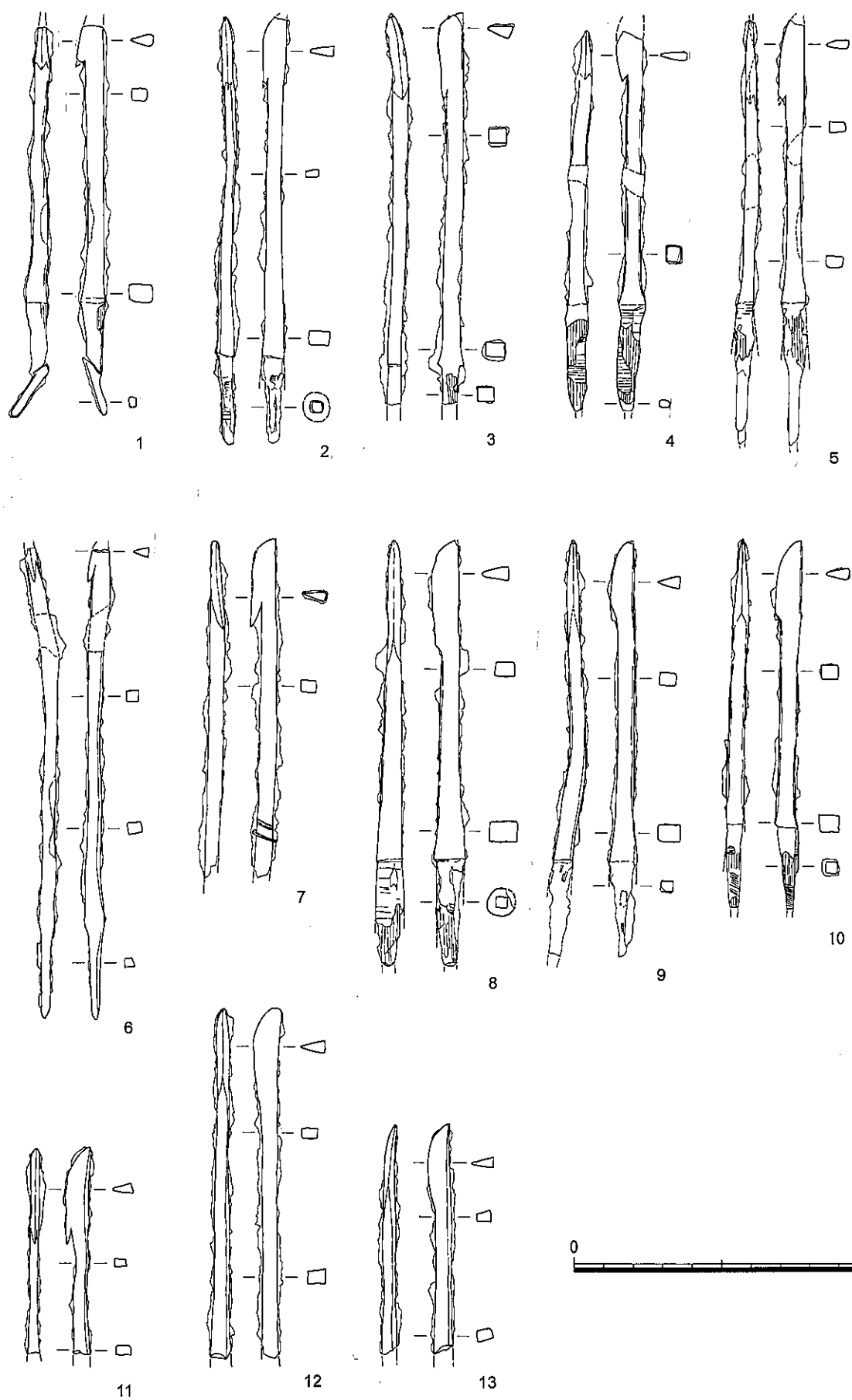


图52 鉄鏃 (1)

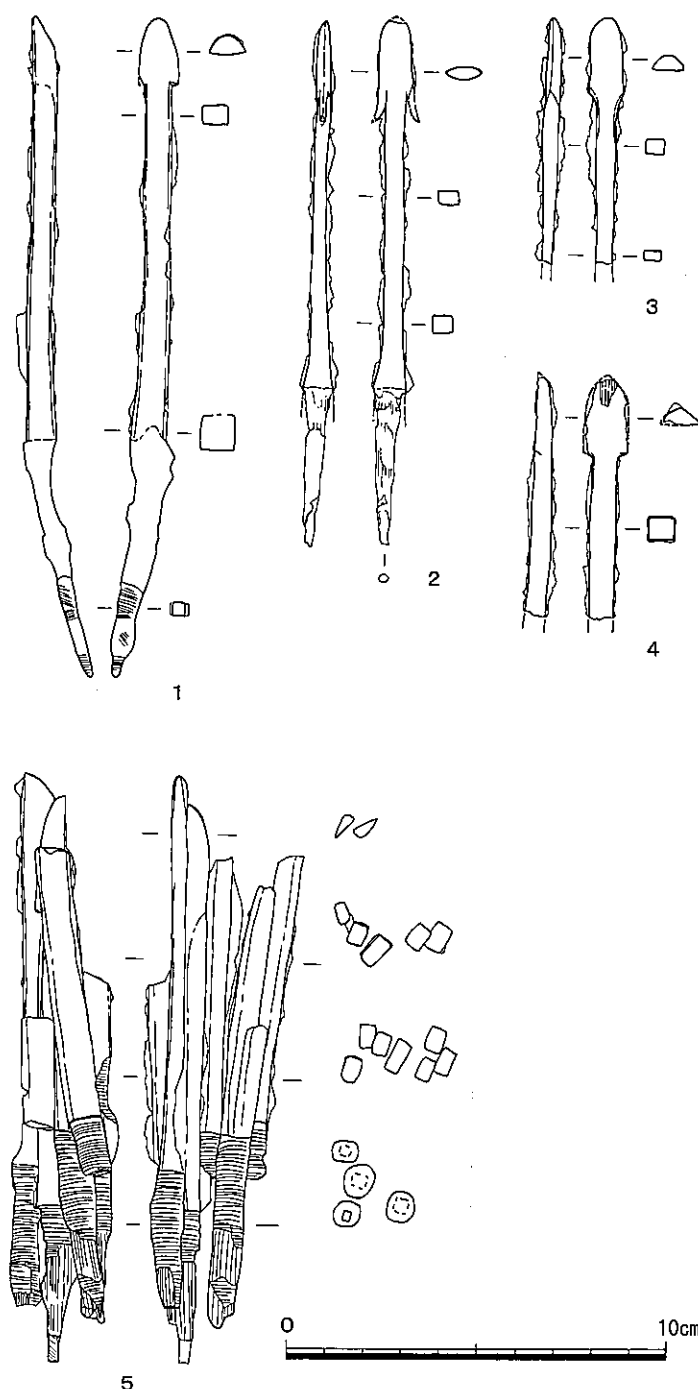


図53 鉄鏃 (2)

寸法は、完形もしくはそれに近い例で確認しうる限りでは、もっとも長いもので全長15cm程度、短いもので14cm程度を測る。刀子形・柳葉形ともに鏃身部の長さ、平面形、断面形、刃関の形などが多様である。

刀子形のタイプは、鏃身部と頸部との境界、すなわち鏃身関部の形状により、A) 刃縁が先端から緩い弧を描いてその終止点から頸部が始まるもの (図52-9・12・13)、B) 弧の途中で明確な角を作って頸部への屈曲点をなすもの (同8・10)、C) 逆刺 (腸挟) をもつもの (同1~7・11)、という3つほどに大きく分かれる。B) やC) には、鏃身部の最大幅部位が中位から先端近くにくいて、いわゆる「ふくら」をなすもの (同2・3・4・7・8・11) と、鏃身関部に近い下方にくるもの (同1・5・6・10) とがある。刃部の長さも、2cm未満の短いもの (同1・6) から3.5cmほどの長いもの (同3・8) まで、幅がある。

鉄剣3 (図51-1) 全長63cm以上、茎長11cm以上、刃部長52cm、刃部最大幅3.5cm、厚さ0.8cmで刃部の断面はレンズ形を呈し、明確な稜はない。茎部には、約0.4cm大の目釘穴が2つあけられている。茎尻に近い方の目釘穴から茎尻にかけて欠損している。また、茎部には柄木と思われる木質が付着している。関は直角関である。

装具は、鹿角製の鐙が残っている。ちょうど片面にあたる半分が残っており、長さ1.5cm、幅約4.1cm、厚さ1.4cm以上の大きさであったことが推定できる。表面は剥落しており、文様の有無を知ることができない。しかし素材が鹿角であることから考えて、鉄刀1の鹿角装鞘口と同様に直弧文が線刻されていた可能性が考えられる。また、刃部には鞘と考えられる木質が付着している。切っ先付近の木質は残りがよく、0.8cm以上の厚さをもつ鞘であったことがわかる。また鞘口にあたる部分では、長さ0.9cmにわたって木質がまったく付着しておらず、鞘口金具があったと考えられる。この部分の身自体の依存状況が良好であることから考えて、乱掘時に本来ここにあったはずの鞘口金具が鹿角製鐙の片面とともに欠失してしまったものと考えられる。

また、鐙が欠失した面には鉄刀2と同様に粘土が付着している。この面を下にして床面に直接置いたと推定できる。 (大熊美穂)

(9) 鉄鏃 (図52・53、図版42-1・2)

平根系の短茎腸挟付三角形鉄鏃が2本あるほかは、いずれも細根系の長頸式である。

細根系鉄鏃 (図版42-1) 鏃身部の残存数から、少なくとも100本はあったものとみられる。刃部の形は、片刃の刀子形と両刃の柳葉形とに分かれ、前者が8割以上を占める。

柳葉形のタイプは少ないが、これも鏃身関部の形状により、A) 屈曲点を作って頸部に向かうもの(図53-3)、B) 直角に折れて明確な鏃身関部をなすもの(同1・4)、C) 逆刺をもつもの(同2)、の3者に分ける。鏃身部の断面は、いわゆる片丸造と両丸造のものが混在するが、以上の鏃身関部の形状との相関ははっきりしない。

頸部は、いずれのタイプも断面が長方形で、茎部との境をなす関部に向かって下端部が幅と厚みを増す。上位のもっとも細いところでも幅7mm・厚さ5mmを測る重厚なもの(図52-3)から、幅4mm・厚さ3mm程度の華奢なものまである。茎部との境は、多くが矢柄の木質に包まれているので明瞭に観察できる例が少ないが、明確な段をなすものと、茎部に向かって徐々にすぼまるものとが存在するようである。刃部やつぎに述べる茎部が長いものは頸部が短く、短いものは長いという傾向が認められる。

茎部の断面は長方形であるが、ごく先端近くは円味を帯びる場合が普通である。茎部の長さも多様で、3cmほどの短いものから、7cmに近い長いものまである。

細根系鉄鏃は、このように、全長は14~15cmにほぼ揃っているいっぽうで、鏃身部・頸部・茎部の長短がさまざまである。すなわち、鏃身・頸・茎という3部分のプロポーシオンに表れた全体形状が多様といえる。さらに、さきに述べた鏃身部形状のヴァリエティや頸部の太さのばらつきも含めると、本古墳の細根系鉄鏃は、あまり斉一性の高くない一群をなしているといえることができる。

ただし、全体としてみると、比較的厚で鏃身関部が明瞭なものが主体をなす点で、尾上元規の編年(1993)のⅠ期に位置づけられる。尾上によれば、Ⅰ期の開始は須恵器出現前後に、Ⅱ期との境はMT15段階に求められるので、本古墳の年代にかかわる他の要素とのあいだに矛盾はない。

平根系鉄鏃 短茎腸挟付三角形鉄鏃2本がある(図版42-2)。すでに村井氏報文と『岡山市史』に図が掲載されている。村井氏報文では2本が別型式に属するように記述されているのに対し、『岡山市史』では同型式に復元されている。今回調査時の観察による限りでは、『岡山市史』の見解が妥当で、ほぼ同形同大の一組であったと考えられる。ほぼ完形を保つ1本は、現存長4.8cm・幅4.75cmを測る。なお、『岡山市史』には、天狗山古墳出土資料として、ほかに有茎腸挟付三角形鉄鏃と柳葉形鉄鏃各1本の図が掲載されているが、これらに関する記述は村井氏報文にはなく、今回の調査でも一括資料のなかに見当たらなかった。

(松木武彦)

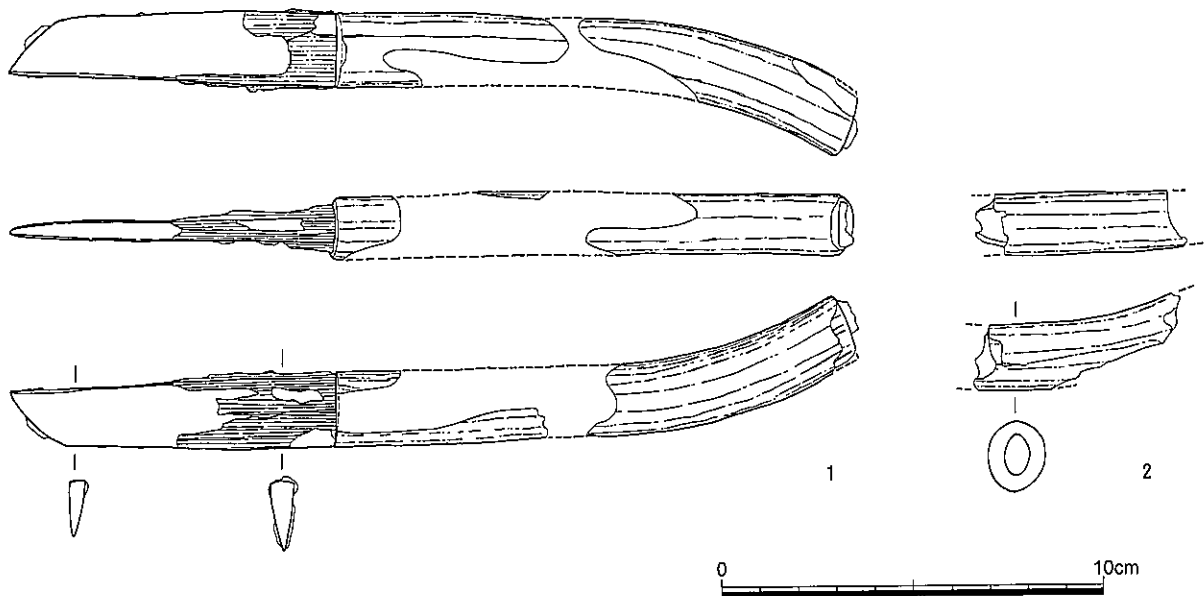


図54 鹿角装刀子

(10) 鹿角装刀子 (図54、図版42-3)

鹿角装刀子は石室内部より出土したと伝えられている。1は復元1個体、2は鹿角製刀子柄片である。末永雅雄は『日本上代の甲冑』に一節をもうけて天狗山古墳の副葬品配置について触れその様子を甲冑出土図として示している。「(前略)前方の東壁には一口の直刀を、(遺体の：筆者註)右側には大小の刀各一を配置し、その間に鹿角装刀子を副え、(後略)」(末永1934)とある。また「而して最も特殊な事柄は、籠手の中に二本の鹿角柄小刀子を挿入していた」としている。出土図とあわせて検討すれば、遺体の腰部下位付近に他の鉄剣や鉄刀の間に1個体がおかれ、加えて籠手の内部に挿入される形で2個体、先ほどの1個体と合わせて計3個体の鹿角装刀子が副葬されていたものとみられる。

2の柄片は湾曲部位にあたり、1の同部位がほぼ完存している。また村井氏と西川氏は天狗山古墳出土資料として2個体の鹿角装刀子を報告しており(村井1966、西川1986)、1・2の二つはそれぞれ別個体であろう。出土状況から3個体の鹿角装刀子が副葬されていたと推察されたが、残りの1個体の所在は不明である。

1は全長で22.4cmを測り、柄は一部破損しているものの、刃部を含めてほぼ完形に復元可能である。刃部は最大長で8.5cmを測り、最大幅は1.8cm、最大厚0.6cmとなる。関部の形態はわからないが、この個体は形態から紹介された2資料(西川1986)のうち刃部の短い方の資料に当たると考えられ、この推測が正しいとすれば、両関で茎の長さは4.1cmを測るものと思われる。その場合刃部と茎を合わせた刀子全長は12.6cmとなろう。刃部には鞘木の残痕と考えられる木質が残存している。残存状況から鞘木は2枚の板を組み合わせる構造のものだったことがわかる。柄は長さ13.9cmを測る。断面楕円形で、短径1.7cm、長径で2.0cmを測る。刃部からの見通しで1.9cm湾曲している。表面は平滑で鋭利な工具により加工されたと考えられる。削痕は観察できない。

2は鹿角装刀子の柄片である。残存長で5.3cmを測る。短径1.6cm、直径で2.0cmのほぼ断面円形で、見通しで1.0cm湾曲している。この資料がこれまでの報告資料のうち、刃部がより長い資料の柄片である可能性がある。1と同じく表面は平滑で鋭利な工具による加工が施されたと考えられるが、削痕は観察できない。

奈良県北葛城郡新庄町寺口忍海古墳群D-27号墳では大小2振りの鹿角装刀子が見つかった。小形のものは全長9.1cm、大型のものは残存長20.5cmを測る。天狗山古墳例はこの中間の大きさである。またこの古墳からは剣、矛、馬具、鉄鏃などの豊富な鉄器類が出土しており、天狗山古墳と共通する。鹿角装刀子を副葬する古墳の被葬者像を考えていく上で興味深い。(和田 剛)

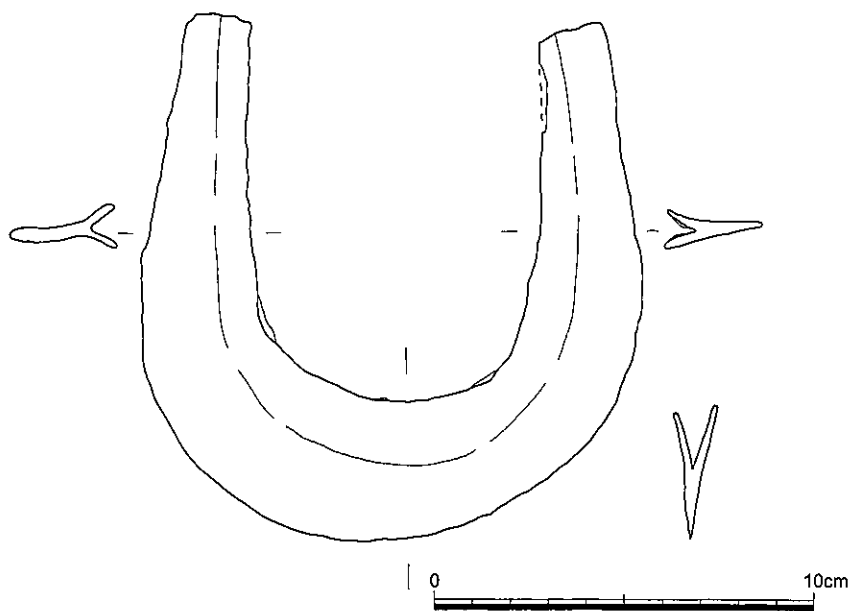


図55 U字型鋤先

(11) U字形鋤先 (図55、図版42-4)

全体の長さが13.8cm、幅が13.0cmを計る比較的大形のU字形鋤先である。体部は整ったU字形を描き、両上端部は内側に向かってやや絞られるような雰囲気をもつ。幅は、もっとも狭

い上端部で2.5cm、刃部端近くでは約4cm にまで広がる。断面は、内側に着柄のための切れ込みを作り出した Y 字形で、この切れ込みは刃部端が深く、両上端部に近づくほど浅くなる。修復のあとがあるが、残存状況は良い。
(松木武彦)

(12) 鏃 (図56、図版42-5)

鏃は、すべて戦前に乱掘された時に石室内から出土したもので、出土位置は不明である。ほぼ完形に近いもの16点、ビニル袋2袋に入った破片や小片を含めると全部で20点以上あるものと考えられ、そのうち図化できたのは8点である (図56)。長辺が約18cm 前後の長いタイプ (1~3) と、約9cm 前後の短いタイプ (6~8) に分かれる。まず短いタイプから紹介すると、6は、短辺が片方欠損しているが、長辺で9.5cm、短辺で4.0cm、幅は1.1cm、厚さは0.6cm である。7は、短辺の一部が欠損しているが、長辺で8.6cm、短辺で3.5cm、幅は0.9cm、厚さは0.5cm である。8は、6・7より若干短く、長辺で4.2cm、短辺で3.4cm、幅は1.1cm、厚さは0.5cm である。屈曲が緩く短辺の片方は欠損しているため、本来の長さは不明である。4・5は、同一個体で接合する可能性があるが、現状では不確定である。短辺も欠損しており、接合するとす

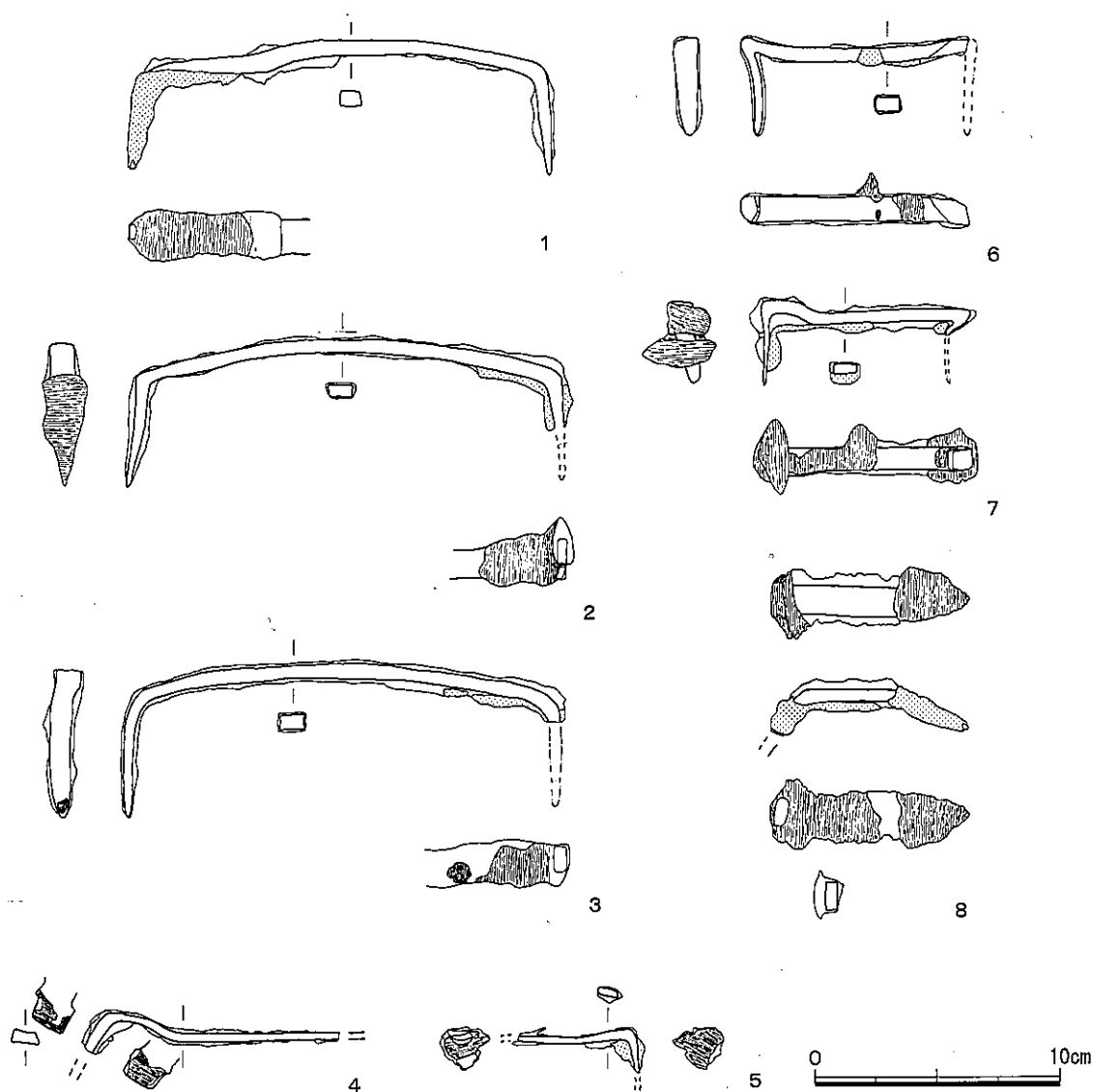


図56 鏃

れば長辺は約15.0cmに復元でき、幅は1.0cm、厚さ0.4cmである。長いタイプの1～3は、短辺の一部が欠損するものもあるが(2・3)、ほぼ完形に近い。1は、長辺で18.4cm、短辺で5.5cm、幅は1.0cm、厚さは0.7cmである。2は、長辺で16.4cm、短辺で4.2cm、幅は1.1cm、厚さは0.6cmである。3は、長辺で17.6cm、短辺で4.5cm、幅は1.0cm、厚さは0.6cmである。

図化できた全ての鏝に木質の付着がみられ、木目は鏝の長軸に垂直に交わる方向に入っている。

(寺村裕史)

参考文献

岡村秀典1990「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』木耳社

尾上元規1993「古墳時代鉄鏝の地域性－長頸式鉄鏝出現以降の西日本について－」『考古学研究』第40巻第1号

後藤守一1926『漢式鏡』雄山閣

末永雅雄1934『日本上代の甲冑』本文篇、岡書院

西川 宏1986「天狗山古墳」『岡山県史』第18巻、考古資料、岡山県

埋蔵文化財研究会編1994『倭人と鏡 その2』第36回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料

村井崑雄1966「岡山県天狗山古墳の遺物」『MUSEUM』250号

注

本章で報告した資料のうち鉄刀と鹿角装刀子については、脱稿後、所蔵元の東京国立博物館により、精細な図と写真による報告がなされたので参照されたい。

東京国立博物館編2013『東京国立博物館所蔵骨角器集成2 鹿角装刀剣装具篇』同成社

Ⅲ 考 察

1. 天狗山古墳出土挂甲の復原

野崎 貴博

はじめに

古墳に埋納される挂甲は、鉄の小札を革紐等で連結するという構造上、出土時には有機質の素材が腐食して小札が離散し、元来の姿をとどめていないものが多数を占める。また、小札同士が錆着し、詳細な観察が困難なものもある。そのような資料的特性をもつ挂甲においても、小札の形状、綴や威等の結合手法については、のこされた断片的な小札の資料から復原することも可能であるが、挂甲の全形をうかがいしることができる資料となると全国でも数例しか存在しない。天狗山古墳出土挂甲は全形を復原できる数少ない出土例の一つである。

本章では、天狗山古墳出土挂甲を構成する小札、綴の方法、威の方法、各段の構成、その他の構成要素について順にみていくことにしよう。

1. 小札

挂甲を構成する小札は、湾曲や孔の位置・孔数によって分類が可能であり、4種類の小札を確認した(図57)。これらを平札a、平札b、腰札、裾札と呼称することとする。

1) 小札の形状 小札の形状はいずれも円頭の長方形で、下端は直線的に裁ち切る。湾曲の有無について、腰札・裾札は中央部が内湾し、平札a・bは内湾しない。綴孔・威孔が穿たれる位置について、平札aは綴孔・威孔が左右の辺と中央の3列構成をとり、平札b・裾札は綴孔が左右の辺の2列構成となる。腰札のみ湾曲部より上位の孔が3列構成、下位の孔が2列構成となっている。下裾の孔は本体部分では確認できなかったが、本体から外れた小札片で観察したものでは、小札下部に3孔が穿孔されており、いずれの小札にも

3孔ずつの下裾孔が開けられていたものとみられる。

2) 各種小札の使用部位 縦上から長側第2段までには平札a、長側第3段には腰札、草摺第1～3段に平札b、草摺裾にあたる第4段には裾札を用いている。

3) 小札の重ね 小札の重ねは、縦上右前胴は右上重ね、縦上左前胴は左上重ね、後胴は右上重ねとなる。長側は、第1・2段は縦上後胴と同じく、右上重ねとなるが、腰札が用いられる長側第3段では、中心札の左右から上重ねする。したがって、腰札以下はすべて中心札の両側に上重ねする構造となっている。

4) 小札の枚数 天狗山古墳出土挂甲は、挂甲を構成する各段が収納された状態で錆着しているため、縦上から長側第2段、草摺第1～3

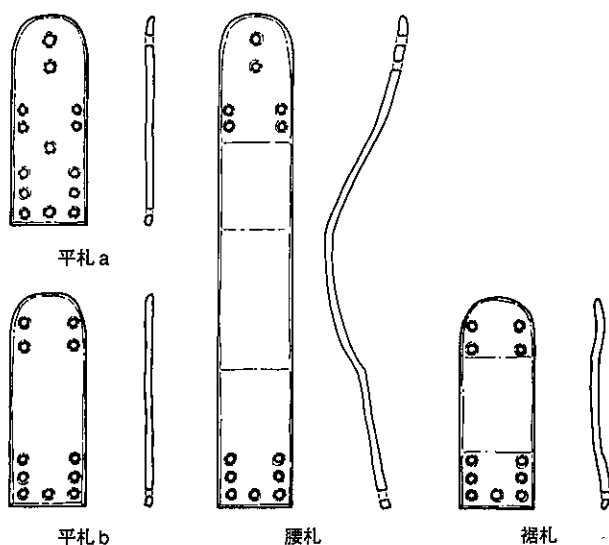


図57 小札の種類

表4 各部位の小札枚数

			後胴壁上	計測数	推定数			
左前胴壁上	計測数	推定数	第1段	26	26	右前胴壁上	計測数	推定数
第1段	9	9+?	第2段	26	26	第1段	脱落 (8)	9+
第2段	10	10	第3段	28	28	第2段	13	13?
第3段	10	10	第4段	30	30	第3段	15	15

長側	計測数	推定数
第1段	73or74	74
第2段	74	74
第3段	71+2 ~ 3	74 (37+1+36)

草摺	計測数	推定数
第1段	80 ~ 82	81 (40+1+40)
第2段	90 枚前後	89 (44+1+44)
第3段	100 枚前後	105 (52+1+52)
第4段	107+10 枚前後	119 (59+1+59)

段は腰札・裾札の内側に隠れている。また、草摺では幅広の威革が銹着しており、第1～3段については、上面から小札の観察も困難な状態であった。しかし、各段の枚数を肉眼と手指による触診によって概数を計測し、各段の枚数は表4にあげた数値の近似値であることを確認した。そこで、この計測値と作成した実測図で小札枚数を確認できた部分を手がかりに、各段の枚数とその構成を不明な部分の多い草摺部分を中心に推定することとしたい。

①草摺

a) 草摺第4段 草摺で最も観察が可能であった。草摺最下段にあたる第4段では、確認された小札枚数109枚、他の段によって隠れる部分の小札枚数は、その長さから推定すると10枚となる。したがって、草摺第4段は合計119枚の小札で構成されているとみられる。草摺第4段には中心札が設けられているが、そこからの重ねをみると、左上重ね59枚、右上重ね46枚+ (α 枚) + 3枚となる。他の段によって隠れる部分の枚数が先の推定のとおりの10枚であるならば、中心札の両側に59枚ずつの小札が重ねられていることとなり、中心札の両側に同数の小札を綴じ合わせた左右対称の構造となる。

b) 草摺第3段 草摺第3段についても同様の方法で観察してみよう。草摺第3段にも中心札があり、草摺第4段の内側に位置していることがわかる。中心札より左側では、25枚+ (α 枚) + 5枚、中心札の右側では、24枚+ (β 枚) + 13枚+ (γ 枚) + 2枚となる。長さから求めた不明部分の枚数は、 $\alpha = 22$ 枚、 $\beta = 3$ 枚、 $\gamma = 10$ 枚となり、中心札1枚を加えた草摺第3段の枚数は105枚となる。これは観察時の計測と大きく矛盾しない。また、この推定の場合、中心札の左右で小札の枚数が等しくなり、草摺第4段と同様、中心札を挟む左右対称構造となる。

c) 草摺第1・2段 草摺第1・2段については確実に記録できた枚数は少ないが、これも観察時の枚数計測と他の段の構造から推測することにしよう。まず、草摺第1・2段にも中心札が確認されるので、第3・4段の成果を鑑みるならば、草摺第1・2段についても中心札の左右で同数の小札が綴じ付けられていることが推測される。今回の観察により、草摺第1段は80～82枚、草摺第2段は90枚前後の小札を用いていることがわかった。この観察時の計測値と中心札の左右に同数の小札が配されることを考慮するならば、草摺第1段は81枚、第2段は89枚となることが推測される。

草摺は第1段から第4段にむかって10～15枚ずつの小札の枚数を増し、裾広がりの構造となる。

②長側

長側は第1・2段には中心札を有さず、腰札を用いる第3段には中心札が認められる。計測の結果、長

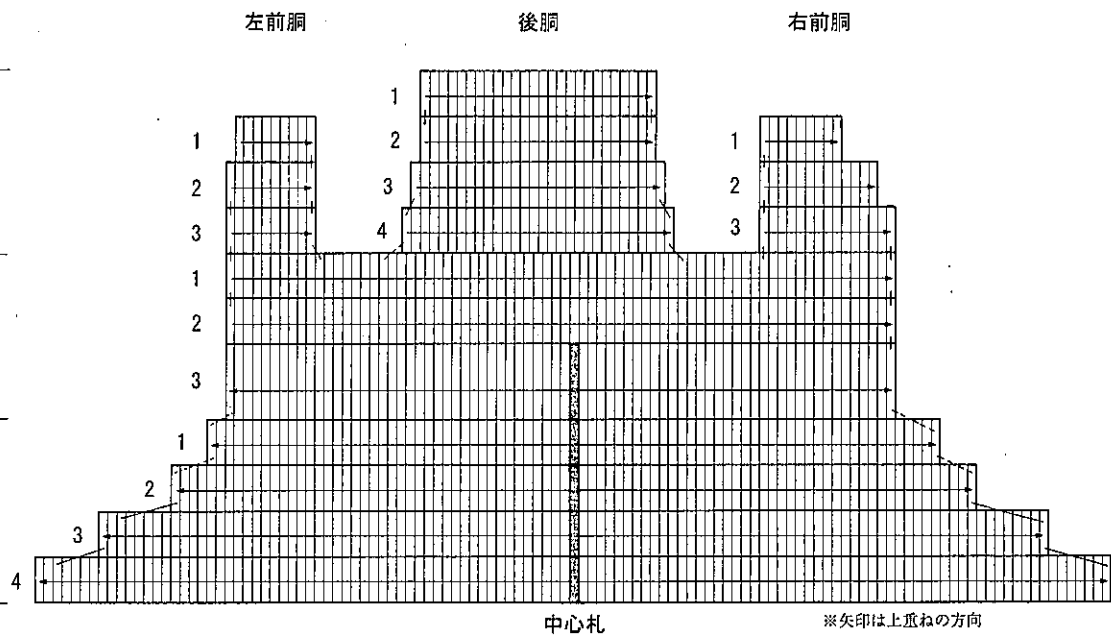
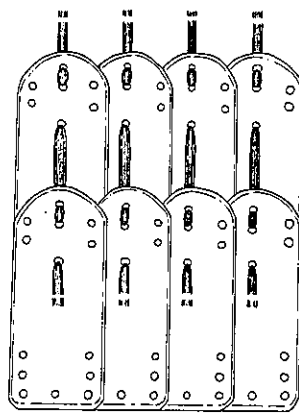
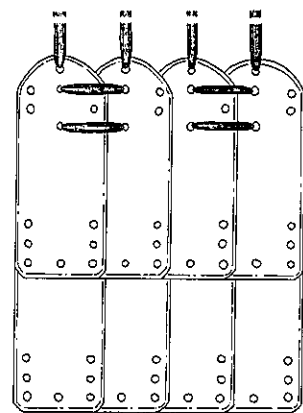
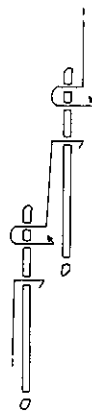


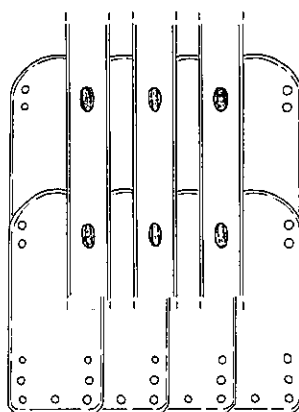
図58 小札の構成



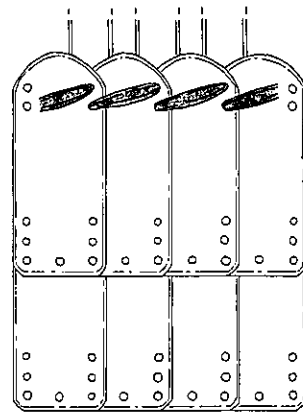
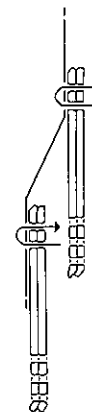
(表)



(喪)



(表)



(裏)

図59 絨

側第1・2段はそれぞれ74枚、第3段は不明部分があるが、その部分の長さを考慮して復原すると74枚となる。

③ 竪上

竪上は左右の前胴、後胴で構成される。それぞれについて各段の枚数を示すことにする。

- a) 左前胴竪上 3段で構成される。第1段は9枚、第2・3段は10枚である。
- b) 右前胴竪上 現状では2段がのこる。第1段は脱落していると考えられる。脱落した第1段は、本体とは別に保管される8枚の小札を綴じ合わせた破片がその候補となる。
- c) 後胴竪上 4段で構成される。第1・2段は26枚、第3段は28枚、第4段は30枚である。
- d) 腕抜き部 左右の竪上前胴の端部が長側の端部に揃うと考えられ、長側49枚分が後胴と左右の腕抜き部分を配するための空間となる。竪上後胴第4段の枚数が30枚であることから、腕を通すための竪上脇部の隙間は19枚分となり、左右の腕抜き部の空間は小札枚数にしてそれぞれ9～10枚分があくことになる。

④ 小札枚数

以上のように復原した場合、小札の復原枚数は793枚となる。実際には右前胴竪上第1段にはさらに数枚の小札が綴じ合わされていた可能性があるので、総数はおよそ800枚程度となるであろう。

2. 威 (図59)

威は腰札を境に上下で異なる。これは上半が3列穿孔の平札a、下半が2列穿孔の平札bを用いて構成されるためである。腰札の穿孔は上下の小札の穿孔に合わせ、3列・2列併用となっており、緘の手法を上下で違わせることを意図したものとなっている。腰札よりも上位は小札の中心に穿孔された緘孔列を使った各段緘 (図59上)、腰札よりも下位では、緘革によって上下の段を結束した綴付緘となっており、綴孔を緘孔と併用している (同下)。

3. 綴 (図60)

綴は上下2段の綴孔を使用したもので、綴紐を各孔に2回通して小札同士を綴じ合わせる。綴紐は小札表面ではすべて立取、小札裏面では鋸歯状となる。

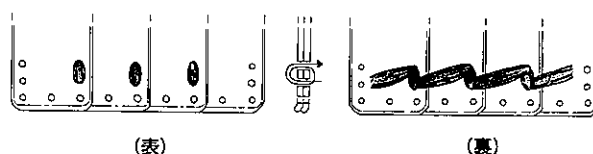


図60 綴

4. 下搦 (図61)

本体部分では下搦を確認することはできなかったが、脱落している小札片では下端の左右と中央に横一列の穿孔があることが確認された。おそらく各段ごとの小札下端部を横方向のらせん状にくくり、連結していたものと考えられる。

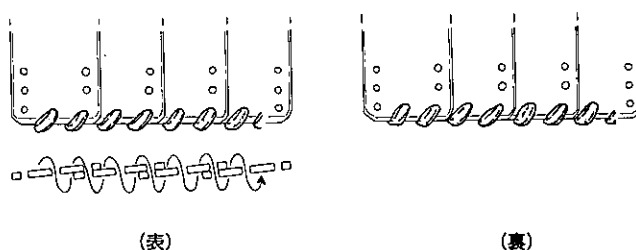


図61 下搦

5. 覆輪 (図62)

覆輪は草摺最下段で確認した。革包覆輪である。小札表面で連続した綴付けを確認している。

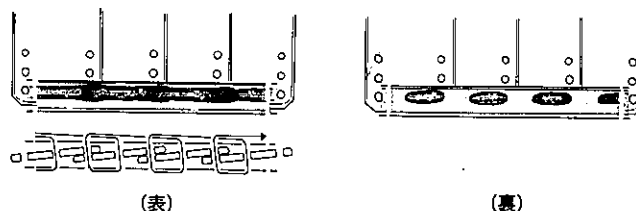


図62 覆輪

6. 引合緒

引合緒の痕跡は、竪上右前胴の内側において引合緒として付けられたと考えられる布を確認した。これは竪上最上段で確認したワタガミの痕跡

とは異なり、紐状に絞った形状のものである。

7. ワタガミ

豎上第1段には布の断片の付着が認められ、ワタガミの痕跡と考えられる。

8. 各段の連結と挂甲の構造

本例は最上段から最下段までがのこされたものであり、挂甲の全体的な構造を把握することができる数少ない出土例の一つである。それぞれの段が上下の段のどの位置で連結されているかを平面での位置関係を考慮しながら、本例の構造を復原することとする。

まず豎上について、後胴の中心が体の背面の中心を通ることが推測される。後胴はいずれも偶数枚で構成されており、後胴の中心が挂甲の背面側の中心となる。前胴は左右で枚数が異なり、腕抜き部の空隙の幅を同数枚とするならば、後胴の中心は長側の中心より左側にずれて位置することになる。

長側と草摺の連結について、草摺のすべての段と長側第3段では中心札が観察された。平面的な位置関係をみると、中心札はほぼ連接した状態であり、これらの段は中心札を軸として各段を連結したものとみられる。したがって、草摺については中心札を対称軸とした左右対称の構造となるが、長側第3段は中心札の左側が37枚、右側が36枚となり、左側の小札枚数が多くなる。

後胴の中心が長側の中心より左側に位置することは先述したが、腰札以下の中心札を軸としてみれば、腰札以上の部位は必然的に左側に寄ることになる。したがって豎上後胴の中心軸と草摺の中心軸にはずれが生じることになる。挂甲を装着した場合、豎上後胴が体の背面の中心となるため、この中心軸を垂下させた場合、相対的に長側以下の中心は右寄りとなり、挂甲の右側の小札枚数が多くなる。豎上前胴の左右でも小札枚数が異なり、右前胴には用いられる小札が多い。これは左右非対称にして各部位を連結し、挂甲の右側に余りを生じさせることを意図したものとみることが可能であろう。胴の前面で左右を引き合わせた際に、右側部分に重ねを生み出す効果を狙ったものと理解したい。

ところで挂甲全体の構造が把握される大阪府長持山古墳出土例は左右対称の構造であり、天狗山古墳例とは異なる。長持山古墳例では腰札に引合緒の金具を2ヶ所に取り付けて、その間を帯状の革で留めるという引合せの方法をとるもの（塚本1997）である。引合せの方法の違いが、挂甲全体の構造の差に反映されているのかもしれない。

参考文献

末永雅雄1934『日本上代の甲冑』

塚本敏夫1997「長持山古墳出土挂甲の研究」『王者の武装』京都大学総合博物館

2. 陶質系土器の系譜

大熊 美穂

はじめに

天狗山古墳の造り出し状遺構の上からは多くの土器が出土している。そして、その土器には須恵器のほかに陶質土器や陶質系土器が含まれ、多様な様相をみせている。なかでも陶質土器は「羅州系土器⁽¹⁾」と呼ばれる(酒井2004a)、韓国全羅南道羅州市周辺で生産された搬入品と考えられるもので、時期は5世紀末頃と考えられる。

この羅州市を含む地域は、貫流する河川名から「栄山江流域」、「栄山江流域圏」と呼ばれ、周辺の百済、新羅、加耶とは異なる文化をもつ複数の集団が存在していたと考えられている。近年の韓国での発掘調査成果等によって、4世紀以降、栄山江流域と倭が密接な関係にあったことが明らかになってきており、この地域の陶質土器製作技術の一部が倭での初期の須恵器生産に影響を与えたこと(酒井2004b)、栄山江流域とその周辺で5世紀後半から6世紀前半頃にかけての前方後円墳や墳周土器(埴輪)、須恵器などの倭系文物が見つかり、相互交流が活発化していたこともわかってきている。これまで4世紀末以降、6世紀前半の日韓交渉が加耶との交流に偏って語られる傾向があったこともあり、この新たな展開に両国の研究者が注目し、また議論がなされているところである。

そのような地域の土器が、政治の中心であった畿内でも、交渉の窓口であった北部九州でもない吉備で出土したことの意義は大きく、また須恵器との共伴によって須恵器編年を韓国の編年とクロスさせることができる資料としても意義は大きいと考える。当時の吉備社会の解明という枠にとどまらず、倭と栄山江流域の交渉の研究や須恵器研究において大変貴重な資料になると考えられる。

その一方で、須恵器とも陶質土器とも判断しがたい土器が出土している。陶質系土器として分類したものである。この土器は、陶質土器はもちろん須恵器よりも焼成があまく、視覚的にも器形的にも非常に違和感を覚えさせる資料である。このような土器が、朝鮮半島と日本列島の陶質の土器に混じって出土したこと、しかも、この時期の古墳出土須恵器にありがちな数点という数ではなく、20点以上と古墳から出土する同器種の一括遺物としては大量な数で、それもすべて陶質土器とも須恵器とも異なった焼成で出土したことは、大変興味深いことである。この判然としない土器の位置づけを検討することは、他の遺跡での類例がない現時点では非常に難しく、誤った評価を与えてしまう可能性すらある。しかし、この判然としない曖昧模糊としたなかに、共伴した須恵器や陶質土器よりもさらに意味深い多くのことを秘めていると考え、あえて現時点で考える範囲内で、この陶質系土器の系譜について検討してみることとした。

遺物報告では「陶質系土器」と呼称しながらも、その具体的根拠を述べないまま論を進めた。陶質系土器の坯身を素材に、ここであらためて陶質系土器として分類する根拠について論じ、その系譜や意義について考えていきたい。

1. 陶質系土器の諸特徴

天狗山古墳出土の陶質系土器の特徴についてはすでに第Ⅱ部第4章(4)の報告(66~70頁)で簡単に触れたが、ここで改めて詳細に説明したい。

以下のような特徴を指摘することができる(図63)。

① 焼成があまく黄灰色を呈する。

須恵器のように焼き締まっていない。1点のみやや色調を異にし(図37-1、カラー図版8-1)、褐色

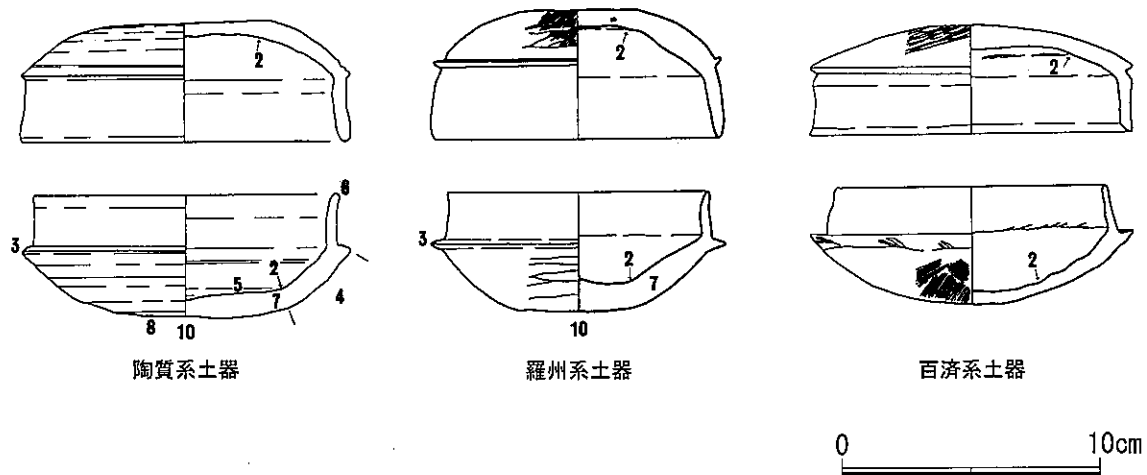


図63 土器の特徴比較
(酒井2004 a をもとに作成)

味をおびるが、それ以外はすべて同じ色調である。1点のみ異なるとはいえ大枠では同系色で、須恵器のような青灰色とはもちろん、陶質土器のような黒灰色とも異なる色調である。

② 円形粘土盤成形技法を用いる

円形粘土盤に粘土紐あるいは粘土帯を積む成形技法が認められる。底部が円盤状に割れている、あるいは粘土接合時のナデのばしの痕跡があることからこの成形技法が確認できる。

③ 受け部が下外方へ下がる

受け部が下外方へ下がるものがほとんどで、下がらないものでも横に水平にのびる。

④ 体部から受け部の先端にいたる部分が直線的である

須恵器に認められる受け部成形の際に粘土をひねり出したような受け部下の屈曲がない。受け部や立ち上がりの成形方法が異なる可能性がある。

⑤ 内面底部と体部の一部までが不定方向のナデによる調整

内面の回転ナデは全面には施されず、範囲の広いもので体部から口唇部まで、狭いもので立ち上がり下から口唇部までで、それ以下には不定方向のナデが施される。

⑥ 口唇部が平坦である

⑦ 体部から受け部にかけて器壁が厚い

全体的に器壁が厚く、体部から受け部にかけて厚くなるものと、底部と変わらず一定の厚みを保っているものがある。

⑧ 底部中心を削らない

すべてのものではないが、大半はケズリ残している。

⑨ 底部が平坦である

I類(70頁参照)の特徴で、大半はケズリ残している。

⑩ 器種がほぼ坏身のみで構成される

坏蓋が1点しかなく、ほかはすべて坏身である。

まず、これらのなかでもっとも重要で、かつ、もっともわかりやすい特徴である焼成と色調について注目したい。ふつう焼成、色調ともに窯の構造や焼成技法、そして使用した粘土によって大きく左右されるため、工人は各窯がもつ特性に合わせて工夫し、あるべき色調や焼成の須恵器、あるいは陶質土器を作りあげていたと考えられる。しかし陶質系土器の場合、この「あるべき姿」からはずれている。したがって、

陶質系土器は、むしろ何らかの問題をもった窯、あるいは焼成技法で焼かれた土器の一群であると理解できよう。つまり、陶質系土器は、1点をのぞくすべてが同一窯で同一時期に焼かれたものであると考えられる。また色調が異なる1点は、異なるとはいえ似た色調であり、少なくとも同一窯で焼かれたものであろう。そうでなければ、ここまでの斉一性をもつことはできなかったと考える。

また、このほかにも器形、技法において多くの共通性をもっており、どのような形のものを作るかという点について、集団内での共通認識と共通した技術を持っており、決してイレギュラーに作られたものではないことがわかる。しかし一方で、細部に着目すると、第Ⅱ部第4章(4)の報告でも指摘したように、器形的特徴のわずかな差異によって6分類することができ、そして一つの分類のなかに近似するものが複数個体含まれる場合もある。この器形、技法の共通性、そして細部の器形の共通性について、前者はほぼ同一の工人集団によって製作されたことを、後者はその工人集団のなかの工人個人を表していると把握することができる。

以上のような特徴から、天狗山古墳から出土した陶質系土器は、同一の工人集団によって1点を除いて同一窯で同一時期に焼かれたものであるという評価を導くことができる。

それでは、この須恵器とも陶質土器とも判断しがたい土器群は、どのような技術的系譜をもつ工人集団によって製作されたのであろうか。すでに指摘した多くの特徴を参考に、当時の倭で生産されていた須恵器や朝鮮半島で生産された陶質土器を比較、検討し、陶質系土器の系譜について考えたい。

2. 須恵器と陶質系土器との比較検討

まず、陶質系土器が製作されたと考える5世紀末前後の須恵器生産をめぐる動向について整理しておく必要がある。

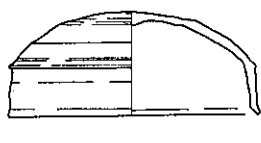
5世紀初頭に始まった倭での須恵器生産は、西日本の各地の首長と朝鮮半島の加耶の各地域との独自の交渉によって多元的に開始したものであったが、これは畿内の陶邑窯など一部の窯をのぞいて継続するものではなかった⁽²⁾。その後、地方での須恵器生産は朝鮮半島からではなく、すでに定型化していた陶邑窯の製作技術の拡散によって開始し、その時期はON46型式期、TK23型式期、TK47型式期の3期に分けられる(植野1998)。特にTK47型式併行期に生産を開始する地方窯は飛躍的に増加し、なかにはすでに陶邑窯の技術を取り入れて生産を開始していた地方窯からの間接的技術影響のもとに生産を開始する窯もあった⁽³⁾。また、地方窯で継続的に須恵器生産が行われるに伴い、「地域色」をもつ須恵器を製作する窯が現れる。

このように5世紀末前後の須恵器は、陶邑窯(系)須恵器一辺倒ではなく、わずかではあるが陶邑窯からの乖離が見え始める時期と言える。つまりこの時期、須恵器には大きくは陶邑窯(系)須恵器と地域色をもつ須恵器の2種類が混在しているのである。したがって、列島内で出土した陶質の土器の技術系譜を明らかにしようとするとき、この両者からの視点は不可欠である。TK47型式併行期を中心に、前段階であるTK23型式併行期の須恵器も考慮にいれつつ、陶質系土器の諸特徴と比較しながら検討していく(図64)。

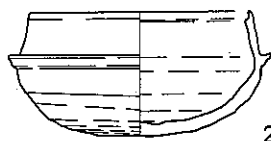
(1) 陶邑窯産須恵器との比較

まず、列島内の須恵器生産の中心であった陶邑窯の製作技術と比較してみたい。

成形技法 成形技法には、「粘土紐積み上げ技法」(田辺1981)と「マキアゲ・ミズヒキ技法」(中村1983)が用いられたと想定されている。両者とも名称こそ違うが具体的に示していることは同じであると理解できる。最初に粘土紐をまきあげて素地を作り、その後ロクロの回転を利用して各部を完成させる方法である。このように、須恵器は陶質系土器の成形技法②とは異なる技法で作られている。また②のような粘土盤を用いた成形技法は、確かに大庭寺窯やTK73号窯などで出土している平底の坏に認められるが、これは初期須恵器の段階のものであり、平底の坏身はのちに定型化して丸底化して行く過程でなくなる。この過程で②も同様に失われ、陶質系土器が作られた5世紀末頃にはすでに用いられない技法となっていたと考えられる。



1



2

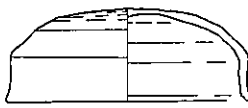


3

陶邑窯産須恵器



4



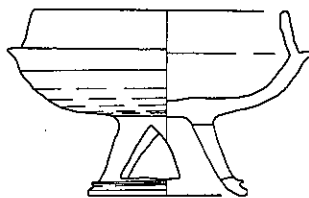
5



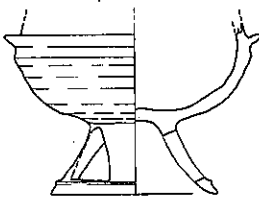
6



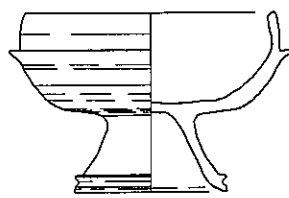
7



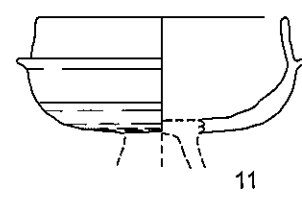
8



9



10



11

吉備産須恵器



12



13



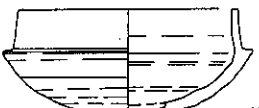
14



15



16



17

陶質系土器



図64 須恵器と陶質系土器

1～3 高蔵47号窯 4 大木2号墳 5 オノ峪1号墳 6 日上畝山6号墳
7 茶山古墳 8～11中山6号墳 12～17 天狗山古墳

調整技法 須恵器の場合、内面はすべて回転ナデが施され、個体によっては回転ナデのあとに底部にのみ「仕上げナデ」と呼ばれる不定方向のナデを施すものがある。また底体部外面には、底部の中心から受け部にむかって回転ヘラケズリが施され、底体部のうち回転ヘラケズリが施されないのは範囲の多少の差はあるが、時期から考えても体部から受け部にかけての範囲になる。つまり⑤⑧のような調整技法は認められない。

器形 成形技法と関連してくるが、ロクロ上で細部を作り上げる際、立ち上がりは粘土を引き上げてオリコミ技法で作出すと考えられている（中村1993）。この引き上げによるものと考えられるが、須恵器では体部の器壁が底部と比較して薄く、また受け部のひねり出しによって受け部下が強く屈曲するものが多い。そして受け部は上外方へのび、口唇部は内傾する段をもつ。底部はTK23型式では半球形、TK47型式ではさらに球形に近いものとなる。この底部が丸みをもつという点に関しては、前述の陶質系土器Ⅱ類に分類したものが近いであろう。以上のように陶邑窯産須恵器には③④⑥⑦の器形的特徴は認められない。

(2) 地域色をもつ須恵器との比較

つぎに、地域色というものがどのようなもので、どのようなところに現れるのかをまとめ、果たして陶

邑窯産須恵器には認められない陶質系土器の諸特徴が地域色として捉えられるのかを検討してみたい。

TK47型式併行期に成立した地方窯はその特徴として、長期間にわたる操業と地方窯からの間接的な技術影響を受けた窯の存在があげられる(植野1998、小林1988)。そして、これらの過程で発現してくると思われるのが地域色である。例えばTK208型式併行期から生産を開始する大阪府桜井谷窯では、蓋坯の口唇部や稜、高坯の透かしの形態変化が遅れ、器種構成の面でも陶邑窯より遅れた段階での新器種の出現という地域色が現れている(木下1983)。また兵庫県鬼神谷窯では、MT15型式併行期に蓋坯の口径が大型化しないかわりに、深底化という陶邑窯とは異なる形態変化が起こる。そして、坯身の口唇部の陶邑窯よりも早い段階での退化という地域色も現れている(菱田1992)。

このように一般的に地域色とは、器形の細部、調整技法、器種などにみられる陶邑窯系技術の停滞、保守、そして退化と考えられよう。現象としては、大枠では陶邑窯の須恵器にいずれかの段階で起こり得る、あるいは起こっていた変化の出現の相対的な遅速と考えられる。つまりTK23型式併行期やTK47型式併行期に現れる地域色とは、あくまでも陶邑窯系技術を土台としたもので、その規格性から大きく逸脱するようなものではなかったといえる。

地域色という観点から陶質系土器に認められる諸特徴を検討した場合、①は生産開始初期における窯構造あるいは焼成技術の問題として、⑤⑧の部分的に回転ナデ、回転ヘラケズリを施さないことは、「省略＝退化」と捉えられるかもしれない。しかしTG232型式・TK73型式併行期にすでに消えている②の成形技法、陶邑窯産須恵器のどの時期にもみられない③④⑦のような器形的にまったく新しい要素。これらも含めて「地域色」と位置付けることができるであろうか。今までに確認されている地域色とは、祖型である陶邑窯産須恵器からのマイナーな変化はあっても、成形技法の変化や系譜を追えないような器形の飛躍的な変化は認められていない。したがって陶質系土器は、地域色が発現した陶邑窯系譜の須恵器とは考えられない。

(3) 吉備産須恵器との比較

筆者は以前、吉備にはTK47型式併行期に二つの窯があった可能性を指摘したことがある(大熊2002)。窯自体は発見されていないが、古墳から出土した特徴的な須恵器をとおして、それらを吉備産と考えることができるからである(図65)。それでは、これらの吉備産須恵器が陶質系土器の技術系譜となりうるのか検討してみたい。

一つは岡山県北部、津山盆地周辺にあると考えられる窯で生産された須恵器である(図64-4~7)。この須恵器は、TK47型式併行期にあるはずの坯蓋の稜をすでに消失しているという特徴から吉備産と判断されるものである。この坯蓋の場合、陶邑窯の器形的特徴の一つが先取的に退化するという地域色をもつものと捉えることができる。陶質系土器とは器種こそ異なるが、地域色をもつ須恵器と同様の理解があたりはまり、陶質系土器の系譜とはなり得ない。

もう一つは、総社平野周辺にあると考えられる窯で生産された、総社市中山6号墳出土の有蓋高坯・坯身である(図64-8~11)。その特徴として、両器種とも全体的に厚ぼったくシャープさに欠ける。立ち上がり内側に内彎するものが認められ、口唇部を丸くお

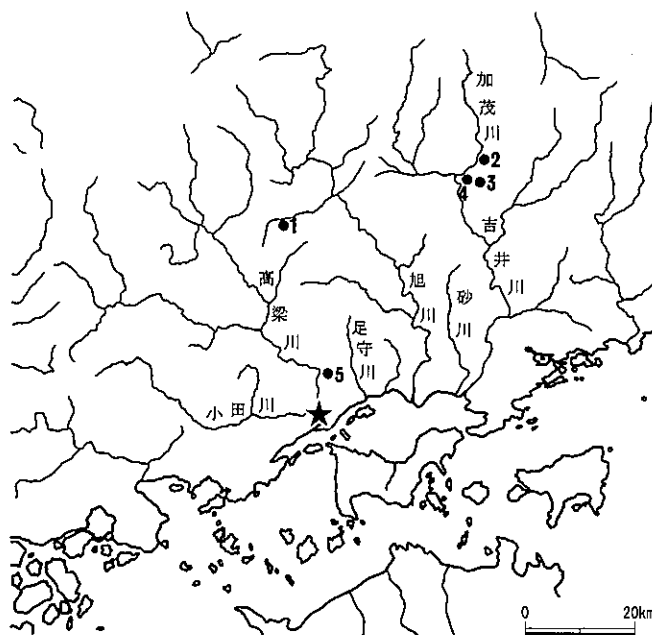


図65 吉備産須恵器の分布

★天狗山古墳 1 大木2号墳 3 オノ峪1号墳
4 茶山1号墳 4 日上畝山6号墳 5 中山6号墳

さめる。また高坏の脚は低く、脚径が小さいため坏部とのバランスが悪いということがあげられる。陶邑窯（系）須恵器を指向し、確かに陶邑窯系技術の影響を受けているが、その器形に関する原則からの乖離が他の地域色をもつ須恵器と比較しても大きい。陶邑窯産須恵器を母体として展開していく地域色と捉えるには難しい須恵器である。

これらを陶質系土器の各特徴と比較してみると、合致するのは⑦の器壁の厚さと⑨の底部が平坦であるものが含まれるということだけであり、中山6号墳の須恵器とは基本的に器形が異なっている。したがって天狗山古墳出土の陶質系土器は、現時点までわかっている吉備産須恵器はもちろん、吉備のなかで出土している須恵器とも異なるものであることがわかる。

（4）小結

以上のように、天狗山古墳出土の陶質系土器の中心であった陶邑窯産須恵器やこれに忠実に地方窯で製作された須恵器とも、また陶邑窯の製作技術を母体としながらも生産展開していく過程で地域色を発現した須恵器とも、そして天狗山古墳が所在する吉備で製作された須恵器とも系譜を異にすることが明らかになった。つまり、現時点で日本列島内で見つかっている須恵器のなかには、天狗山古墳出土の陶質系土器の系譜を追えるものがなく、須恵器ではないと言える。

3. 陶質系土器の系譜

須恵器生産が、朝鮮半島から技術を導入することで開始したことは自明のことであるが、その開始に関与した地域として、加耶のほか、百済や栄山江流域があげられている（酒井2004）。そして、天狗山古墳出土の陶質系土器の時期の須恵器型式である TK47型式へとつながってくる、いわゆる「定型化」した蓋坏の成立には栄山江流域からの技術影響が指摘されており、蓋坏は、その系譜を栄山江流域に求めることができる器種である（酒井1994a）。したがって、陶質系土器の技術系譜として須恵器の可能性が消えた今、須恵器生産の故地である朝鮮半島の陶質土器、なかでも、加耶ではなく栄山江流域の陶質土器から技術系譜を探ってみることが妥当と言えよう。以下では、栄山江流域の陶質土器との比較検討を行いたい。

（1）栄山江流域土器の特徴

栄山江流域の陶質土器の器形的、技法的な特徴については酒井清治氏の論文が参考になる（酒井2004b）。氏の分類によると栄山江流域には「百済系土器」と「羅州系土器」の二つの陶質土器がある。前者は百済土器の系譜をひき、後者は羅州を中心⁽⁹⁾に分布する「瓦質系土器」⁽¹⁰⁾のなかから発展、陶質土器化したものと

表5 栄山江流域土器の諸特徴

	羅州系土器	百済系土器
成形技法	円形粘土盤成形技法	円形粘土盤成形技法 粘土盤は羅州系土器よりも大きい
器形	・外面天井部や底部の中央部に小さな平坦面をもつ ・古式のは平坦面が広く、坏蓋の口縁部が長く直線的に広がり、口唇部先端が尖る。新式なもののほど坏蓋の口縁部が短く内彎気味になる ・受け部の段は窪まず水平に近くなり、水平に横、あるいは下外方へのびる ・坏蓋の天井部の稜付近、坏身の体部と受け部付近が厚く作られ、百済系土器と比較して全体的に厚く重量がある	・天井部や底部の中央部は丸みをもち（注12）、尖り気味になるものもある ・坏蓋の口縁部がゆるやかなS字をえがく ・坏蓋の口唇部は段をもち、坏身の口唇部は丸い ・受け部に窪みがある ・厚さが全体的に薄い ・口縁部内面に斜めに成形痕が認められる
調整技法	・天井部、底部外面を手持ちあるいは回転のヘラケズリで整形するが、ケズリは稜・受け部にまでは及ばない	・天井部、底部外面はすべて手持ちヘラケズリで整形し、稜・受け部にまで及ぶ
焼成・色調	・坏身と坏蓋を交互に口縁部を上にして重ね焼きする ・色調が暗背灰色で外面に火だすきをもつ	・坏身に坏蓋をかおせて焼成 ・色調が灰白色から灰色

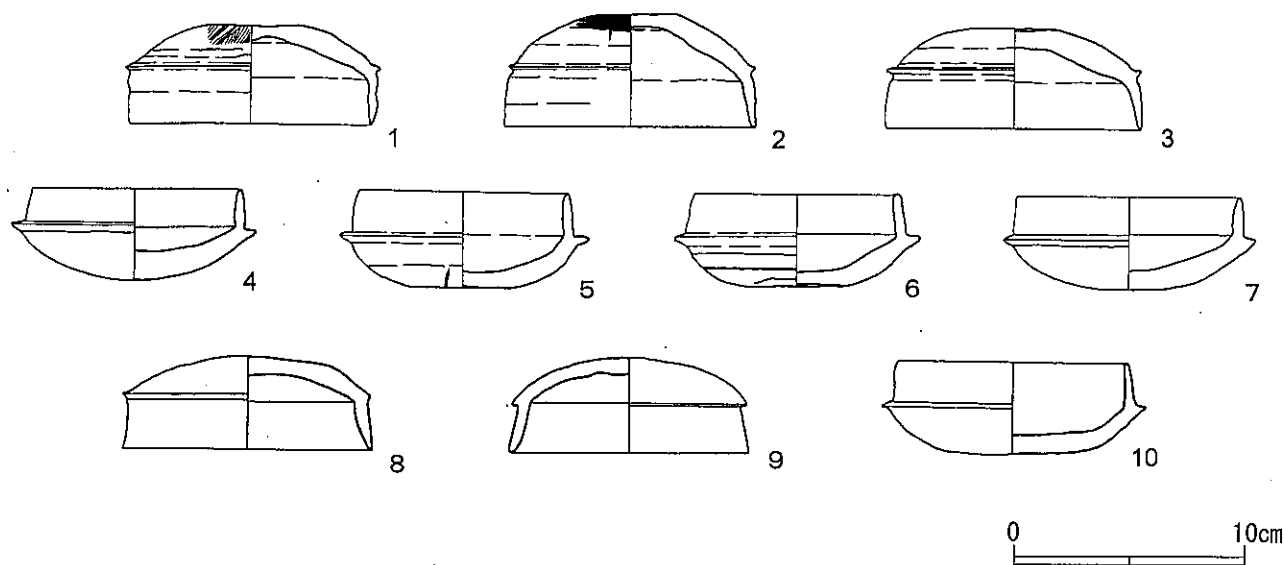


図66 羅州系土器

1～4 伏岩里1号墳 2・3・5～7 伏岩里2号墳 8～10 新村里9号墳

考えており、同じ栄山江流域を中心に分布しながらも異なる系譜をひく陶質土器が併存している。各土器の蓋坏の特徴として表5のような点があげられている。

(2) 栄山江流域土器との比較

具体的に陶質系土器を比較していく。

成形技法 栄山江流域土器と同一の円形粘土盤技法で作られている (②)

器形 器形はおもに羅州系土器との類似点が多く認められる。類似点として、受け部 (③)、底部 (⑨)、また体部から受け部の先端にいたる部分 (④) の形態、器壁の厚さと厚くなる部位 (⑦) があげられる。なお体部から受け部の先端にいたる部分の形態は、栄山江流域土器では受け部下が屈曲するものと直線的になっているものの両者がある。

その一方で陶質系土器と栄山江流域土器には、相違する点も認められる。それは口唇部の形態 (⑥) で、羅州系土器では先端が尖り、百済系土器では丸みをもつものが多い点である。羅州系土器のなかには陶質系土器と同様、平坦なものも認められるが、割合的にはごく少数である。

調整技法 百済系土器は、外面調整に回転ヘラケズリを用いない点で陶質系土器とは異なっており、陶質系土器と羅州系土器との類似性が認められる。また羅州系土器は、底部の中心から体部にかけて一気に回転ヘラケズリを施すのではなく、底部の中心に静止ヘラケズリ、あるいは回転ヘラケズリを施した後底部の中心部をナデたままにして、陶質土器と同じく底部の途中から回転ヘラケズリを施すものがある (⑧)。しかし、この例は羅州系土器のなかでも少数派である。このように底部中心の調整技法についてはやや相違する点もあるが、底部の中心部から一気に回転ヘラケズリを施さないという点では共通していると言えよう。

また内面調整は、栄山江流域土器には全体にわたって回転ナデを施すもののほか、底部には施さずに粘土盤接合部から上方のみが回転ナデになっているものもある。これは円形粘土盤成形技法に関連したもので、粘土盤に粘土紐、あるいは粘土帯を接合していくため、その接合部付近は静止した状態でナデのぼし、上方の部分は回転ナデで作り出していったためと考えられる。陶質系土器には後者と同じ方法で内面調整が施されている (⑤)。

焼成・色調 陶質系土器は焼成があまく、また陶質土器に特徴的な還元雰囲気弱く色調が黄灰色を呈

しており、陶質土器の堅緻な焼き上がりとはほど遠いものとなっている。また火だすきも認められず、栄山江流域土器とは異なる焼成技法が考えられる。

(3) 陶質系土器の系譜

陶質系土器と栄山江流域土器を比較すると、多くの共通点とわずかな相違点があることがわかる。ここでもう一度まとめたい。

まず土器づくりの基本となる成形技法が共通する。成形技法である円形粘土盤成形は、陶質系土器と栄山江流域土器に共通する技法で、この時期の須恵器には認められない。そして受け部、底部、器壁の厚さと厚くなる部位といった器形の共通性。特に受け部が下外方へと下がる点は、この陶質系土器をもっとも特徴づけるものであり、須恵器が上外方へのびる傾向にあるのとは対照的である。さらに調整技法の共通性があげられる。栄山江流域土器には内面全体に回転ナデを施すものと途中から回転ナデを施すものの2種類がある。そのうち須恵器にはない後者の調整が陶質系土器に認められることは特筆すべき点である。

その一方で相違点として、口唇部の形態、外面調整、色調と焼成があげられる。まず口唇部の形態が陶質系土器では平坦であるが、これは栄山江流域土器のなかではイレギュラーに認められるものである。須恵器にはもちろん認められない形態である。そして外面調整であるが、羅州系土器と同様に底部中心を残して回転ヘラケズリを施すものがある。しかし羅州系土器では、中心部がナデであるのは少数である。また陶質系土器のなかにはこのケズリ残しをつくらず、須恵器と同様、底部中心から一気に回転ヘラケズリを施すものがある。

このように、前節の須恵器との比較では認められなかった技術的、器形的な共通性が栄山江流域では多く認められる。したがって、天狗山古墳出土の陶質系土器は、栄山江流域土器の系譜をひく土器と考えられ、なかでも羅州系土器との共通点が多い(図66)。しかし一方では相違点も認められ、陶質系土器が羅州系土器とまったく同一の技術のもとで作られたものとは考えにくい。

従来、栄山江流域で出土する土器は百済土器としてひとまとめにして扱われることが多く、近年の発掘調査の増加に伴う資料数の増加によって、ようやく詳細な様相が明らかになりつつある。現在、酒井氏の分類によると、5・6世紀の栄山江流域では、在地の土器として羅州系土器、百済系土器のほか、羅州系土器の祖型となった瓦質系土器、須恵器に類似した須恵器系土器、高敞系土器があり(酒井2004)、異なる系譜をもつ多様な土器があることがわかっている。陶質土器に関してだけでも、すでに百済系土器と羅州系土器の二つの異なる系譜の土器があることが指摘されており、倭の須恵器生産で想定されているような陶器単一系譜的な状況とは異なる様相が、栄山江流域では想定できる。つまり栄山江流域は、蓋坏という器種を製作するという点では大枠で百済土器圏の範疇に含まれるが、内実としては、百済土器の技術的影響を受けながらも異なる、百済系土器や百済土器とは別系譜の羅州系土器が存在している。近年の発掘調査によって次々と栄山江流域の土器の様相が明らかになってきたように、今後、これらのほかにも異なる器形や系譜をもつ陶質土器が発見される可能性が十分考えられる。このような状況を考慮に入れると、天狗山古墳出土の陶質系土器は、その技術的、器形的共通性から、栄山江流域土器、なかでも羅州系土器に近い技術をもつ未確認の土器に系譜を求めることができると考えられる。

なお、陶質系土器Ⅱ類は底部が丸底化して球形のようになっているが、栄山江流域土器は平底のままである。⁽¹²⁾丸底は須恵器にみられる特徴であり、陶質系土器Ⅱ類はⅠ類と同様の系譜であるが、器形面ではいくから須恵器的な要素を取り入れ、変容していると考ええる。

4. 陶質系土器の製作地

陶質系土器の系譜が須恵器ではなく、朝鮮半島の栄山江流域土器に求められることが分かった。それでは、この陶質系土器が果たしてどこで製作されたものであるのかという問題が残る。共伴する羅州系土器の坏蓋と同様に、その系譜を求めることができる栄山江流域で製作された搬入品であるのか。それとも栄山江

流域の技術で、倭のどこかで、あるいは吉備で製作されたものであるのか。三つの選択肢が考えられる。

この問題を考える際に通常用いられるのが胎土分析であるが、天狗山古墳で出土した陶質土器、陶質系土器、須恵器のいずれも胎土分析をしておらず、客観的な科学的裏付けをとれていない。したがって現時点では資料を観察し、栄山江流域の陶質土器や須恵器と比較することによってしか製作地の問題を考えることができない。したがって、ここではどこで作られた可能性がもっとも高いかを指摘するにとどめたい。

単純に考えて製作地として可能性がもっとも高いのは、陶質系土器の系譜を求めることができる栄山江流域であろう。すなわち搬入品である。共伴して羅州系土器の坏蓋が出土していることから考えても、ともに朝鮮半島からもたらされたと理解することができる。しかし、ここで問題点として指摘できるのが、陶質系土器の法量である。

まとまった量が出土している伏岩里1・2号墳などの栄山江流域土器と法量を比較すると明らかな差異が認められる(図67)。陶質系土器の場合Ⅰ類とⅡ類で口径が異なるが、多数を占めるⅠ類の口径は11cm⁽¹³⁾～12cm。器高はⅠ類・Ⅱ類ともに4.6～5.2cmである。これに対して栄山江流域土器は、口径がイレギュラーなものを除くと8.8cmから10.3cm、器高は3.1cm～5.1cmで、このうちほとんどが口径9cm台、器高3～4.6cmに集中し、陶質系土器よりも口径が小さく、器高も低いことがわかる。つまり、陶質系土器が口径が大きく全体的に深さがあり、容量が大きいのに対し、栄山江流域土器は口径が小さくて浅く、容量が小さいというように、器の規格に違いがある。また注意したいのが、栄山江流域土器には別系譜の羅州系土器と百済系土器があるが、両者の間には規格上の大きな違いがなく、異なる系譜の土器どうして規格を同じくしていることである。栄山江流域で、同一時期、かつ別系譜である土器の法量がほぼ同じであるということから、この時期の栄山江流域の陶質土器の口径は9cm、すくなくとも11cmを超えないものを指向、あるいは規格として採用していたと考えられる⁽¹⁴⁾。

両者の差異は、土器の系譜によって規格を異にするというよりも、さらに大きな枠組み、たとえば栄山江流域の陶質土器と陶質系土器のあいだでの差、つまりは栄山江流域と倭のあいだでの差として捉えることができるのではないだろうか。

TK47型式の陶器窯産須恵器の場合、ほぼ口径10cm～11.5cm、器高4.5～5.5cm⁽¹⁵⁾となり、また天狗山古墳に近い総社平野に分布する同時期の古墳から出土する須恵器も陶器窯産須恵器と同様の傾向を示している⁽¹⁶⁾(図67)。これらと陶質系土器を比較してみると、Ⅰ類は両者よりもやや口径が大きい、吉備産須恵器と

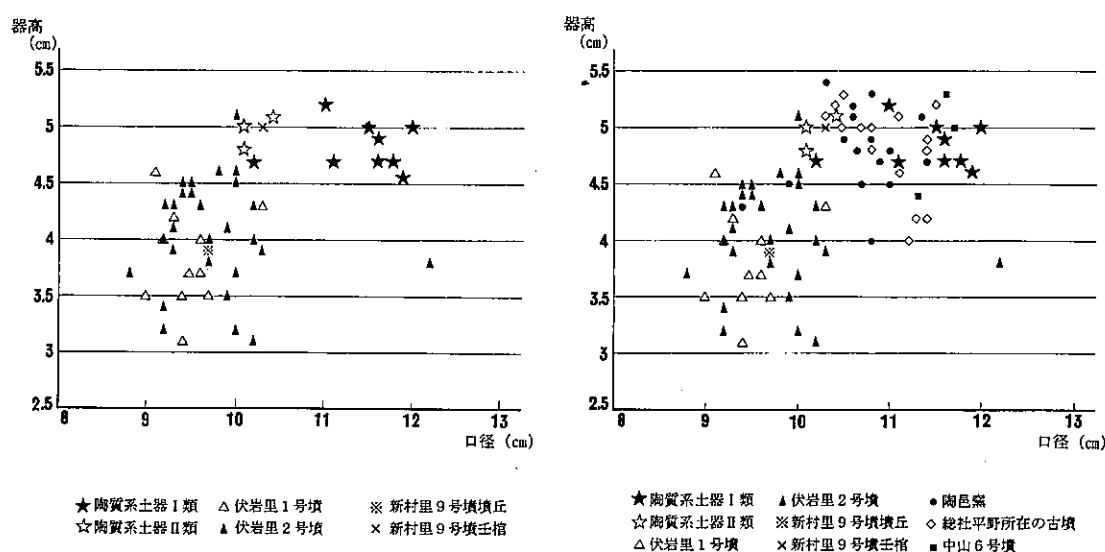


図67 法量の比較

考える中山6号墳の有蓋高坏と坏身の口径も11.3～11.7cmと同様に大きいことから、あり得る大きさであると考えられる。また器高は4.5～5.5cmで類似する。Ⅱ類は口径が10.2cm～10.4cm、器高は4.8cm～5.1cmでともに両者と類似する。陶質系土器の規格は、その故地である栄山江流域土器よりもむしろ須恵器に近似しており、栄山江流域土器と陶質系土器のあいだでみられる規格の差異は、採用した規格の差、つまり陶質土器（栄山江流域）と須恵器（倭）の差と考えることができる。

以上のことと陶質系土器の系譜が栄山江流域土器に求められることを考え合わせると、陶質系土器は栄山江流域の陶質土器の工人集団が何らかの事情により倭に渡来し、当時の倭で使われていた須恵器の規格に準じて製作したものと考えるのが妥当であろう。栄山江流域土器にはない須恵器の特徴である丸底に変容した陶質系土器Ⅱ類の存在もこのことを裏付けていよう。

それでは製作地は倭のなかのどこであるのだろうか。5世紀末から6世紀初頭の栄山江流域と関係する可能性が高い土器の出土例はそれほど豊富ではないが、そのなかでも比較的多いものとして鳥足文土器があげられる。この土器は、北部九州と畿内に多く分布しており、当時の政治や須恵器生産の中心、あるいは外交の窓口であった両地域において栄山江流域からやってきた工人たちによって天狗山古墳出土の陶質系土器を含めた土器製作が行われていた可能性も考えられる。そこで鳥足文土器の様相をてがかりに検討してみたい。

鳥足文土器は、基本的には5世紀前半から日本列島内で出土しており、この時期のものは集落から出土する例が多く、また朝鮮半島での出土例と比較して焼成や器種が多様で、人の移住を伴って日本列島で製作された可能性も考えられる。しかし5世紀末から6世紀前半になると、おもに古墳から単独で出土し、器種も陶質の短頸壺が大部分となる（図68）。このことから、この時期の鳥足文土器は、人々の移住以外の要因で日本列島へ入ってきたもの、さらには、焼成の特徴から栄山江流域で製作された搬入品である可能性が高い（武末2000、和田・吉井2000）。つまり、5世紀末から6世紀前半の栄山江流域と関係する可能性が高い鳥足文土器を多く出土する北部九州や畿内においても、栄山江流域土器を製作していたことを示す積極的な根拠は見当たらず、天狗山古墳出土の陶質系土器が両地域のいずれかで製作され、吉備へ運ばれた可能性は低いと言える。

そこで、もう一度天狗山古墳で出土している蓋坏の一群をみると、羅州系土器のほか、倭で作ったと考えられる栄山江流域土器に系譜をもつ陶質系土器、さらに栄山江流域土器と須恵器の両者の技術をもって作られた須恵器、そして地域色をもつと考えられる須恵器の4種類の土器が共伴している。なかでも陶質系土器のⅠ類は器形的には栄山江流域の陶質土器と比較的近いものであるのに対し、Ⅱ類は、栄山江流域土器にはない丸底となっており、須恵器の器形が取り入れられている。また、須恵器は器形、焼成ともに須恵器でありながら、成形技法には栄山江流域土器の円形粘土盤成形が用いられている。このように、天狗山古墳の土器は、製作現場での異なる技術をもつ工人同士の交流がまぎまぎと伝わってくる良好な一括資料であるといえよう。搬入品と考えられる羅州系土器を除いた3種類の土器は、色調や器形など視覚的にはまったく異なっているが、同じ工房で製作されたと考えられる。また、焼成、技法を同じくする20点以上もの斉一性をもった陶質系土器、そしてその技術的影響を受けた須恵器が、これほどまとまって、たとえ倭のなかであっても遠距離を運ばれたとは考えにくい。以上のような点から、陶質系土器は倭のなかでも吉備、なかでも吉備中枢部である総社平野を含む天狗山古墳の周辺で製作された可能性が高いと考える。

5. 陶質系土器が語るもの

陶質系土器は栄山江流域から渡来した陶質土器工人によって天狗山古墳の周辺で製作されたものである可能性が高いことを指摘したが、この土器は当時の吉備社会のなかにおいて決して主流をなすものではない。5世紀末の吉備では、すでに墓制にはもちろんのこと、生活にも須恵器は食器として受容され普及し

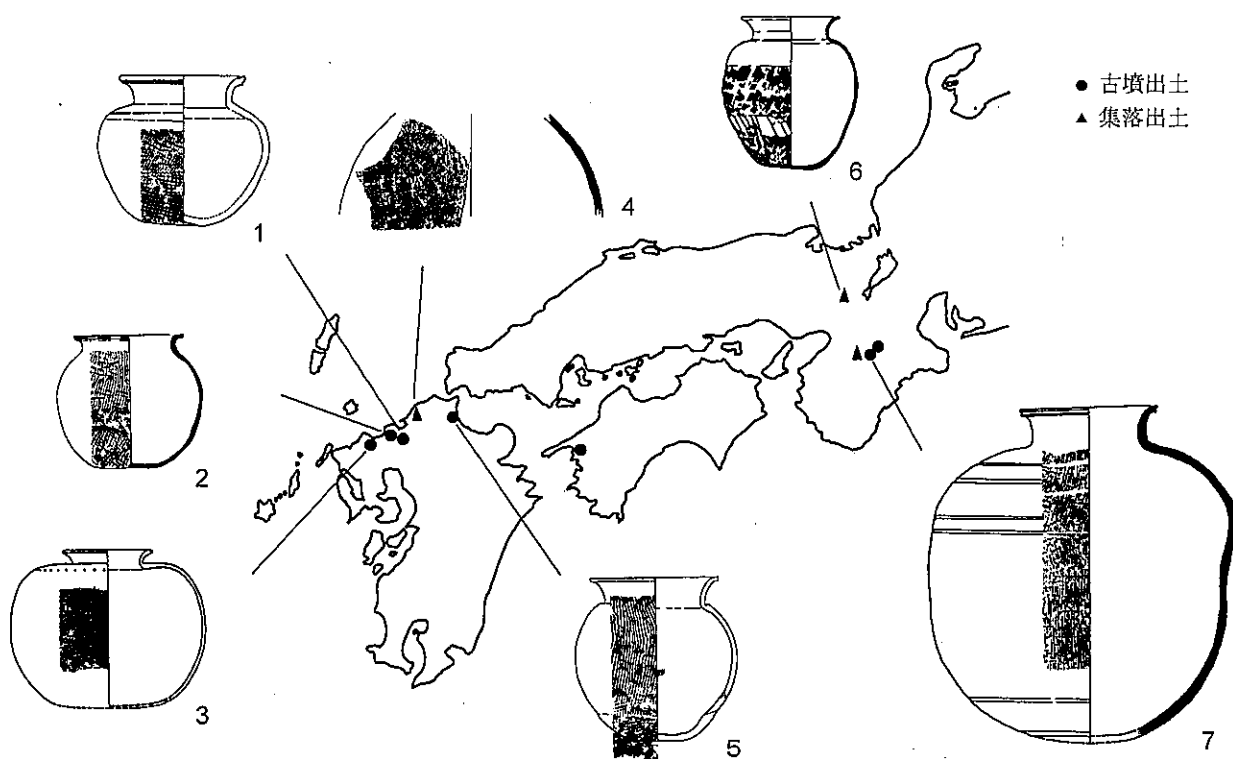


図68 鳥足文土器の分布（5世紀末～6世紀中葉）

（吉井2001を一部改変、ただし4のみ池ノ上ほか1996より）

- 1 梅林古墳 2 井ノ浦古墳 3 相賀古墳 4 在自下ノ原遺跡
5 番塚古墳 6 中臣遺跡 7 星塚古墳

ており、使われた須恵器はごく一部で認められる地域色をもつものを除き、陶邑窯産須恵器、あるいはそれと判別がつかないほど規格化された須恵器であった。窯こそ見つかっていないが、吉備で陶邑窯系の須恵器が生産されていたと想定できる。このような状況のなかで陶質系土器は生産されたということになる。

この陶質系土器の製作工人は、技法、器形に見られる栄山江流域土器からの変容の少なさから、栄山江流域から吉備へやって来た渡来第1世代（なかには第2世代も含まれていたかもしれないが）のような渡来後間もない工人であったと考えられる。そして陶質系土器Ⅱ類に現れている須恵器の特徴や栄山江流域土器と須恵器の両方の技術を用いて製作された須恵器からもわかるように、工人集団は在地の須恵器工人のなかに混じって製作をしており、渡来によって新たに工房が築かれたわけではなく、在地にすでにあった工房へ編入されたものと推測できる。そして両工人集団の関係はというと、須恵器工人が円形粘土盤成形という栄山江流域土器の技法を取り入れているものの、器形は取り入れていること。さらには、須恵器が意図どおりに還元雰囲気になっているのに対して、陶質系土器が焼成不良かつ焼成不足となっており、この土地での、そして使用した窯での製作に熟達していない状況であった可能性が考えられること。以上のことから、陶質土器工人と須恵器工人の関係は、同じ工房にいらながらも技術を「教え／教わる」という関係ではなく、互いに影響を受け合いながらも一定の距離を置いた関係であったと考えられる。つまり陶質土器工人の吉備への渡来は、栄山江流域の陶質土器製作技術の吉備への導入を意図したものではなかったと考えられる。

それでは、陶質土器工人集団は何のために吉備へやって来たのか、吉備でどのような役割を果たしたのか、また一時的な渡来であったのだろうか。現在、天狗山古墳の土器以外にこの時期の吉備と栄山江流域の関わりを示す資料は見つかっておらず、この状況のなかでこれらの問題について結論を出すのは難しい。

推論の域を脱しないが、あえて述べるならば栄山江流域の社会状況と考え合わせて、以下のようなことがいえるのではないだろうか。

栄山江流域の集団は4世紀以降、半独立的な存在として倭と百済の交渉の仲介役を果たしてきたが（吉井2005）、5世紀後半から6世紀中葉にかけての百済の南下、特に475年の漢城百済の滅亡による百済の熊津南遷とそれに伴う南への領域拡大、有力在地勢力への直接支配志向によって緊張が高まったため、倭の北部九州や畿内をはじめ地方勢力とも関係を深めたと考えられる⁽¹⁸⁾。そのような社会状況によって、物的にはもちろんのこと人的にも倭の諸地域との交渉活動が活発化した。その過程で天狗山古墳の被葬者、あるいは集団のもとへ栄山江流域の陶質土器工人はやって来た⁽¹⁸⁾と推測される。そして、陶質土器工人はこのような背景のもと吉備にやって来たがために、新たに栄山江流域の陶質土器の製作技術を教えるのではなく、すでにあった工房で須恵器工人とともに土器製作にあたり、天狗山古墳の造り出し上で行われる祭祀のために陶質系土器を製作したのではないだろうか。

彼らのその後の足取りも、その後、陶質系土器の系譜が立ち消えになるのか、あるいは須恵器製作技術と融合していくのかも現時点ではわからない。今後あらたな資料が現れることを期待したい。

おわりに

天狗山古墳で出土した陶質系土器が朝鮮半島の栄山江流域土器に技術系譜が求められること、そしてこの土器が栄山江流域から渡来した陶質土器工人によって吉備、すなわち在地で製作された可能性が高いこと、また陶質系土器や共伴する須恵器からみた陶質土器工人の吉備での土器生産への関わり方、そして陶質系土器が天狗山古墳の造り出し状遺構上での祭祀のために製作されたと考えられることを指摘した。

5世紀後半から6世紀前半までの倭と栄山江流域との交渉に関して、栄山江流域で倭系遺物のほかに前方後円墳や北部九州系の横穴式石室などソフト面での受容が認められ、倭からの人の移動が想定されている（林2004、徐2004）一方で、列島内では土器などの出土例に比して人の移動を示すものが少ないという状況にあるといえる。このような状況のなかで、小稿でとりあげた陶質系土器は列島内においても栄山江流域からのモノだけでなく人の移動を伴う交渉があったことを示しており、この時期の相互の歴史像をより豊かにする重要な遺物であることも指摘できたのではないかと思う。

後半、可能性の上に立った強引な論の展開になったが、その点を十分認識した上で、この陶質系土器が出土したことの意義について考えるためにあえてそのような方法をとったことを申し添えたい。ご寛恕の上、批判的検討を加えていただければ幸いである。

本稿の作成にあたり、酒井清治氏（駒澤大学教授）、亀田修一氏（岡山理科大学教授）、朴淳發氏（韓国忠南大学校教授）、林永珍氏（韓国全南大学校教授）から数々のご教示をいただいた。とりわけ酒井氏には、栄山江流域の土器について懇切丁寧なご指導、ご教示をいただいた。

また韓国での資料調査に際して、林永珍氏をはじめ全南大学校（当時）の趙鎮先氏、徐賢珠氏、忠南大学校の禹在柄氏、および張允禎氏（当時、岡山大学大学院文化科学研究科）に多大なご厚意をいただいた。感謝申し上げます。

注

- （1）口径が11～12cmで底部が扁平な土器
- （2）このほかに継続していた可能性があるものとして朝倉窯、東山窯があげられる。
- （3）普通「地方色」という用語を用いるが、地方色という言葉には「中央に対する地方」という意味内容が含まれ、地方が同一の特徴をもつかのような印象を抱かせる。地方色といっても各地域、各窯ごとでその内容は異なるので「地域色」という言葉を用いたい。

- (4) 陶邑窯産須恵器と陶邑窯の製作技術に忠実で見分けがつかないような須恵器
- (5) この平底の坏は、百済あるいは栄山江流域に系譜が求められている(酒井2004b)。栄山江流域ではのちまで坏身は平底であり、粘土盤成形技法が用いられる。しかし須恵器はTK216型式で丸底化しており、この過程で成形技法も変化したと考えられる。
- (6) TG232型式併行期の総社市奥ヶ谷窯が、吉備で最初に須恵器生産を行った窯である。甕を主体に生産しており、加耶系の可能性が考えられる。しかし、この窯は短期間で操業を停止しており、吉備ではMT15型式併行期の和気町戸瀬池窯まで須恵器生産の空白期間となっている。
- (7) 津山市才ノ峪1号墳、同茶山1号墳、同日上畝山6号墳、真庭市大木2号墳で出土している。
- (8) 稜は、陶邑窯ではTK43からTK209型式で消失し、TK47型式併行期にはまだ残っているはずのものである。
- (9) 栄山江流域土器には本来これらのほかに瓦質系土器、須恵器形土器、高敞系土器が含まれる。しかし陶質土器と比較したいので、煩雑さを避けるため、本稿でいう「栄山江流域土器」とは羅州系土器と百済系土器のみを指すこととする。
- (10) 五良洞窯で生産された土器で瓦質碗と共通する胎土、器形で、瓦質土器の延長上にあると考えている(酒井2004)。
- (11) 酒井清治氏のご教示による。
- (12) 百済系土器に底部に丸みをもつものがあるが、須恵器のように底部全体が丸みをもつものとは異なり、底部の中心付近のみが丸くなる。
- (13) 口径が102cmのものが1点含まれるが、これは破片が小さいこともあり口径復元がうまくできていない可能性がある。
- (14) 栄山江流域で生産されたと考えられる高敞鳳德里ナ地区溝1出土の須恵器形土器でも10cmである。
- (15) データは『陶邑』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのものを使用しているが、報告されている須恵器すべての法量が掲載されているわけではないため完全にカバーできていないとは言えない。しかし筆者が用いる田辺編年の編年基準資料が報告されている『陶邑古窯址群Ⅰ』でも、具体的数値は示されていないがTK47型式の口径は10.5cm、11.5cmがもっとも多く、次に10cmが多いと報告されている。したがって整合性があると考えられる。
- (16) 総社市雲上山11号墳、同小造山西2・3号墳、岡山市雲山2号墳、同雲山遺跡土墳墓8から出土している坏身のデータを用いている。
- (17) 窯の構造や窯詰め仕方、窯焚きの方法、そして使った土などによって作ろうと意図したもの出来上がるかどうか左右され、須恵器工人はその場、その時に試行錯誤し、工夫する必要がある(余語2004)。
- (18) 5世紀後半から6世紀前半に栄山江流域で一時的に認められる前方後円墳、北部九州系横穴式石室、埴輪、須恵器などの倭系遺物、北部九州や畿内で認められる鳥足文土器や蓋坏、甕焚口棒などの資料がこのことを示している。

引用・参考文献(ハングル文献については末尾に回して「韓」と記す)

- 林 永 珍2002「百済の成長と馬韓勢力、そして倭」『古代百済と日本』大巧社
- 上野浩三1998「須恵器生産の展開」『第44回埋蔵文化財研究集会 中期古墳の展開と変革－5世紀における政治的・社会的変化の具体相－』埋蔵文化財研究集会
- 大熊美穂2002「須恵器地域色抽出に関する一試論－岡山地域の事例から－」『駒澤考古』第28号、駒澤大学考古学研究室
- 木下 亘1983「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷2－17窯跡』豊中市文化財調査報告第9集、少路窯跡遺跡調査団
- 金 洛 中2000「5～6世紀の栄山江流域における古墳の性格－羅州新村里9号墳・伏岩里3号墳を中心に－」『朝鮮学報』第179輯、朝鮮学会
- 小林久彦1988「伊勢周辺における須恵器の地域性」『三河考古』創刊号、三河考古刊行会
- 酒井清治1994a「日本における初現期須恵器の系譜」白石太一郎編『加耶及び日本の古墳出土遺物の比較研究』国立歴史民俗博物館
- 酒井清治1994b「わが国における須恵器生産の開始について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集、国立歴史民俗博物館
- 酒井清治2004a「須恵器生産のはじまり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集、国立歴史民俗博物館
- 白井克也2002「土器からみた地域間交流－日本出土の馬韓土器・百済土器」『検証 古代日本と百済』大巧社
- 徐 賢 珠(大竹弘之 訳) 2004「三国時代の甕の焚口についての考察」『韓式系土器研究』Ⅶ
- 高田貫太1999「瀬戸内における渡来文物の受容と展開－5世紀代の墓制を中心として－」『第45回埋蔵文化財研究集会 中期古墳の展開と変革－渡来文物の受容と展開－』埋蔵文化財研究集会
- 武末純一2000「北部九州の百済系土器－4・5世紀を中心に－」『福岡大学総合研究所報』第240号、福岡大学総合研究所
- 竹谷俊夫1995「日本と朝鮮半島出土の鳥足形タタキ文土器の諸例－その分布と系譜－」『古墳文化とその伝統』勉誠社

- 田中清美1994「鳥足文タタキと百済系土器」『韓式系土器研究』V
- 田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園高校考古学クラブ
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- 田辺昭三1982「初期須恵器について」『考古学論考』平凡社
- 中村 浩1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房
- 中村 浩1983『須恵器』考古学ライブラリー5、ニュー・サイエンス社
- 朴 淳 發2001「栄山江流域における前方後円墳の意義」『朝鮮学報』第179輯、朝鮮学会
- 朴 淳 發2002「百済の南遷と倭」『古代日本と百済』大巧社
- 朴 天 秀2002「栄山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」『考古学研究』第49巻第2号
- 菱田哲郎1992a「須恵器地方色の発現過程－近畿地方北部の事例から－」中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢Ⅱ』三星出版
- 菱田哲郎1992b「須恵器生産の拡散と工人動向」『考古学研究』第39巻第3号
- 松木武彦2001「第4章 古墳の動態からみた「雄略朝」期の古備」『古備地域における「雄略朝」期の考古学的研究』平成9～12年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書
- 余語琢磨2004「古代窯業技術論－焼成実験と遺構計測値から読み解く窯技術と築窯プラン－」『須恵器窯の技術と系譜2－8世紀中頃～12世紀を中心にして－』窯跡研究会
- 吉井秀夫2001「百済の墳墓」『東アジアと日本の考古学Ⅰ』同成社
- 吉井秀夫2005「第6章 朝鮮半島西南部における古代国家形成過程の諸問題」『国家形成の比較研究』学生社
- 和田晴吾・吉井秀夫2000「日本出土百済系土器をめぐる1考察」『福岡大学総合研究所報』第240号、福岡大学総合研究所（韓）
- 木下 亘2003「韓半島出土須恵器（系）土器について」『百済研究』第37輯、忠南大学校百済研究所（韓）
- 酒井清治2004b「5・6世紀の土器から見た羅州勢力」『百済研究』第39輯、忠南大学校百済研究所（韓）
- 徐 賢 珠2004「4～6世紀 百済地域と日本列島の関係」『湖西考古学』第11輯、湖西考古学会（韓）
- 小栗明彦2000「全南地方出土埴輪の意義」『百済研究』第32輯、忠南大学校百済研究所（韓）
- 吉井秀夫2002「日本出土百済（馬韓）土器の諸問題」『日本所在百済文化財調査報告書Ⅲ－近畿地方－』国立公州博物館研究叢書第14冊、国立公州博物館（韓）
- 林 永 珍2004「栄山江流域圏 長鼓墳（前方後円墳形古墳）の被葬者と築造背景」SEAA（韓）

<遺跡文献>

【雲上山11号墳】前角和夫編1993『折敷山遺跡・雲上山11号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告10 総社市教育委員会【大木2号墳】江見正巳・石田容一1996『宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・粧田山遺跡・大村遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第113集 岡山県教育委員会【雲山2号墳】正岡睦夫1994「黒住・雲山遺跡」正岡睦夫・柴田英樹編『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第89集 岡山県教育委員会【小造山西2・3号墳】武田恭彰2004『総社市埋蔵文化財発掘調査報告17 小山ヶ谷古墳・小造山古墳群』総社市教育委員会【オノ峪1号墳】中山俊紀1985『オノ峪古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集 津山市教育委員会【陶邑】中村 浩1976『陶邑Ⅰ』大阪文化財センター、同1977『陶邑Ⅱ』同、同1978『陶邑Ⅲ』大阪文化財センター【茶山1号墳】保田義治1989『茶山古墳群』埋蔵文化財発掘調査報告第27集 津山市教育委員会【中山6号墳】椿真治ほか1997「中山遺跡・中山古墳群」江見正巳編『藪田古墳群・金黒池遺跡・奥ヶ谷窯跡、中山遺跡・中山古墳群、西山遺跡・西山古墳群、服部遺跡、北溝手遺跡、窪木遺跡、高松田中遺跡』中国横断自動車道建設に伴う発掘調査4 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会【日上畝山6号墳】安川豊史編1998『日上畝山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集 津山市教育委員会、【在自下ノ原】池ノ上宏ほか1996『在自遺跡群Ⅲ』津屋崎町文化財調査報告書第11集、津屋崎町教育委員会、【星塚】国立公州博物館ほか2002『日本所在百済文化財調査報告書Ⅲ－近畿地方－』国立公州博物館研究叢書第14冊、【新村里9号墳】国立光州博物館1998『羅州潘南面古墳群総合調査報告書』光州博物館学術叢書第13冊、【伏岩里】林永珍ほか1999『伏岩里古墳群』全南大学校博物館・羅州市、尹根一ほか2001『羅州 伏岩里3号墳』国立文化財研究所

図出典

図64－1～3：田辺1966を再トレース、同4・5、8～11：大熊実測、同6：安川編1998、同7：保田1989、図66－1～7：林ほか1999、同8～10：国立光州博物館1998、図68－4：池ノ上ほか1996

3. 天狗山古墳の副葬品配置—伝聞記録と埋葬に先行する副葬に関する検討—

光本 順

1. はじめに

古墳における葬送儀礼について検討する際に、副葬品配置の分析はひとつの有力な視点となりうる。天狗山古墳においては、すでに以前に石室内の副葬品が取り出されたという経緯がある。しかしながら幸運なことに、その後の末永雅雄の聞き取り調査によって、個々の副葬品の配置場所に関する詳細な記述と副葬品出土状況図（図69）が作成された。それは、末永の著書『日本上代の甲冑』（1941年）において掲載されている。この副葬品配置図は、伝聞に基づくものであることから、後の古墳研究にはとくに取り上げられることはなかったようである。しかし、数々の優品を出土した本古墳の葬送儀礼の一端を示す副葬品を配置する行為を知るためには、この伝聞記録がもっとも重要なものであることもまた変わりはない。小稿の第一の目的は、古墳時代後期初頭頃⁽¹⁾に位置づけられる本古墳の伝聞記録の妥当性について、発掘調査がなされた当該期の資料と比較しながら検討することにある。

第二の目的は、今回の発掘調査によって、新たに石室構築前の床面下の粘土層から発見された鉄剣と鉄槍、鉄鉾に関して検討を行うことにある。すなわち、棺設置前に納めるという特徴的な配置方法について、若干の検討を行いたい。

2. 岡山地域における副葬品配置の時期的変化と伝聞記録に関する比較検討

(1) 伝聞記録の様相

冒頭で述べたように、聞き取り調査にもとづく石室床面上の副葬品の出土状況は、図69のように記録されている。石室の四壁の下部に鏝が出土しており、石室と同大の組合せ式木棺が安置されていたと考えられている。この棺の中に、ほぼ全身がわかる遺骸が頭部を東にして安置されていた。以下、末永の記述と村井崑雄による本古墳出土遺物の研究（村井1966）、『岡山県史』における西川宏の記述（西川1986）から、石室内の副葬品配置について、品目ごとに以下に列举する。

〔鏡〕小形変形獣形鏡（半肉彫獣帯鏡）1面が、頭部に近接して、遺骸からみて左側（以下、左右の呼称は遺骸を基準とする）に置かれる。布に包まれる。

〔刀剣〕頭部側の小口に刀1点、遺骸の左側に刀剣各1点が配置。剣と1点の刀（長刀）には鹿角装が残存。

〔刀子〕遺骸側の刀剣の間に配置された1点と、籠手の中に挿入された2点がある。いずれも鹿角装。

〔挂甲・籠手〕木箱に納められるかたちで、挂甲と籠手が出土。

〔櫛〕挂甲の前竪上第1段と2段の間に1点、後胴より1点出土。

〔鉄鏃・胡籜〕足側の小口壁に立てかけられた状態で鉄鏃が2束出土。石室北西隅には、内部に長頸式鉄鏃を収めた金銅装胡籜が出土。

〔挂甲〕木箱に収められた状態で、被葬者近くより出土。

〔籠手〕挂甲に副えられた状態で出土（挂甲の左右腰に銹着）。籠

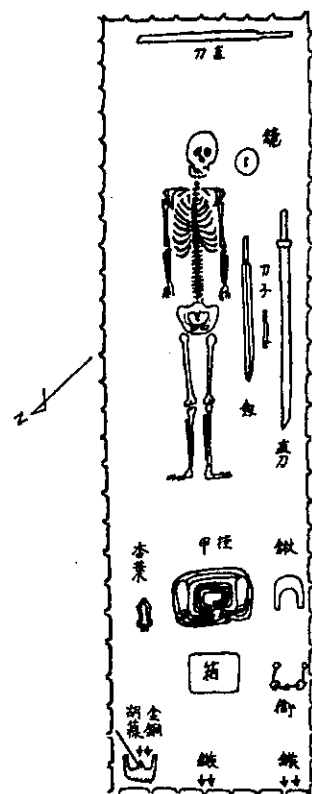


図69 天狗山古墳の副葬品配置

a. 有力墳

b. 小規模墳

凡例 (填形) 後円: 前円後円墳、後方: 前方後方墳、造円: 造り出し付円墳、帆立: 帆立貝形前方後円墳、円: 円墳、方: 方墳。 副葬品に付した数字は個体数。「-」は攪乱等により配置状況が不明であることを示す。複製の配置場所にまたがる副葬品には「*」を付す。括弧を付した副葬品は該当箇所への配置の可能性を示す。配置場所分類については光本2001に附録。

手の中から鹿角装刀子2点出土。

〔馬具〕挂甲の右側より剣菱形杏葉3点出土。挂甲の左下方より轡1点出土。他に位置は定かでないがf字形鏡板3片・環状雲珠1点・鉸具3点、鞍1対、木芯鉄板覆輪鍔片が出土。

〔鉄先（鋤先）〕挂甲の左側より出土。

（2）岡山地域の副葬品配置の事例分析

では、上記の記録の妥当性について検討するために、岡山地域の古墳時代中期・後期の副葬品配置について、副葬品が良好な状態で遺存する資料を対象に事例の検討を行う⁽²⁾（表6）。副葬品配置に副葬段階の別があることはこれまでも論じられてきたが（e.g. 今尾1984）、ここでは時期的変化が追いやすい棺内の被葬者周辺における配置を中心にみていきたい。検討にあたって、便宜的にはあるが副葬品を多く有する上位のランクの墳形（前方後円（方）墳・造り出し付き円墳）や19m以上の規模の古墳を「有力墳」とし、それよりも下位と考えられる小規模な円墳・方墳を「小規模墳」として、それぞれに分析を行いたい。

有力墳における副葬品配置（図70、表6-a） まず有力墳についてみていきたい。古墳時代前期末～中期初頭の岡山市金蔵山古墳（西谷・鎌木1959、図70-1）をみてみよう。この古墳は墳長165mの前方後円墳で、後円部に2基の竪穴式石室（中央石室・南石室）を有する。遺存状況のよい南石室では、玉類がまとまって出土した場所を頭部とすると、頭部周辺に変形二神二獣鏡1面が配置され、両小口方向に鉄器類が副葬される。南石室における副葬状況は、頭部を中心に構成されているものといえる。

それに対し、中期前葉ごろに位置づけられる美咲町月の輪古墳（近藤編1960、2・3）では大きく異なる様相が認められる。月の輪古墳は、径60mの円墳に長さ9mの造り出しを有する造り出し付円墳である。円丘部に2基の粘土槨（中央主体・南主体）が検出され、両主体部とも副葬品の遺存状態はきわめて良好であり、かつ遺骸の痕跡がのこっており、報告において副葬状態に関する詳細な検討がなされている。中央石室では歯の遺存した頭部推定箇所左横に珠文鏡1面が置かれ、頸部に首飾り、脚部両脇に刀剣が2本ずつ配置される。一方、南主体では、歯と頭部痕跡の遺存から、頭部の位置が推定される。頭部では右横に仿製内行花文鏡1面が配置される。また、頸から胸元にかけて首飾りが着装され、右腕には石釧1点が着装されたものと考えられる。腰部には、左腰付近に刀子がみられる。腕部周辺には、右側に剣1本、左側に刀1本、脚部周辺には、左右それぞれに刀1本が配置される。以上のように、各身体部位へ副葬品の配置が分散する状況を確認することができる。

こうした状況は、中期後葉の総社市随庵古墳（鎌木編1965、4・5）でも同様といえる。随庵古墳は、全長約40mの帆立貝形前方後円墳で、後円部に2基の主体部を有する。中央石室は、天狗山古墳と同様の「渡来系」石室（高田1999）と呼ばれる竪穴式石室であり、棺内・棺外から豊富な副葬品が出土した。被葬者周辺の状況を見ると、頭部周辺に位至三公鏡1面、腕部周辺と腰部周辺、脚部周辺に刀剣が配置される。右手首付近には、手玉と思われる滑石製白玉とガラス小玉がみられる。もう一基の主体部である粘土床については、3分の1ほどが工事によって失われているが、腕部～脚部周辺に剣が配置され、頭部上方に刀子や手鎌などがまとめて置かれる。

では古墳時代後期はどうであろうか。まず赤磐市正崎2号墳をみてみよう。この古墳は東西20m、南北16mの円墳で、丘陵尾根上に立地する。墳丘表土および甲内出土土器から、TK47型式ごろの築造が推定されている（宇垣・高畑編2004、6）。主体部は2基からなるが、ここではきわめて良好な状況で副葬品が遺存した第1主体を取り上げる。第1主体の棺は鏝使用の木棺である。赤色顔料の分布と首飾りの存在から、被葬者の位置が推定される。頭部周辺には上方に仿製画像鏡1面と左右に長頸式鉄鍔の束が配置される。この鉄鍔付近からは胡籙金具の出土が指摘されている。腕部周辺には、左側に馬具が置かれる。右腕側にも何らかの鉄製品があるように見えるが報告からは判然としない。脚部周辺には両側に刀剣が配置される。右腰付近には、先端を足側に向けた平根系鉄鍔の束がみられる。これは出土位置と鉄鍔の向きから、胡籙を着装するような配置がなされていたものと考えられる。

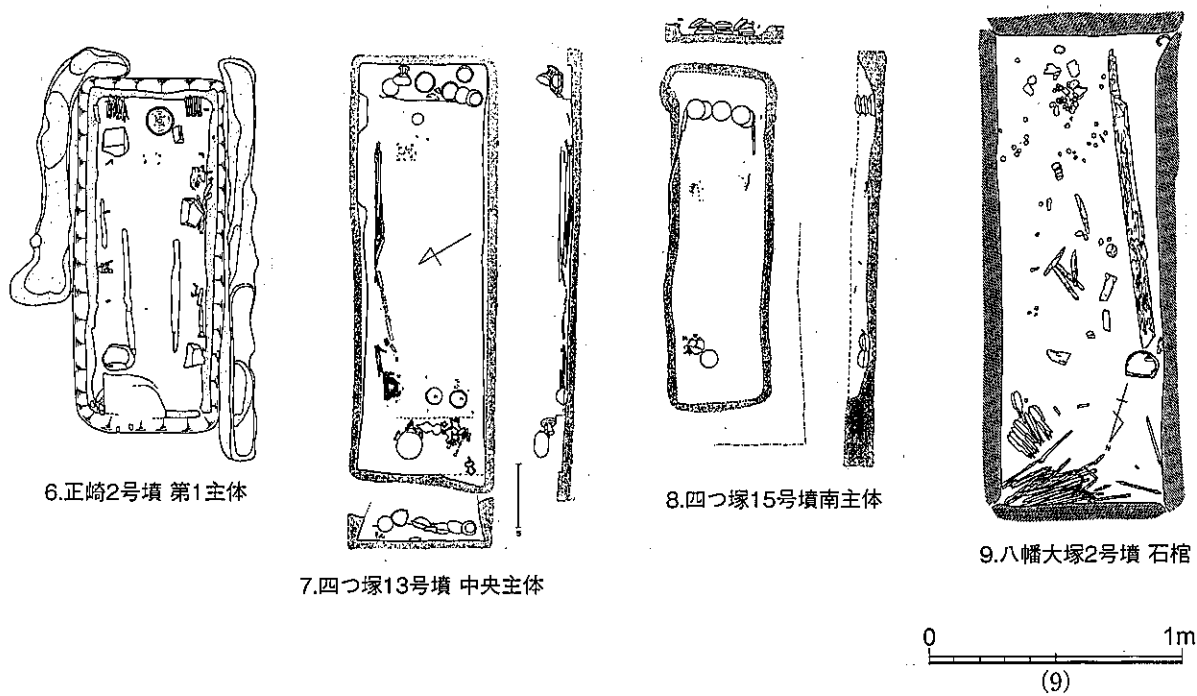
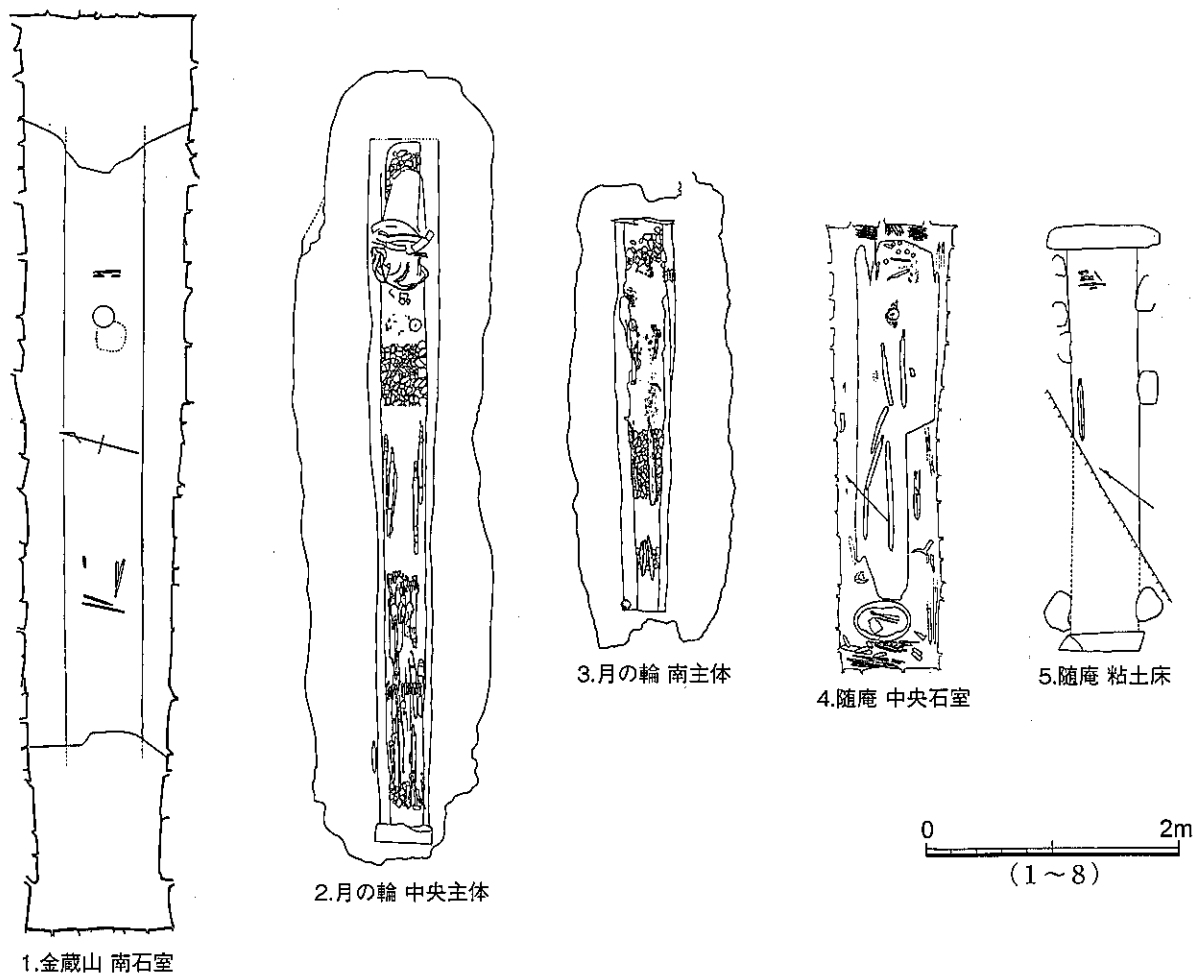


図70 有力墳における副葬品配置

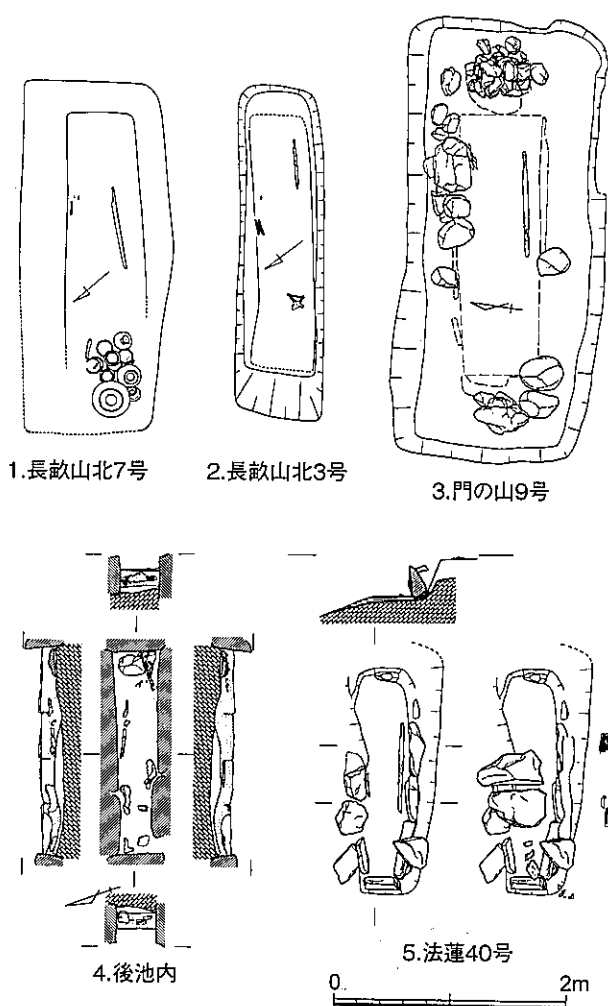


図71 小規模墳の副葬品配置

配置状況は次のようになる。2点の垂飾付耳飾が出土した部分が頭部とみなすことができ、これらは着装されていたものと考えられる。頭部から腰部付近にかけて振り環頭大刀が副葬されている。腰部には刀子5点がみられ、足元に胡録金具を伴う長頸式鉄鏃の束が置かれている。

こうした横穴式石室における棺内配置の状況は、竪穴系埋葬施設と同様に、各身体部位へ分散する状況として捉えることができる。津山市中宮1号墳（近藤編1952）や赤磐市岩田古墳群（神原1976）のように、棺内の副葬品が良好に遺存する例では、これと同様の状況を確認することができる。したがって、横穴式石室においても棺内配置については竪穴系埋葬施設と同様の原理によるものとみなしてよいだろう。

小規模墳における副葬品配置（図71、表6-b） 小規模墳の事例として、まず岡山県北部の古式群集墳の例をみたい。比較的良好な副葬品の出土状況を示す津山市長畝山北古墳群（行田・木村1992）と門の山古墳群（小郷編1992）を中心に検討する。TK23型式段階に位置づけられる長畝山北7号墳（図71-1）は径9.5mの円墳であり、木棺直葬墳である。この主体部においては、剣の切っ先の方を被葬者の足元方向と考えると、腕部周辺において鉄刀と刀子が両側にそれぞれ1点配置されているものと考えられる。また、長畝山北3号墳（2）は出土須恵器からTK47型式段階に位置づけられる古墳で、径約10mの円墳である。内部主体としては、1基の木棺直葬が検出されている。この主体部では、左の腕部周辺に剣1本、右腰に

次にMT15型式段階と考えられる真庭市四つ塚13号墳（近藤1954、7・8）をみたい。この古墳は径19mの円墳に造り出しを有する、造り出し付き円墳である。円丘部には木棺直葬による2基の主体部が設けられている。中央主体の方が南主体よりも先行して築かれ、かつ規模が大きいことから、中央主体が主たる埋葬であったといえる。中央主体は、報告では追葬の可能性が提起されているが、首飾りや耳環の分布から2体の遺骸が対向するかたちで納められたものと考えられる。棺の主軸に対して北側寄りに位置する被葬者は、耳環と首飾りを着装する。頭部周辺に鏡1面、右腕周辺に刀2本、右腰部に先端を足元に向ける長頸式鉄鏃、脚部周辺に刀1本、右足元付近に金具を伴う胡録に収められた長頸式鉄鏃が配置される。一方、南主体については、両手首に手玉が着装されたものと考えられ、右手玉付近において刀子1点が出土している。また左側頭部から腕部周辺にかけて刀1本が副葬される。

では、横穴式石室における副葬状況はどうだろうか。横穴式石室の場合、追葬の関連で棺内の配置が乱れていることがあるため、良好な資料の選択が必要である。岡山市八幡大塚2号墳（鎌木・亀田1986、9）をみたい。児島半島東部に位置するこの古墳は、径約35mの大型円墳である。玄室には家形石棺が納められていた。報告によるとこの石棺内には土砂の混入がみられず、副葬品はほぼ原位置を保つものと考えられる。副葬品の

先端を足方向に向けた長頸式鉄鏃の束、足元付近に馬具が副葬されている。古墳時代後期に属する門の山9号墳(3)は径8mの円墳で、木棺内部の腕部周辺より刀が出土している。TK47型式段階の門の山8号墳第1主体は、内部主体の掘り方が検出されていないが、脚部周辺の位置から刀、腰部にあたる位置から刀子が出土している。

他にも岡山県北部の例として、TK208型式段階と考えられる真庭市大木2号墳(江見編1996)も、厳密な位置は特定できないが腕部周辺から脚部周辺にかけて刀が副葬される。また山之城1号墳(下澤編1987)では、左右の腕部周辺に刀が配置される他に、枕石の下より剣先状の鉄器が出土している。

岡山県南部に目を転じてみよう。長頸式鉄鏃の存在から前方後円墳編年7期(広瀬1991)に位置づけられる岡山市後池内古墳(中野編1992、4)は、箱式石棺を主体部とする径9mの円墳であるが、石棺内において遺骸の上面を厚い精良な白色粘土が覆う点において特異である。粘土層の下より歯が検出され、副葬品としては頭部周辺に鉄鏃と刀子、右腕部周辺に剣が配置される。なお、粘土層上面には副葬品は認められず、石棺蓋と粘土層との間には埋葬はなされなかったものと考えられている。

TK10型式ごろの径10~11mの円墳である総社市法蓮40号墳(村上編1987、5)では、左腕部周辺より刀が出土している。また、棺外から胡録金具を伴う鉄鏃1束とそれを有さない鉄鏃1束、短甲片が出土している。TK23・47型式段階の総社市中山6号墳は、天狗山古墳と同様に「渡来系」竪穴式石室を有すると考えられている小方墳であるが、この古墳においても腕部周辺に刀が配置されている。他にも岡山県南部の例として、「渡来系」竪穴式石室とされる総社市中山6号墳第1主体(江見編1997)でも左腕部周辺より刀が出土している。このように小規模墳においても腕部周辺や腰部に配置がみられる点で、当該期の有力墳と共通するものといえる。

(3) 岡山地域における副葬品配置の時期的展開

ここまでの事例分析と、筆者がかつて検討した弥生時代後期から古墳時代前期の様相(光本2002)をあわせて整理すると、岡山地域における副葬品配置は大きく二つの時期に区分して捉えることができる。第一の段階は、弥生時代後期4段階から古墳時代前期である。この段階は、頭部周辺への集中的配置の盛行と、首飾りを除けば身体への副葬品の着装が低調であることを特色とする。一方、第二の段階は古墳時代中期から中期から後期である。この段階は、①身体各部位への分散的配置が盛行し、相対的に頭部周辺への配置が低下することと、②刀剣や胡録の配置にみられるように着装を喚起させる配置の増加、そして③日常的な機能・役割に基づく副葬品の分節化を特色とする。これらの時期的特色は、墳丘規模や墳形の差異を越えた共通性であるといえる。こうした副葬品配置の時期的変化は、近畿地方の一部地域を対象とした変遷(光本2001、2006)と同様のものといえる。すなわち、地域の枠を超えて一定の原理が、副葬品配置に働いていたものと理解されよう。

①・②の具体的状況については事例分析を通じてみてきたが、副葬品が身体各部位に分散し、かつ着装を示す配置が増加することの前提となるのは、副葬品が日常的な機能・役割に基づいて個別的に分類・分節がなされることにあるといえる。

この点に関連して、中期~後期が身体付近への着装的な配置を特色とする一方で、物の種類によって着装的か否かが異なる副葬品も存在することは注目できる。すなわち胡録金具を伴う鉄鏃束と、それを有さない鉄鏃束とで配置に差が生じている。胡録金具は棺内の短辺や棺側といった非着装の状態で出土するのに対し、胡録金具を伴わない鉄鏃束には被葬者の右腰に先端を足側に向けた、胡録を着装した状態を想起させる配置が認められる。

このことから、胡録金具を伴う鉄鏃束とそれを伴わないものとは、葬送儀礼というコンテキストにおける着装に対する意識に差が存在していたことがわかる。そして金具を有する構造か否かという質的な差によって、葬送儀礼における胡録の役割が細分されていたものと考えられる。

(4) 配置場所にみる階層性

墳丘規模や墳形の差異を越えた共通性が、中・後期の副葬品配置に認められる一方で、階層的要因によって異なる様相もみることが出来る。すなわち有力墳では頭部周辺への鏡の配置がひろく認められるのに対し、小規模墳においては頭部周辺への配置が認められないことは、注目すべき現象であるといえる。有力墳の被葬者頭部に配置された鏡は、小形仿製鏡を主体とする。今井堯の研究によると古墳時代の吉備においては、鏡径による身分秩序の存在が提起されている（今井1992）。鏡の副葬自体に、階層的関係を表示する意義があるものといえる。

鏡の配置は有力墳と小規模墳との差異を明示化する要素であるとともに、有力墳の中においても、一古墳あるいは一主体部内においてもっともランクの高い被葬者のみが対象となる例がみられることは注目されよう。例えば堅穴式石室と粘土槨を有する随庵古墳では、鏡の頭部配置は堅穴式石室のみである。また4体の被葬者が想定される四つ塚13号墳において、鏡が頭部に配置されるのは中央主体北被葬者のみである。したがって頭部周辺への鏡の配置は、有力墳の中でも特定のもっとも中心的な埋葬においてなされるものと評価できる。すなわち鏡の頭部配置は、古墳間とともに一古墳内における階層的関係を再確認する行為として位置づけられる。

頭部周辺へ鏡を配置するという方式は、前期における頭部に三角縁神獣鏡や画文帯神獣鏡などを配置する方式からの流れを汲むものとみることが出来る。兵庫県権現山51号墳（近藤編1991）や奈良県黒塚古墳（奈良県立橿原考古学研究所編1999）はその古墳時代前期において鏡を頭部に配置した典型である。こうした観点からは、中・後期における頭部への小形仿製鏡の配置は、前期以来の伝統的な鏡の配置方式を踏襲したものとみることが出来る。そして、そうした踏襲がなされたのは上位の被葬者に対する配置行為においてといえる。すなわち上位の被葬者への副葬品配置には、伝統的要素が保持されていたものといえよう。

その一方、前期における鏡の配置が頭部周辺に限定されるものではなく、脚部側や棺外にも認められることにも注目しなければならない。すなわち、中・後期における鏡の頭部配置は、単に前代からの伝統の保持を意味するのではなく、副葬品配置の時期的変化の中で新たに再定義されたものであると考えられる。頭部を上、足元を下とする人間の身体を基準とした方向感覚が、階層的関係をイメージする際の普遍的基盤と認めるならば（光本2003）、頭部は階層的上位を意味するゾーンとみることが出来る。こうした頭部に対する鏡の配置が、中・後期における上位のランクの主体においてなされていることは、上位の被葬者に限って階層的上位の身体部位が重視されたこと、逆に下位のランクの被葬者については、階層的上位を暗示する頭部が葬送儀礼において強調されなかったことを意味する。すなわち中・後期においては被葬者のランクと身体部位の階層性が対応することを、鏡の頭部配置は物語るものと考えられる。

以上のように論述するならば、中・後期の鏡の頭部配置は、伝統的要因と階層的要因が組み合わさることによって生まれた配置方式と考えられる。被葬者身体は、副葬品配置という行為によって伝統と階層性を象徴的に表示する場となっていたものといえよう。

(5) 伝聞記録の妥当性

ここまで岡山地域における副葬品配置の時期的差異を検討し、中・後期の副葬品配置の特色について概観してきた。小論の目的のひとつである天狗山古墳の副葬品配置に関する伝聞情報の蓋然性について比較した場合、大卒において中・後期の状況と一致するものと判断することができる。

まず、被葬者の身体周辺をみてみよう。第一に、身体周辺への配置全体を見た場合、頭部のみに副葬品が集中することなく、腕部周辺へ副葬品が分散していることは、当該期の特色を示す。第二に、刀剣が腕部周辺に配置される状況は、当該期に特有の着装的配置を示すものといえる。第三に、頭部周辺へ鏡の配置が記録されているが、この様相は上位のランクの主体における様相と一致する。天狗山古墳が墳長約57mの帆立貝形前方後円墳であり、本主体部はその中心埋葬と考えられることから、先にみた上位のランクの主体と同様に、階層的上位の一群として捉えることができる。

また、金銅装胡鐐の配置場所にも注目できる。金具を有する胡鐐については、被葬者の身体から離れた場所に配置されることをみてきたが、本例もその状況と一致するものといえる。なお、胡鐐や同じ小口に立てかけられた鉄鏃束が、棺内か棺外であったかは、鏃の出土場所が厳密ではないため判然としない。ただし、同様の竪穴式石室でかつ鏃を伴う木棺が納められた随庵古墳では、同じように棺外の石室小口より鉄鏃が出土している。したがって、天狗山古墳においても胡鐐及び鉄鏃は棺外副葬であった可能性が高い。こうした観点によれば、天狗山古墳における反対側の小口に平行するかたちで出土したとされる鉄剣もまた、棺外遺物であった可能性があるだろう。

このようにみると、細部の位置関係の妥当性については不明であるものの、伝聞記録は中・後期の副葬品配置として矛盾なく位置づけることができる。また、こうした石室構築後の副葬品配置については、当該期の岡山地域の副葬品配置と同様の論理において成り立つことを示唆する。副葬品や石室の形状から渡来系の要素の強い古墳として認識される本古墳であるが、ここまで検討してきた副葬品配置に関しては際立つ個性があるわけではなく、当該期に共通の方法に準拠したものといえよう⁽³⁾。

3. 埋葬に先行する副葬行為

今回の調査によって、石室床面の下位より、鉄鉾1点、鉄槍3点が新たに出土した。これら武器類は、サブトレンチによって偶然発見されたものであり、石室倒壊の危険性からサブトレンチを拡張して鉄器が出土した面の全体的状況を知ることはできなかった。調査の所見をまとめると、武器類が副葬され、石室床面が構築されるまでに次のような過程を経たものと考えられる。

①地山を墓坑状に掘り込む→②石室設置場所に壁体構築のための溝を掘る→③壁体を積み重ねつつ粘土を貼る→④武器類の配置→⑤武器類の上に粘土を貼り、壁体を構築→⑥床面の円礫を敷く

上記の過程からわかるように、武器類が副葬されたのは石室構築開始後でありかつ石室床面完成前、すなわち石室床面構築途上の副葬であるといえる。これは、今尾文昭が示した配置の第一段階に位置づけた棺内配置（今尾1984）に先行するものと考えられる。近年、墳丘構築途中あるいは石室構築前の、副葬品の出土事例が玉城一枝や土生田純之によって検討されている（玉城1994、土生田1998・2003）。玉城は、埋葬施設への副葬に先立つ玉類を用いた儀礼の例を集成し、そうした玉類が被葬者と密接に関わる品であることについて論究している。土生田は、構築前の火の使用痕跡や土器類を中心とした儀礼の例について集成し、検討を行うとともに、7世紀段階に属する群馬県剣崎長瀬西27・35号墳に関する調査研究の中で、横穴式石室構築途上の鉄鏃を用いた儀礼の意義について考察している。

埋葬に先立つ儀礼の痕跡が検出されるのは調査段階の確認の有無によるところが大きい。本古墳の状況と比較しうる例はおのずと限られる。そうした中、群馬県剣崎長瀬西27・35号墳（土生田編2003、土生田2003）における鉄鏃の出土例は武器の副葬という点で示唆的である。剣崎長瀬西27号墳では、玄室側壁の裏込め層の中から、同35号墳では、羨道床面下の基盤層から出土している。特に35号墳から出土した1点の鉄鏃は、仕上げの加工がなされておらず、実用品ではなく儀器として理解されている。こうした鉄鏃について、土生田は鳴弦の儀礼と解釈している。

石室構築途上に限らず、武器ないし鉄器に関する埋葬に先行する副葬事例についてみた場合、岡山地域においても少数ながら類例を求めることができる。山之城1号墳では、枕石の下から剣先状の鉄器が出土したことが報告されている。これは、遺骸が搬入される前に配置されたものとみることができる。また随庵古墳中央石室では、棺外副葬とされる鉾と槍が類例の候補となる。いくぶんの二次的移動は想定する必要があるが、これら鉾と槍を、特に南側長辺のものに関しては、納棺後に棺と石室長辺との間に副葬するにはいささか無理があるだろう。石室長辺寄りに鉾・槍が配置された後に、棺が設置されたものと考えられる。

翻って、天狗山古墳から出土した床面構築途上の武器類は、どのように評価できるだろうか。まず武器

類の内容をみると、これらは石室内の副葬品とは異質なものと見える。鉾と槍という長柄の副葬品については石室内からは出土しておらず、本古墳の床面構築途上の副葬における固有の品目となっている。鉾については、高田貫太が論究するとおり（高田1998）、他の副葬品とは異なる棺外などから出土することが知られており、本例もそれに該当する。こうした本古墳における床面構築途上の武器類は、石室内の副葬品とは異質であるという点において、埋葬に先行する儀礼で用いられたとみなしてよいだろう。その儀礼については、高田が鉾の儀礼に、また土生田が鉄鏃の儀礼において見出したように僻邪にかかわるものと想定しうるだろう。

4. おわりに

小稿では、天狗山古墳の副葬品配置について、比較による伝聞記録に関する検証と、新たに発見された埋葬に先行する副葬品に関する検討を目的に議論をすすめてきた。朝鮮半島の事例との比較等、まだ多くの課題をのこしており、それらは他日に期したいが、今回の基礎的考察が本古墳を歴史的に評価するに際しての一助となれば幸いである。

註

- (1) 小稿では、和田晴吾による古墳時代の時期区分（和田1987）に従い、後期の始まりを TK23型式段階としている。
- (2) 表6については、光本2013でも概略を述べた。
- (3) このことは中・後期の古墳における副葬品配置に、渡来系文化が反映されていないことを意味するものではない。
- (4) 箱式石棺内部の白色粘土下から埋葬施設が検出された後池内古墳は、本例を評価する上で注意を要するが、天狗山古墳の場合は本文で述べたとおり副葬品の内容から考えて埋葬に先行する儀礼行為によるものと理解される。

引用・参考文献

- 今井 堯1992「吉備における鏡配布体系」『吉備の考古学的研究』下、山陽新聞社、23-45頁
- 今尾文昭1984「古墳祭祀の画一性と非画一性—前期古墳の副葬品配列から考える—」『榎原考古学研究所論集』第6、111-166頁
- 末永雅雄1941『日本上代の甲冑』岡書院
- 高田貫太1998「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』第45巻第1号、49-70頁
- 高田貫太1999「瀬戸内における渡来文化の受容と展開—5世紀代の墓制を中心として—」『渡来文化の受容と展開』第46回埋蔵文化財研究集会、167-202頁
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- 玉城一枝1994「古墳構築と玉使用」『博古研究』第8号、12-34頁
- 西川 宏1986「天狗山古墳」『岡山県史』第18巻、考古資料、岡山県、360-361頁
- 土生田純之1998『黄泉国の成立』学生社
- 土生田純之2003「古墳構築過程の儀礼（箭弓の儀礼）」『剣崎長瀬西5・27・35号墳』専修大学文学部考古学研究室、86-90頁
- 広瀬和雄1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社、24-26頁
- 光本 順2001「古墳の副葬品配置における物と身体分類及びその論理」『考古学研究』第48巻第1号、96-116頁
- 光本 順2002「弥生から古墳時代における副葬品配置の展開—岡山地域の事例と分析—」『環瀬戸内海の考古学』、149-166頁
- 光本 順2003「世界像としての古墳被葬者の身体—死者の身体をめぐる行為と認知—」『認知考古学とは何か』青木書店、129-142頁
- 光本 順2006『身体表現の考古学』青木書店
- 光本 順2013「副葬品組成とその意義」『古墳時代の考古学』4、副葬品の型式と編年、同成社、246-255頁
- 村井崙雄1966「岡山県天狗山古墳出土の遺物」『MUSEUM』250号、4-17頁
- 用田政晴1980「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』第27第3号、37-54頁
- 和田晴吾1987「古墳時代の時期区分をめぐる」『考古学研究』第34巻第2号、44-55頁

遺跡文献

【後池内古墳】中野雅美編1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会／【岩田古墳群】神原英朗1976『岩田古墳群』岡山県山陽町教育委員会／【大木1号墳】江見正己編1996『宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・粧田山城跡・大村遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113 日本道路公団広島建設局高梁工事事務所・岡山県教育委員会／【男戸嶋古墳】小郷利幸編1998『有本遺跡・男戸嶋古墳・上遠戸嶋遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集 津山市都市開発公社・津山市教育委員会／【門の山古墳群】小郷利幸編1992『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集 佐良山門の山古墳群発掘調査委員会・津山市教育委員会／【金蔵山】西谷真治・鎌木義昌1959『金蔵山古墳』倉敷考古館／【黒塚古墳】奈良県立橿原考古学研究所編1999『大和の前期古墳Ⅲ黒塚古墳調査概報』学生社／【権現山51号墳】近藤義郎編1991『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会／【正崎2号墳】宇垣匡雅・高畑富子編2004『正崎2号墳』岡山県山陽町教育委員会／【随庵】鎌木義昌編1965『随庵古墳』総社市教育委員会／【月の輪】近藤義郎編1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会／【中宮1号墳】近藤義郎編1952『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市／【中山6号墳】江見正己編1997『藪田古墳群・金黒池東遺跡・奥ヶ谷窯跡・中山遺跡・中山古墳群・西山遺跡・西山古墳群・服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会／【長畝山北古墳群】行田裕美・木村祐子1992『長畝山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集 津山市教育委員会／【剣崎長瀬西27・35号墳】土生田純之編2003『剣崎長瀬西5・27・35号墳』専修大学文学部考古学研究室／【橋本塚1号墳】平岡正宏編2003『橋本塚古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第73集 津山市教育委員会／【法蓮40号墳】村上幸雄編1987『法蓮40号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告4 総社市教育委員会／【八幡大塚2号】鎌木義昌・亀田修一1986『八幡大塚2号墳』『岡山県史』考古資料／【四つ塚13号】近藤義郎1954『蒜山原－その考古学的調査－』岡山県／【山之城1号墳】下澤公明編1987『山之城古墳群』北房町埋蔵文化財発掘調査報告6 北房町教育委員会

図出典

図69：末永1941、図70－1：西谷・鎌木1959、2・3：近藤編1960、4・5：鎌木編1965、6：宇垣・高畑編2004、7・8：近藤編1954、9：鎌木・亀田1986、図71－1・2：行田・木村1992、3：小郷編1992、4：中野編1994、5：村上編1987

4. 周濠の地方伝播に関する一試論—吉備の事例を中心に—

宇垣 匡雅

1. はじめに

天狗山古墳は底面幅2.5mの周濠と基底幅7.5m、高さ2mの周堤を伴う。高さ9.7m、全長57.0mの墳丘を深い周濠と高い周堤が取り巻いており、岡山県下でも屈指の保存状態の良さと威容を示す古墳と言ってよい。

第Ⅱ部第3章において述べたように周堤は基本的に地山の削り出しによって形成されるが、前方部側では盛土によって構築される。周濠も大部分が地山の岩盤を掘削して形成されているが、尾根が狭くなる前方部西側では周濠底面近くまで盛土が見られ、全周する周濠と周堤を形成するために大規模な造成、盛り土作業がなされたことを示している。底面は墳丘前端側と後端側で約0.8mの差をもつが、地形の傾きを考慮すれば水平に近いと言って良い。

周濠には0.5～1mの暗褐色土が堆積している。下部の堆積土は粘質をもつとはいえ粘土層や有機質層ではなく、滞水状況ではなかったことを示している。これは山頂という古墳の立地からすれば当然なことであり、降雨後にわずかに水が溜まる程度で、常には空濠の状態であったと判断される。

天狗山古墳はきわめて整った周濠と周堤をもつが、こうした例は吉備にあっては少数である。ここでは吉備の古墳の構成要素のなかにどのように周濠と周堤が採用されていくのか、またそれはどのような意味をもつのかを考えてみたい。なお、中期の古墳において周濠と周堤は基本的に一体のものと考えられるが、周堤は天狗山古墳のようによほど遺存状態が良い、あるいは両宮山古墳のように巨大な規模をもつ場合には確認できるものの、幅や高さを確認できるほどの残存状態にないことが多く、また、発掘調査例も少ないため、ここではおもに周濠を検討の対象とする。

なお、周濠のうち巨大古墳を中心に採用される2重周濠については、別稿（宇垣2006b）において評価を試みているので参照願えれば幸いである。

2. 資料の問題点と研究の課題

周濠は、中期の古墳、なかでも巨大古墳では基本的な属性の一つである。しかしながら、墳丘の築造企画を検討する際などに要素の一つとして取り上げられることはあるものの、それ以上に検討の対象となることは少ない。これは巨大古墳の周濠の多くが陵墓域に含まれるため、また、常時湛えられた水のために観察がむずかしいこと、そしてそれ以上に、幕末の修陵、その対象とならなかった場合でも溜池として利用される過程で改変や浸食を生じており、測量図から得られる平面形をそのまま検討材料とはしがたいことによる。また、もう一つの問題点は、周濠が比較的浅かった場合、しばしば完全に埋没し、あるいは埋め立てられていることであり、地表に畦畔として痕跡が残れば良い方で、場合によってはそれすら残さず確認調査によってはじめてその存在が明らかになることも少なくない。

こうした資料化のむずかしさが周濠の比較検討の妨げとなっており、概括的な研究は比較的少ない。白石太一郎氏は巨大古墳の周濠資料の検討をもとに周濠の変遷過程を示し、さらに周濠の意義を論じた（白石1993）。また、一瀬和夫氏は、その後蓄積された資料をもとに周濠を含む外域施設に新たな要素が付加されていく過程を整理し、変遷の諸段階を設定した（一瀬1992）。両氏の論はともに畿内中枢の資料を用いたものであるが、畿外に点在する周濠をもつ古墳にも注意がはらわれている。白石氏は畿内からの伝播であることを示唆するにとどめるが、一瀬氏はそれらが畿内からの影響のもとに構築されたとする評価を示している。

なお、ここで述べる古墳の「ほり」をどう呼ぶかについては、いくつかの提言がなされている。小林行雄氏は周濠と呼ぶ（小林1959）のに対し、白石氏は水をたたえた「ほり」を周濠、「からほり」あるいは溝状をなすものを周溝とする。一方、茂木雅博氏は後世の改変によって「からほり」が濠に改変された可能性を指摘し、基本は隍（からほり）であるとした（茂木1992）。「ほり」が水ほりであったか「からほり」であったかは、周濠の機能や古墳の景観を考えるうえで重要な意味をもつことは言うまでもないが、現状において多くの資料を弁別することはきわめてむずかしい。現在見られる大量の水を湛えた状態ではなく浅い水深であるが、畿内を中心に水ほりであったことが確認された資料が増加しており、一方で天狗山古墳のように水ほりとなることは企図されなかったとみられる資料も少なくない。水ほりになるかどうかは地下水位の高さや周囲からの水の流入量に係ると理解するなら、築造時の選地がそれを決する要素であって、形状など他の要素からの区分はきわめてむずかしいことになる。そのためここでは水ほりと「からほり」の区分は行わず一括して周濠⁽¹⁾と呼ぶ。

なお、吉備の古墳に限って述べるなら、巨大古墳、造山古墳と両宮山古墳の対照的な景観、墳丘が平地に屹立する造山古墳と水濠をめぐらせる両宮山古墳の対比から、周濠をもつ古墳とそうでない古墳が中期に混在することは早くから注意を引いてきた。ただし、畿内の巨大古墳と同様の景観をもつ両宮山古墳が目立った存在であるため、ややもすればこの古墳の特異性として扱われがちであったと言える。

3. 吉備の古墳の周濠

①前期

検討にあたり、吉備の古墳において周濠がどのように採用されているかを整理する。

吉備を代表する前期古墳として、浦間茶臼山古墳や備前車塚古墳、七つ埴1号墳などをあげることができる。このうち墳丘の発掘調査が実施された七つ埴1号墳（図72-1）を例にとれば、墳丘が細い尾根の上に築かれているため周濠がめぐる余地は全くなく、本来、周濠をもつことが企図されていなかったとみられる。これは他の1期の古墳についても同様であり、尾根を切断して墳丘を形成したため尾根側に幅の広い溝状の掘削が認められる操山109号墳のような例はあるが、それが周濠となって墳丘をとりまく例は認められず、吉備の前期古墳の構成要素のなかに周濠はなかったとみてよい。

この状況は4期まで変わらない。4期を代表する古墳に金蔵山古墳があるが、尾根稜線側を若干の掘り込んで墳端を下げ、墳端の高さの調整を試みている可能性があるが、周濠はない。同時期の神宮寺山古墳は沖積平野の微高地を利用して築かれた古墳であり、周濠の存在が想定されたこともあるが、明確な根拠はなく周濠はなかったと考えられる。

②中期～後期

吉備の古墳が周濠を伴うのは中期、5期以降である。それらを時期別に示せば、以下のようになる。

5期 小盛山古墳105m（以下m略）

6期 造山古墳350 造山4号墳55

7期 造山2号墳 小造山古墳133 宿寺山古墳114 双つ塚古墳60 両宮山古墳206

和田茶臼山古墳55 森山古墳84

8期 夫婦塚古墳45 天狗山古墳57 仙人塚古墳43 東塚古墳50 朱千駄古墳85 小山古墳67

築山古墳81 牛文茶臼山古墳48 鹿歩山古墳81 十六夜山古墳60

5期 小盛山古墳が周濠をもつ古墳として最も早い資料となり、6期の造山以下の古墳がこれに続く。小盛山古墳（2）は全長105mにおよぶ大形の帆立貝形古墳であるが、周濠は底面幅8m前後と狭い。墳丘と東側の丘陵の間の周濠には溜池が設けられており、西の平野側は弧状に畑がとりまく（草原1996）。山側にあたる東半部には周濠がめぐり、西半にはそれに続く地割りがあったと推定できるが、濠が西半まで完周するものであった可能性は低く、掘り込みをもたず周庭状になっていたと推定される。

6期 造山古墳の築造ののち7期にかけて周辺に陪塚群が形成されており、これらがここで取り扱う資料となる。造山古墳(4)では墳丘をとりまく盾形の地割りを見ることができ、確認調査の結果、この位置に周堤が存在することが明らかになった。その内側の周濠の幅は約20mと推定されており、周堤斜面の傾斜はきわめて緩やかで濠は浅く、底面の標高は前方部側と後円部側で異なる(新納編2012)。畿内の巨大古墳の周濠の正確な数値を示すことはむずかしいものの、墳丘規模が造山古墳に近い上石津ミサンザイ古墳では周濠の幅は40m以上となる。

また、部分的ではあるが発掘調査が実施された造山4号墳においては、幅の広い周濠が後円部をとりまくものの、前方部側は掘り放した形状、あるいは前方部まで達しないかのいずれかと想定されている(安川1998)。

このように、周濠は設けられるものの同一水面を形成するような濠ではなく、多くが完周しないものであったとみられる。また、この時期、周濠をもつ例は造山古墳とその陪塚に限られ、周濠をもたない古墳のほうがむしろ多い。一本松古墳、随庵古墳、岩田3号墳などがそれである。このことは造山古墳群の卓越を示す事象と言えるが、それだけでなく、陪塚に主墳と同様の要素が与えられたことを示している。同様のあり方はともに2重周濠をもつ主墳・両宮山古墳と陪塚・和田茶臼山古墳においても認められ、主墳と陪塚の関係を考える上で重要な手がかりになると考える。

7期 6期に見られた地域的な偏りが見られなくなり、備中南部の小造山古墳(3)、宿寺山古墳(6)、備中南西部の双塚古墳、備前の両宮山古墳(5)、森山古墳(7)と、吉備南部全地域において周濠をもつ古墳が築かれる。これらのうち、小造山古墳は上記6期の例と同じく周濠は完周せず前方部側が開くのに対し、他の4基はいずれも完周する周濠をもつ。埴輪から小造山古墳は宿寺山古墳よりも先行するとみてよく、両宮山古墳も7期のなかでも新しい段階に位置付けられる。これらのことから、古い形態の周濠をもつ小造山古墳は他の4基に先行すると推定できる。後述のように続く8期の周濠は完周を基本としており、周濠形状の転換はこの期のなかでなされると判断できる。

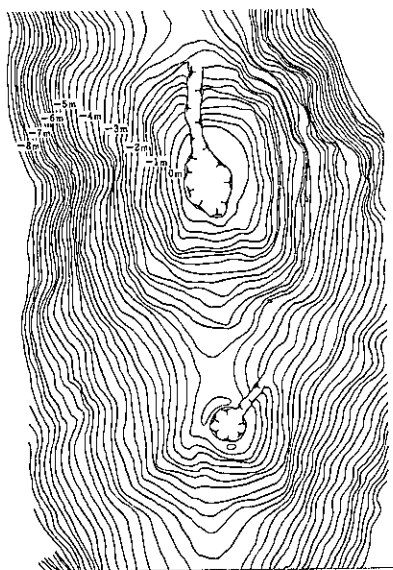
両宮山古墳に代表される新しい様相の周濠は幅が前時期のものにくらべて広く、完周し、底面の高低差も小さいとみられる。この期の資料のうち両宮山古墳のそれは現在水をたたえるが、山麓の緩斜面を深く掘り込んで周濠が設けられており、湧水等によって水濠をなしていた可能性が考えられる。この古墳では前方部側には高さ2.5mの周堤が設けられている。また、宿寺山古墳も周濠跡に設けられた水田は「池田」等の小字であり(葛原1987)、水濠であったと可能性がある。残存する周堤は現水田面から約1mと高い。

6期の周堤は造山古墳のものがあるが、その規模は小さい。それに対して、周濠が完周しない小造山古墳でも周濠外側に周堤が遺存しており、両宮山古墳、森山古墳、宿寺山古墳などでは規模の大きな周堤を伴っており、地表に残る規模の周堤はこの時期にはじまる可能性がある。

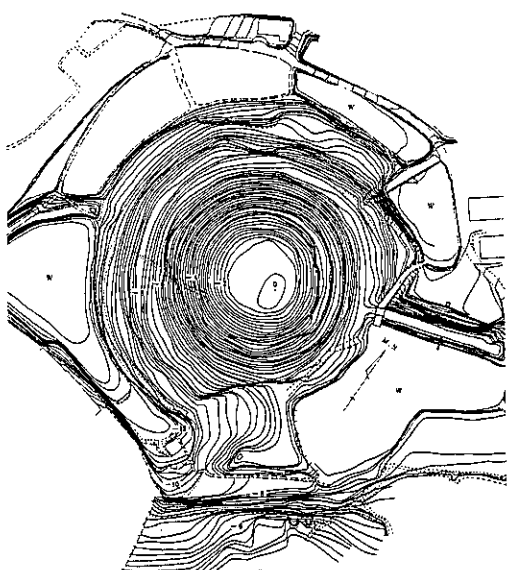
なお、吉備では2重周濠は7期に出現し、8期に増加する(宇垣2006b)。

8期 周濠は主要な首長墳において一般化する。その代表となるのが天狗山古墳である。

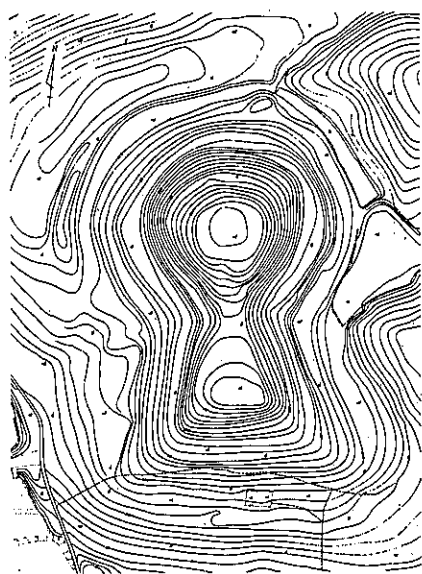
なお、先に示した古墳のいくつかは周濠が想定されていなかった資料であるため、若干説明を加えておく。朱千駄古墳は墳丘および周辺の改変が著しいが、山麓に築かれた前方後円墳で東西に主軸をとる。墳丘南側には池が設けられるほか前方部前面側が一段低くなっており、本来は周濠がめぐっていたとみられる。ただし、古墳が山麓斜面に位置するため、周濠底面はかなり斜めになる可能性が強い。また、小山古墳は低い尾根上に築かれた古墳で南北に主軸をとる。現在は北側の後円部後端に周濠の痕跡を残すのみで畑地化による改変が大きい。墳丘をとりまく周濠を想定することができる。その他、牛文茶臼山古墳(8)は墳丘周辺に周庭帯状に畑がめぐるが、これは周溝と周堤が畑の造成によって一体となったものとみられる。7期以降、吉備南部においては各地域ごとに首長墳の築造が再開されるが、8期にはそれはさらに活発化する。帆立貝形古墳を含めて多数の首長墳の築造がなされ(宇垣2004a)、そのほぼすべてに周濠・周堤を伴う。この時期、小墳において埴輪の使用が活発となり、首長墳に限定されていた要素の一部が下位に導



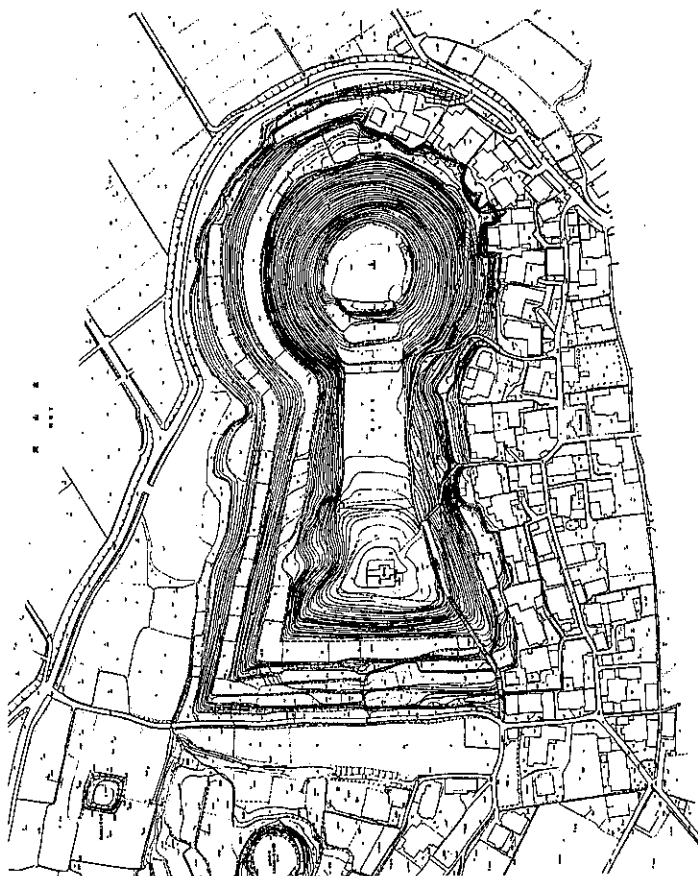
1.七つ坑1号墳



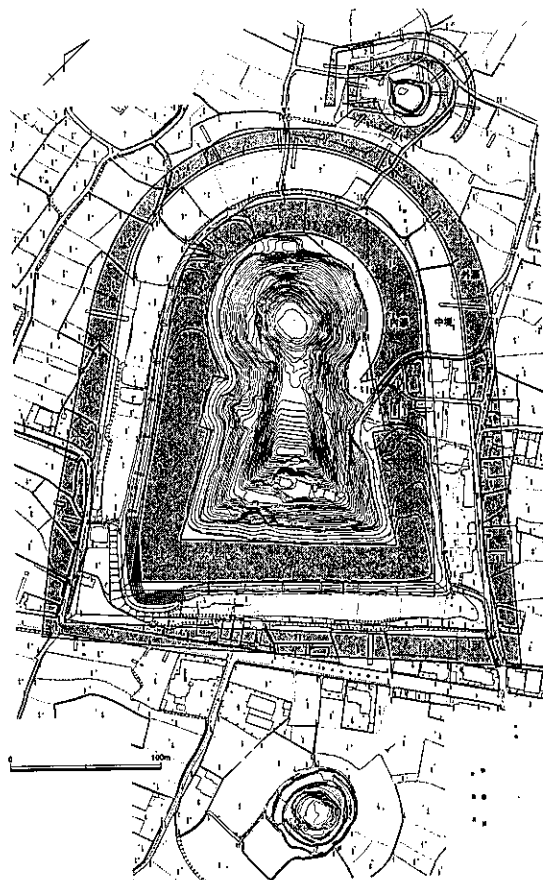
2.小盛山古墳



3.小造山古墳

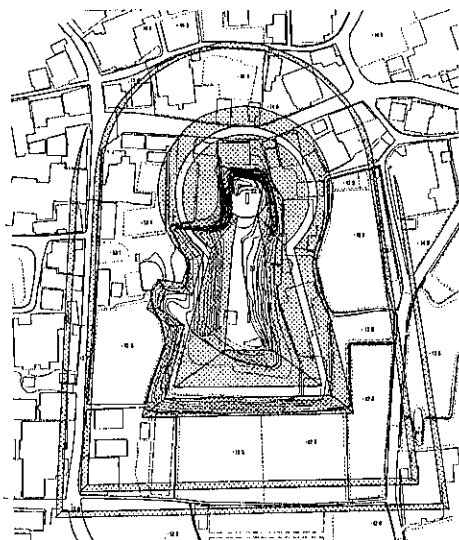


4.造山古墳

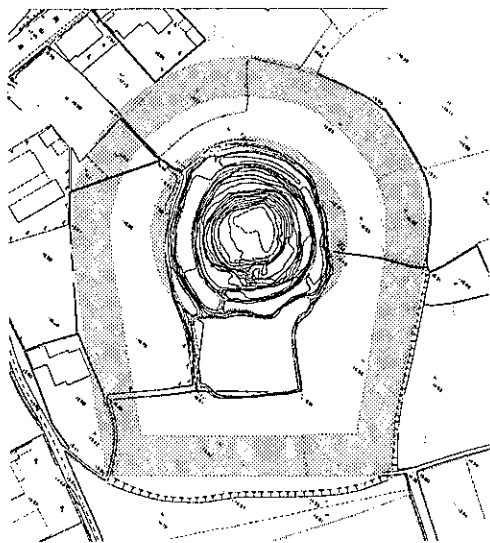


5.両宮山古墳

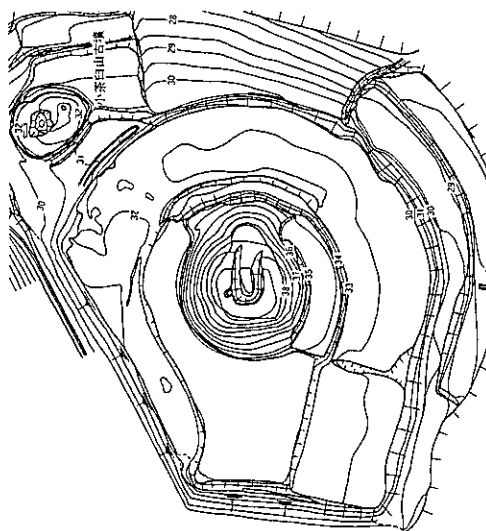
図72 吉備の古墳の周濠（1）



6.宿寺山古墳



7.森山古墳



8.牛文茶臼山古墳

図73 吉備の古墳の周濠 (2)

入されると評価できる(宇垣2006a)が、小墳は墳丘をとりまく溝をめぐらせることは多いものの、それらは浅く不整形で周堤は認められない。それと首長墳の周濠との差は大きく、周濠は首長墳の構成要素として保持されるとみられる。

9期 発掘調査によって墳丘の詳細が確認された資料は9期でも後半に限られ、その前半期-MT15型式段階の様相がやや不明確ではあるが、周濠の消滅がこの期の特徴となる。

この期の前半段階と推定されるものとして波歌山古墳、船山古墳、廻り山古墳がある。波歌山古墳は発掘調査を経ずに消滅したため確実ではないものの、測量図から少なくとも規模の大きな周濠はなかったと言えるし、船山古墳も周濠は伴わないとみてよい。廻り山古墳は墳裾に畑がめぐっており周濠の想定が不可能ではないが、その場合でも広い周濠を想定することはむずかしい。後半の資料としては二万大塚古墳、斎富2号墳があり、ともに周濠を伴わない。この期の資料で確実に周濠をもつ例は認められず、周濠の採用は8期の盛行の後、急速に衰退するとみられる。

10期 箭田大塚古墳がある。大形の円墳で、周囲に周濠をめぐらせる。また、江崎古墳では群集墳を構成する円墳の場合と同様、山側となる前方部から後円部北半にかけて周溝(周濠)を設ける。一方、同時期の前方後円墳、備中こうもり塚古墳や二塚山古墳、亀ヶ原大塚古墳などでは周濠は設けられない。

周濠は基本的に設けられなくなるが、一部で採用される。箭田大塚古墳は大形円墳であることとあわせ、以前の周濠の系譜に連なるものではなく、完周する周濠が再度導入された可能性も考えられる。

③周濠の変遷

以上、吉備南部の首長墳について周濠の採用状況を概観した。一般的な存在と見られがちな周濠は5～8期に限定されたものである。その形状とあり方は7期のなかで変化しており、そこを画期として前半と後半に区分することができる。前半期(5～7期前半)には3段築成で大形の墳丘をもつ大首長墳およびその陪塚に採用される。周濠が完周する例は稀で、完周する周濠を構築することが企図されていなかったか、それを考慮した選地がなされていなかった可能性がある。一方、後半期(7期後半～8期)には完周する周濠が首長墳において広く採用され、2重周濠をもつものも現れる。そして、この盛

行の後、周濠は吉備南部においては急速に採用を停止する。

この出現・消滅過程から明らかなように、吉備の古墳にとって周濠は後出の要素である。吉備における周濠の変遷は、周濠の発展・改良を示すかに見えるが、同時期の畿内の古墳の周濠が完成の域に達していることからすれば、それは、周濠が当初から完全な形で吉備にもたらされたのではなく、少なくとも二段階にわたる形で導入がなされたことを示すと言える。

4. 周濠の地方伝播

①各地の様相

以下に示すように、前方後円墳の成立以来一貫して周濠を設け、それを整備し型式化していくのは大和、後には河内地域である。墳丘に次ぎ、後には墳丘を凌駕する面積をもつ周濠は、主体部の隔絶のための装置の一つとしてはじまり、後には古墳を人為的な景観として視覚的に表示する施設として展開すると考えるが、古墳の多くの構成要素のなかでも常に重要な位置を占め、その存続期間はきわめて長い。その周濠が大和に起源をもち、新たな要素として各地域の古墳に付加されると整理できるとするなら、それは、きわめて単純に述べれば、各地域の古墳が、少なくとも見かけの上で「畿内型古墳」化すると言ってよいだろう。

ただし、東日本、あるいは北部九州などの前期古墳の周濠が、前方後方形周溝墓などそれまでの墓制に由来する可能性、また、吉備の場合のような段階的な導入も考えられる。このことについては、地域ごとに周濠の様相を検討していく必要がある。したがって課題は残るが、周濠の「伝播」の状況を把握するため、以下ではいくつかの地域を抽出してその変遷を概観しておく。

大和 1期を代表する巨大古墳・箸墓古墳には周濠を伴うことが明らかになっており、3期の行燈山古墳、渋谷向山古墳には渡り土手で区切られた階段状の周濠が設けられる。4期の宝来山古墳で周濠は水平となり、古市古墳群よりも一時期遅れるが5期には市庭古墳に2重周濠が採用される。以後も佐紀古墳群、馬見古墳群を中心に周濠をもつ巨大古墳の築造は継続し、この状況は10期の平田梅山古墳、見瀬丸山古墳まで継続する。前方後円墳の出現から消滅まで一貫して周濠が採用されているわけであり、こうした特徴をもつ地域は大和に限られる。

河内・和泉 和泉における周濠の出現は3期の摩湯山古墳と早いですが、河内はそれよりも遅れる。河内では玉手山古墳群、松岳山古墳など3期までの主要古墳は丘陵上に設けられ、周濠をもたない。続く4期には古市古墳群の築造が開始され、津堂城山古墳が築造される。よく知られるように津堂城山古墳には広大な内濠が設けられるだけでなく、中堤と外濠が設けられ、新たに2重周濠が創出される。以後、6期の萱田山古墳、7期の大山古墳などの大王墳には3重の、それに次ぐ規模の大形墳には2重あるいは1重の周濠が設けられ、それをとりまく陪塚にも周濠が設けられて百舌鳥、古市古墳群の景観を形成する。この周濠の盛行は7期のニサンザイ古墳、8期の岡ミサンザイ古墳を経て9期河内大塚古墳まで継続する。

それまで周濠の伝統がなかった河内に古市古墳群が出現し、そこに他地域にさきがけて2重周濠が出現することは、古市古墳群の淵源が大和にあること、そして新たにこの古墳群が古墳形態を更新しそれを発信する舞台となったことを示すといえてよいだろう。

播磨 東部の加古川流域では導入が早く、日岡古墳群で3期に出現するのに対し、揖保川流域を中心とする西部においては中期の古墳そのものが少ないとはいえ、8期の塚森古墳のみが該当資料となる。

筑前 周濠をもつ古墳ともたない古墳の混在状況が特徴的である。周濠をもたないものがやや優勢で、その間に周濠をもつものが入り込むかのような状況を示す。周濠をもたない例として1期・名島古墳、3期・若八幡古墳、5期・丸隈山古墳などがあり、伴う例として1期・那珂八幡古墳、2期・端山古墳、4期・築山古墳、拝塚古墳などがある。この状況は1期から7期まで続き、8期以降は基本的に周濠が普遍化する。

美濃 周濠は3期の矢道長塚古墳において導入され、4期には昼飯大塚古墳をはじめ粉糠山古墳、可児

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10期
日向										
肥後										
筑後										
筑前										
豊前										
出雲										
備中										
備前										
美作										
讃岐										
播磨(西部)										
播磨(中・東部)										
河内										
和泉										
大和										
山城										
美濃										
越前										
遠江										
上野										
上総										

図74 各地域における周濠の採用

長塚古墳など主要な大形墳に採用される。以降、周濠をもたない古墳も中小規模墳に認められるが、野古墳群など大形墳に継承され9期まで継続する。

なお、図74には示していないが、尾張においては断夫山古墳が築かれる9期に周濠の採用が活発となり、それは10期まで継続する。

上野 2期から10期まで一貫して周濠が採用される。このうち2期には前方後方墳に方形気味の平面形をとる周濠をめぐらせる例が多く、畿内との関係を論じることは適当でないかもしれないが、3期の朝子塚古墳にみられる墳丘と相似形で前方後円形をなす周濠や、4期の浅間山古墳における2重周濠の採用などからみて、3期以降は常に畿内の周濠の影響下にあったとみてよい。

以上に整理した周濠の採用状況から明らかなのは、大和をのぞいて前期には周濠をもつ古墳はさほど多くないことで、畿内の主要地域、河内、摂津、山城などにおいても3ないし4期までは周濠は一般化しない。前方後円墳は弥生墳丘墓の統合、飛躍的な展開として成立したものであり(近藤1983)、それを担ったのが中・東部瀬戸内地域から畿内の有力首長層であった(都出1989)という理解にもとづいた場合、周濠というきわめて大きな要素に関しては統合がなされず、纏向石塚、ホケノ山といった先行する弥生墳墓にそれを採用してきた大和においてのみ継続して採用・発展がなされたということとなり、「統合」の意味を問うものとも言える。

畿内以外の地域のうち、東日本の美濃、上野などにおいては大和周辺地域と同様前期のうちに出現しており、大きな時期差を示さない。一方、北部九州では1期から継続して周濠を採用する古墳が認められるが、地域全体に周濠が波及するわけではない。そして、北部九州と畿内の中間にあたる中四国地域では周濠の採用は遅れ、讃岐が5期から、出雲は7期からとさらに遅くしかも地域全体への波及は示さない。前章において述べたように吉備では5期に早い例が出現するが、本格的な波及は7期からである。

②波及の意義

周濠と古墳立地 吉備においては小盛山古墳、造山古墳と、まず大首長墳に採用され、続いて中小の首長墳に広がるが、讃岐でも同様に大首長墳である富田茶臼山古墳の築造を嚆矢として地域内に波及するとみられる。各地域における展開状態を十分に把握できていないが、このパターンが基本的な波及のあり方と考える。

吉備での状況をもとに周濠の意義を考えるとすれば、周濠の採用は古墳景観の大きな転換であるが、それにとどまるものではなく、古墳立地の大幅な転換を伴うものと言える。前期古墳はさほどの広さをもたない山頂に築かれることを常とするが、それと全く同じ立地をとって周濠を伴うことはほぼ不可能である。5～6期の吉備の古墳に立地の変化が生じるが、それは古墳の性格が、山頂など集団領域の外縁にあって集団の守護のために機能すると観念される祭祀的構造物から、交通路などに面し首長の権威を間近に視覚的に表示する政治的な構造物へと変化したことを示し、後者は畿内からの新たに伝来した古墳の思想であると考えた（宇垣2004b）。周濠の採用はこの立地の転換と同時に生じており、周濠は古墳の新たな意義と一体となって畿内から受容されたと考える。

河内をはじめ多くの地域で丘陵上で周濠をもたない古墳から平地で周濠をもつ古墳という変化が生じることからすれば、他地域における周濠の出現もその時期はそれぞれ異なるが、この古墳の性格の転換と連動しているとみられる。それまでの古墳に与えられた祭祀性を払拭し新たな性格を受容することになる要因は、強制によるものでないとするなら、地方の側が畿内の古墳と同じ景観、形状の同一性を求めたためであり、それは地域間に中央と地方という政治的関係が生じたことによると考える。

天狗山古墳の周濠 さて、天狗山古墳は周濠をもちながらも比高70mの山頂に位置している。水をたたえる濠となんら遜色のない濠が水が溜まるべくもない山頂に設けられていると言えるが、同様な立地をとる例として鹿歩山古墳がある。こうした前期古墳さながらの立地は上記の理解のなかでどのように整理・評価できるだろうか。この2基はともに8期に位置付けられる。それに先立つ7期の古墳は、両宮山古墳や宿寺山古墳の立地に示されるように平地に築かれることを原則としており、大形墳で山頂に築かれるものはない。続く8期においても朱千駄古墳や築山古墳など7期と同様の立地をとるものは多い。つまり、この2基の立地はこの期にあってはやや特異なものであり、5期以前と同様の山上に立地が回帰したと考えるべきである。続く9期には周濠そのものが消滅しており、吉備においては伝統的な立地への指向が完全には払拭されず、古墳の「畿内型古墳」化は曲折しながら進んだことを示すと考える。

5. まとめにかえて

小論では吉備を中心に周濠のあり方を検討した。

古墳の諸要素すべてを畿内の古墳に求めることは適当ではないが、多くの要素の発信地が畿内であることは否定できない。地方の古墳が畿内の古墳をどこまで指向しているか、どこまで要素を受容しているかを見る指標として葺石・段築・埴輪があるが、それらと並んで周濠も地方と畿内の関係を表示するものと言える。

検討により、地域によって周濠の伝播・導入の時期に大きなばらつきがあることを確認した。これはそれぞれの地域と大和・河内との関わり、親疎を示すものと言えるが、畿内政権の中核である大和・河内勢力が関係の強化をいずれの地域に指向したかを明瞭に示すものとも言えよう。

早くから周濠を採用するのは北部九州と関東の2地域である。周濠の最高位の形態と評価できる2重周濠が他の地方に先駆けて関東と南九州に導入される⁽²⁾のも、それと軌を一にする事象とみられ、これらのことは畿内政権が勢力扶植に最も意を注いだのがこの2地域であったことを示すと考える。なお、北部九州の場合は他地域のように周濠が普及を示さず、一部の古墳への採用にとどまる。こうした要素の混在状態は副葬刀剣のあり方、埋葬頭位においても認められ（宇垣1997）、外部からもたらされた要素が古墳や小地

域ごとに選択・採用されて複雑な分布状況を作り出している可能性が強い。

一方、吉備をはじめとする中四国地域では周濠の受容は遅く、またその採用が長続きしない場合があり、これは遅くまで伝統的な祭祀的性格が古墳に保持されたことに起因するとみられる。

周濠の地方伝播からは地方と畿内の政治的関係の一端を垣間見ることができると考える。ここでは現象の大まかな整理にとどまらざるをえなかったが、今後の整理と検討によって、より詳細な動態を把握することができると思われる。なお、多くの地域において9期には周濠の構築は終息にむかうのに対し、尾張のほか関東、北部九州においてはむしろ活発化する。このことについても評価が必要となる。

註

(1) たとえば古市古墳群の2例、峯ヶ塚古墳内濠は滞水状態(下山・吉澤2002)、大鳥塚古墳周濠は空ばかりであった(上田1986)と堆積土の状態から推定されている。なお、中規模古墳のさほど広くない「ほり」を周濠と呼ぶのは不適切とも思われるが、規模による区分がむずかしいためここでは周濠に一括する。

(2) 群馬県浅間山古墳(4期)、同太田天神山古墳(5期)、宮崎県男狭穂塚古墳(6期)

(3) 小論の作成において、大久保徹也氏から多くの教示を得た。

引用・参考文献

- 一瀬和夫1992「周濠」『古墳時代の研究』7 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造 雄山閣出版、49-59頁
- 上田 睦1986「大鳥塚(質屋山)古墳」『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックNo.1、藤井寺市教育委員会、118-122頁
- 宇垣匡雅1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第44巻第1号、72-92頁
- 宇垣匡雅2004a「吉備の首長墓系譜」『古墳時代の政治構造』青木書店、60-79頁
- 宇垣匡雅2004b「古墳の立地とはなにか」『古墳時代の政治構造』青木書店、157-173頁
- 宇垣匡雅2006a「吉備地域の帆立貝形古墳」『「雄略朝」期と吉備地域』シンポジウム記録5、考古学研究会、175-186頁
- 宇垣匡雅2006b「二重周濠の地方波及とその意義」『両宮山古墳』日本の遺跡14、同成社、133-151頁
- 草原孝典1996「小盛山古墳の測量調査-岡山市足守地域の地域史研究(4)-」『古代吉備』第18集、38-52頁
- 葛原克人1987「古墳時代前期」『岡山県の考古学』吉川弘文館、258-259頁
- 小林行雄1959「周溝」『考古学辞典』東京創元社、435頁
- 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』日本歴史叢書、岩波書店
- 白石太一郎1993「古墳の周濠」『角田文衛博士古希記念古代学論集』125-145頁
- 都出比呂志1989「前方後円墳の誕生」『古代を考える 古墳』吉川弘文館、1-35頁
- 下山恵子・吉澤則男2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第48号
- 新納 泉編2012『岡山市造山古墳群の調査概報』科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書
- 茂木雅博1992「築造技術」『古墳時代の研究』第7巻 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造、雄山閣出版、142-154頁
- 安川 満1998『造山第4号古墳』岡山市教育委員会

図1・2出典

- 近藤義郎・高井健司編1987『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団
- 草原孝典1996 前掲
- 中田啓司・近藤義郎1987「小造山古墳」『総社市史 考古資料編』岡山県総社市、122-123頁
- 岡山県史編纂室1986「付図1 造山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料、岡山県
- 宇垣匡雅2006『阿宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集、一部改変
- 宇垣匡雅2002「宿寺山古墳の研究(1)」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』古代吉備研究会、239-258頁
- 宇垣匡雅2004『森山古墳・阿宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集
- 亀田修一1998「牛文茶臼山古墳」『長船町史資料編(上)』長船町、78-89頁

5. 日朝関係からみた天狗山古墳築造の歴史的背景

高田 貫太

はじめに

天狗山古墳は渡来系色彩の濃厚な帆立貝形前方後円墳である。その埋葬施設の形態や副葬品、造り出し状遺構出土の陶質土器などは、天狗山古墳造営の母胎となった集団（以下、天狗山集団とする）が何らかの形で朝鮮半島南部諸地域との交渉に携わっていた、もしくは渡来人集団との密接な関係を維持していたことを想起させる。本稿では、まず天狗山古墳の様々な渡来系要素の系譜について整理し、朝鮮半島のどの地域と関係を持っていたのかを明らかにする。次に、この整理を基礎にして、吉備地域や瀬戸内沿岸地域における天狗山古墳の位相や当時の朝鮮半島情勢について注意を払いつつ、天狗山古墳築造の歴史的契機や朝鮮半島南部諸地域との関係の具体相について考察したい。

1. 天狗山古墳にみられる渡来系要素

まず、天狗山古墳において認められる渡来系要素の系譜について整理したい。

竪穴式石室 天狗山古墳の竪穴式石室の特徴を要約すると、以下のようになる。①石室平面形の長幅比が3.6と比較的幅広である。②使用石材に角礫を用いる。③壁面下部から角礫を面を揃えつつ横方向に順次平積みし、四壁を同時に構築している可能性が高い。四壁はほぼ垂直に構築される。④壁石と壁石、蓋石と壁石の間に白色粘質土を充填する。⑤石室構築後に小礫を敷き床面を整える。⑥四壁面と天井面に赤色顔料を塗布する。⑦石室に収納する木棺の緊結に鋸が用いられる。⑧四壁構築後に床面を整え木棺を安置するという順序をたどる。⑨地山削り出しによって整形された後円部墳丘1段目に、棺床の最基底となる部分の周囲を10cm程掘り下げて、そこから墳丘積み上げを並行して壁体を築く。

筆者は以前に先学の指摘を参考に、木棺や石棺を先置した後に四壁を築く前段階の石室とは系譜を異にすると考えた。そして釜山福泉洞古墳群の竪穴式石室との比較を通して、その系譜を洛東江下流域の墓制に求め得ると判断し、このような「渡来系」竪穴式石室が他地域に比べて瀬戸内地域によく分布することを指摘した(高田1999)。ただ、最近明らかになりつつある朝鮮半島内での竪穴式石室の地域性を勘案する時、その系譜を洛東江下流域に一括限定して求めたことについては、再考する余地があると今では考えている。特に墓壙の構造における差異(福泉洞古墳群は深く広い墓壙を有する)についての検討が必要と考える。

それでも、天狗山古墳資料に限っていえば、石室平面形や壁体構造、木棺緊結への鋸の使用、壁石や蓋石の間への白色粘質土の充填など、釜山福泉洞古墳群の竪穴式石室との技術的関連を窺わせる渡来系要素があり無視できないことも事実である。また、鋸の形態についても百済地域や大加耶地域でみられる幅広の鉄板を折り曲げたものではなく、洛東江下流以東地域で一般的にみられる細身の断面長方形の鉄棒を折り曲げ作成したものである。おそらくは、⑥などの伝統的要素との調和、高塚の墳丘に石室を構築するという造営環境への対応において、様々な渡来系要素が取捨選択された結果、天狗山古墳のような竪穴式石室が成立したのであろう。その意味で、選択された渡来系要素の系譜を現状では洛東江下流域の墓制に求めておきたい。

山形金具付胡籙 天狗山古墳の他に日本列島では福岡県月の岡古墳、千葉県内裏塚古墳など5世紀中後葉以降の事例が確認されている。特に洛東江下流域の釜山福泉洞21・22号墳出土資料との技術的関連性が指摘されている(田中1988)。最近では、洛東江以東地域の慶山林堂洞7B号墳(龍文透彫山形金具付胡籙)、同造永洞CⅡ-2号、以西地域の陝川玉田23号墳、高霊池山洞30号墳などでも確認されている。この点で、三燕の墳墓である遼寧省北票県喇嘛洞村墓出土品を林堂洞7B号墳の祖型とする東潮氏の見解に注意する

必要がある（東1997、424頁）。特に慶山地域が新羅圏内の中でも特に早い時期から慶州地域と密接な関係を有していた当時の状況を勘案する時、現状ではその系譜はやや広く捉えて、釜山地域も含む洛東江以東地域とみておく必要があろう。

鹿角柄刀子 3点の鹿角柄刀子が確認された。尾上元規は岡山県内の刀子を集成し、木柄刀子に比して鹿角柄刀子の割合が極端に少ない点（全体の6%程度）や朝鮮半島洛東江下流域（金海礼安里古墳群や東萊福泉洞古墳群など）では特に5世紀代に鹿角柄刀子が一般的に認められることなどを指摘し、「朝鮮との関係」を考慮しなければならないと指摘した（尾上1998）。実際に洛東江下流域は朝鮮半島南部の他地域と比較しても、5世紀代に鹿角柄刀子がよく分布し、一つの地域性として把握できそうである。

鉄鉾 山形挟り式鉄鉾で、細長で鑄の厚い身部が特徴的である。朝鮮半島南部地域では3世紀中葉頃には導入されており、その系譜は楽浪系もしくは高句麗系と把握されている。4世紀中後葉頃に洛東江地域を中心に一般化するようで、その頃に日本列島にも伝わり5世紀代を中心に広まる。筆者は以前に、副葬鉄鉾には大量副葬された事例が皆無であり、当時一般的な武器として定着しなかったと考えられる点や渡来色の濃厚な古墳によく副葬される点などから、被葬者集団と渡来人集団もしくは朝鮮半島諸地域との何らかの関係を反映する朝鮮半島系武器として古墳副葬鉄鉾を把握したことがある（高田1998）。ただし、日本列島出土山形挟り式鉄鉾の系譜について導入初期の資料である金海礼安里74号墳出土品などを根拠に洛東江下流域に求める見解もあるが（朴天秀1998）、山形挟り式鉄鉾の普及現象は時期を若干異にしつつも朝鮮半島南部諸地域に広くみられるもので、現状で系譜を限定的に捉えることは難しいであろう。また、天狗山古墳資料は、棺床形成土中に埋め込むという副葬様相から、異郷の器物故に儀器化していくという副葬鉄鉾の性格を明瞭に示す資料といえよう。

馬具 特に剣菱形杏葉とf字形鏡板付轡が注目できる。日本列島においては5世紀中葉頃に朝鮮半島から導入され、6世紀前半にかけて盛行する。その系譜に関するこれまでの諸先学の成果を要約すると、大きく二通りに分けることができそうである。まず、特に剣菱形杏葉について、陝川玉田M3号墳や咸安道項里54号墳などの最初期資料を新羅系の扁円魚尾形杏葉をモデルとして加耶地域内で創出されたものと判断する見解である（金斗喆2000など）。もう一つは、扶安竹幕洞遺跡、天安龍院里1号墳、公州宋山里古墳、海南月松里造山古墳出土資料を根拠として、剣菱形杏葉とf字形鏡板付轡のセットが百濟を主体とした地域（大加耶圏を含む）で創出されたとみる見解である（千賀1994、鈴木・齋藤1996、李尚律1998など）。

まず、天狗山古墳の剣菱形杏葉は、剣菱形鉄板と鉄製縁金の間に金銅板を挟み、それを鋲留めする。楕円部上端の縁金に突起を有さず、また楕円部と剣菱部の境に区画帯を持たない。剣先部の突出は少ない。類例としては岡山県築山古墳や福岡県勝浦12号墳、長野県新井原12号墳出土資料などの資料を挙げることができる。ただ、これらよりも大型であり、若干後出するようである（宮代1993）。このような形態は日本列島出土資料の中でも初期段階のものと考えられている。

また、それとセットをなすf字形鏡板付轡は鉄地金銅張りで、中央部分が欠損しているため推定の域を出ないが、全体的に細身でf字があまり強く屈曲しない形態のようである。縁金の鋲の数も少なく、やはり初期段階の資料として評価されている。千賀久氏は、長野県新井原4号土壙（鉄地金銅製）や釜山福泉洞23号墳出土資料（鉄製）との形態や構造の類似性を指摘し、「同一工房での製品と考えてもおかしくない」と評価している（千賀1994）。また、公州宋山里古墳出土資料と比較しても、縁金の鋲を多く打たない点や全体に細身でf字があまり強く屈曲しない点などで類似性を指摘できよう。

このように、天狗山古墳資料は剣菱形杏葉とf字形鏡板付轡の組み合わせの中でも初期段階のものとして評価されており、またその組み合わせは百濟を主体とする地域（大加耶圏を含む）もしくは加耶地域で創出されたと推定されている。とすれば、これらの地域との何らかの関係性を示す資料として評価することは可能であろう。ただし、洛東江下流域の釜山福泉洞23号墳で形態の類似するf字形鏡板付轡が確認されていることにも注意する必要がある。

陶質土器 前方部西側に付設された造り出し状遺構に須恵器蓋杯（TK47段階）とともに供献された蓋杯である。まず蓋については、①天井部に平坦面を持つ。②天井部と口縁部に火樫が残存する。③平坦面とその周囲、もしくは平坦面を除いたその周囲に回転ヘラ削りを施す。④後円部と天井部の境界をめぐる稜線は突出が高く上方に向く。⑤須恵器に比して口縁部に厚みを持ち若干外側に開く。⑥天井部に比して口縁部が高い。などの特徴を持つ。すでに指摘があるように、このような器形は羅州潘南面古墳群や同伏岩里古墳群などをはじめとする朝鮮半島西南部榮山江流域に類例を探し出すことができる。特に②の火樫の存在は榮山江流域に特徴的な属性の一つであり、天狗山資料はそこからの搬入品の可能性が高い（吉井2002b）。一方、杯身（陶質系土器）についても受け部が短厚でつまみ出しが非常に弱く、厚みを持ち高い口縁部が内湾するという特徴を持つ。榮山江流域の杯身と酷似する。

このように、榮山江流域の蓋杯が複数個体、副葬・供献される事例は日本列島全域においても珍しく、また須恵器（TK47段階）と共伴することから、両地域の編年並行関係を考える上でも貴重な資料といえよう。

その他 天狗山古墳では挂甲やU字形鋤先などの先進的な器物も副葬されており、朝鮮半島系の先進文化に接し得る立場にあった天狗山集団の位相をよく示している。

以上の議論を整理する。まず、山形金具付胡籬や鹿角装刀子、山形挟り式鉄鉾などの副葬品や竪穴式石室の構造などを古墳墓制に備えていた地域、すなわち天狗山集団が主として積極的に関わりを持っていた地域の候補としては、洛東江下流域、特に釜山福泉洞古墳群を中心とした東萊地域を挙げることができそうである。個別資料のみをみれば、その系譜を限定しにくい鉄鉾や胡籬なども他の要素と総合してみれば、当地域との何らかの関わりを反映するものと捉えることは許されよう。

また、造り出し状遺構に供献された陶質土器は天狗山集団と榮山江流域との関わりを示唆する。造り出し状遺構で行われたであろう儀礼の供献物としての性格や、中心埋葬施設には当地域に系譜を追い得る要素が見出せない点を考える時、洛東江下流域とは別個に、榮山江流域とも関係を持っていたと把握できよう。

そして、f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の馬具セットである。先にも述べたように、またその組み合わせは百濟を主体とする地域（大加耶圈を含む）、もしくは加耶地域で創出されたと推定されている。釜山福泉洞23号墳で形態の類似するf字形鏡板付轡が確認されている点や他の副葬品との関係からみると、洛東江下流域との関連性も考えてみるができそうである。さらに、初期のf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉のセットを副葬する古墳には、墳丘形態や副葬品の内容などに共通性が認められ、その入手経路に関して「畿内政権の強い関わり」を想定する見解もあり（鈴木・齋藤1996）、注意を要する。この点については後述したい。

このようにみてくると、天狗山集団が朝鮮半島南部の洛東江下流域や榮山江流域と主に関わりを持っていたという評価を下すことができそうである。このような渡来系色彩の濃い古墳がどのような歴史的背景において出現したのか？次節では、吉備地域内の主要交通路や渡来系資料を出土した遺跡との関係から、天狗山古墳の地政学的位置について検討したい。

2. 天狗山古墳の地政学的位置

天狗山古墳は岡山県吉備郡真備町川辺・下二万に高梁川下流域の小田川との合流点を南から見下ろす標高約80mの山頂部に位置する。墳頂からは西方と北方に小田川が形成した沖積平野の広がりを見ることができ、「この平野部を基盤として本墳が造営されたこと」がうかがえる（松木2001）。これを、天狗山古墳出現の一つめの背景と評価できよう。また、二つの河川の合流点を見下ろす位置に築かれた点から、その築造背景に当時の海上・河川交通との関わりを指摘できる。

新納泉は、吉備地域の主要交通路について次のように整理した。まず当時の吉備地域では、児島の北に当時形成されていた小規模な内海（「穴海」）を通る瀬戸内北岸航路と岡山県北部を横断する播磨から出雲に至る経路という「二つの大動脈」が走っていたと捉え、そして、その「二つの大動脈」を吉井川、旭川、高梁川という三大河川が結び付けるという構造を指摘した（新納2002）。また亀田修一は、吉備地域の渡来

人に関する論考の中で、吉備地域内で朝鮮系資料が比較まとまって確認される地域として足守川東南部流域から高梁川下流域の東西に長い平野部をあげた。そして、足守川の河口や高梁川方面に津の存在（関連遺跡として岡山市川入遺跡、倉敷市菅生小学校裏山遺跡を挙げている）を指摘しつつ、それらの津を経て渡来人が各地域へ渡来・定着するが多かったと判断している（亀田1997）。

以上のような先学の見解に触れる時、やはり天狗山古墳が瀬戸内北岸航路と高梁川経路の結節点に位置することは見逃すことができない。この点を5～6世紀代の朝鮮系資料出土遺跡との関係から具体的にみていこう。

① 亀田が高梁川方面の津関連遺跡と評価した菅生小学校裏山遺跡や、陶質土器が出土した酒津遺跡などと隣接し、高梁川や阿智潟を利用して瀬戸内北岸航路へ出る際には必ず経由する必要がある地点。瀬戸内北岸航路を利用し西へ北部九州や朝鮮半島南部地域、東へ備前地域、播磨地域、畿内地域へと向かうことができる。

② 小田川を西に遡ると笠岡市長福寺裏山古墳群に至る。この古墳群には埋葬施設の箱式石棺に須恵器の壺、甗（TK216～208）、土師器碗を納めた七つ塚古墳群や天狗山古墳と同じ構造の竪穴式石室を持つ仙人塚古墳など渡来色の濃い古墳が分布する。この古墳は笠岡湾を介する海上交通に関わった集団や、一部渡来人集団の墓域と評価される（亀田1997）。

③ 高梁川を北上し高梁川下流域東岸に広がる細長い平野部に出ると、その北辺丘陵に朝鮮系資料出土遺跡が比較的まとまって分布する（小寺2号墳、すりばち池1号墳、西山44号墳、中山6号墳、奥が谷窯跡）地域に至る。また、その対岸の新本川流域には埋葬施設の箱式石棺に須恵器や滑石製紡錘車などを納めた秦金子1号墳が立地する。

④ 高梁川をさらに遡ると、東には北房町地域、西には広島県北部の三次盆地という、共に内陸交通の結節点に至る。

このようにみると、朝鮮半島系の墓制や技術、情報などの受容に努めた吉備諸地域を結ぶ交通路の結節点に天狗山古墳が位置することが理解できよう。すなわち、瀬戸内北岸航路と高梁川経路そして小田川経路の結節点を押さえていた天狗山集団の地政学的位置が天狗山古墳築造を可能にした2つめの要因と考える。

3. 瀬戸内沿岸地域ネットワークに参加した天狗山集団

次に、5世紀代に瀬戸内沿岸地域に営まれる渡来系要素の濃い古墳との関係から、天狗山古墳築造の背景を考える。注目する属性は竪穴式石室である。第2節の竪穴式石室の項で指摘したように、筆者は以前に、割り石や河原石で四壁をほぼ垂直に築き、木棺（銚や釘を緊結金具として用いる場合もある）を後置する石室（一部、竪穴系横口式石室の可能性のある資料が含まれていることも事実）を埋葬施設として用いる古墳が瀬戸内海沿岸地域によく分布する状況を指摘した（高田1999）。

当時、北部九州地域はすでに横穴式石室の思想を自らのものとして他地域に影響を及ぼしていた時期であり、畿内地域も5世紀後半を中心に初期横穴式石室の導入を契機にその導入・定着に対して積極的な姿勢をみせていた時期である。瀬戸内地域においても例えば、千足古墳のように肥後系横穴式石室が導入されるが、それを定着させた痕跡は現状では確認できない。むしろ初期横穴式石室よりも「渡来系」竪穴式石室を旧来の墓制と調和させて導入することに積極的であったとみることができそうである。このような渡来系墓制における地域性について、筆者は予察として、先進の技術、情報、祭祀方式などをやりとりするネットワークのようなものが、瀬戸内沿岸地域に形成されていたことを示すものと評価したい。5世紀代は渡来文化の影響（渡来人の渡来・定着）を日本列島諸地域が強く受ける時期であり、各地域権力は多様かつ錯綜した交渉ルートを駆使してその受容に努めたはずである。とすれば、西の北部九州地域と東の畿内地域を結ぶ幹線路もしくはその経由地である瀬戸内沿岸地域に、各集団それぞれを結びつけるネット

ワークが構築されていた可能性は考えてもよいであろう。

例えば、香川県原間6号墳や同川上古墳、岡山県正崎2号墳などは5世紀前中葉代に木槨を埋葬施設として採用している（川上古墳はおそらく竪穴式石室構築後にその四壁に沿って木槨を設置しそれを内側から河原石によって固定している）。これらは副葬品の内容からみても渡来人、もしくは彼等と密接な関わりを持つ集団の墳墓としてみるができる。このような渡来系墓制の構築に携わったであろう渡来集団の保有する様々な技術を、それぞれの地域権力が個別的に導入した可能性と同時に、瀬戸内沿岸地域を多様に結びつけるネットワークを利用して導入した可能性を考慮する必要があるだろう。

瀬戸内沿岸地域に位置する各集団がそのネットワークを積極的に利用した場合、それぞれの限られた政治基盤に頼るよりも、より効率的かつ恒常的に渡来文化の受容・維持に努めることができたであろう。また、そのネットワークは決して閉鎖的なものではなく、北部九州地域や畿内地域からの様々な技術・情報にも開放されていたはずである。ただし、各地域権力や集団はそれらの全てを受け入れるのではなく、自らの意思で取捨選択することが可能であったと思われる。だからこそ、千足古墳にみるように5世紀前葉には横穴式埋葬施設とそれに付随する葬送思想に触れたはずの吉備諸地域が、何らかの理由でその受容には積極的ではなかったとみることができよう。

さらに、おそらくこのようなネットワークの一つの核があったであろう吉備地域に限っていえば、これらのネットワークに直接参与した集団は、当時の吉備中核勢力であったとは考えにくい。それは、「渡来系」墓制を採用する集団が、渡来集団もしくは彼等との密接な関係を持っていた集団や、大型円墳や帆立貝形前方後円墳を築く「中間層」、そして須恵器・鉄器生産など、この時期に本格的に受容された新来の生産活動に関わりを持つ集団などであったこと（高田1999）からもうかがえる。彼等こそが実質的な参与主体であり、直接、朝鮮半島諸地域との交渉や渡来人の招請、受容にあたったのであろう。むしろ吉備中核勢力は、彼等を支援、管理、掌握していくことで、渡来文化の摂取や渡来人の受容・編成に努めたものと判断したい。実際に、5世紀前半代の吉備中核部たる造山古墳や作山古墳の周辺には、朝鮮半島と関わりが深い遺構や遺物が多数確認されており、当時の吉備中核勢力が渡来文化に深い関心を寄せていたことが明らかにされている（亀田1997）。また、このような吉備中核勢力と朝鮮半島との関係に関与していた地域の一つとして、牛窓地域（黒島1、2号墳）が挙げられている（亀田2001）。

筆者は天狗山集団もその地政学的位置からみて、牛窓地域と同様に吉備中核勢力と朝鮮半島との交渉を仲介した勢力として評価したい。おそらく、瀬戸内沿岸地域を結びつけるネットワークに直接参与し、恒常的に朝鮮半島南部も含めた諸地域との多様な交渉を積み重ねていたのであろう。故に埋葬施設に「渡来系」竪穴式石室を採用し、豊富な渡来系副葬品を副葬できたと考えたい。これを、天狗山古墳出現の3つめの要因とみる。

以上、前節と本節で天狗山古墳出現の歴史的背景に関連して述べてきた。ただし、まだ天狗山古墳の出現背景を説明し切れていない感を受ける。天狗山古墳の立地する丘陵には、天狗山古墳の他に、小坑古墳（全長30m程の帆立貝形前方後円墳）や北方の小方墳群、東方や西方に円墳群が存在し、南山古墳群を形成している。天狗山古墳以外には発掘調査を経っていないため、正確な年代は不明とせざるを得ないが、天狗山古墳が高塚墳丘を有する古墳としては最初のものである可能性が高い。南山古墳群の中で小方墳群が天狗山古墳よりも時期が遡るとすれば、これらの小墳群が天狗山古墳出現以前における天狗山集団の本来の墓制であり、これらを母胎として天狗山古墳が「卓越」した存在として生み出されたとみることができよう（松木2001）。5世紀前半代に高塚古墳が築かれていない理由については、吉備中核部が海上・河川交通に携わる天狗山集団をより直接的（前方後円墳が継続して営まれる牛窓地域よりも）に管理していた可能性や、前方後円墳が「すべての地域集団にとってかならずしもその存在が必須ではない、純粋に宗教的あるいは経済的実態とは事実上疎遠な『政治的』世界で特定の地位を占めた存在」であった可能性（松木2001）などが思い浮かぶ。

ただし、5世紀後葉段階に小墳群から立地や規模の面で「卓越」した天狗山古墳が、どのような契機で出現したのか、という疑問は残る。これまで述べてきたような、小田川の形成した沖積平野という基盤や主要交通路の結節点の管理、瀬戸内沿岸地域を多様に結びつけるネットワークの参与などは、より以前の小墳群の形成にも当てはまるものであり、そこから天狗山古墳が「卓越」した存在として出現した背景として、何か別のものを考える必要があるだろう。

筆者はこの点に関して、当時の日本列島内諸勢力の政治経済的関係を規定していた要因の一つである、朝鮮半島の政治情勢とそれへの対応を迫られたヤマト王権の動きに注目する。次節では、天狗山古墳出現前後の朝鮮半島南部地域の政治情勢について触れつつ、それへの対応を迫られたヤマト王権の動きの中から、天狗山古墳出現の契機となったプラスアルファの要素を探ってみたい。

4. 天狗山出現前後の朝鮮半島南部地域

ここでは天狗山古墳出現前後の朝鮮半島南部地域の政治情勢について概観してみたい。そのためには文献古代史の成果を参考にしつつ記述する必要があるだろう。成果の引用に過ちがあることを恐れる。しかし、天狗山古墳築造背景の要因の一つに当時の朝鮮半島情勢とそれに対応せざるを得なかったヤマト王権の動きがあるとみる筆者にとっては、文献古代史の成果を解釈の枠組みに組み込むことは不可欠である。ここでは、諸先学の成果（鈴木2002、山尾1999・2002、李成市1999・2002、田中1992・2003など）を参考に朝鮮半島南部諸地域の政治情勢を個別的にまとめてみたい。

① 新羅—「脱高句麗化」の動き—

新羅は4世紀中後葉頃から高句麗との関係を深めていった。377年の前秦への朝貢は高句麗の導きによるものと考えられており、4世紀末に実聖、5世紀前葉に卜好をそれぞれ高句麗へ「質」として派遣するなどして高句麗への従属の動きを強めた。広開土王碑文に新羅が「属民」として服し「朝貢」を強いられる関係や新羅領域内への軍隊の駐屯や新羅王以下高位者に高句麗服飾を賜与したとする中原高句麗碑の内容は当時の高句麗と新羅の関係を端的に表している（李成市2002）。このような高句麗との関係を一つの背景としつつ、新羅中央は諸地域権力の統合を進めていったと判断されている。その考古学的指標としては、各地域中心への高塚群の造営、洛東江以東様式土器の分布、出字形冠や帽冠などをはじめとする着装形威信財の配布などが挙げられている（李熙濬1998a）。一方で当時、新羅は5世紀初頭に倭に対しても王子未斯欣を「質」として派遣しており、高句麗と倭に「質」を出す新羅の厳しい国際環境を反映している。

そのような新羅が、一転、高句麗の勢力下からの脱却を試みるようになったのが5世紀中頃と推定されている。『三国史記』訥祗王34年（450）条に記された悉直（三陟）で起きた何瑟羅（江陵）城主の高句麗將軍殺害事件や455年以降の高句麗の南侵に対する百済との共同対処など、いわゆる「脱高句麗化」の動きを明確にする。その後、6世紀初頭に至るまで基本的には百済との共同戦線は維持されたようであり、またそのことによって、新羅と加耶との対立が解消し、加耶諸国が交易活動を十分に展開し得る国際的条件が生み出されたようである（李成市1999）。

筆者は、5世紀代に日本列島内で確認される洛東江以東地域に系譜を求め得る考古資料について、4世紀末～5世紀初における新羅の厳しい国際環境や5世紀後半代新羅の脱高句麗化に伴う百済・加耶側への加担などの動きから、倭との交渉に臨む（もしくは交渉意図を抱く）新羅の動きが一部反映されているのではないかと推定したことがある（高田2003）。

② 百済—倭との提携と漢城陥落—

広開土王碑文に記されるように、百済は396年に高句麗に大敗し58城700村を奪取された（武田1989）。その時、多数の生口や織物を献上し、高句麗に「奴客」として永く服することを誓ったが、397年にはその誓いを違ひ、阿華王の王子腆支を倭に「質」として送り友好関係を結んだ。その後、400、404、407年と高句麗の南下政策に互いに提携して共同戦線を張ったが、その結果は不調に終わった。その後も421年以降の倭

の対宋外交を導くなど倭との提携を深め、高句麗の南侵へ対処した（鈴木2002）。さらに、455年には「脱高句麗化」の動きをみせていた新羅とも相互支援の関係を築き、468、469、472年と新羅・百済各地の国境で高句麗との激戦が繰り返された。その間も倭との関係は維持され、461年には蓋鹵王の弟昆支を倭に送り、倭の出兵を画策した。しかし、高句麗の南侵は続き、苦境に立った百済は472年に高句麗との関係の深かった北魏に使者を送り高句麗征討を請うが、成功しなかった。結局は475年に高句麗が百済王都漢城を落とし、蓋鹵王は捕殺されてしまう。いち早く漢城を抜け出した文周によって熊津の地で復興されるが、佐平解仇や思率燕信らの反乱も起こり、まさしく内憂外患の危機にあった。そのような王権の復興には一部、倭の助力があったらしい。『日本書紀』雄略紀23年条が記すように、479年に倭国で生まれ育った末多（牟大、昆支の子）が「筑紫国の軍師五百人」に守られて還り東城王として即位している（479もしくは481）。その後、東城王も政変に見舞われ排除され、その後、武寧王が即位する（田中2003）。

東城王、武寧王の時代に百済王権は再建されていくが、その過程で朝鮮半島西南部地域、すなわち榮山江流域を統合する志向が生まれたようである（山尾2002）。その時期に榮山江流域に盛んに築かれるのが前方後円墳である。在地墓制たる甕棺古墳とは異質の倭系墓制がどのような歴史的背景のもとで築かれたかについては、日韓両学界で活発な論争がある。重要な点は、この地域と日本列島諸地域とが古くから活発な交流を行っていた点であり（吉井2002b、白井2003）、また前方後円墳を構成する要素が倭系（墳形、埴輪、石室形態、銀装三角穗式鉄鉾、振り環頭大刀）のみではなく、在地系（副葬土器の多く）、百済系（金銅製装身具や木棺構造）、加耶系（明花洞古墳出土土器）など多様であり、その被葬者が、多様な地域権力と関係を結んでいたという点である（吉井2002a）。前方後円墳築造当時にも、この地域が日本列島諸地域と密接な交流関係にあったことは間違いない。

③ 加耶—金官加耶の衰退と大加耶の成長—

まず、金官加耶の衰退、特に釜山地域がいつ頃どのような過程を経て新羅に統合されたのか、についてである。最近、韓国学界では多様な見解が提示されているが、大きく二通りの見解が対立する。まず、新羅土器が本格的に副葬され始める洛東江以東諸地域（慶州を除外、一部以西地域も含む）を「親新羅系加耶」と把握し、6世紀前葉までは新羅（慶州）を中心とした政治連合体に加担したとする見解である（申敬澈1995）。基本的に釜山・金海地域を金官加耶の両中心勢力とみて、400年の高句麗南征によって金官加耶の中心が金海地域（大政洞古墳群）から釜山地域（福泉洞古墳群）に移動したと捉える。

一方、洛東江以東諸地域における新羅土器の本格的な副葬開始期をその地域に対する新羅の間接支配の結果とみる枠組みの中で、釜山地域について福泉洞古墳群に新羅土器が本格的に副葬される21・22号墳段階までには新羅の間接支配下に入りその一地方として動いたとする見解（李熙濬1998）や、400年の高句麗南征によって決定的な打撃を受けた後に、新羅勢力圏へと離脱したとみる見解（金泰植1993、洪普植1998）などが提示されている。

これらの諸見解をみると、少なくとも、福泉洞21・22号墳段階以降の釜山地域は、何らかの形で程度の差こそあれ、新羅の政治的干渉を受けていた点については共通項を持つようである。それが金官加耶の衰退につながったようである。ただし、この段階で金官加耶が洛東江河口を基地とした交易権を完全に失ったということではないであろう。白井克也が的確に指摘したように、新羅への金官加耶の投降とは「積出港としての洛東江河口の使用权を金官加耶が放棄したことを意味」し、それ以前には「金官加耶の裁量権が多く留保されていた」と考えられる（白井2000、112頁）。

一方、金官加耶の衰退と相前後して台頭してきたのが、高霊地域を母胎とする大加耶であった。考古学的には大加耶様式土器分布圏の形成と拡大、着装形威勢品（冠や垂飾付耳飾）の分布、各地域への高塚古墳の造営などから、洛東江西岸から蟾津江下流域に及ぶ大加耶中心の政治統合体への動きが想定されている（朴天秀1999など）。そのような統合への動きを背景に479年に大加耶の嘉悉王（荷知王）は南齊に朝貢し「輔国將軍・本国王」に冊封された。また481年、高句麗の新羅侵攻に対し百済と共に援軍を出している。

そのような統合の動きの背景としては、百済による大加耶への影響力の低下や高句麗の圧力に対する政治的対応などの見解がある（田中1992、金泰植1993）。さらに、5世紀後半代の大加耶の活発な交易活動に対する新羅の影響を指摘する見解もある。4世紀半ば以後高句麗への従属戦略を取っていた新羅が、5世紀半ば以後には高句麗からの脱却を図り百済と結んだことによって、以前の高句麗を媒介とした新羅と加耶との対立が解消したと捉え、それによって加耶諸国（大加耶）が交易活動を十分に展開し得る国際的条件が好転し、南斉に自力朝貢する道が開かれたと解釈する（李成市1999）。一方で、日本列島諸地域とも密接な交渉を重ねたようであり、5世紀中葉以降には、大加耶系の様々な文物、技術、情報が日本列島諸地域にもたらされている。朴天秀の指摘のように5世紀後半代の対倭交渉の中心軸の一つとして評価することができよう（朴天秀1998）。

さて、以上のような朝鮮半島情勢は、多様な外交ルートを駆使し王権に連なる諸地域権力に安定的な渡来文化受容・定着の機会を提供してきたであろうヤマト王権にとっても、無関係なものではなかったはずである。特に5世紀後半代には、南侵政策を推し進める高句麗とそれに対峙する百済、新羅、加耶、という対立構図が生じており、さらにはそれぞれの勢力間も全くの友好関係であったわけではなく、非常に流動的かつ不安定な情勢であったことがうかがえる。特に、大加耶との新たな交渉関係の成立とその維持、高句麗南侵に押され危機に瀕する百済との提携維持、古くからの交渉地域であった榮山江流域への百済の統合志向、同じく古くからの交渉地域であった釜山地域への新羅介入への対応などは、王権レベルにおいては差し迫った課題であったと判断できよう。

5. 朝鮮半島情勢に対応するヤマト王権の動き—吉備地域の様相から—

このような朝鮮半島情勢に対するヤマト王権の動きが端的に表れている事件が、実は天狗山古墳出現前夜に勃発した「吉備の反乱」ではなかろうか？すでに多くの指摘があるように、吉備地域では、造山古墳—作山古墳—両宮山古墳と続いた大規模な前方後円墳が突然姿を消し、中枢部では6世紀中葉まで、すなわちこうもり塚古墳出現まで目立った古墳はほとんど築かれなくなる。このような古墳の上での激変をいわゆる「吉備の反乱」伝承と関連付ける見解がある。その一方で、5世紀後葉から6世紀前葉にかけて、臨海性の高い縁辺諸地域では継続して首長系列が維持されたり、新たに帆立貝形前方後円墳や中型の前方後円墳が築かれる。具体的には、小田川上流域の仙人塚古墳、小田川下流域の天狗山古墳、吉井川下流東岸北部地域の築山古墳・牛文茶臼山古墳、同南部地域の船山古墳、牛窓湾沿岸地域の鹿歩山古墳や波歌山古墳などを挙げることができる。

亀田修一は、特に吉井川下流域東岸南部地域と牛窓湾沿岸地域を取り上げ、両地域の古墳が「吉備の反乱」以後も「前代の力のある程度維持している」理由として、「おそらくそれ以前からの牛窓湾沿岸周辺の海上交通を実質的に支配しつづけ」たためと見ている。すなわち、5世紀に吉備の中心勢力にその海に関する実力を認められており、さらに「吉備が力を押さえ込まれた5世紀後半以降においても、おそらく吉備を押さえ込んだ大和政権にその海の力を認められたもの」としている。そして、その被葬者像として吉田晶氏の吉備古代史の成果をもとに、「吉備海部直」氏一族の可能性を指摘している（亀田2001、130～131頁）。吉田氏は「吉備の反乱」伝承について、吉備勢力が南部朝鮮地域と密接な関係を持っていたことを背景とするとし、また伝承の中で、「吉備弓削部虚空」（『日本書紀』雄略紀七年八月条）や「吉備海部直赤尾」など、吉備一族とは異なる立場で王権に忠実であろうとする人物が存在することを指摘している（吉田1995）。

筆者は、その他の小田川上流域や同下流域、吉井川下流東岸北部地域などについても、それぞれ臨海性が高く、海上交通に関与した地域集団の存在を想定できる点や、実際に天狗山古墳や仙人塚古墳、牛文茶臼山古墳などは渡来系色彩の濃厚な古墳である点、そして特に天狗山古墳では入手経路に関してヤマト政権の関わりも想定できる副葬品（f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の馬具セットや挂甲）が納められている点

などから考えて、これらの被葬者、築造主体となった地域集団にも「吉備海部直」氏のような解釈の枠組みを当てはめることができるのではないかと考える。

5世紀後半代の朝鮮半島情勢に対する対応策の一つとして、ヤマト王権は海上交通、河川交通に長けた各地域集団を徴発、編成することで対外交渉の一元化を志向したであろう。その際に注目したのが、ヤマト王権に次ぐ多様な交渉ルートを持っていた吉備中枢勢力ではなかったか？これに打撃を与え、吉備中枢勢力が利用・支援、時には管理していた様々な海上交通に携わる地域集団をみいだし瀬戸内ネットワークを自らのものとする、この「吉備の乱」にはこのようなヤマト王権の意図も潜んでいたと考えたい。一方でそのようなヤマト王権の動きに呼応し、王権レベルの対外交渉に積極的に関わり、その傘下に入った地域集団には、それまでの政治的地位や海上交通をめぐる既得権の安堵、より安定した先進文化の受容・定着の機会などが見返りとして保障されたのであろう。

このような5世紀中後葉代のヤマト王権の動きとそれに対する天狗山集団の呼応こそが、前段階の小墳群から天狗山古墳が「卓越」した存在として出現したプラスアルファの要素であったと推定する。前段階まで高塚墳墓造営に労働力を消費することに、決して積極的であったとは思えない天狗山集団が、全国的にみて大規模古墳築造が下火となる時期に、「政治的に」肥大化した帆立貝形前方後円墳を築いた（あるいは築かされた）背景がここにあったと考える。この関係には二つの側面が存在しよう。まず、ヤマト王権の立場からみれば、自らの権力のヘゲモニーのもとに吉備中枢勢力を押さえつけ瀬戸内沿岸ネットワークを自らのものとし、外交権の一元化、朝鮮半島南部諸地域との関係の再編をもくろむものであり、そして、天狗山集団を初めとする地域集団にとっては、自らの利益を実現させる方策の一つとして選択的にかつしたたかにヤマト王権の傘下に入っていくというものであったろう。

以上、3～5節にかけて天狗山古墳出現の歴史的背景について検討してきた。これを今一度整理すると、以下ようになる。まず、天狗山集団の存在基盤としては、小田川の形成した沖積平野、吉備地域の主要交通路結節点の管理、瀬戸内沿岸地域を多様に結びつけるネットワークの参与などが推定できる。そして、5世紀後葉代に、このような経済的基盤を背景に成長を遂げてきた天狗山集団と、朝鮮半島南部地域の政治情勢に対応せざるを得なかったヤマト王権とが、ある面で強圧的に、ある面では相互利害を一致させることで、直接的な「政治的」関係を結んだ。その結果として天狗山集団の根拠地に天狗山古墳という「政治的」モニュメントが出現したのであろう。

それでは、当時の天狗山集団が携わった対外交渉には、具体的にどのような様態があったのであろうか？第2節で、天狗山古墳の諸属性からは洛東江下流域と榮山江流域との関係が主に認められると判断したが、これらの地域とはどのような形で交渉したのか、次節で考えてみたい。

6. 5世紀代天狗山集団の地域間交渉形態

一古墳から出土した副葬品の分析から、実際に被葬者もしくはその造営集団の地域間交渉の様態を復元することは難しい。ただ、これまでの天狗山古墳出現の歴史的背景についての検討を状況証拠として、演繹的にいくつかの交渉様態を考えてみるができると思う。

まず思い浮かぶのが、ヤマト王権主導の外交に参与し朝鮮半島南部諸地域に赴く天狗山古墳被葬者の姿である。先に、5世紀後半代ヤマト王権の外交課題として榮山江流域への百済の統合志向や釜山地域への新羅介入への対応という点を挙げた。このような情勢の中で、ヤマト王権と直接結びついた天狗山集団がヤマト王権主導のもと、洛東江下流域や榮山江流域に赴き、当地の地域集団との交渉の中で先進文化を摂取し、渡来人を招請するという交渉形態が存在したと思われる。このような動きを表象するのが、主に洛東江下流域に系譜を追える埋葬施設や副葬品、榮山江流域に系譜を追える造り出し状遺構出土の陶質土器であるのかもしれない。また、f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の馬具セットや挂甲などは、ヤマト王権との関わりの中で入手したものと判断することも可能であろう。天狗山古墳の渡来系要素に対する全体的な解

釈の枠組みとしては、このような交渉形態を想定することが適当ではないか、と考える。

ただし、王権レベルの政治情勢が、天狗山集団の地域間交渉の全てを規定したとは思えない。5世紀代、天狗山集団が勢力基盤としていた小田川下流域においては、いまだ明確な渡来集団の痕跡や朝鮮半島との交渉を裏付ける資料は確認されていない。しかし、これまで述べてきたその地政学的位置や天狗山古墳出現以前に造営された可能性のある小方墳群の存在、そして天狗山古墳が埋葬施設として採用した「渡来系」竪穴式石室にみる瀬戸内沿岸地域の地域性などを勘案する時、天狗山集団は、5世紀代を通じて瀬戸内沿岸に分布する諸地域集団と連携しつつ、直接的に朝鮮半島南部諸地域と交渉し、渡来文化の受容に努めていた可能性は十分に考えられる。その過程で、吉備中枢部と朝鮮半島南部諸地域との「政治的」な交渉に関与したこともあったろう。天狗山古墳被葬者自体も、おそらくは瀬戸内沿岸のネットワークを利用しつつ、不断に渡来系技術、情報、墓制の受容に努めたはずである。このような実績があったからこそ、ヤマト王権が天狗山集団を自らの傘下に加えようと意図したとみておきたい。

したがって、ヤマト王権の傘下での「政治的」な交渉形態とは、天狗山集団の側からみれば、その前段階での吉備中枢部と朝鮮半島南部諸地域との交渉に関与するという形態と類似し、ある意味で特殊かつ単発的なものであったとみることもできよう。むしろ諸地域集団との多様かつ錯綜した関係に基づく交渉が、最も基層的なものではなかったか、というのが、筆者の立場である。

そのような観点からみれば、特に天狗山古墳造り出し状遺構出土の陶質土器については、別の解釈も可能であるかもしれない。この陶質土器から、造り出し状遺構で執り行われた祭儀に榮山江流域からの渡来人が参加したと解釈することも可能であろう。その意味で、天狗山集団構成の一部には当地に根を下ろした渡来人の存在も考えてみることもできるのであり、榮山江流域の勢力と天狗山集団との関係を、王権レベルの「政治情勢」のみで解釈しきってしまうことも難しい。むしろ、諸地域集団間の錯綜した交渉を表象するものと評価する余地もあるのではなかろうか。

ただし、一度ヤマト王権の傘下に入った天狗山集団が、少なくとも完全自由な対外交渉を行い得たわけではないであろう。吉備中枢勢力の傘下にあった時期以上の束縛、規制があったはずであり、朝鮮半島情勢も、天狗山集団個別の交渉を許す状況ではなかったことは明らかである。天狗山古墳集団は、以上のような困難な政治情勢下においていかに自らの既得権を確保するかを模索し、次善の策を選択したはずである。彼等なりの計算に基づいてその激動期を乗り越えようとしたはずである。それまで、自らの既得権を認めてくれた吉備中枢勢力が吉備の乱によって深刻な打撃を受けた時、より上位の政治勢力、すなわちヤマト王権と直接結びつくことを是とした可能性は高い。自らの独自性を最低限守るため、あえて王権に接近していく姿が、筆者には天狗山古墳を通して浮かび上がるのである。

推測に推測を重ねた感が強い。この憶測を検証するためにも、今後、小田川下流域における調査によって、5世紀代の渡来系資料が増加することを期待したい。

おわりに―その後の天狗山集団

以上、天狗山古墳出現の歴史的背景と天狗山集団が主体的に関わった地域間交渉の形態について検討してきた。天狗山古墳以後、天狗山集団は二万大塚古墳（全長38m、前方後円墳）を築く。海上、河川交通に携わる天狗山古墳の姿は基本的に古墳時代後期に入っても基本的には変化がなかったようである。その後、小田川対岸に箭田大塚古墳が築かれるが、この古墳の造営主体として天狗山集団を考え得るかどうか、今後、両古墳出土副葬品の比較や地域史における両古墳の位置などの検討を通して、明らかにする必要がある。その副葬品を見る限り、筆者は何らかの形で箭田大塚古墳造営に天狗山集団が関わったのではないかと想像している。

また、その後の古代における高梁川以西地域は、7～8世紀初頭段階での古代寺院の建立（箭田廃寺、八高廃寺、岡田廃寺）、和銅元年（708）十一月二七日の年紀を持つ「下道朝臣園勝母骨藏器」、天平宝字七

年（763）十月十六日の年紀を持つ買地博などから、多様な朝鮮半島・中国大陸系の渡来文化を理解し摂取し得た地域社会として評価されている（吉田1995）。

このように、天狗山古墳が位置した地域とその周辺は、長く地域文化と渡来文化の多様な関わりが認められる地域であり、そのような地域社会の成熟に朝鮮半島南部諸地域との交渉や渡来人集団の果たした役割がすこぶる大きかったことはいうまでもない。その意味で、天狗山古墳は、5世紀代東アジアの国際情勢において、日本列島内の一地域社会が主体的に朝鮮半島南部諸地域あるいはヤマト王権と交渉を重ね、彼等のもたらす渡来文化を受容・定着させていく姿を端的に我々に伝えてくれているのである。

主要参考文献（紙面幅の関係から報告書については割愛した。またハングル文献については（韓）と記した。）

- 東 潮1997『高句麗考古学研究』吉川弘文館
- 尾上元規1998「曲刀子の系譜と性格—岡山県内出土資料を中心に—」『古代吉備』21
- 亀田修一1997「考古学から見た吉備の渡来人」『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社
- 亀田修一2001「古墳の時代—古代国家への道—」『牛窓町史 通史編』牛窓町
- 金 泰 植1993『加耶連盟史』—潮閣（韓）
- 金 斗 喆2000『韓国古代馬具の研究』東義大学大学院博士学位論文（韓）
- 洪 潜 植1998「金官加耶の成立と発展」『加耶文化遺跡調査および整備計画』慶尚北道他（韓）
- 白井克也2000「日本出土の朝鮮産土器・陶器—新石器時代から統一新羅時代まで—」『日本出土の舶載陶磁—朝鮮・渤海・ベトナム・タイ・イスラム—』東京国立博物館
- 白井克也2003「土器からみた地域間交流—日本出土の馬韓土器・百濟土器—」『検証 古代日本と百濟』大巧社
- 申 敬 澈1995「三韓・三国時代の東萊」『東萊区誌』（韓）
- 鈴木一有・齋藤香織1996「剣菱形杏葉出現の意義—伝岡崎出土資料をめぐる問題—」『三河考古』9
- 鈴木靖民2002「倭国と東アジア」『日本の時代史2 倭国と東アジア』吉川弘文館
- 高田貫太1998「古墳副葬鉄鉢の性格」『考古学研究』45-1
- 高田貫太1999「瀬戸内における渡来文化の受容と展開（報告要旨）—5世紀代の墓制を中心として—」『渡来文化の受容と展開—5世紀における政治的・社会的変化の具体相（2）—』第46回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 高田貫太2003「5、6世紀日本列島と洛東江以東地域の交渉に関する予察」『韓国考古学報』50 韓国考古学会
- 武田幸男1989『高句麗史と東アジア—「広開土王碑」研究序説—』岩波書店
- 田中新史1988「古墳出土の胡籙・靱金具」『井上コレクション弥生・古墳時代資料目録』
- 田中俊明1992『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館
- 田中俊明2003「百濟と倭の関係」『検証 古代日本と百濟』大巧社
- 千賀 久1994「日本出土馬具の系譜2—5世紀後半の馬装具を中心に—」『樞原考古学研究所論集』12 吉川弘文館
- 新納 泉2002「古墳時代の社会統合」『日本の時代史2 倭国と東アジア』吉川弘文館
- 朴 天 秀1998「考古学から見た古代の韓・日交渉」『青丘学術論集』12（財）韓国文化研究振興財団
- 朴 天 秀1999「考古学資料からみた大伽耶」『考古学を通してみた大伽耶』韓国考古学会
- 松木武彦2001『吉備地域における「雄略朝」期の考古学的研究』岡山大学文学部
- 宮代栄一1993「5・6世紀における馬具のセットについて—f字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に—」『九州考古学』68
- 山尾幸久1999「倭王権と加羅諸国との歴史的関係」『青丘学術論集』15（財）韓国文化研究振興財団
- 山尾幸久2002「五、六世紀の日朝関係—韓国の前方後円墳の—解釈—」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会
- 吉井秀夫2002a「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」『日本の時代史2 倭国と東アジア』吉川弘文館
- 吉井秀夫2002b「日本出土百濟（馬韓）土器の諸問題」『日本所在百濟文化財調査報告書Ⅲ』国立公州博物館研究叢書第14、国立公州博物館（韓）
- 吉田 晶1995『吉備古代史の展開』塙書房
- 李 尚 律1998「新羅、加耶文化圏からみた百濟の馬具」『百濟文化』27（韓）
- 李 熙 濬1998a「4～5世紀新羅の考古学的研究」ソウル大学大学院文学博士学位論文（韓）
- 李 熙 濬1998b「金海禮安里遺跡と新羅の洛東江西岸進出」『韓国考古学報』39（韓）
- 李 成 市1999「加耶の国際環境と外交—新羅関係を中心として—」『加耶の対外交渉』第5回加耶史学術会議 金海市他（韓）
- 李 成 市2002「新羅の国家形成と加耶」『日本の時代史2 倭国と東アジア』吉川弘文館

6. 石室蓋石・葺石の岩石と産地の検討

鈴木 茂之

石室蓋石・葺石として使用された岩石を鑑定し、それらの石材の産地を検討した。検討にあたって天狗山古墳の周辺の地質を調べたところ、以下のように蓋石・葺石と同じ種類の岩石が古墳周辺に分布している。石材に使われた岩石が、古墳周辺の岩石と同定出来るかどうか、鉱物組成や組織・微細構造の特徴を、両者の岩石薄片を作成して観察することによって検討した。

1. 検討した岩石試料

蓋石のほか葺石試料は3箇所の発掘トレンチから採取した。後円部東トレンチから10試料、くびれ部中央トレンチから10試料、前方部西トレンチから4試料である。これらのうち岩石薄片を作成したものは、蓋石1試料、葺石は後円部東トレンチから東③・東⑤、くびれ部中央トレンチからくびれ⑤・くびれ⑩、前方部西トレンチから西④の5試料である。石材に利用したと考えられる岩石3種類について、その産地と推測した場所から、試料S-1, S-2, S-3の3試料を採取し岩石薄片を作成した。

2. 石材試料の岩石鑑定結果

①蓋石の石材

塊状な細粒花崗岩である。薄片の顕微鏡観察によって次のような特徴が認められる。等粒状をなし0.5～1ミリ程度の結晶からなる（カラー図版1）。主に石英、斜長石、カリ長石、黒雲母で構成される。白雲母、不透明鉱物、ジルコンをわずかに伴う。石英は他形をなす。0.1ミリ程度の、周囲の結晶より小さい粒状のものも普遍的に存在する。斜長石は半自形をなし、アルバイト式双晶が明瞭なものと、均質でソーシュライト化が顕著なものがある。カリ長石には明瞭ではないがマイクロパーサイト組織を伴う。カールスバット式双晶をなすものがある。核として斜長石を包有するものがあることが特徴的である。この斜長石はアルバイト双晶を持ち、虫食い状の形で分散している。分散したこれらの結晶は同じ光学的方位を持ち同時に消光するため、もとはより大きな斜長石の結晶があったことがわかる。この斜長石は冷却中にマグマの残液と反応して融解し、カリ長石に置き換わって成長したものと考えられる。

②葺石の石材

試料は構成鉱物や組織から、花崗岩類、ホルンフェルス、貫入岩岩脈の3種類に区分できた。鑑定結果は表7に示される。

花崗岩類：一般的な花崗岩は鉱物粒のサイズが1～数ミリで等粒状の中粒から粗粒な岩石である。しかし石材として利用された花崗岩は斑状細粒花崗岩と細粒花崗岩である。斑状細粒花崗岩は葺石に利用されている。細粒花崗岩は蓋石に利用され、また葺石にも使われている。

顕微鏡観察によると、斑状細粒花崗岩は0.5～1ミリ程度の斑晶と石基をなす0.1～0.2ミリ程度の等粒状の結晶からなる（くびれ⑤、カラー図版2）。斑晶をなす鉱物は石英、斜長石、カリ長石である。斑晶の石英はマグマから早い段階で晶出した高温型石英と考えられ、その後の温度低下に伴う不安定化のため、融解によって丸みをおびたり、虫食い状になっていることが多い。斜長石の斑晶はアルバイト式双晶が明瞭で自形をなすものが多い。また累帯構造をなすものがある。カリ長石の割合は石英と斜長石にくらべて少ない。カールスバット式双晶をなすものが認められた。石基をなす鉱物は石英、カリ長石（アルカリ長石を含む）、斜長石、黒雲母からなる。不透明鉱物、ジルコン、燐灰石がわずかに存在する。石英とアルカリ長石はいっしょに成長して鉱物をなすマイクログラフィック（micrographic）組織をなすことが多い。

表7 石材試料の岩石鑑定結果

試料番号	岩石名	備考
後円部東トレンチ①	泥岩のホルンフェルス	
同②	泥岩のホルンフェルス	
同③	泥岩のホルンフェルス	
同④	細粒花崗岩	斑状 岩体周縁部のもの
同⑤	細粒花崗岩	等粒状 岩体周縁部のもの
同⑥	泥岩のホルンフェルス	平行葉理残る
同⑦	泥岩のホルンフェルス	
同⑧	泥岩のホルンフェルス	
同⑨	細粒花崗岩	等粒状 岩体周縁部のもの
同⑩	泥岩のホルンフェルス	
くびれ部中央トレンチ①	流紋岩	斑状 貫入岩
同②	泥岩のホルンフェルス	斑状変晶が形成されている
同③	泥岩のホルンフェルス	平行葉理残る
同④	泥岩のホルンフェルス	
同⑤	細粒花崗岩	斑状 岩体周縁部のもの
同⑥ たちわり2	泥岩のホルンフェルス	
同⑦ たちわり10	泥岩のホルンフェルス	平行葉理残る
同⑧ たちわり5	泥岩のホルンフェルス	斑状変晶が形成されている
同⑨ たちわり3	細粒花崗岩	斑状 岩体周縁部のもの
同⑩ たちわり16	泥岩のホルンフェルス	斑状変晶が形成されている
くびれ部西トレンチ①	泥岩のホルンフェルス	
同②	泥岩のホルンフェルス	
同③	安山岩	細粒 貫入岩
同④	細粒花崗岩	斑状 岩体周縁部のもの

け、再結晶作用によって硬く緻密になったものである。もとの泥岩は極微粒な泥からなっていたが、高温による再結晶作用によって石英や黒雲母などが成長したために、ややざらつきのある外観をなす。すなわち源岩の泥が変成作用によって、0.01～0.05ミリ程度の大きさの石英と黒雲母の結晶に変化し成長している。微粒な不透明鉱物をわずかに伴う。0.5ミリ程度の大きさに成長した斑状変晶として、白雲母がくびれ⑩で認められた（カラー図版3）。これは顕微鏡下（平行ニコル）では無色、一方向の平行的な劈開が明瞭で、屈折率がやや高く、偏光板を直行方向（十字ニコル）にすると、黄色から青の二次干渉色をなす。実体顕微鏡でも透明で板状の鉱物であることから白雲母と判断される。白雲母の斑状変晶は泥岩起源のホルンフェルスには稀である。なおもとの泥岩の堆積構造として、細かい平行葉理が認められる試料がある。

貫入岩岩脈：葦石として利用されているが少数である。安山岩と流紋岩がある。これらは斑状組織をなしていることから、薄い岩脈をなしていたものと推測される。

3. 天狗山古墳周辺の地質

天狗山古墳から2km四方程度の範囲の地質を調査した。古い地質から順にホルンフェルス、花崗岩類、流紋岩岩脈、山砂利層、沖積層からなる。地質の分布を図75に、概念的な地質断面を図76に示した。

ホルンフェルス：天狗山周辺に分布する。古生代末頃の堆積岩が花崗岩による接触変成作用を受けて形成されたものである。外観は緻密で黒色であるが、新鮮な面では変成鉱物の黒雲母の影響で暗い赤紫がかった色調が認められる。図76に示すように、花崗岩体に近いほど変成の程度が高く、花崗岩体との境界付近では、変成鉱物である堇青石が斑状の結晶（斑状変晶）をなし、斑点状の外観をなす。源岩は泥岩が主体で砂岩泥岩互層のものもある。砂岩泥岩互層の砂岩単層は、厚さが10cm程度のものが一般的で級化層理をなすものがある。泥岩には平行葉理が認められることがある。これはシルトサイズの泥と粘土サイズの泥が厚さ1mmほどの葉理をなして交互に縞模様を呈しているもので、流れがほとんどない深海で堆積したものと解釈される。このような特徴からこの地層は超丹波帯の江尻層に相当すると考えられる。この地層

斜長石は自形または半自形をなす。石英は他形または粒状をなす。黒雲母は微細な結晶として散在するが、まれに集合体をなす。斑状の組織はマグマが急に冷却して出来た岩石に認められる組織で、花崗岩では岩体の周縁部に存在する。

細粒花崗岩である試料東⑤の薄片顕微鏡観察によると、斜長石を核にもつかり長石は見出せなかったが、その他の結晶のサイズ、構成鉱物、各鉱物の特徴は蓋石の石材とほぼ同様であった。

ホルンフェルス：葦石に使用されたホルンフェルスはいずれも泥岩または砂質泥岩が源岩である。これらが花崗岩の貫入時の熱による接触変成作用を受

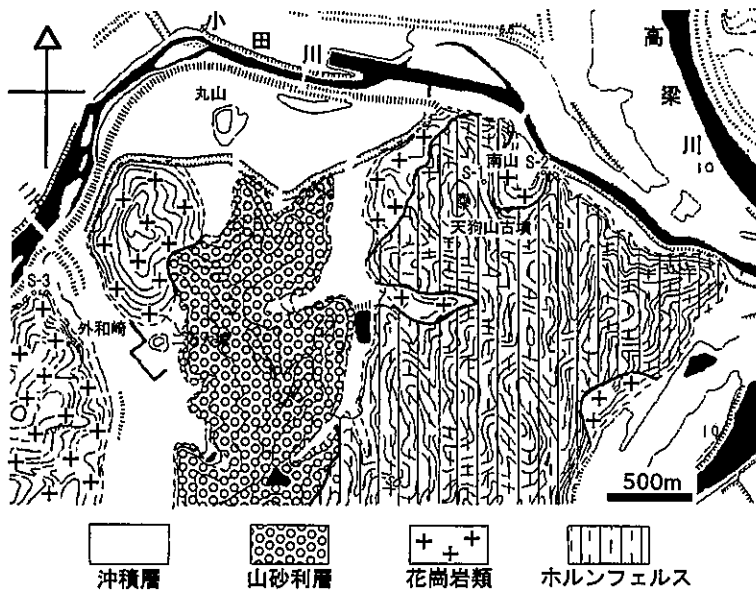


図75 天狗山周辺の地質図および試料採取位置

分布する。地質図（図75）に示されるように天狗山の麓の一部にも分布している。岡山県南部に分布する花崗岩は一般に粗粒（2～数ミリ程度）であるが、本地域内には鉱物のサイズが1～2ミリ程度の中粒花崗岩、0.5～1ミリ程度の細粒花崗岩、0.5～1ミリ程度の斑状の鉱物と石基からなる斑状細粒花崗岩が分布する。地域内の中粒の花崗岩は風化によってまさ土化していることが多い。石材に利用したと考えられる斑状細粒花崗岩（S-2）と細粒花崗岩（S-3）を採取して観察した。

南山の東方約200mの露頭では花崗岩と泥岩が接した部分が認められ、花崗岩は幅20m程度の狭い範囲で斑状組織になっている（カラー図版5、試料S-2）。この斑状細粒花崗岩は風化しにくく緻密である。顕微鏡下では0.5～1ミリ程度の斑状の結晶と石基をなす0.1～0.2ミリ程度の結晶が観察される。斑状の結晶は、融解によって丸みを帯びたり虫食い状になった石英、自形から半自形のアルバイト式双晶をなす斜長石（累帯構造をなすものがある）、カリ長石（カールスバット式双晶をなすものがある）からなる。石基をなす鉱物は石英、カリ長石、斜長石、黒雲母などである。特徴的にマイクログラフィック組織が形成されている。本試料にはわずかに角閃石が存在するが、薄石試料で薄片を作成したくびれ⑤、西④には認められなかった。

外和崎では等粒状の細粒花崗岩が分布する。試料S-3を採取した露頭は小田川の攻撃斜面にあたり、古墳時代でも岩石が露出していた可能性がある。連続性の良い一方向の平行的な節理が数10cm間隔ではあり、大型の板状の石材を得るには適した産状をなす。顕微鏡下では0.5～1ミリ程度の石英、斜長石、カリ長石、黒雲母が認められる（カラー図版6、試料S-3）。白雲母、不透明鉱物、ジルコンをわずかに伴う。蓋石と同様に石英には0.1ミリ程度の小さい粒状のものがあ、斜長石はアルバイト双晶が明瞭なものとな、いものがある。また斜長石の部分が核として残されているカリ長石が本試料からもみいだされた。

流紋岩岩脈：白亜紀末から古第三紀初期のものと推測される。幅数10cmの岩脈をなして泥岩に貫入しているのが、天狗山古墳脇に露出している。石英と長石の結晶が、貫入岩に特徴的な斑状組織をなしている。

山砂利層：岩石化していない、玉砂利状の礫からなる古第三紀の地層である。天狗山の西の丘陵地に分布する。礫の長径は20～5cmで、これらは円礫形から亜円礫形をなす。大礫を含むことがある。風化によってくさり礫になった部分が多いため、流紋岩などの硬い礫のみ地表に転石として残る。

沖積層：沖積層分布域は平地をなし、一般に水田として利用されている。主に氾濫による泥からなる。小田川の流路では流域に広く分布する花崗岩から由来した砂が多く、そのほか長径が1cm程度の礫を含む。

は旧瀬戸町（現岡山市東区）、岡山市、旧美星町（現井原市）、井原市など岡山県南部に分布しており、本地域はその地層の分布域として調和的である。

古墳から南山に下る斜面の転石（試料S-1）から岩石薄片を作成し顕微鏡観察を行った。主な構成鉱物は変成鉱物として形成された0.01～0.05ミリ程度の微粒な黒雲母と石英である（カラー図版4）。微粒な不透明鉱物をわずかに含む。斑状変晶として、0.5ミリ程度の堇青石（風化などによって変質している）が認められる。堇青石より多くの白雲母の斑状変晶が形成されていることが特徴的である。

花崗岩類：白亜紀後期に形成された岩石で、本地域内および周辺に広く分布する。

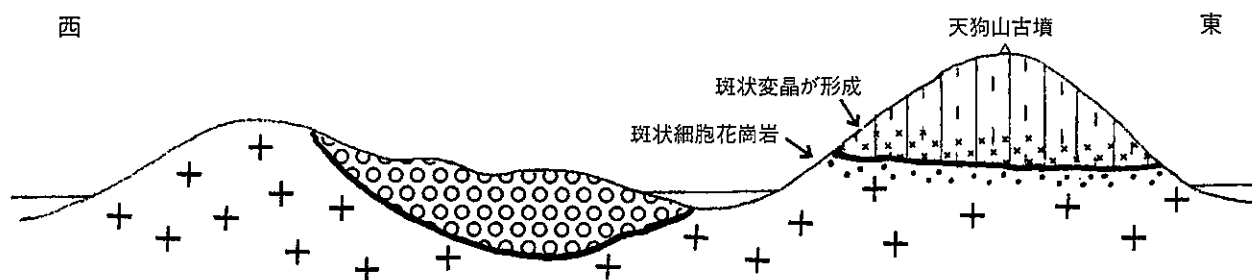


図76 天狗山周辺の地質断面図（東西方向、凡例は図75と同じ）

高梁川の流路には礫州が発達し、長径が20～10cmの円礫から亜円礫が分布する。

4. 蓋石・葺石の産地について

蓋石は試料S-3の露頭付近で採取された可能性がある。等粒状の細粒花崗岩で、石英の微小粒状結晶を伴うことなど、鉱物組み合わせと鉱物の産状が一致する。この特徴は細粒花崗岩としてそれほど特殊ではない。しかしカリ長石中に斜長石が融解した結晶が核をなす例は少ない。また露頭が小田川の攻撃斜面で古墳時代も露頭であったと推測され、平行な節理が存在し大型の板状の石材が得られる状態にあることは、産地の可能性を高める。

葺石に使用された岩石は以下のように天狗山古墳周辺に分布する岩石と対応する。葺石として最も多い泥岩起源のホルンフェルスは天狗山の地山をなす岩石である。ホルンフェルス化によって緻密になったため、風化にはやや強く、山の斜面などに転石として普通に存在する。顕微鏡観察によってくびれ⑩の試料から、接触変成鉱物としては例が少ない白雲母の斑状変晶が見出されたことは重要である。古墳から約100m東方の斜面の転石（試料S-1）からも、白雲母の斑状変晶が見出されたことは、くびれ⑩がこのあたりで採取された可能性を示す。ホルンフェルスの石材で斑状変晶を伴わないものも多いが、このような岩石は転石として古墳周辺に存在する。これらの石材は古墳のすぐ近傍から採取されたとみなされる。

葺石として多く利用されている花崗岩類も天狗山の麓に分布している。特に斑状細粒花崗岩はホルンフェルスとの境界部に分布し、くびれ⑤と西④の石材の顕微鏡下での特徴は南山東方の試料S-2のものと、鉱物組み合わせや組織がほぼ同じである。マイクログラフィック組織が両者に認められた。石材は天狗山の麓付近に転石として存在していたものを利用したと考えられる。等粒状をなす細粒花崗岩（東⑤）の顕微鏡下での特徴は、蓋石とほぼ同じである。蓋石を採取した際の副産物を利用した可能性も推測される。なお一般的な粗粒な花崗岩が利用されていないのは、風化によってまき土化したり、もろくなっていたためと推定される。

流紋岩も古墳付近から採取された可能性がある。安山岩は天狗山では確認できなかったが、流紋岩と同様な岩脈として、付近にごく小規模に存在している可能性がある。

天狗山古墳周辺に分布しながら利用されていない石材として、山砂利層や高梁川河原の礫がある。山砂利層のものは石のサイズが10cm以下の小さいものがほとんどで、風化や土壌の被覆によって利用しにくかった可能性がある。高梁川河原の礫は葺石と同様のサイズで、表面が磨かれた硬く丸みのある石材であるのに、これらが利用されなかった理由は不明である。高梁川から天狗山古墳に礫を運ぶには、小田川を渡る必要があったため利用しにくかったのであろうか。

5. まとめ

天狗山古墳の蓋石は、古墳の西方約2.5km（試料 S - 3 採取地点）あたりに露出する細粒花崗岩が利用された可能性がある。石材と現地試料の鉱物組成、鉱物のサイズなどの組織のほか、共にカリ長石に斜長石の核を持つものがある特徴が一致する。S - 1 採取地点が小田川の攻撃斜面で当時も岩石が露出していた可能性があること、花崗岩が明瞭な一方向の節理によって大きな板状をなすこともその推測を支持する。

葺石に利用した石材はホルンフェルス、斑状細粒花崗岩、細粒花崗岩などで、これらは天狗山付近の斜面や麓から採取したものであると考えられる。葺石と古墳近傍の試料を検討した結果、ホルンフェルスには稀な白雲母の斑状変晶が両者から見出されたこと、斑状細粒花崗岩のマイクログラフィック組織を伴う岩石組織の特徴が両者で共通することがその主要な根拠である。

総 括

天狗山古墳の発掘調査では、古墳の規模・構造や年代に加えて、その歴史的背景に関わるいくつかのことが明らかになった。その概要を、以下にまとめておく。

1) 天狗山古墳は、墳丘長57.0m、後円部径46.5m・高さ9.7m（周溝底から）、前方部長17m・最大幅推定22.7m・高さ1.6m（周濠底から）の帆立貝形前方後円墳で、周溝と周堤をめぐらせ、それらも含めた総長は約80mである。

2) 墳丘は、後円部2段、前方部1段に築かれ、後円部1段目のテラスが前方部上面に接続する。前方部の西側斜面には造り出し状遺構が付設されている。後円部の南西側に、径約15mの円墳と考えられる天狗山西古墳がある。

3) 葺石は、後円部の2段目のみに施す。葺石および後述の竪穴式石室石材は、岩石学的には地元産と鑑定され、盛土も含めた墳丘本体のマテリアルは築造箇所および近隣より取得されていることが判明した。円筒埴輪列は、墳頂平坦面外縁、1段目テラスおよび周堤に各1重、都合3重に巡らせる。天狗山西古墳には、葺石および円筒埴輪列はない。

4) 竪穴式石室は長さ380cm、最大幅117.8cm、高さ71.5cmで、後円部ほぼ中央、後円部の現頂部より約6mの深さで整地した地山上に構築されている。墓壙はなく、石室での埋葬および副葬行為等を終えて蓋石を架構した後、その上に墳丘を築成している。石室の壁体は、角礫間に粘質土を充填する技法で作られていて、この特徴は、上記した石室と墳丘の構築順序ともども、朝鮮半島南部加耶地域の古墳と共通する。天狗山西古墳の埋葬施設は完全に破壊されていたが、小型の竪穴式石室の壁体や蓋石を構成していたとみられる石材が出土した。

5) 出土した須恵器のうち天狗山古墳に伴うと考えられるものは、いずれもTK23型式からTK47型式への過渡期、もしくはTK47型式に属するので、天狗山古墳の築造年代は、TK47型式が行われた5世紀後葉を前後する時期である可能性が高い。これは、円筒埴輪や、かつて石室から出土した遺物の型式学的年代とも矛盾しない。天狗山西古墳の築造年代も、出土した須恵器から、天狗山古墳とほぼ同時期と考えられる。

6) すでに触れた円筒埴輪と須恵器のほか、墳丘からは蓋形埴輪を主とする形象埴輪、陶質土器および本書で陶質系土器とした一群の土器が出土し、石室内からは棺床形成土に埋め込まれた状態の鉄製武器が発見された。これらのうち陶質土器は、朝鮮半島西南部の栄山江流域地方の所産である可能性が高い。

調査で明らかになった以上の事実のうち、天狗山古墳の歴史的背景を論じるに際してとくに重要なのは4)と6)である。すなわち、天狗山古墳の石室形態、石室と墳丘の構築手順、および墳丘に置かれた土器は、天狗山古墳の被葬者ないしは築造主体者と朝鮮半島との密接なつながりが、同じ時期の他の古墳以上に明確に示されている。もちろん、埴輪列を巡らせたり石室内部を赤彩したりすることは日本列島の古墳に古くからみられる伝統に則った要素であるから、ここで被葬者や築造主体者の出自やアイデンティティについて言及するのは尚早である。しかしながら、これまでもっぱら畿内を中央とし地方を周辺に置く列島内部の政治的関係論を軸に歴史的な評価が下されることが多かった帆立貝形古墳について、対外的関係を多分に含む複雑な背景を考えなければならないことがわかったのは、大きな調査成果の一つである。

その他にも、本書で陶質系土器とよぶ特異な土器の一群、円筒埴輪の良好な一括資料などの遺物、墳丘や竪穴式石室の詳細な構造などの重要なデータが得られ、今後、吉備地域の中期古墳を列島史や東アジア史の中で評価していくために資するところは大きい。

총 관

天狗山古墳은 이번 발굴조사를 통해 古墳의 규모·구조와 연대, 그리고 그 역사적 배경 등에 관해 어느 정도 밝혀지게 되었다. 그 개요는 아래와 같이 정리하고자 한다.

1) 天狗山古墳은 墳丘길이 57.0m, 後圓部 직경 46.5m·높이 9.7m(周濠바닥에서부터), 前方部 길이 17m·추정 最大幅 22.7m·높이 1.6m(周濠바닥에서부터)의 帆立貝形前方後圓墳으로 周濠와 周堤를 둘러싸고 있는 것까지 포함한 총 길이는 約 80m이다.

2) 墳丘는 後圓部 2段, 前方部 1段으로 축조되었으며 後圓部 첫번째 테라스가 前方部 上面에 연결되어 있다. 前方部 西側斜面에는 造出部모양의 유구가 설치되어 있다. 後圓部 南西側에 직경 약 14~15m의 圓墳으로 생각되는 天狗山西古墳이 있다.

3) 葺石은 後圓部 두번째 段에만 설치되었다. 葺石 및 후술할 수혈식석실의 石材는 암석학적으로는 이 지역산으로 감정되었고 盛土를 포함한 墳丘 본체의 재료는 축조장소 혹은 인근으로부터 획득한 것으로 판명되었다. 圓筒埴輪列은 墳頂 平坦面 바깥쪽, 그리고 첫번째 테라스 및 周堤에 각 1겹씩, 합쳐서 3겹으로 둘러져 있다. 天狗山西古墳에는 葺石 및 圓筒埴輪列은 없다.

4) 竪穴式石室은 길이 380cm, 最大幅 117.8cm, 높이 71.5cm로 후원부 거의 중앙, 후원부 현재 정상부로부터 約 5.5m 깊이에서 整地된 생토 위에 구축되어 있다. 墓壙은 없고 석실에서 埋葬 및 부장행위 등을 마치고 개석을 덮은 후 그 위에 분구를 축조하고 있다. 석실 벽체는 角礫사이에 점토를 충전하는 기법으로 만들고 있는데 이 특징은 상기한 석실과 분구의 축조순서와 함께 한반도 남부가야지역의 고분과 공통된다. 天狗山西古墳의 埋葬施設은 완전히 파괴되었지만 소형 수혈식석실의 벽체와 개석을 구성하였던 것으로 보이는 석재가 출토되었다.

5) 出土된 須惠器 중 天狗山古墳에 동반된다고 생각되는 것은 모두 TK23 型式에서 TK47 型式으로의 과도기, 혹은 TK47 型式에 속하기 때문에 天狗山古墳의 築造年代는 TK47 型式이 이루어졌던 5世紀後葉을 전후한 시기일 가능성이 높다. 이것은 圓筒埴輪과, 동시에 석실에서 출토된 유물의 형식학적 연대와도 모순되지 않는다. 天狗山西古墳의 축조연대도 출토된 須惠器에서 天狗山古墳과 거의 동시기로 생각되고 있다.

6) 이미 언급한 圓筒埴輪과 須惠器 외에 분구에서는 蓋形埴輪을 기본으로 한 形象埴輪, 陶質土器 및 本書에서 陶質系土器로 표현한 一群의 토기가 출토되었고 석실 내에서는 棺床形成土에 매몰된 상태로 철제무기가 발견되었다. 이들 중 陶質土器는 한반도 남부 영산강유역지방의 所産일 가능성이 높다.

調査에서 밝혀진 상기의 사실 중 天狗山古墳의 歷史的背景을 논할 때 특히 중요한 것은 4)와 6)이다. 즉, 天狗山古墳의 석실형태, 석실과 분구의 축조순서 및 분구에 매납된 토기는 天狗山古墳의 피장자 내지는 축조주체자와 한반도와의 밀접한 관련성을 같은 시기의 다른 고분에서보다 명확하게 시사하고 있다. 물론 埴輪列을 둘러세우거나 석실내부를 붉게 채색하는 것 등은 일본열도 고분에서 일찍부터 보이는 전통에 따른 요소이기 때문에 여기에서 피장자와 축조주체자의 출신과 아이덴티티에 대해 언급하는 것은 시기상조이다. 그러나 이제까지 오로지 畿内를 중앙으로 하고 지방을 주변으로 둔 일본열도 내부의 정치적 관계론을 축으로 역사적인 평가가 이루어진 적이 많은 帆立貝形古墳에 대해서 대외적 관계를 다분히 포함하는 복잡한 배경을 생각해야만 한다는 사실을 알게 된 것은 커다란 조사성과의 하나이다.

그 외에도 本書에서 陶質系土器로 부르는 特異한 토기의 一群, 圓筒埴輪의 양호한 일괄자료 등의 유물, 분구와 수혈식석실의 상세한 구조 등 중요한 데이터를 획득하였고 이는 今後 吉備地域의 中期古墳을 日本史와 東아시아史 안에서 평가해가는데 이바지하는 바가 클 것이다.

Summary

Tenguyama tumulus is located on a hilltop in the central area of Kibi district (present Okayama and the east half of Hiroshima prefecture) where powerful chiefs are thought to have established local chiefdoms against the political centre ruled by *daio* (a paramount chief or a king) in Kinai district (present Nara, Osaka, the southern part of Kyoto and the eastern part of Hyogo prefecture) during the Kofun period (3-6th centuries), when a highly developed chiefdom or an early state is considered to have emerged in Japanese archipelago.

Kofun period is characterized by kofun, chiefly burial mounds, built in various sizes and forms to reflect or demonstrate the religious, political and economic status of each person buried in them. Their sizes range from less than 10m to 480m in length or diameter, and the forms include round, square, round with trapezium (*zenpo-koen-fun* or keyhole-shaped mound) and square with trapezium (*zenpo-koho-fun* or double square mound). A number of the round with trapezium type of mounds are so huge that they have been regarded as the status symbol of the highest class elites including *daio*.

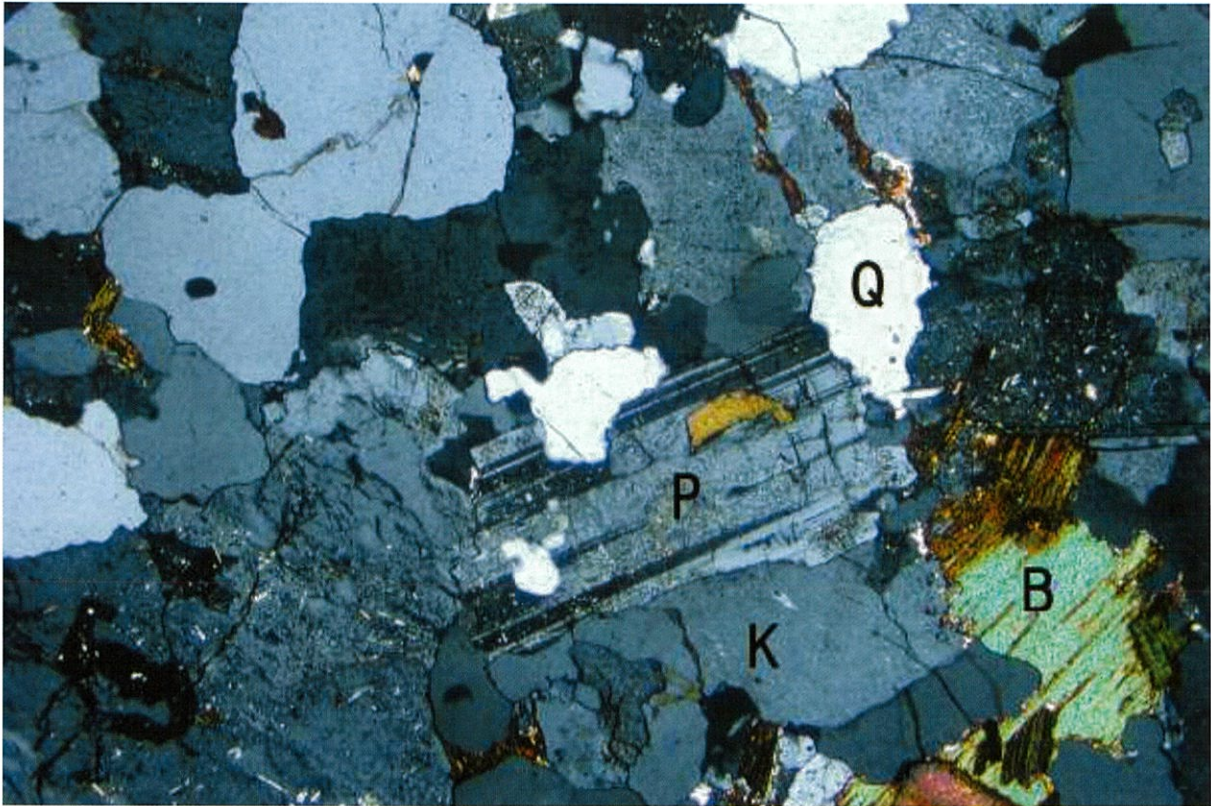
Among the round with trapezium type, smaller ones with extremely reduced trapezoidal part can be found during the middle Kofun period (5th century) in a wide area. This type of mounds has been called scallop-shaped tumuli (*hotategai-shiki-kofun*) and assumed to be an expression of the status of the chiefs weakened and degraded by *daio* in Kinai who was increasing his political power over the other areas. Tenguyama is a typical case of this type of mound in Kibi, allegedly built for a local chief subordinated by Bu (Wakatateru or Yuryaku) who appears in the historical record as a great *daio* in the late 5th century, although splendid grave goods such as horse trappings and body armour were found from the stone chamber by a local antiquarian in early 20th century, suggesting prosperity of the buried person.

The excavation of Tenguyama tumulus was conducted in every March 1998-2000 to make a survey map, uncover the surface of the mound by trenching and investigate the chamber. In consequence, it is revealed that the mound is 57m in length and 9.7m in height, surrounded by a ditch and covered with stones except the bottom and the trapezoidal part (fig.2, pp.11-12). The chamber is 3.8m in length and 1.2m in width, built with angular rocks and clay on the ground before the construction of the mound in the same manner with burial mounds in Kaya area of southern part of Korean peninsula (fig.6, p.19 and pl.3).

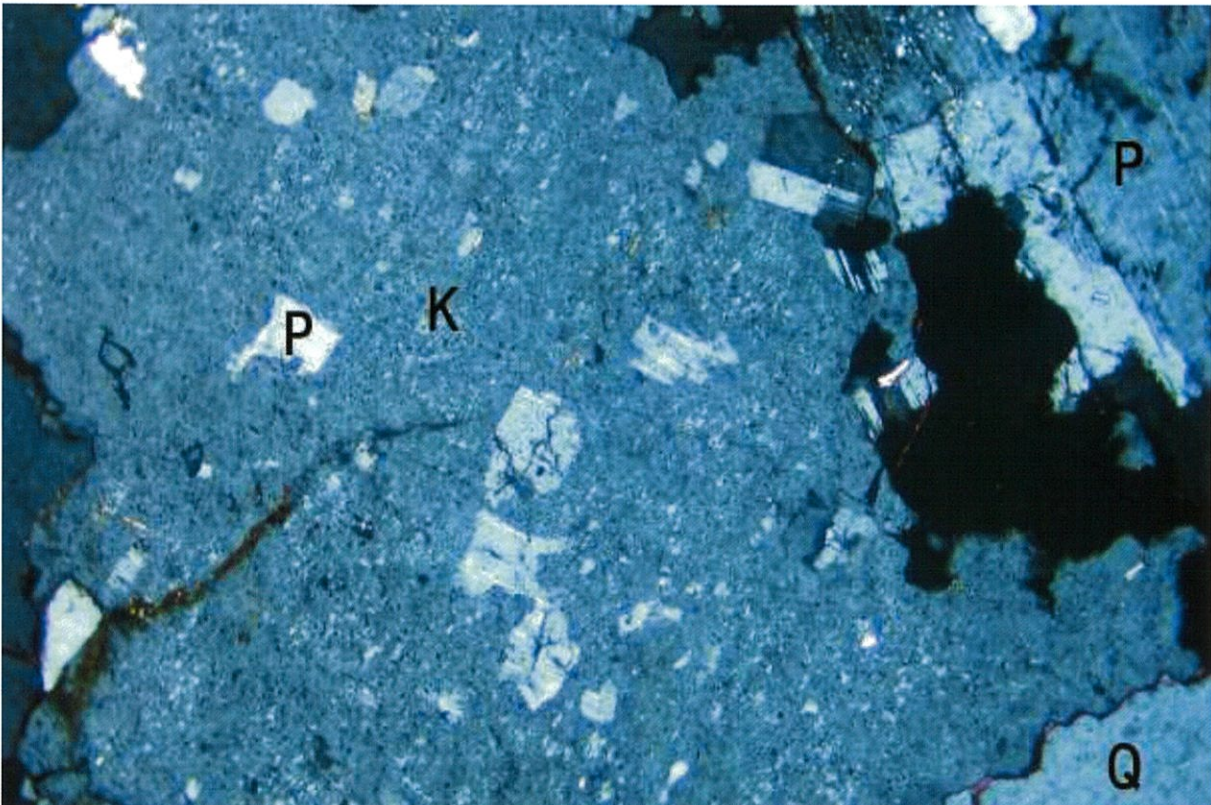
A dagger and three spears, left unnoticed at the time of previous digging, were discovered in the chamber (fig.26, p.49 and pl.23-1), as well as many cylindrical and parasol-shaped haniwas (fig.27-35, pp.51-56, 61, 63, 64 and pl.24-35) and pottery from the trenches. The pottery is dated to the late 5th century and some of them are notable as they are assumed to have originated from southern part of Korea along with the construction method of the chamber (fig.36, p.67 and colour plate 7).

In conclusion, Tenguyama tumulus is built under the strong influence from southern Korea, while Japanese traditional elements such as haniwas and red-painted walls of the chamber are also observed. It indicates that the buried man was one of the successful local chiefs in Kibi achieving a close relationship with Korea in the late 5th century, when the mound building was declining after the construction of the gigantic tumuli such as Tsukuriyama. It was a start of the transition from a confederacy of chiefdoms or an early state supported by kinship organization and indigenous belief to an archaic state based on a political institution and world religion.

カラー図版 1

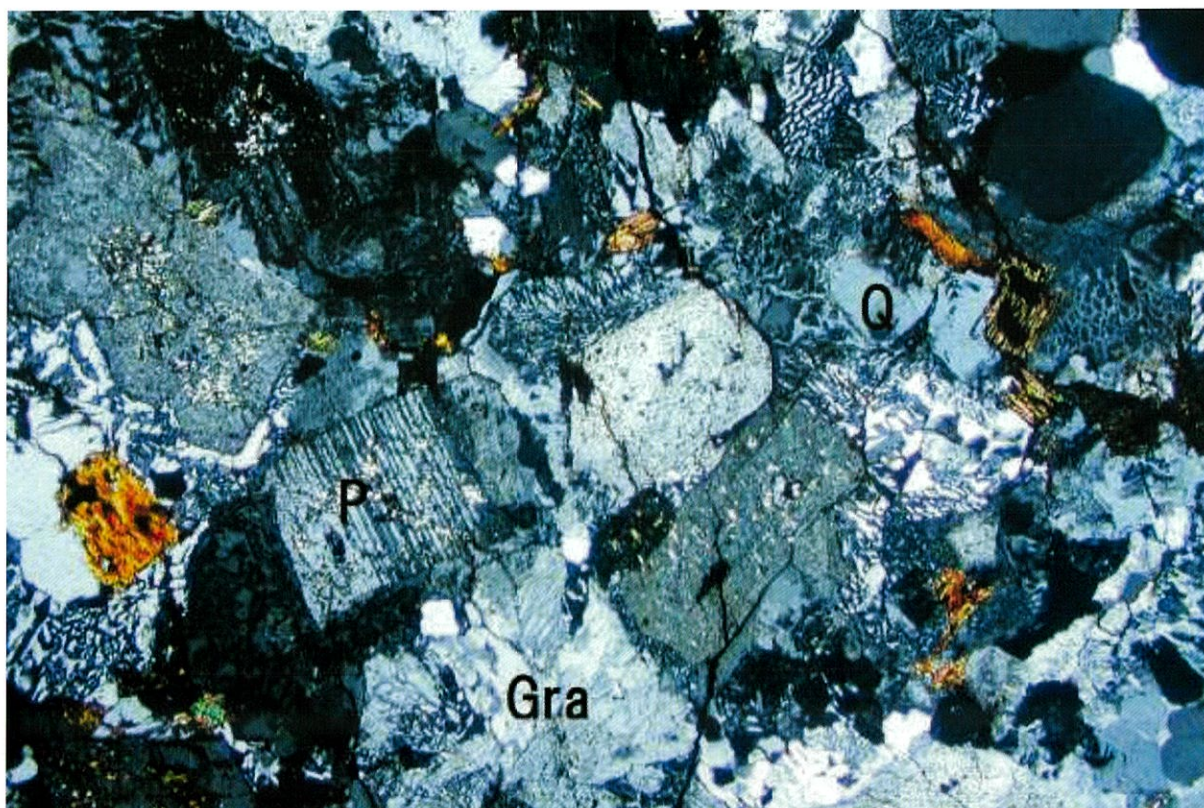


1a

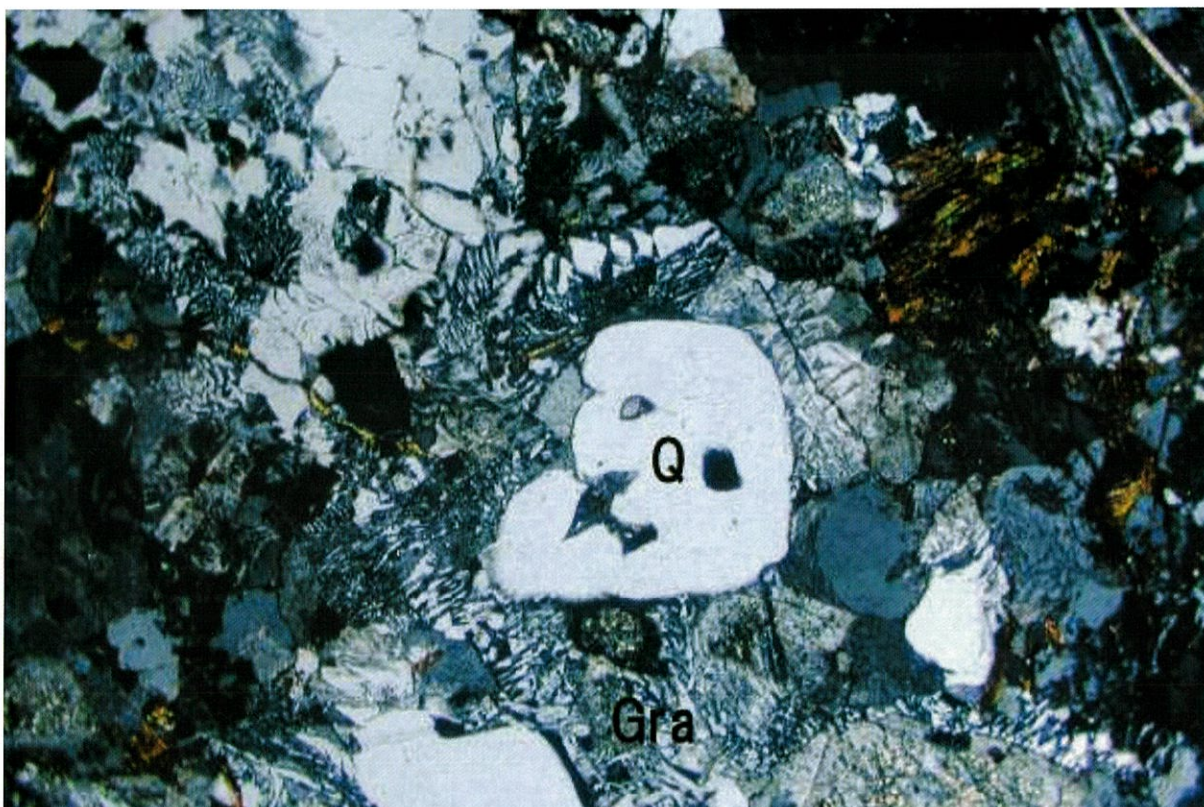


1b

写真 1 a, 1 b: 蓋石: 細粒花崗岩; 1 a, 石英 (Q)、半自形の斜長石 (P)、カリ長石 (K)、黒雲母 (B) からなる。
写真の横幅 2 mm (十字ニコル) 1 b, カリ長石中に斜長石の融解した結晶が残る。横幅 1 mm (十字ニコル)

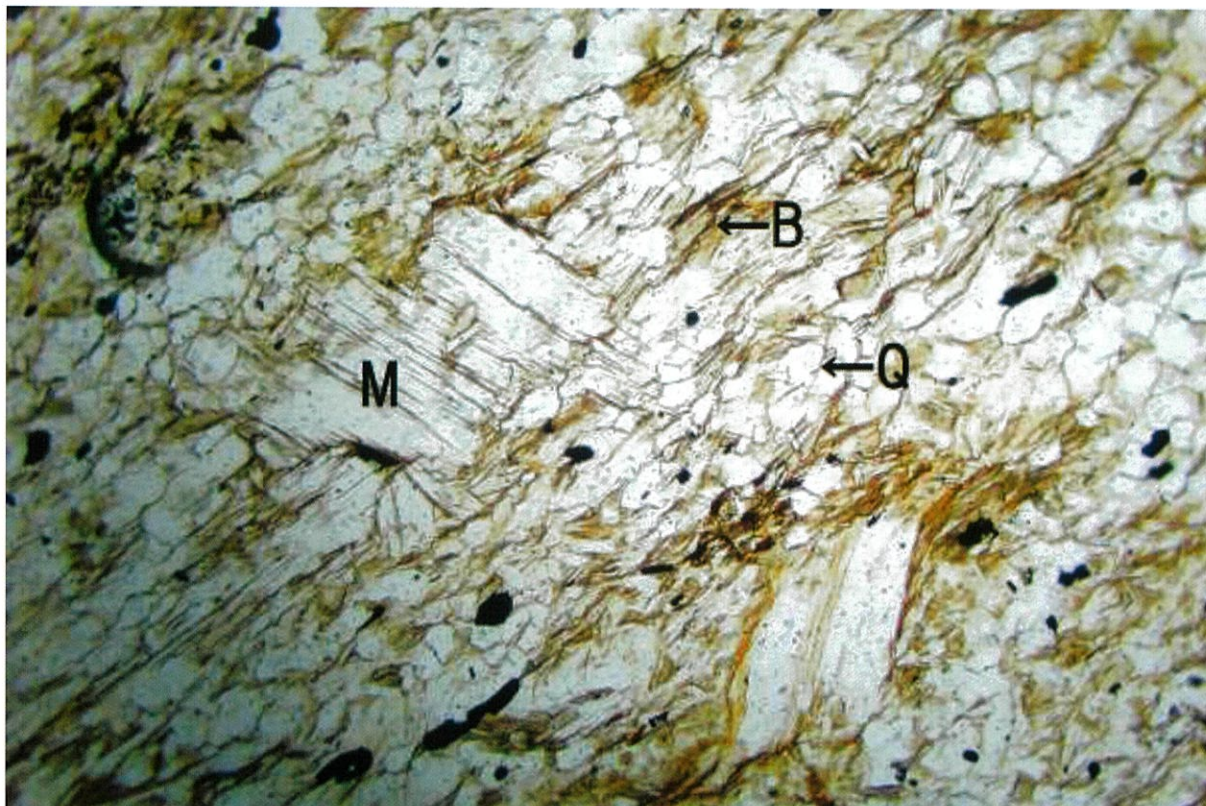


2a

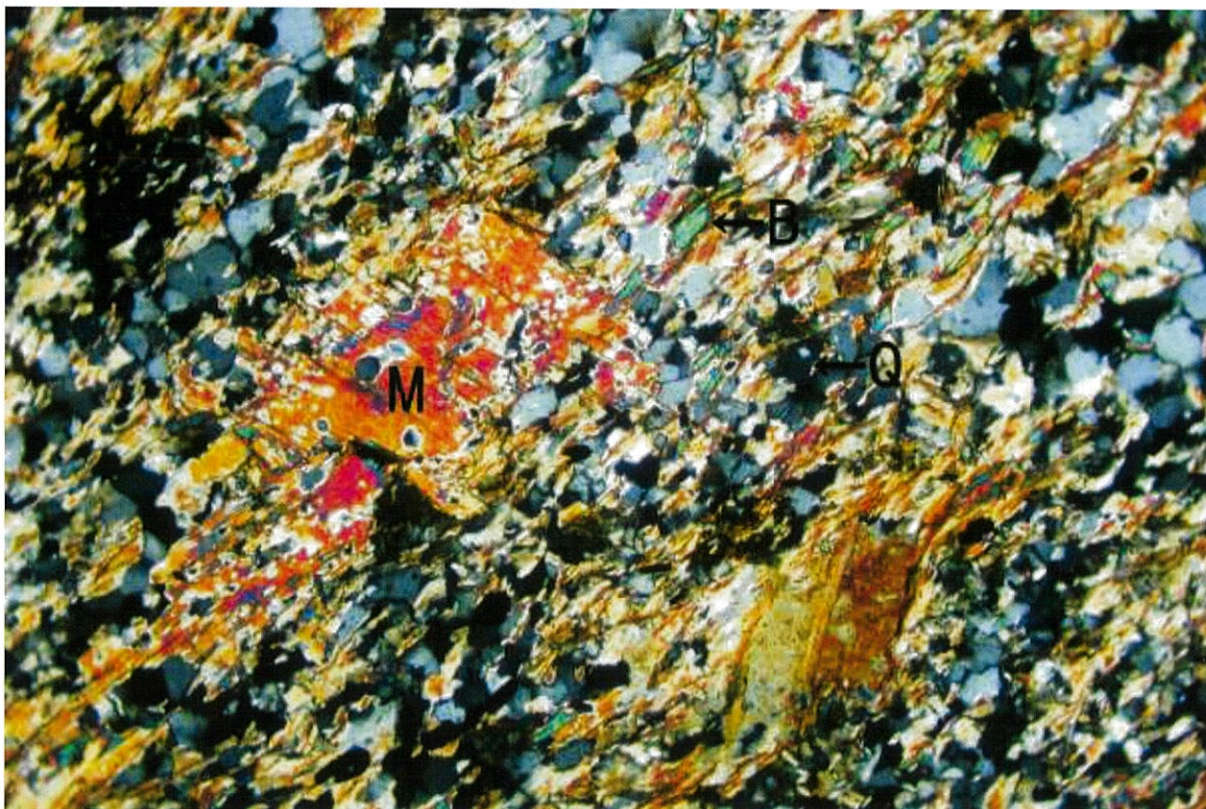


2b

写真2a, 2b: くびれ⑤: 斑状細粒花崗岩; 2a, 自形の斜長石の結晶を囲むようにマイクログラフィック組織をなす石英・アルカリ長石からなる結晶 (Gra) が形成されている。2b, 石英の斑晶は融解によって円みをおびる。石英 (Q), 斜長石 (P), 黒雲母 (B), 写真の横幅2mm (十字ニコル)



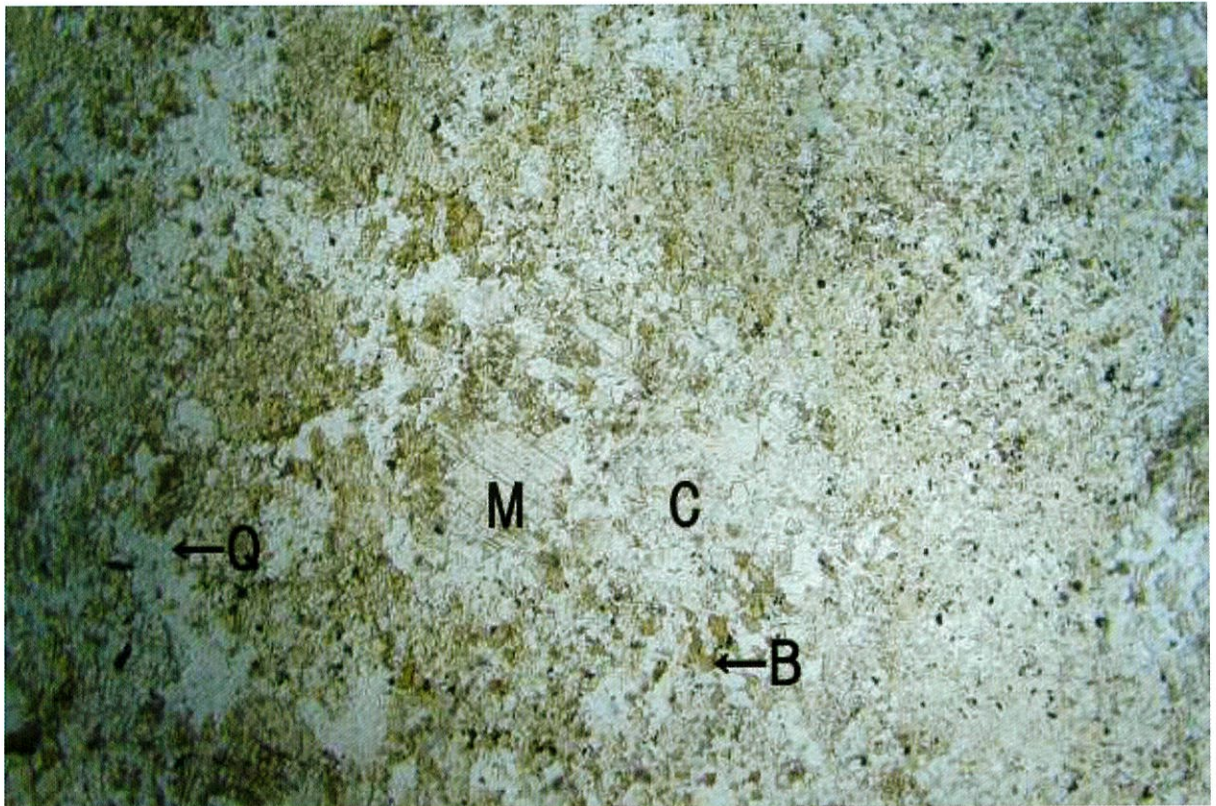
3a



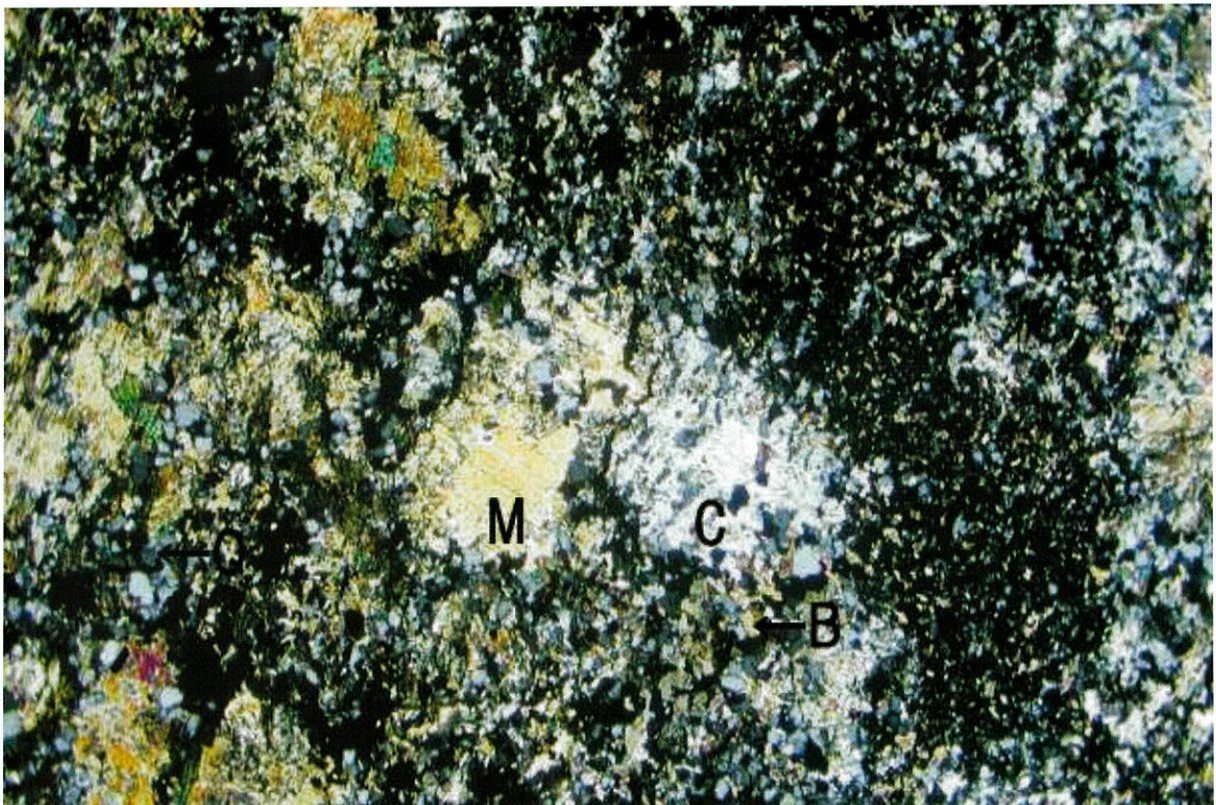
3b

写真3a, 3b: くびれ⑩: ホルンフェルス; 再結晶したモザイク状の石英 (Q)、黒雲母 (B) に白雲母 (M) の斑状変晶が形成されている。3a (単ニコル), 3b (十字ニコル), 写真の横幅1 mm

カラー図版 4

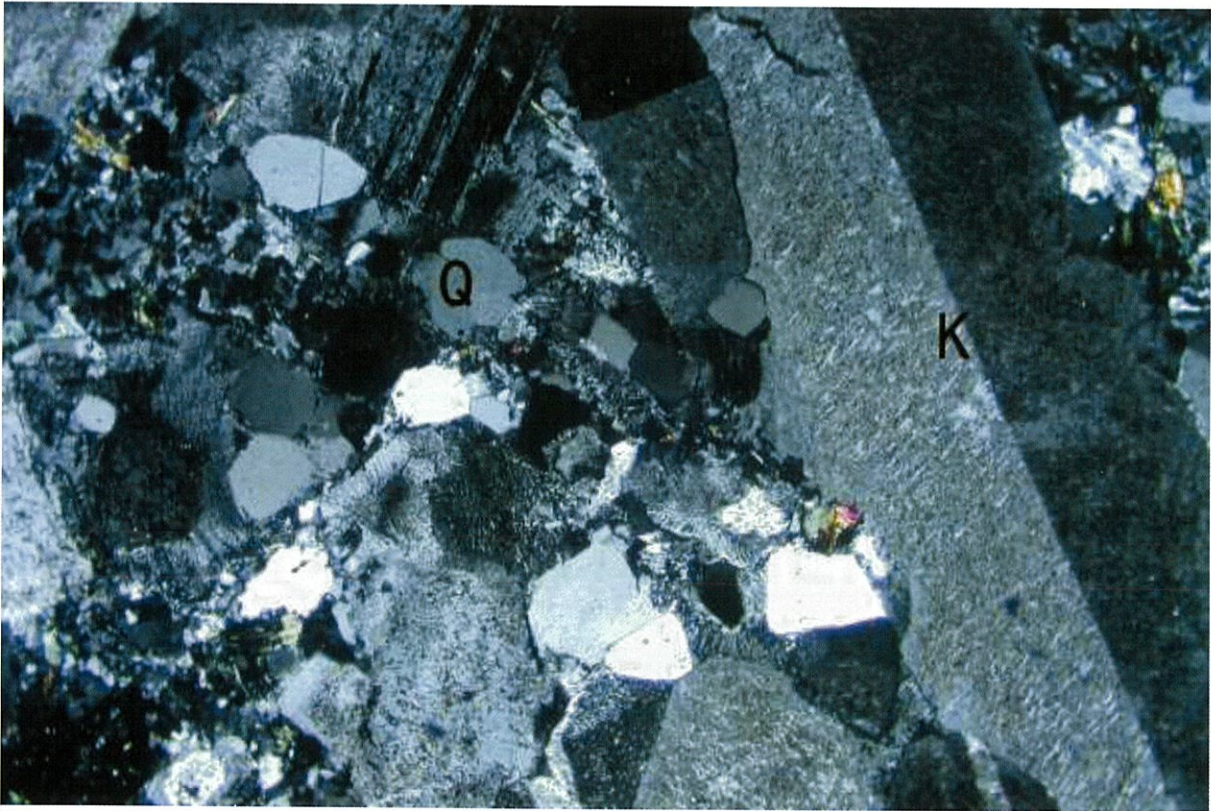


4a

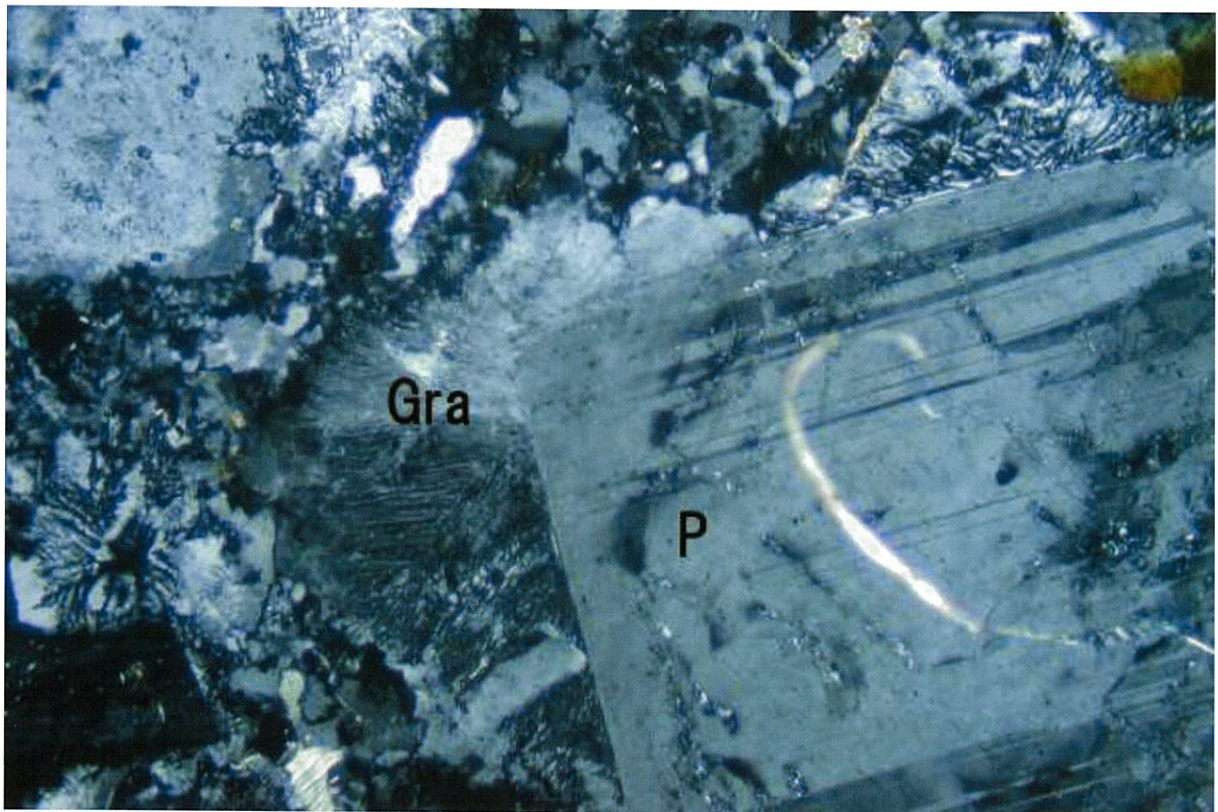


4b

写真 4a, 4b: 試料 S-1: ホルンフェルス; 接触変成作用によって形成された石英 (Q) と黒雲母 (B) がほとんどを占める。斑状変晶として白雲母 (M) と堇青石 (C) が形成されている。4a (単ニコル), 4b (十字ニコル), 写真の横幅 2mm

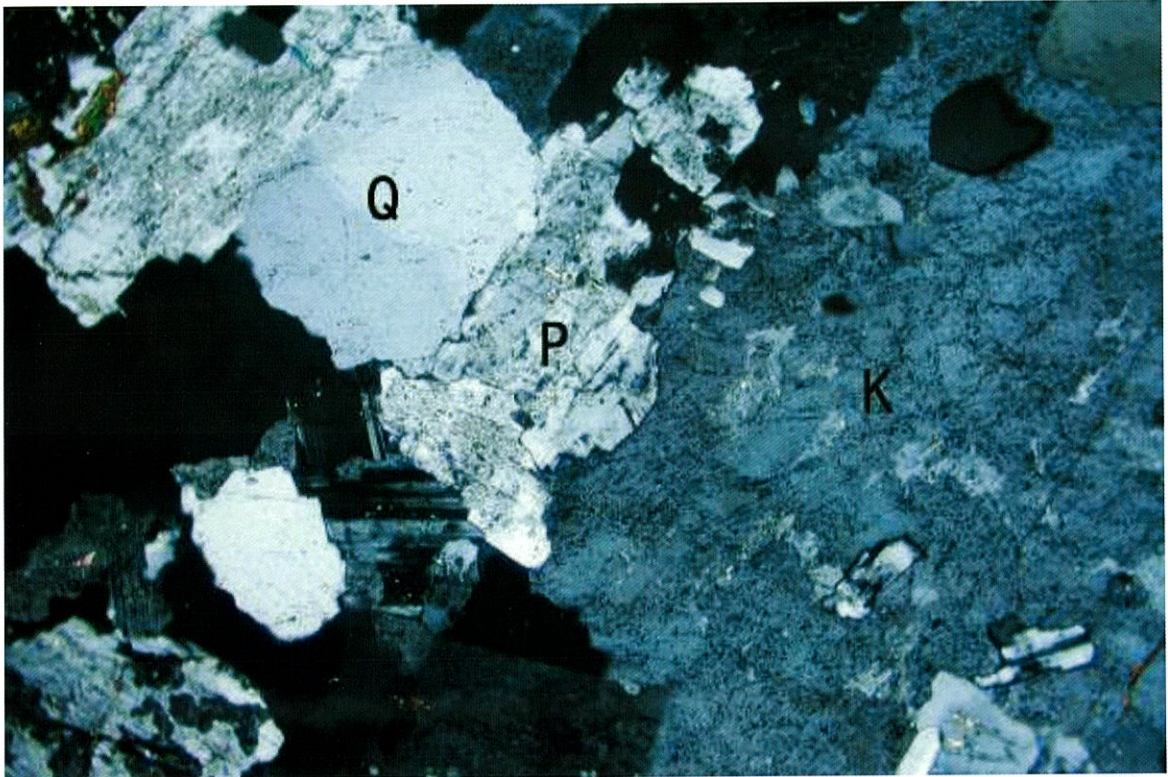


5a

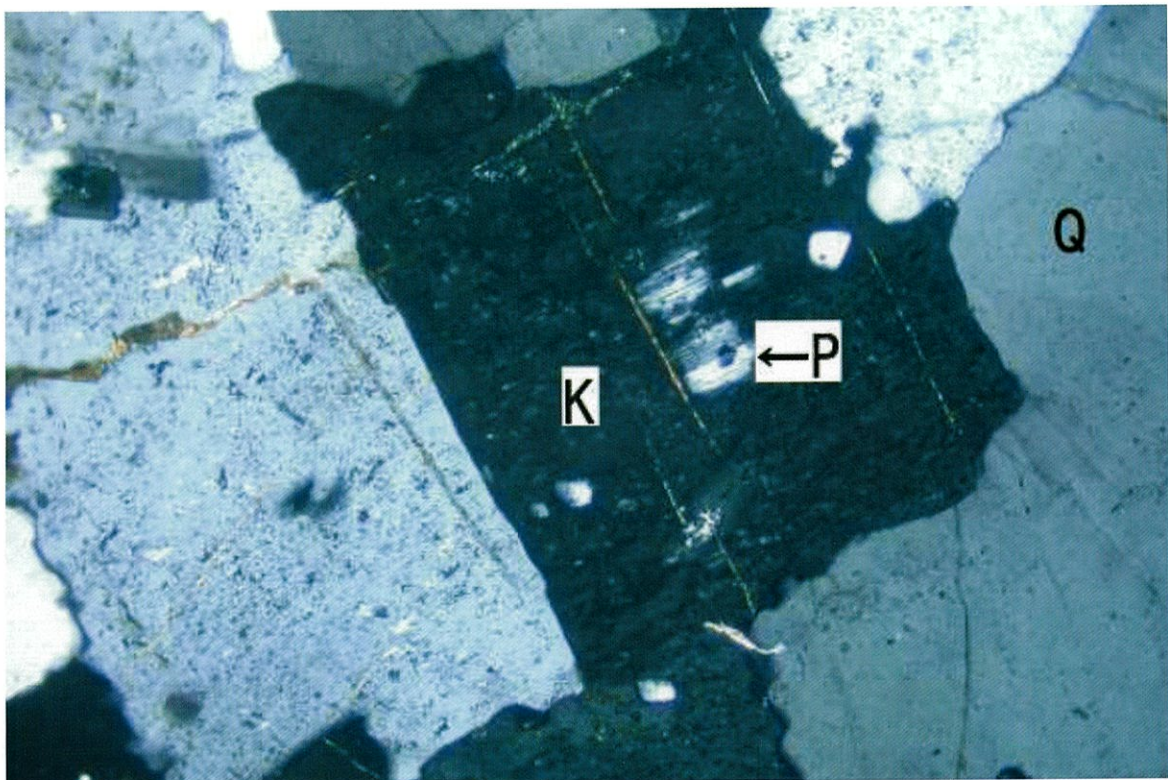


5b

写真5a, 5b: 試料S-2: 斑状細粒花崗岩; 5a, カリ長石などの斑状の結晶とより細粒の石基をなす鉱物からなる。カリ長石の斑晶はカールスバット式双晶をなす。5b, 自形の斜長石の結晶を囲むようにマイクログラフィック組織をなす石英・アルカリ長石からなる結晶 (Gra) が形成されている。石英 (Q), 斜長石 (P), カリ長石 (K), 5a, 写真の横幅2mm (十字ニコル), 5b, 横幅1mm (十字ニコル)



6a



6b

写真6a, 6b: 試料S-3: 細粒花崗岩; 6a, 石英 (Q)、半自形の斜長石 (P)、カリ長石 (K)、からなる。写真の横幅2 mm (十字ニコル) 6b, カリ長石 (K) 中に斜長石の融解した結晶 (P) が残る。横幅1 mm (十字ニコル)

カラー図版7



1. 陶質土器 1

2. 陶質土器 2

カラー図版8



1. 陶質系土器 1

2. 陶質系土器 6



1. 調査前の墳丘 後円部南側より



2. 調査前の墳丘 後円部西側周溝

図版2



墳頂部石室トレンチ メインセクション



1. 竪穴式石室内部（南東から北西方向をのぞむ）



2. 竪穴式石室内部（南東側小口壁と乱掘時破壊口）



1. 石室内遺物出土状況



2. 石室基底部の構造



1. 墳頂部東トレンチ



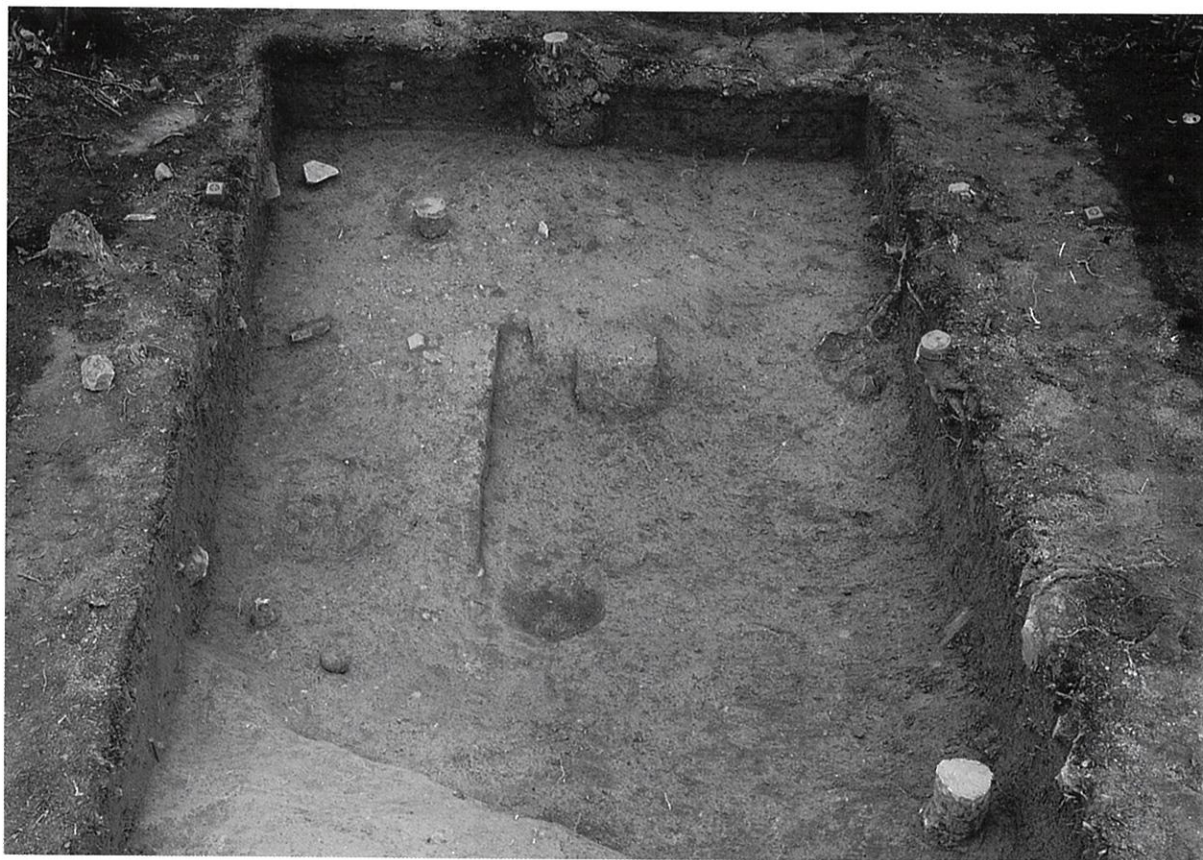
2. 墳頂部東トレンチ 埴輪出土状況



後円部南トレンチ 周堤側からみた埴輪列と周溝



1. 後円部南トレンチ 周溝堆積状況



2. 後円部南トレンチ 周堤外側および土壌



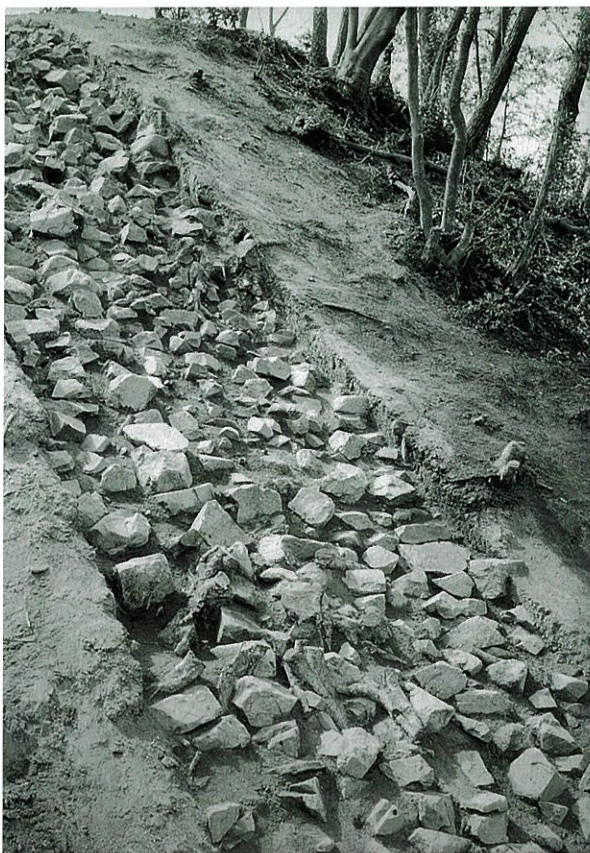
後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葺石



後円部東トレンチ 後円部1段目テラス・埴輪列および周溝



1. 後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葺石（直下より）



2. 後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葺石断面

3. 後円部東トレンチ 後円部2段目斜面葺石
（斜め方向より）



1. 後円部東トレンチ 後円部 1 段目テラス埴輪列



2. 後円部東トレンチ 周溝堆積状況



1. 後円部西トレンチ 周堤側より



2. 後円部西トレンチ 周溝堆積状況



1. くびれ部西トレンチ 全景



2. くびれ部西トレンチ 埴輪列



1. くびれ部西トレンチ 東側拡張部分 埴輪列屈曲点（背後はくびれ部中央トレンチ）



1. くびれ部中央トレンチ 全景



2. くびれ部中央トレンチ 後円部2段目斜面葺石



1. くびれ部西トレンチ 造り出し状遺構全景



2. くびれ部西トレンチ 造り出し状遺構上面土器出土状況



1. 前方部北西トレンチ 全景



2. 前方部北西トレンチ 周溝堆積状況



前方部北トレンチ 周堤より前方部斜面を望む



1. 前方部北トレンチ 周溝堆積状況



2. 前方部北トレンチ 周溝内埴輪出土状況



1. 前方部北トレンチ 周堤斜面および裾



2. 前方部北トレンチ 周堤断ち割り状況



1. 天狗山西古墳 調査前の墳丘



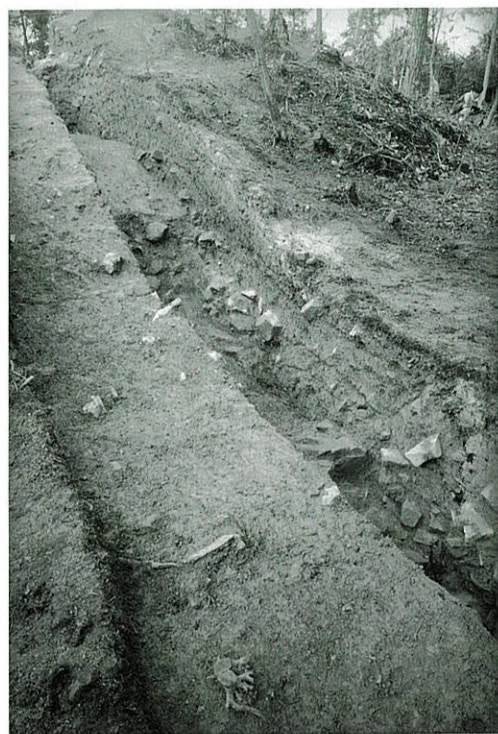
2. 天狗山西古墳 石室に使用されたと推測される石材



1. 天狗山西古墳 攪乱状態



3. 天狗山西古墳 西トレンチ



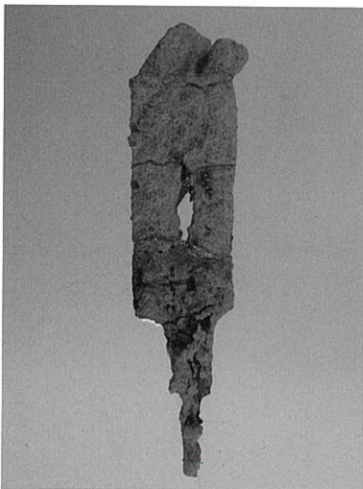
2. 天狗山西古墳 北トレンチ



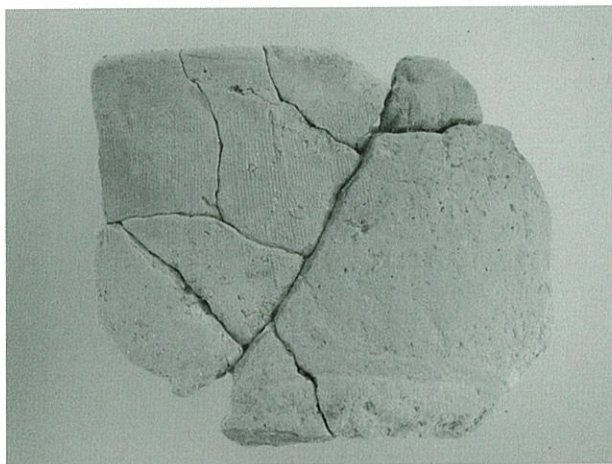
4. 天狗山西古墳 南西トレンチ



1. 鉄鉾・鉄剣・鉄ヤリ



2. 鉄鏃 (天狗山西古墳出土)



1. 円筒埴輪 1



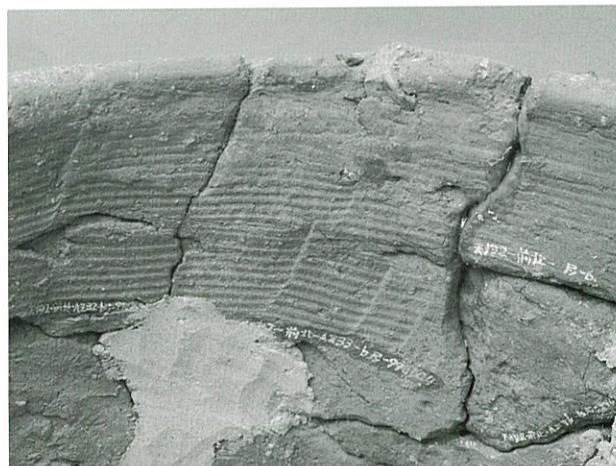
3. 円筒埴輪 6



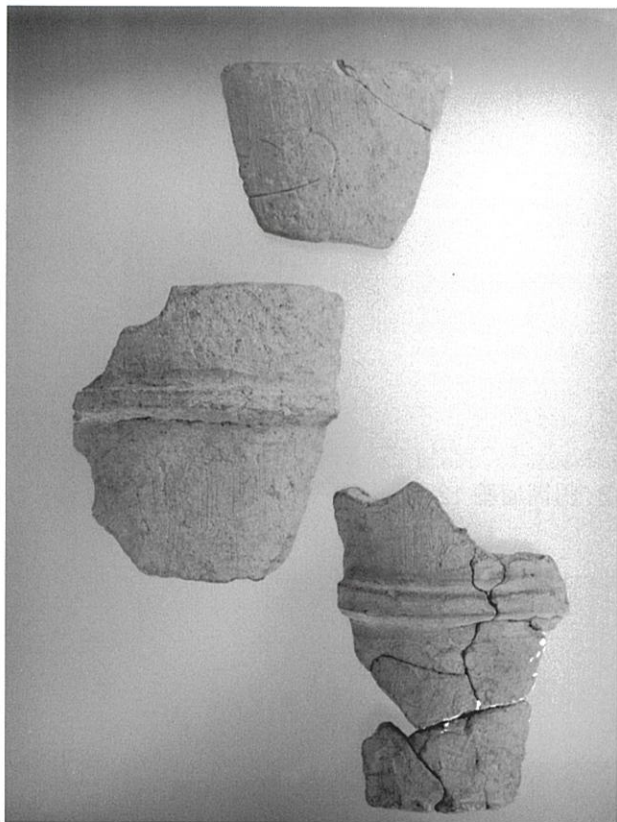
2. 円筒埴輪 2



4. 円筒埴輪 6 外面線刻



5. 円筒埴輪 6 口縁内面調整



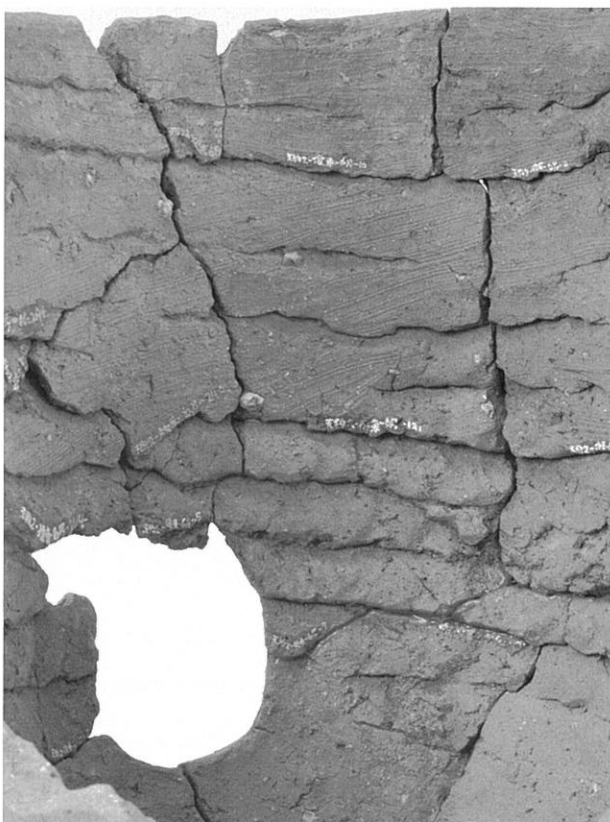
1. 円筒埴輪 9



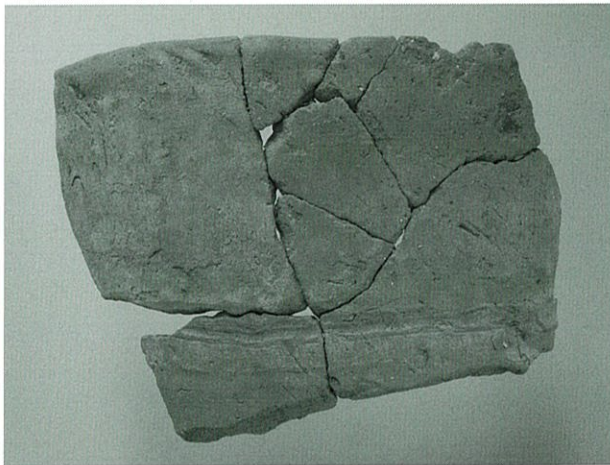
3. 円筒埴輪 10 外面調整



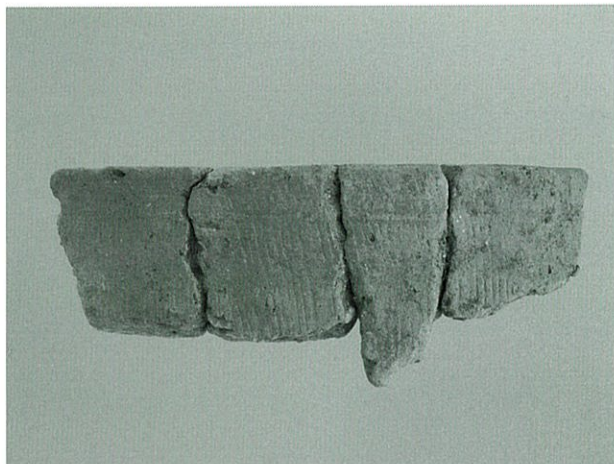
2. 円筒埴輪 10



4. 円筒埴輪 10 内面調整



1. 円筒埴輪 8 口縁部



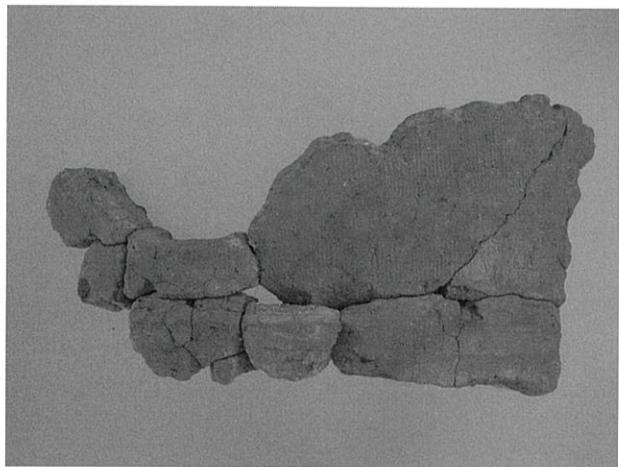
3. 円筒埴輪 12



2. 円筒埴輪 8 筒部～底部



4. 円筒埴輪 15



1. 円筒埴輪 16



2. 円筒埴輪 17



3. 円筒埴輪 18



4. 円筒埴輪 19



1. 円筒埴輪 20



3. 円筒埴輪 21



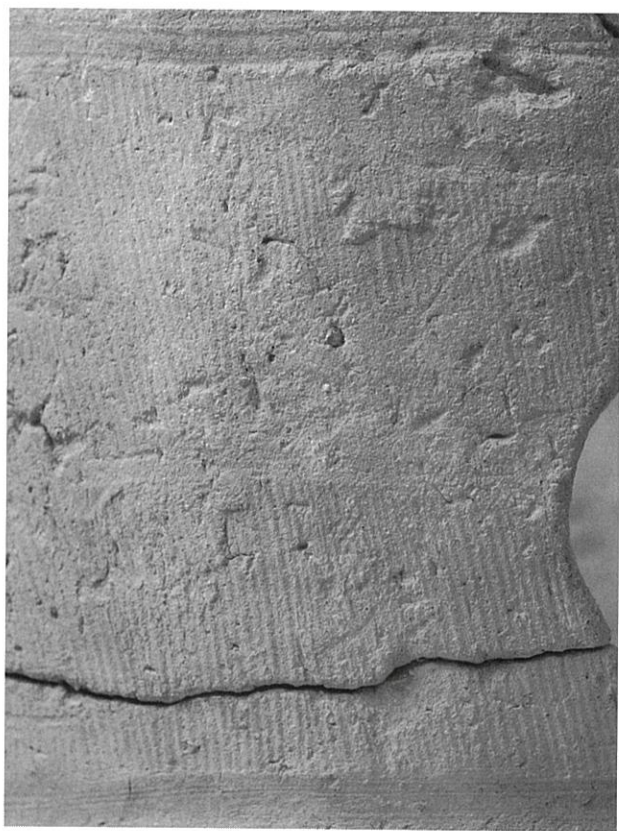
2. 円筒埴輪 20 外面調整



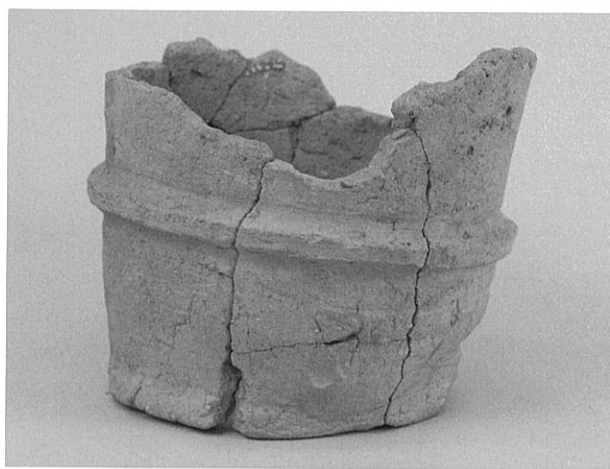
4. 円筒埴輪 21 外面調整



1. 円筒埴輪 22



2. 円筒埴輪 22 外面調整



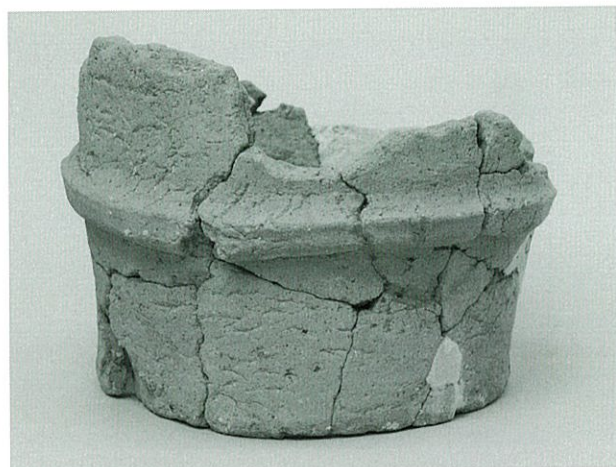
3. 円筒埴輪 23



4. 円筒埴輪 24



1. 円筒埴輪 25



3. 円筒埴輪 27



4. 円筒埴輪 28



2. 円筒埴輪 26



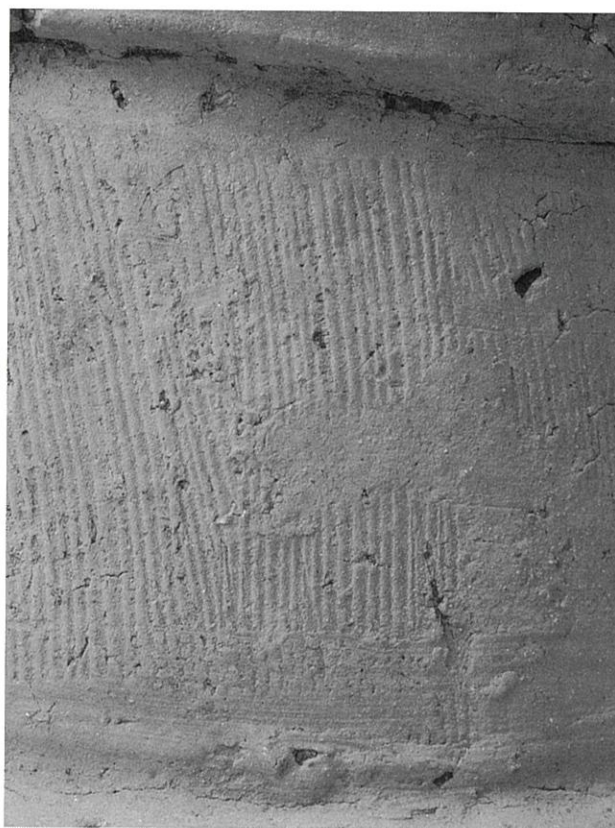
1. 円筒埴輪 29



3. 円筒埴輪 30



2. 円筒埴輪 29 外面調整



4. 円筒埴輪 30 外面調整



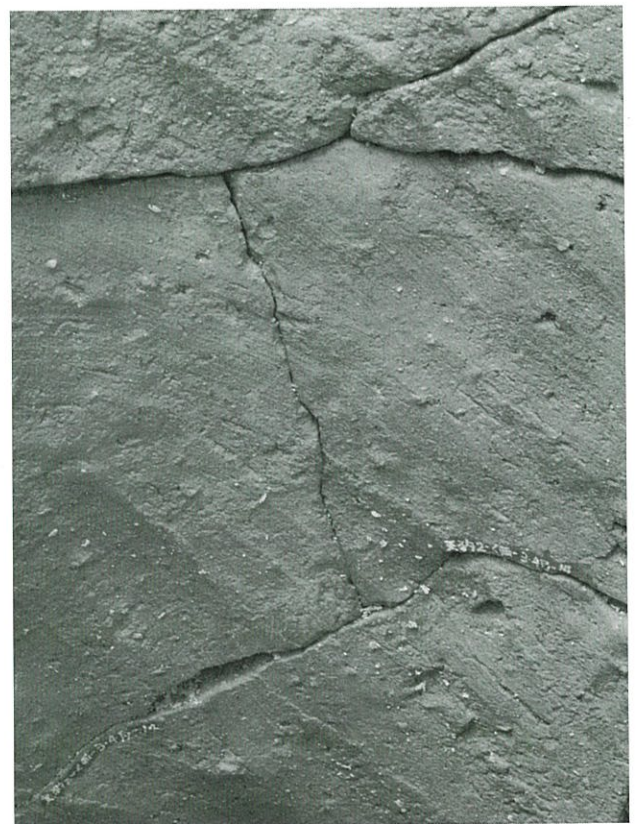
1. 円筒埴輪 31



3. 円筒埴輪 33



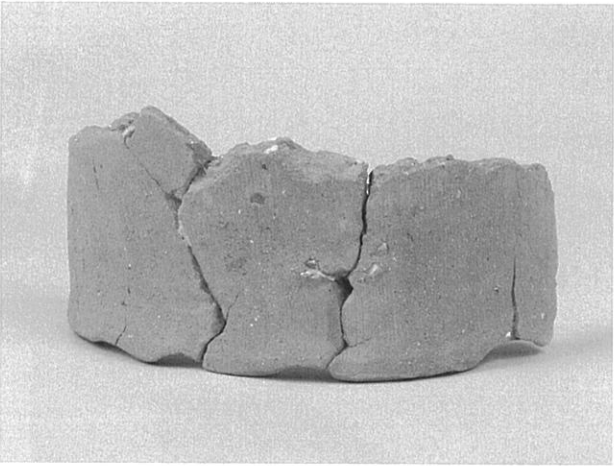
2. 円筒埴輪 31 外面調整



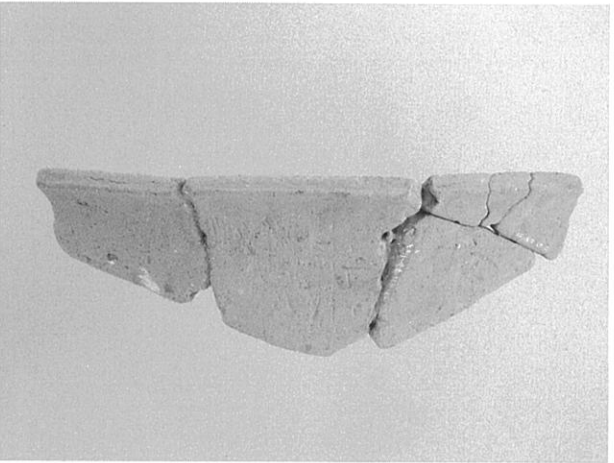
4. 円筒埴輪 33 内面調整



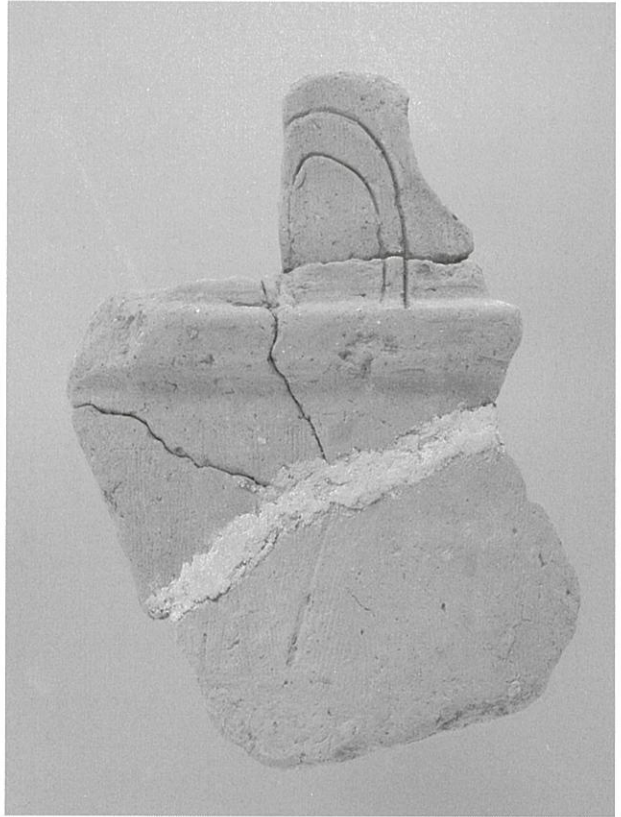
1. 円筒埴輪 32



2. 円筒埴輪 34



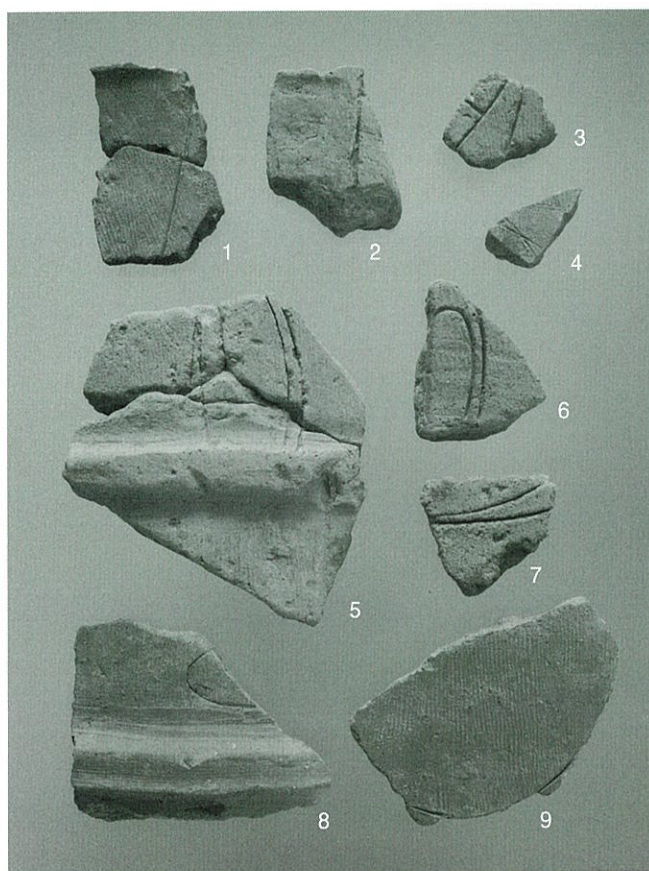
3. 円筒埴輪 35 (朝顔形) 口縁



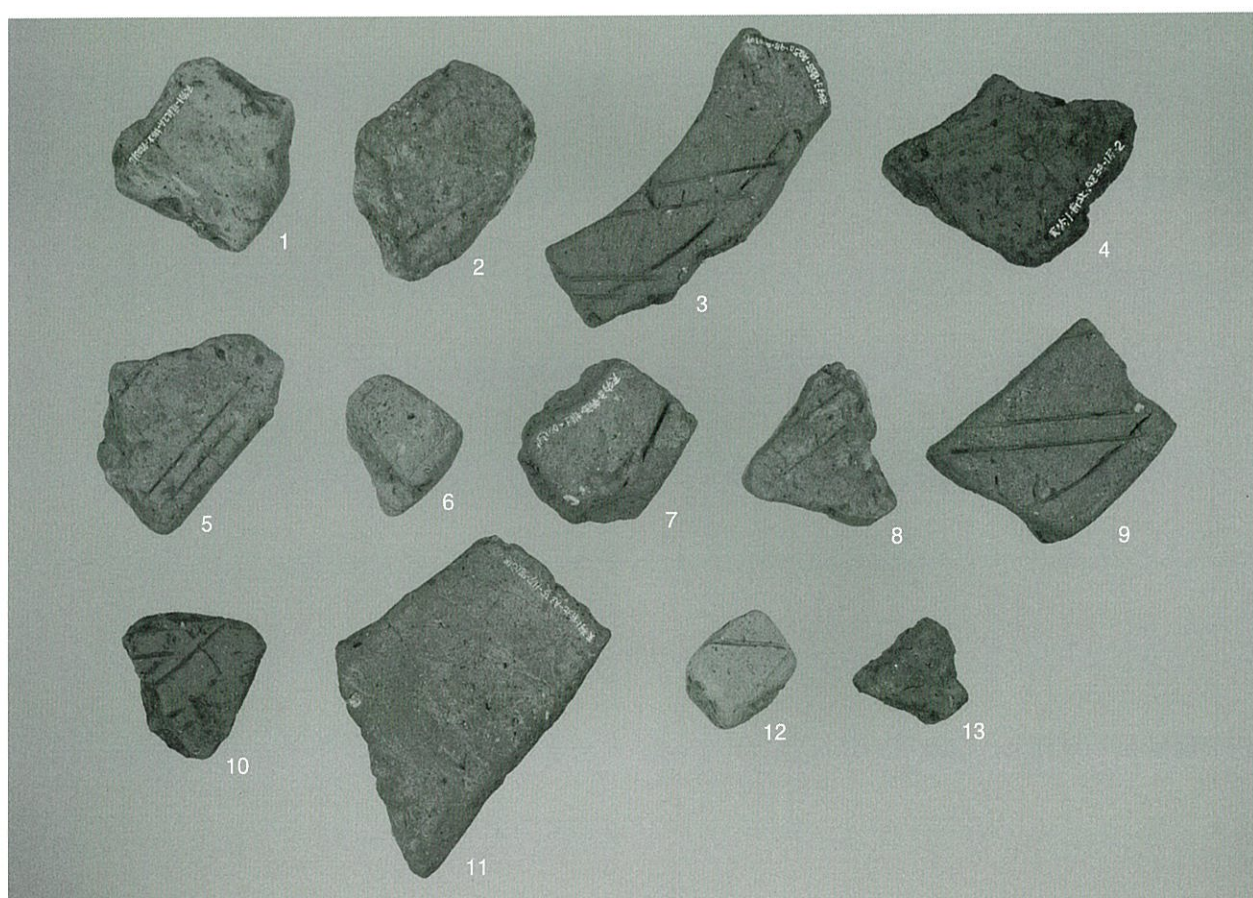
4. 円筒埴輪 36 (朝顔形) 筒部線刻



5. 円筒埴輪 36 (朝顔形) 筒部下半～基底部



1. 線刻のある埴輪片



2. 蓋形埴輪 立ち飾り部片



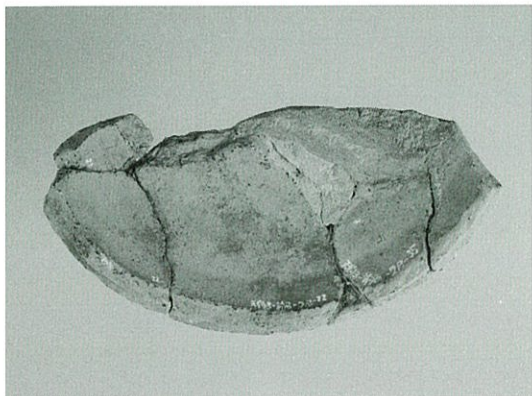
蓋形埴輪 軸受部・笠部・台部およびその他の形象埴輪



1. 陶質系土器 2



5. 陶質系土器 7



2. 陶質系土器 3



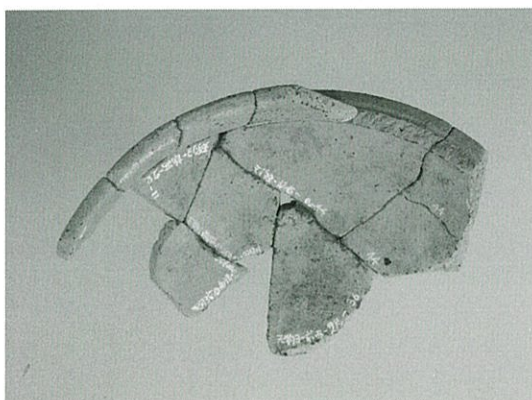
6. 陶質系土器 8



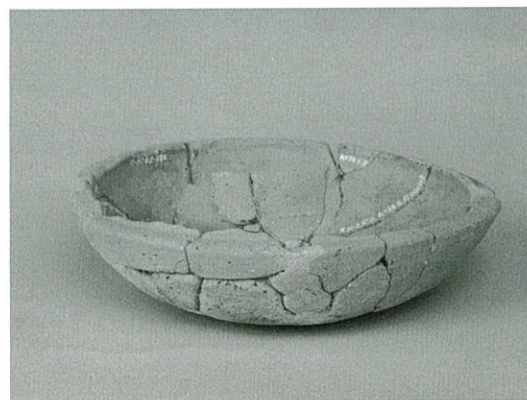
3. 陶質系土器 4



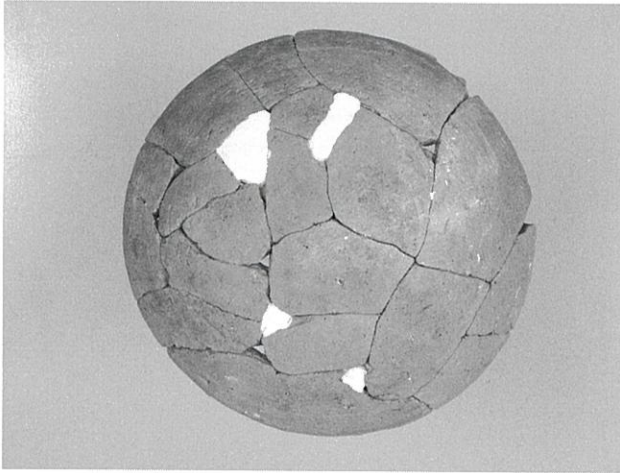
7. 陶質系土器 9



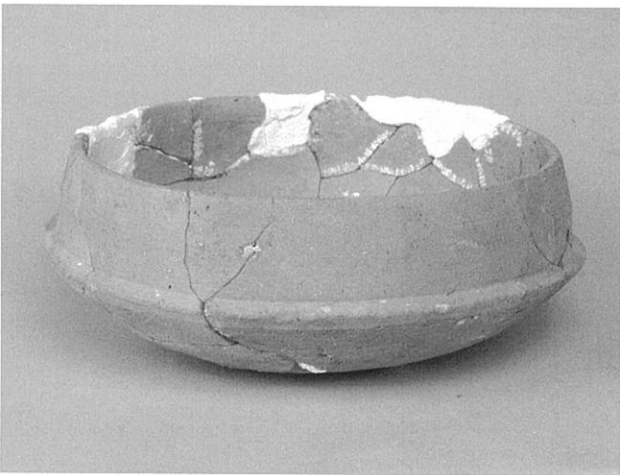
4. 陶質系土器 5



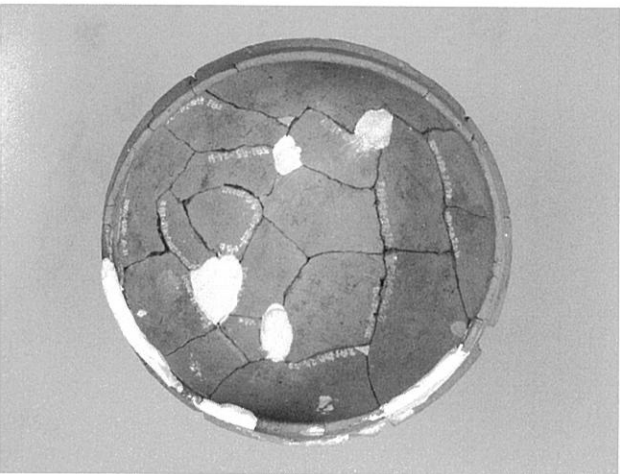
8. 陶質系土器 10



1. 陶質系土器 13 (外面上から)



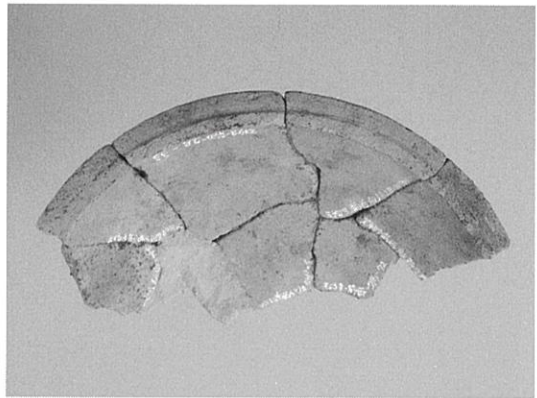
2. 陶質系土器 13 (斜め横から)



3. 陶質系土器 13 (内面上から)



4. 陶質系土器 11



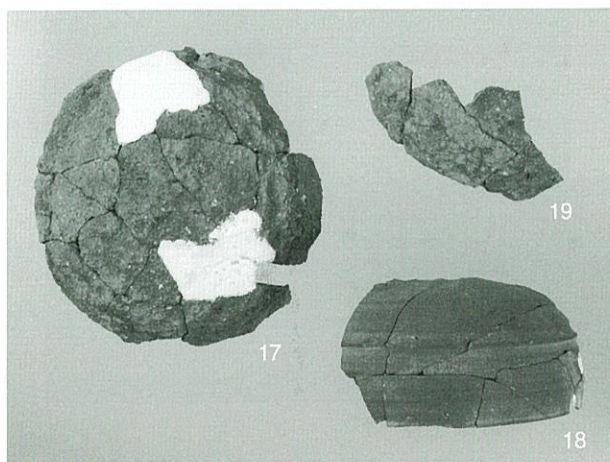
5. 陶質系土器 12



6. 陶質系土器 14



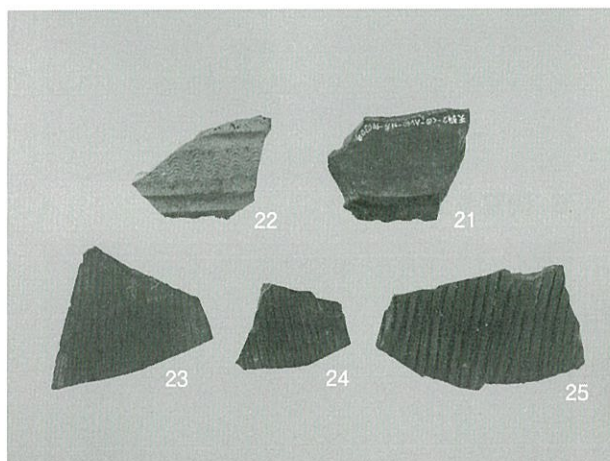
7. 陶質系土器 15



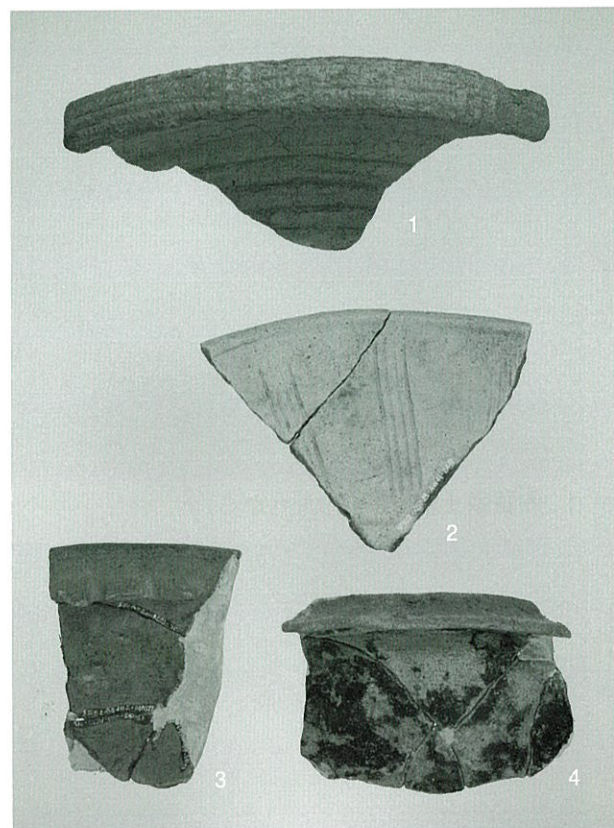
1. 須恵器 17 ~ 19



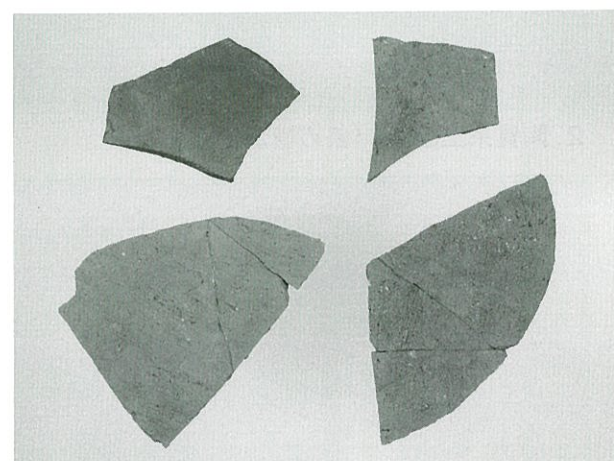
2. 須恵器 20



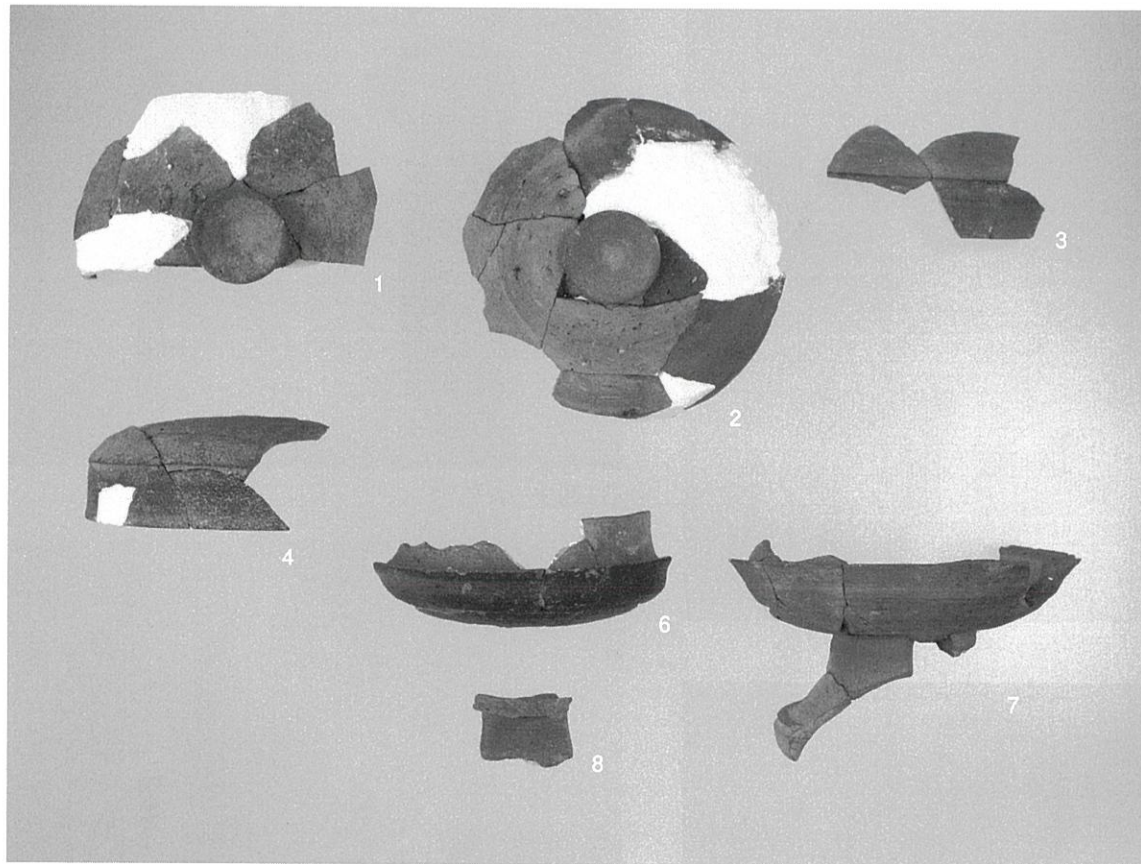
3. 須恵器 21 ~ 25



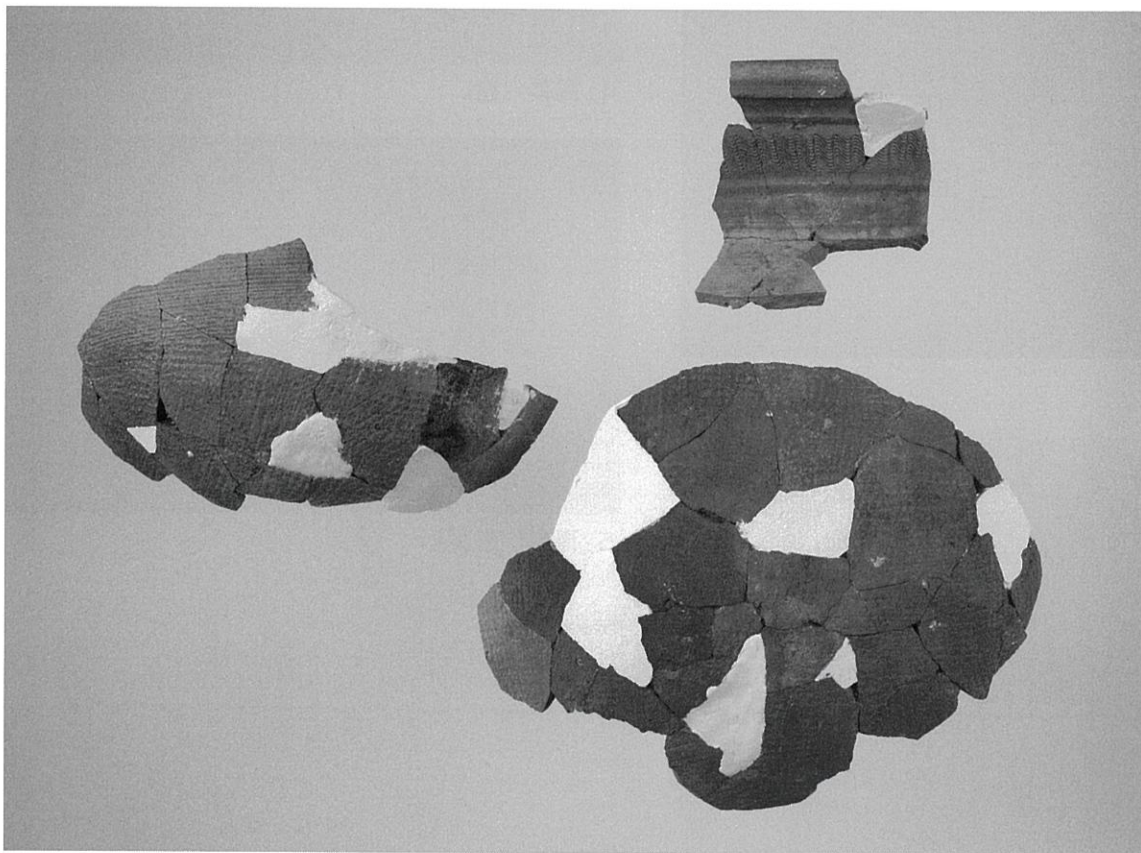
4. 弥生土器・中世土器



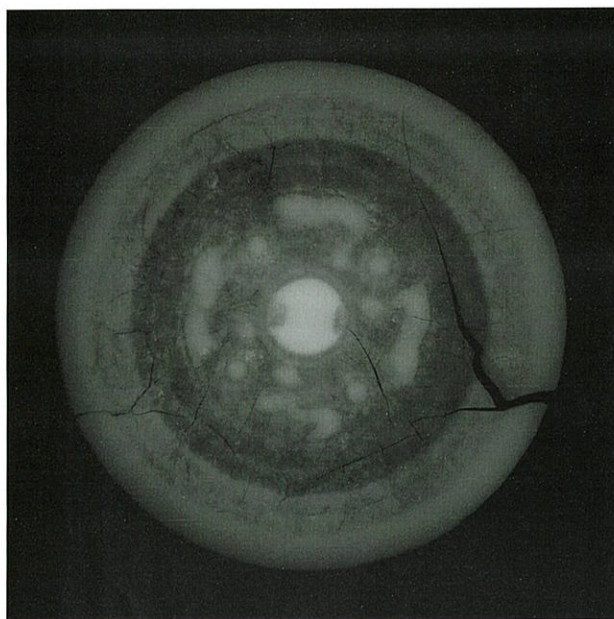
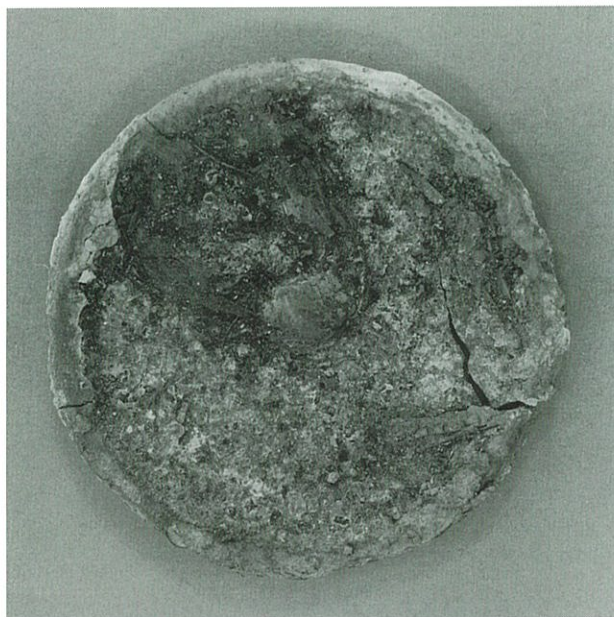
5. 須恵器片



1. 天狗山西古墳出土 須恵器 1～4・6～8



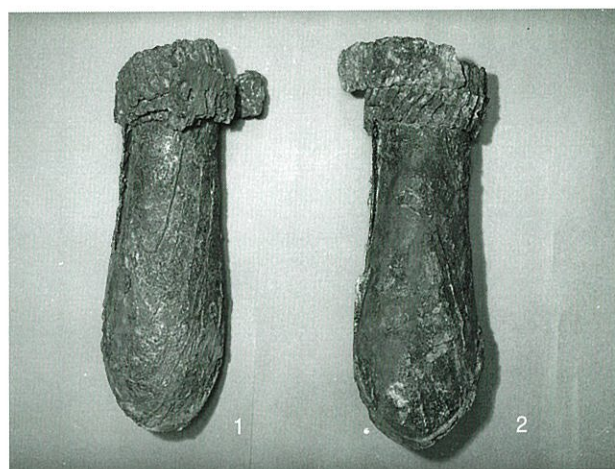
2. 天狗山西古墳出土 須恵器 9



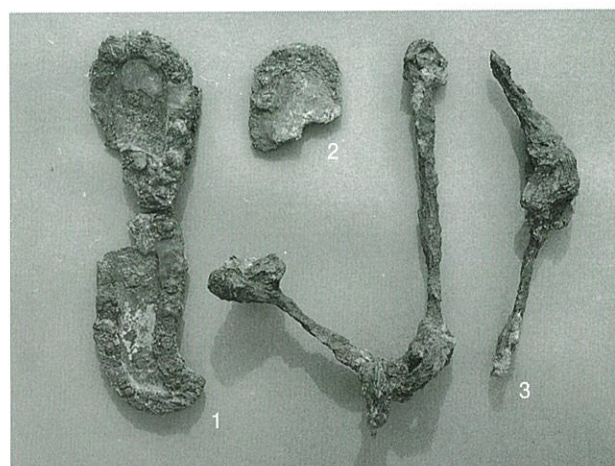
1. 鏡



2. 挂甲



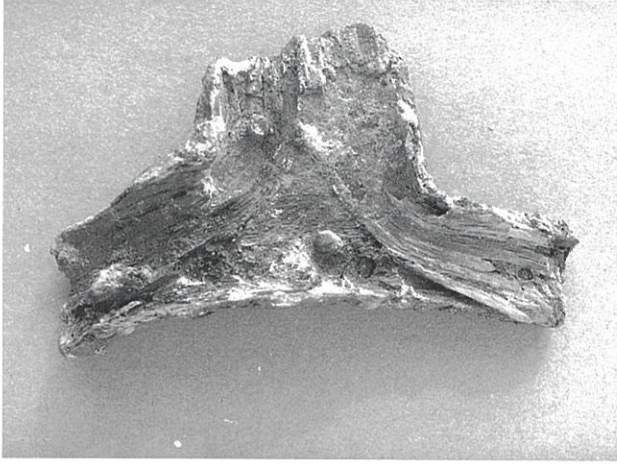
3. 籠手



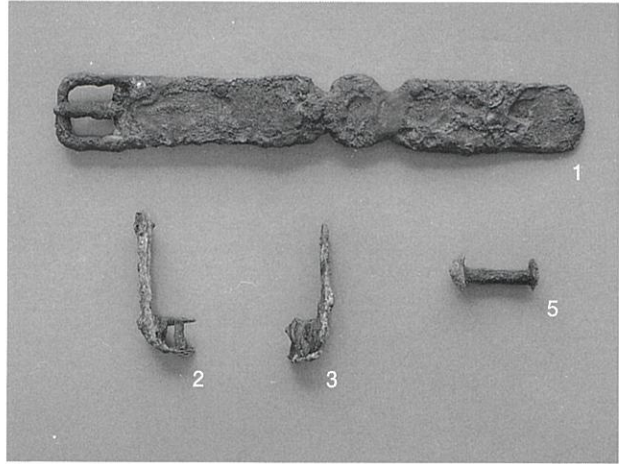
4. 馬具 (轡)



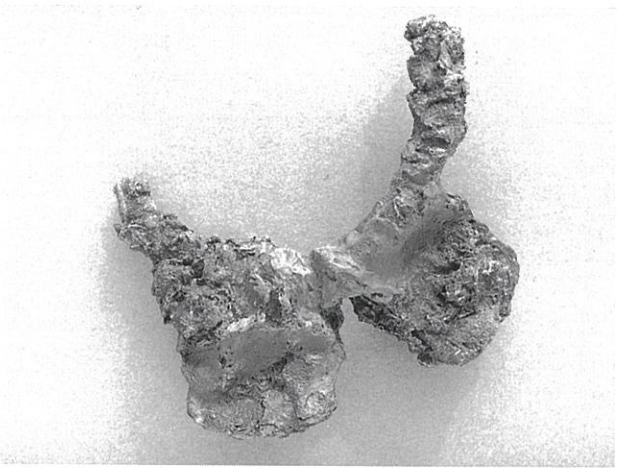
5. 馬具 (杏葉)



1. 馬具 (鐙)



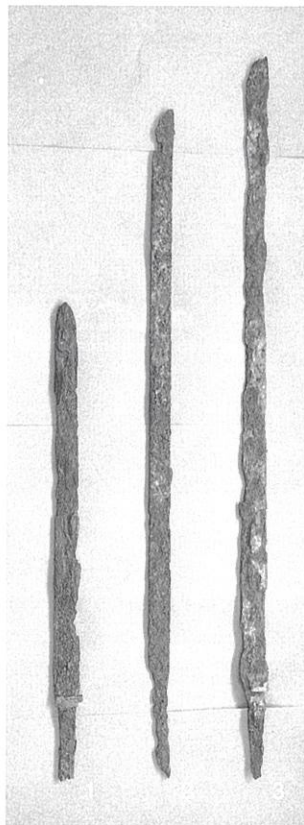
4. 胡鐐金具他



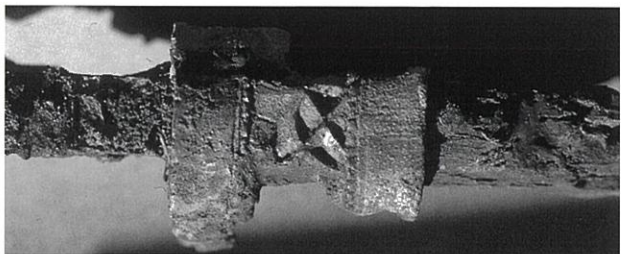
2. 馬具 (雲珠)



3. 絞具



5. 鉄刀



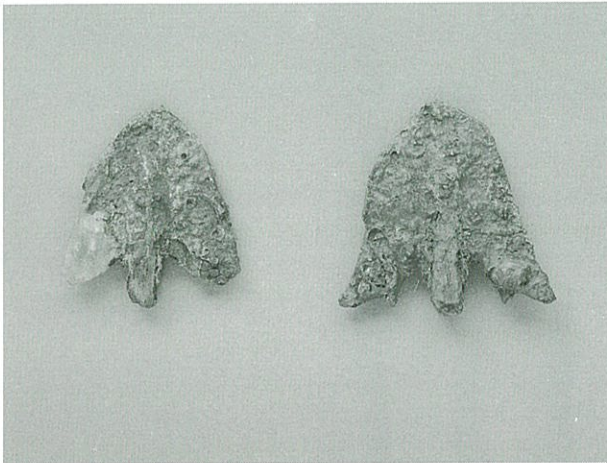
6. 鉄刀 (装具)



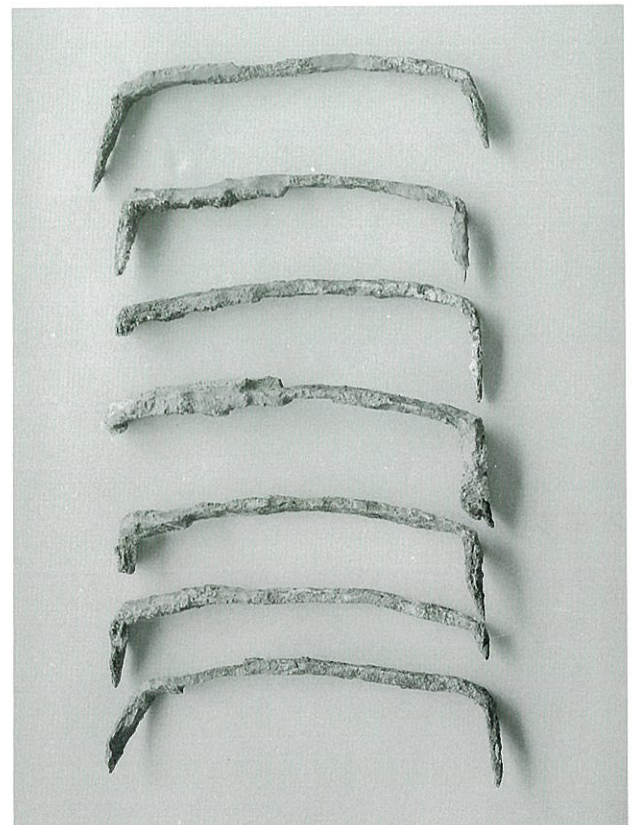
1. 鉄鏃



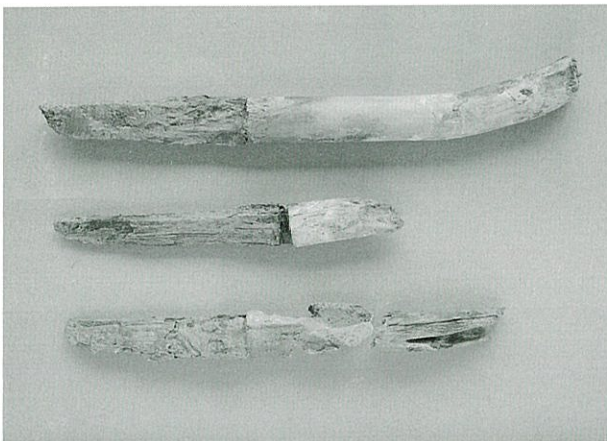
4. U字形鋤先



2. 鉄鏃 (平根系)



5. 鏃



3. 鹿角装刀子

報告書抄録

ふりがな	てんぐやまこふん							
書名	天狗山古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者名	松木武彦、和田 剛、寺村裕史、飯田浩光、池尻伸吾、井上宗嗣、宇垣匡雅、大熊美穂、金子 愛、北 浩明、鯉沼裕子、鈴木茂之、高田貫太、張 允 禎、新納 泉、西田和浩、野崎貴博、福井 優、藤原貴宏、藤原憲芳、淵ノ上隆介、光本 順							
編集機関	岡山大学大学院社会文化科学研究科							
所在地	〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんぐやまこふん 天狗山古墳	おかやまけん くらしきし まびちようしもにま 岡山県倉敷市 真備町下二万	33202		34度37分 30秒	133度43分 10秒	岡山大学 考古学 研究室	447.4	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天狗山古墳	古墳	古墳	竪穴式石室 墳丘 周溝 周堤 円筒埴輪列	鉄剣 鉄矛 円筒埴輪 形象埴輪 須恵器 陶質土器		墳丘長57mの帆立貝形古墳 竪穴式石室(既掘)		
天狗山西古墳	古墳	古墳	墳丘	須恵器 鉄鏃		径15mの円墳 埋葬施設は既破壊		

天狗山古墳

2014年 3 月31日印刷

2014年 3 月31日発行

編集 松木武彦

和田 剛

寺村裕史

発行 天狗山古墳発掘調査団

印刷 山陽印刷株式会社